

けものフレンズR くび
わちほー

禁煙ライター

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

見知らぬ場所で目覚めたとき、少女は記憶を失っていた。

盟友を名乗る獣人（フレンズ）、イエイヌと共に、

かつてジャパリパークと呼ばれた無窮の大地にて、

今、少女ともえの命がけの冒険（サファリ）が始まる――

少女を待つのは多くの友との出会い、そして別れ。

倒れゆく友の背を踏み越えた先にあるものは――

という話にはなりません。たぶん。

――

本著は「けものフレンズ」の二次創作「けものフレンズR」を原作・原案とした三次創作です。

「けものフレンズ2」並びに「けものフレンズプロジェクト」全体の知的財産権を貶める意図は一切御座いません。

原作・原案

祝詞兄貴様「けものフレンズR」

(<https://www.nicovideo.jp/watch/sm34862414>)

ネガティブな気持ちからポジティブな創作意欲がムクムクしてきたので書き始めました。

ただただ自分が見たかった「けものフレンズ2」や「ここすき」なものを書いてきます。

拙い文章ですが、暇つぶしにでも目を通して頂ければ幸いです。

基本コンセプト

- ・けものフレンズ2に出たフレンズたちをできる限り出します。
- ・ギスギスさせないため、大幅なキャラ改変もします。

・イエイヌとアムールトラを救います。(最重要)

・オリジナルのキャラクターが出ます。そういうの苦手な方はご注意ください。

・当然ハッピーエンド。(irrodoririspekt)

本著は三次創作物ですが、著作物としての権利は著者が持ちます。

著者の許可なく転載や頒布を行う等の行為はご遠慮ください。

2019/7/7 第08話B・Cパート更新

第08話、おうち回後半になります。

本日は七夕ですが関東は曇天で星も見えなそうですね。

たいして星に興味がある訳でなし、晴れてても多分空を眺めたりしないと思います
が、

なんとなくがっかりした心地になるのは何故でしょう？

次話は2にはなかつた場所でのお話です。

プロットがまだふわふわしてるので少々時間がかかるかもしれません。

ラストまで残り4話、なんとかお話を収束させられるようにしたいものです。

では。

目次

	けものフレンズR	くびわちほー	第0
	1 話「きおくそうしつ」A パート		
1	けものフレンズR	くびわちほー	第0
	1 話「きおくそうしつ」B・C パート		
21	けものフレンズR	くびわちほー	第0
	2 話「おおきなけもの」Aバン・A パート		
	けものフレンズR	くびわちほー	第0
94	2 話「おおきなけもの」B・C パート		
	けものフレンズR	くびわちほー	第0
	3 話「うみをはしる」Aバン・A パート		
	けものフレンズR	くびわちほー	第0
	3 話「うみをはしる」B・C パート		
	けものフレンズR	くびわちほー	第0
	4 話「はーどらつくとだんす」Aバン・A		
	パート		
	けものフレンズR	くびわちほー	第0
	4 話「はーどらつくとだんす」B・C パー		
	ト		
	けものフレンズR	くびわちほー	第0

59

167

137

243

209

- 5 話「かぞくのきずな（前編）」アバン・A
パート ————— 288
- けものフレンズR くびわちほー 第0
- 5 話「かぞくのきずな（前編）」B・Cパ
ト ————— 319
- けものフレンズR くびわちほー 第
0 6 話「かぞくのきずな（後編）」アバン・
Aパート ————— 349
- けものフレンズR くびわちほー 第0
- 6 話「かぞくのきずな（後編）」B・Cパ
ト ————— 386
- けものフレンズR くびわちほー 第0
- 7 話「せるりあんくいーん」アバン・A
パート ————— 423
- けものフレンズR くびわちほー 第0
- 7 話「せるりあんくいーん」B・Cパ
ト ————— 459
- けものフレンズR くびわちほー 第0
- 8 話「ぼくのふれんど」アバン・Aパ
ト ————— 498
- けものフレンズR くびわちほー 第0
- 8 話「ぼくのふれんど」B・Cパ
ート ————— 528

けものフレンズR くびわちほー 第01話 「きおくそ
うしつ」Aパート

目を覚ますと、知らない場所にいた。

そんなどこかで聞いたお話の、はじまりみたいな状況に、わたしはいた。

目覚めたのはよくわからない部屋の中。照明がいつさい点いてなかったけど、ところどころ天井がくずれているから、外の明かりが差し込んでいる。

おかげで部屋の大まかな様子は分かったのだけど、どれだけ見ても、やっぱり全く見覚えがなかった。

たぶん、こういう状況に置かれた場合、多くのヒトはまずは不安になってちぢこまり、その後で周囲の様子を見てみようと思き出すものだと思う。

それが目に見えるものでも。こういった自分の置かれた状況でも。なんであれ、よく分からないものはみんな怖がるものだ。

けど、何にしても例外というものはある。

「フンフンフンフナー、フフフフーン♪」

ハナウタ交じりに手を動かしているわたしは、間違いなくその例外に当てはまると思

う。

われながらノーテンキなことだけど、起きて早々、近くにあったスケッチブックとクレヨンを手にとって、ついさつきまで寝ていたタマゴ形のベッドのようなものをモデルにスケッチをはじめていた。

「デレデレデレデレデレデレデレ、ジャン♪ うんっ！ かんせいっ！」

白紙だったスケッチブックの1ページ目が埋まり、思わずにつこりと笑ってしまう。

どうもわたしというヒトは、絵をかくのが好きみたいだ。

……って、周りを調べるのをそつちのけでお絵かきをはじめちゃう時点で、あえて確認することもないかもだけだね。

腰かけていたガレキから立ち上がり、辺りを見渡した。

「うーん、それにしても……、なんなのかな？ これ。」

薄暗い部屋には、わたしが寝てたのと同じようなタマゴ形のベッドのようなものがかくつかあって、なんだかうすぼんやり光っていたりする。

「タマゴ……、ベッド……、うーん……、」

あれこれ考えてみるけど、わたしのあんまりよくない頭では、答えなんて見つかるわけがなかった。

「うん、わかんないかな！」

よくわかんないものは置いといて、とりあえず、外に出てみることにしよう。
「わあ……」

ドアノブを回し、押し開けて見えた外の景色に思わず声が出る。

空まで続いているような広い草原にはたくさんの木があつて、葉っぱの一枚一枚が太陽の光をはね返して、きらきらと輝いている。

地面に生えている草はどこどころ花も咲かせていて、すん、と吸うと甘酸っぱいような匂いがする。

「すっごくいいきれいな……」

スケッチブックをひろげてお絵かきを始めたくなるけど、がまんがまん。

そんなんじゃないつまで経つても、ここがどこなのかもわかんないままだし。

まっすぐに伸びる石畳の道に沿って、ゆっくり歩いていくと、ちよつと外れたところの木陰に何かが見えた。近づいてみると、だいぶ古ぼけたほろ馬車だとわかる。

小さなものだけど、造りは頑丈そう。

「……、ようこそ、ジャパリパークへ？」

ほろに書いてある文字を読み上げる。

ジャパリパーク……、ジャパリパーク……。

うーん、何か思い出せそうな気もするんだけど……。

んー・・・と。

ともかく、ここはジャパリパークというところ、らしい。

パーク、つてくらいだから、さっきまでわたしが居た建物の名前じゃあないと思う。きつとたぶん、目の前にひろがる景色がぜんぶジャパリパーク、なのかな。

パーク・・・つていうと公園だけど、馬車みたいな移動手段があるわけだし、この場合、自然公園みたいな感じ？

まあ、引いてくれる動物がいない今は、それも移動手段にはならないんだけど。

でも、ようこそつて言ってるくらいだし、どこかに係りのヒトとかも、いるよね？

「すうーっ・・・」

おもいつきり息を吸い込む。

空気おいしいなあとか思いながら、いっばいになったところで一気に吐き出した。

「だれかー！ だれかいませんかー！」

思った以上に大きな声が出て自分でもびっくりしたくらいなんだけど、返事はない。

「だれかー！ いたら返事してくださいー！」

めげずに何度も呼びかけてみる。

けど、わたしの声以外周りはびっくりするほど静かだ。

「だれかってばー！」

．．．、さすがにちよつと恥ずかしくなってきたかなあ．．．
——がさがさっ!

「だれかー!．．．つて、．．．うわあ!」

物音が聞こえてふり向くと、視界の端の茂みから何か勢いよく飛び出してきた。
あわてて回れ右してかけ出す。

「わふっ! わふわふっ! わふっ!」

「うわあー!」

「わふわふっ! わふわふわっふ!」

「なにー!? なんなのー!? なんてえーっ!?」

飛び出してきた何かは荒い息を吐きながら、逃げるわたしを追いかけてくる。

やばい．．．、どんだん近づいてくる．．．。

これ、すぐ追いつかれる．．．!

「わふうー!」

「うわあっ!」

走る勢いそのまま飛びついてきた何かに、わたしは何もできずに押し倒された。

背の高い草がクッションになって、倒れた痛みはあんまりないけど、肩を押さえられて身動きが取れない。

視界にはハアハアと息を吐く大きな口。

おひさまの影になっていてもわかるくらいに大きなずいどいキバ。

そこから垂れてくるよだれが、わたしのほおに、ぴたん、と落ちた。

ああ・・・、これはもう、ダメかな・・・。

こんななんだつたらさつきのお絵かき、がまんするんじやなかった・・・。

あたし、このままきつと・・・、

・・・いや、あきらめちやダメだ！

考えろ。考えろ、あたし。

身動きができなくても、まだ口は動く！

おはなしが通じるかわからないけど、せめて一言だけでも・・・！

わたしはさつきよりもつとっぱいに空気を吸い込んで、思いつきり吐き出した。

「お・・・、おねがい！ たべないでえーっ!!!」

「た、たべませんよおっ!!!」

・・・あれ？

———

さつきまでわたしに覆いかぶさっていた何かは、わたしの目の前で正座をしていた。

そしてわたしもなぜか、その前に正座をしてしまっている。

なぜか、と言ったけど理由は簡単だ。

申し訳なきような顔をしながら地面を見つめるその何か――、

「すみません……。わたし、あなたにごめいわくを……。」

「いやー、あはは……。、」

もとい、しつぽと大きな耳のついた女の子は、さつきまでの姿はどこへやら、すつかりしよんぼりしてしまっていたのだから。

「ぜんぜん大丈夫。気にしないで。いきなり逃げちゃったあたしも悪いんだし。」

女の子の姿を見る。

髪も服も、きらきらと銀色みたいなうすい灰色で、頭の上には大きな耳、おしりにはふわふわのしつぽがついている。

今はうつむいてるからよく見えないけど、目が大きくてまつ毛が長くて、とてもかわいらしい顔をしている。

オツドアイ、っていうんだっけ？

右と左で瞳の色が違って、すつごいきれい。

でも、その大きな目も、しよんぼりしてる今は細められている。

「いえ、わたしがこうふんしてとびだしてしまったのがわるいので……。」

「いやいや、そんなことないよ。あたしが悪いんだって。」

「いえいえ、わたしがわるいんです……。」

「いやいや、あたしが——、」

「いえいえ、わたしが——、」

「……ぷっ、あははっ、」

おんなじようなやり取りをくりかえしていると、なんだか可笑しくなってきました。まっ
た。

「……?」

いきなり笑い出したせいとか、女の子は不安そうな顔でこつちを見る。

わたしは、ぽん、と手のひらを合わせて、不安そうなその子に笑いかけた。

「それじゃあ、どつちも悪くないってことで！ ね！」

「は、はい……。」

女の子はまだちよつと不安そうだったけど、少し落ち着いたみたい。

「それで、ええと、あたし、あなたのこと、何て呼べばいいのかな？」

そうそう、この子の名前、まだ聞いてなかった。

「わたし、イエイ又つていいます！」

「イエイ又ちゃん？ かわいい名前だね！」

「そ、そうですかあ？」

素直に感想を言うと、イエイヌちゃんはうれしそうに笑った。

どういうわけだかおしりのしつぽもばたばた動いてる……。

作り物……、だよね？

どうやって動いてるの……？

そんなことを考えていると、イエイヌちゃんがこつちに身を乗り出してきた。

「わ、わたしも！ あなたのおなまえをしりたいです！」

「あたし？ あたしの名前は……、」

おっと、たしかにまだ名乗ってなかったか。

いけないいけない、あんまり褒められたことじゃなかったよね。ヒトに名前をたずね

るならまず自分から、とはよく言うし。

すぐに答えなきや。

あたしの名前は……、

なまえ、は……、

「……あれ？ あたしの名前、なんだっけ？」

いや、いやいやいや。ちよつと待つて。

たずねられてみて気づいたけど、わたし、自分の名前、ぜんぜん思い出せない。

「えつと、ちよつとまってね？ はじめから思い出してみるから。あたしは……、ええ

と、タマゴみたいなやつに寝てて、そこが知らない場所で、お絵かきしてたらたのしくて……、それで……、あれ？ あれ？

これまでのことを思い出しながら話してみる。といつても、思い出せたのはあの部屋で目を覚ましてからのことだけだ。

「えつと、それで、そとにでて、だれかいないかなって、呼びかけてみたらイエイヌちゃんがでてきて、えつと、その、」

わたしはただただあわあわしてしまって、まったくうまく説明できなかった。けれど、イエイヌちゃんはマジメな顔でうんうんと頷きながら、ずっと聞いてくれていた。

「わかりました。あなたがめをさましたらしららないばしよにいて、いままでのことがぜんぶおもいだせなかった、ということなのですね？」

「すつごい！ あんな説明でよくわかったね!」

「えへへ……、」

また素直に感想を言うと、イエイヌちゃんは照れたように笑った。

そしてまた、しつぽがばたばたと動く。

うーん……？ どういう仕組み？

「めをさましたばしよに、なにかてがかりになるものはありませんでしたか？」

「えつと……、近くにこんなのが……、」

手に持っていたスケッチブックを差し出してみる。

「イエイヌちゃんはそれを手に取って興味深げに観察しはじめた。」

「ふむふむ……、なんですかね？　これ。」

「えっと、それはスケッチブックについて。絵をかくためのものなんだけど、」

「すけつちぶつく！　そうなんですね！　はじめてみました！」

「イエイヌちゃんはびっくりした様子で声を上げる。」

「でも、このすけつちぶつく、いろがいっぱいあって、えをかくのがむずかしそうです。」

「あ、それは表紙で。ひらくと白い紙が出てくるの。」

わたしはイエイヌちゃんが持ったままのスケッチブックに手を伸ばし、ぱらぱらとページをめくってみせる。

「わふ！　すごいです！」

「イエイヌちゃんはまたびっくりした様子で声を上げる。」

そしてまた、ぱたぱたと動くしっぽ。

うーん、なんというか。

わたしのことより、イエイヌちゃんのしっぽの方が気になるよ……。

「こちらにもいろがいっぱいありますけど、これもひょうし、なのですか？」

「そっちは裏表紙かな？」

「うらびようし。ふむふむ……、この、もようは？」

と、イエイヌちゃんが指さしたのは裏表紙のはしつこの部分。

ところどころ消えかかっているけど、ひらがなで名前が書かれていた。

「と……、もえ……？」

と、もえ……、

ともえ……。

……そうだ。思い出した。

「……これ、あたしの名前だ。」

あたしは、ともえ。

たしかにそう呼ばれていた。

「ともえ……、さん……？」

「そうだよ！ ありがとう、イエイヌちゃん！ おかげで名前、思い出せたよ！」

「ともえ……、さん……。」

「……？ イエイヌちゃん？」

イエイヌちゃんはぼーっとした顔でわたしの名前をくりかえし呼んでいる。

も、もしかして、あたしの名前、何か変だったりする……？

スケッチブックを見返してみると、『と』と『もえ』のあいだになんとか長いスキマが

あるように感じるし。

やっぱりこれ、あたしの名前じゃないのかな・・・？

でも、あたしが、ともえ、って呼ばれてたのは、たぶん本当のことです・・・。

・・・なんて、だいぶ不安になっちゃったんだけど、

「なんだか、とつてもすてきなきもちになるおなまえですう・・・。」

「あ、あはは・・・、なんだか照れるね。」

すつごい幸せそうな顔をして、そんなことを言うイエイ又ちゃんを見て、すぐに考えすぎだと思いなおした。

くー、きゆるる。

と、少し安心したせいだろうか、わたしのお腹がごはんを求める。

やだもう、恥ずかしいなあ。

「と、ところでイエイ又ちゃん、どこかごはんが食べられるところ、ないかな？」

恥ずかしさに顔を赤くしながら、イエイ又ちゃんに聞いてみる。

「あ、はい！ それでしたら、ちかくにボスがいるとおもうので、ジャパリまんをもらいにいきましよう！」

「ボス？」

「はい！ いつもみんなに、たべものをくばったりしてくれるんです！ あちらのほう

こうにいるはずですよ！」

「イエイヌちゃんの示した方向を見てみるけれど、それらしいものは何も見当たらない。それどころか、わたしの目に見える範囲にはわたしとイエイヌちゃん以外、誰もいなかった。」

「誰もいなそうだけど・・・？」

「わたしはイエイヌのフレンズですから！ たべもののおいをさがすのはぼつちりですー！」

「フレンズ？ 友だちってこと？」

「ともだち!? ともえさん！ わたしとおともだちになつてくれるんですか!？」

「え、いや、あの、もちろんわたしも、イエイヌちゃんとおともだちになりたいけど、そうじゃなくて・・・、」

「わたし、うれしいです！ さあさあ！ ごあんないします！ いっしょにいきましょうー！」

「えっと、その・・・うん、そうだね。いこつか、イエイヌちゃん」

「はい！」

自分の名前を思い出せても、まだまだわからないことはいっぱいある。

でも、あんまりあせらず、ちよつとずつわかつていけばいいかな。

となりあつて歩きながら、わたしはイエイヌちゃんから色々なことを教えてもらつていた。

イエイヌちゃんの説明はすつごいわかりやすく、わたしのあんまりよくない頭でも、すぐに理解することができた。

「へー、ジャパリパークってそんな感じなんだね。」

「はい！ いろんなフレンズさんが、いろんなとこにくらしてるんですよ！」

さつきもイエイヌちゃんが言っていた『フレンズ』というのはヒトの形をした動物のことみたい。

元々はわたしの知ってる動物の姿だったんだけど、さんどすたー？とかいうものチカラで、ヒトの形になったのが、『フレンズ』ということみたいだ。

なるほど。

だからさつきもしつぽがばたばた動いたりしたんだね。

うーん・・・、それにしても、なんだろ。

元が動物だつていうことを聞いてから、イエイヌちゃんのことを見るとなんだかう、ムズムズしてくる感じが・・・。

ふさふさはたばたしてるとか・・・、

たまにぴこぴこ動いてるお耳とか……、
すつこいもふもふなでなでしたい……っ！

「と、ところでイエイヌちゃんはなんのフレンズなの？」

ひとりでムズムズしちやつてるのがなんだか恥ずかしくて、ごまかすように聞いてみる。

「わたしはイエイヌのフレンズでして、とおくのおとをきいたり、においをかいだりするのがとくいなんですけど……、」

「……けど？」

わたしがオウム返しに聞き返すと、イエイヌちゃんは急に顔を暗くしてしまった。

「ほんとうはもつと、とくいなことがあるはずなんです。それなのに、わたし、これまでできたことがなくて……。」

「そうなの？」

できたことがないのに、とくいなことだってわかるんだ。

それって、イエイヌちゃんが、フレンズさん、だからなのかな？

でも、それって……、

「はい。だからわたし、だめなフレンズなんじゃないかと……。」

イエイヌちゃんは結論付けるように言葉を続ける。そして、しょんぼりした顔でだ

まっっちゃった。

「え？　なんで？」

思わず、素朴な疑問を口にする。イエイヌちゃんはそんなわたしの反応にちよつと戸惑つてゐるみたいだ。

「なんでつて、できるはずのことができないなんて、はずかしいじゃないですか……」

「うーん、あたしはそんなことないと思うけど……」

わたしはイエイヌちゃんの手を取つて、ぶんぶんと振りながらお話を続けた。

「だって、今まで出来なかつたことなのに、これから得意なことにできるんでしょ？　それつて、はじめから得意なことより凄いじゃない！」

イエイヌちゃんはびっくりしたような顔でこつちを見て、

「はじめからとくいなことよりすごい……、そんなこと、かんがえたこともなかつたです！」

いっぱいの笑顔でわたしの手を両手でにぎり返してきた。

しゅん、と降りていたしっぽもまたぱたと動き出してゐる。

ああ……、またムズムズが……っ！

「あの！　ともえさんはなんのフレンズなのでしょうか!？」

「へ？　あたし？　あたしはフレンズというか……」

ムズムズをがまんしながら自分のことを考えてみる。

今も自分のことは名前以外まったく覚えてないけど、動物だったりとか、パークという単語だったりとか、そういう一般的な知識はなんとなく思い出せる。

なんとなく、だから、正しいかどうかはわからないけど、イエイヌちゃんみたいに頭にお耳も、おしりにしっぽもないわたしは、たぶんフレンズじゃあない。

わたしの知っている動物で、わたしのようなのは、たぶんヒト以外にないだろう。

「たぶん、ただのヒトかな？」

答えた瞬間、イエイヌちゃんの気配が変わったのがなんとなくわかった。

「……いや、はつきりとわかった。」

「ヒト……、ヒト……、ヒト、ヒト、ヒトヒトヒトひひひひひ……っ!!」

「い、イエイヌちゃん……?」

様子のおかしいイエイヌちゃんに、ついさつき正体不明のイエイヌちゃんに追いかけられていたときのドキドキがよみがえる。

これは……、ひよつとして、

つまりその……、なんとというか。

……じらい、ふんじやつ——、

「ようやくあえまじだぁ——っ!! あいだがっだでずう——っ!!!」

「ちよっ！ イエイヌちゃん！ 落ち着いて！ くすぐりたいから！ ねえ！」

わたしが空気を読んで逃げ出す間もなく、イエイヌちゃんは飛びついてほおずりしてくる。

なんとか両手を体の間に挟んで距離を取ろうとするんだけど、イエイヌちゃんは見た目以上にパワフルで、だき着くように回された腕はびくともしない。

いや、あの、ぜんぜん嫌じゃないんだよ？

むしろさつきから感じてたムズムズが今はすつきりしてるし。

それに、くつついてるところがふわふわもこもこで、とっても気持ちいいんだけど…、
「わふっ！ わふっ！ べろべろべろべろっつっ！」

「あー！ あはははははは！ ちよつと！ なめるのだから！ ねえつてばー！」

おねがいだから、おかおをなめまくるのはかんべんしてください。

「そうじゃないがなつておもつだんですう！ ぞうじやないがなつておもつだんですう！
！ みみもじつぽもはねもふーどもないじ！ ひよつとじてヒトがなつておもつでえ
！ だからあー！」

「だからさつきも興奮しちゃったんだよね!? わかった！ わかったから！ いったん
落ちつこう!? ねえ!? あー！ あー！ あはははははは!!!」

イエイヌちゃんの興奮が収まるまで、この後めちやくちやペろペろされた。

フレンズ紹介くイエイヌく

イエイヌちゃんはネコ目イヌ科イヌ属の哺乳類、イエイヌのフレンズだよ！

イヌなのにネコ目とかややこしいけど、前は食肉目って名前だったんだ！

お肉を食べる動物をまとめたものなんだけど、わかりやすいようにネコ目って名前に変わったんだって！ 逆にわかりにくいよね！

イヌは元々オオカミと同じ動物だったんだけど、ヒトと一緒に暮らすようになって、すっごい時間をかけてだんだん今の姿になっていったんだって！

イエイヌちゃんはたぶん、動物だったころはハスキー犬だったんだと思うけど、ハスキーってオオカミさんとよく似てるよね！ かつこかわいいの！

イヌには鼻が良かったり、耳が良かったり、頭が良かったりっていう特徴があるよ！でも、あたしは何より『ヒトと仲良し』っていうのが一番の特徴だと思うかな！

ネコだったりウマだったりウシだったり、ヒトと一緒に暮らしてる動物はいっぱいいるけど、その中でも一番最初に一緒に暮らし始めたのがイヌなんだ！

一万年以上前ってすっごい昔で、それからずっと仲良しが続いているんだって！

びっくりだよね！

【こえ】ともえちゃん（しゅくしちほー）

けものフレンズR くびわちほー 第01話 「きおくそ
うしつ」B・Cパート

フレンズ紹介〜ロバ〜

ロバちゃんはウマ目ウマ科ウマ属の哺乳類、ロバのフレンズだよ！

分類がほとんどウマになってるくらいだし、ウマによく似てる動物なんだよ！

ロバには『うさぎうま』って名前もあって、ウサギみたいに長い耳が特徴だね！

ロバはウマに似てる動物の中で一番小さいんだけど、とっても力持ちなんだよ！

お水が少ないところでもへっちゃらだし、でこぼこしてるところも平気なんだって！

それに食べ物が少ないでも元気だから、色んなところで荷物を運んでヒトを助けてく

れる動物なんだよ！

昔話とかだとよく『ロバは頭がよくない』なんて書かれ方をするんだけど、本当はとつても頭がいい動物なんだって！

頭がいいせいで気にいらぬヒトのことを聞かなかつたりするから、『いうことを聞かない』頭がよくない』って思われてたんだって！

ひどいよね！

【こえ】ともえちゃん（しゅくしちほー）

あれから少しして、わたしはだいぶ困り果てていた。

それはもちろん、顔中よだれまみれになったことについてじゃあない。

たぶん色々忘れちゃう前から、わたしは動物が好きだったんだと思う。よだれまみれでもぜんぜん嫌じゃないし。

まあ・・・、その相手の姿が自分と似た年恰好の女の子っていうことについては、さすがに恥ずかしい気持ちがないわけじゃないけど。

でも、今はそれ以上に困ったことが目の前にある。

「たいへんなことをしてかしました・・・、このおわび、どうすればあ・・・、」

涙声でそんなことを言うイエイ又ちゃん。その体勢は両手両ひざを地面に降ろして、おでこも地面にぴったりつけて、ようするに、土下座スタイル。

さつきまでふりふりぴびこしていたしつぽもお耳もまた、しゅん、と垂れ下がっていた。

「そんな・・・、おわびなんて大丈夫だから、ねえ、イエイ又ちゃん、おかお、あげよ？」

「そういうわけにはいきません。あんなたいへんなことをしてかしたわたしが、そんなかんたんにあたまをあげるわけにはまいりません。」

「ほんとに気にしないでいいからあ．．．、ねえつてば。」

さつきから何度も同じことを言っているのだけど、イエイヌちゃんはすつごい頑固でぜんぜん聞いてくれない。

「ばつを！　どうかわたしにばつを！」

「罰つて言われても．．．、困ったなあ。」

どうしよう．．．、ほんとに困った．．．。

「ねえ、ちよつとそこのきみたち、」

と、後ろから声をかけられて振り返る。

頭の上に大きな耳をつけた女の子がのぞき込むようにこつちを見ていた。

「あ、ごめんなさい！　ひよつとして騒がしかった？」

「ううん、そんなことはないよ。」

この子もフレンズ．．．、なのかな？

大きな耳と頭の後ろでまとめた長い髪はイエイヌちゃんより濃いめの灰色をしてて、ふわふわさらさらと風になびく感じがすつごいかわいい。

うーん、あのふわさら、すつごいなでなでしたい．．．。

イエイヌちゃんのしつぽに感じたようなムズムズがまた湧き上がってくるけど、大きな声を出してごまかすことにする。

「えっと、はじめまして！ あたしはともえだよ！ この子はイエイヌちゃん！ . . .
ほら、イエイヌちゃんも！ ちゃんと立ってあいさつしないと！」

イエイヌちゃんの手を取って、えいつ、と立ち上がらせる。

「わふ！ い、イエイヌです！ おみぐるしいところをおみせしました！」
よかつたあ

なんとか元に戻ってくれたみたい。

「あたしは、ロバっていうの。よろしくね？」

ペこり、とロバちゃんが頭を下げると、長い髪がふわりと揺れる。少し遅れて、背中にしよった大きなリユックもぐらりと揺れた。

「それにしてもすごい荷物だね」

「わふ、とつてもちからもちですう。」

ロバちゃんは自分の体より倍以上大きいリユックを背負っていた。

フタが締まらないくらいばんばんに詰まっついて、さつきおじぎしたときにも中身が飛び出しちやいそうなくらいだった。

「 . . . お引越し？ フレンズさんもお引越しするの？」

なんでそんなにいっぱい荷物を、って理由を考えると、わたしにはそれぐらいしか思いつかない。けれど違ったみたい。ロバちゃんはふるふると首を振って、正解を教え

てくれる。

「えっと、あたし、ものをはこぶのがとくいだから、いろんなものをあつめたり、くばったりしてるの。」

「あつめたり、くばったり、ですか？」

「うん。だれかのいらぬものでも、ほかのこのすきなもの、だったりするから。」

わあ……！

すてきな理由……！

「すっごい！ ロバちゃん、みんなの役に立つのが好きなんだね！ えらいね！」

「ほんとです！ わたしも、いろんなものをあつめるのすきですけど、くばるなんてかんがえもしなかつたです！」

「えっと……、そんなおおげさなことじゃないけど……、ありがとう。」

わたしとイエイヌちゃんにほめられて、ロバちゃんは照れたように頭をかく。

あー、やっぱりかわいいなあ……。

「集めたものってどんなのがあるの？」

「そうだね……、たとえば、」

ロバちゃんは器用に後ろに手を回して、リュックからきらきらした丸いものを取り出した。

「これなんかは、さいきん、ひろったものなんだけど、きらきらしてて、すきなこもおお
いかなって。」

「……、これ、スーパーボール？」

「ともえさん、ごぞんじなのですか!？」

「うん、たぶん。……、ロバちゃん、それ、ちよつと貸してもらってもいい?」

「あ、うん。はい、どうぞ。」

ロバちゃんから受け取ってまじまじと見る。

うん、やっぱりラメ入りのスーパーボールだ。

「えへへ……、ちよつと遊んでもいいかな?」

「うん? かまわないけど……。それって、あそぶものなの?」

「そうだよ!。ちよつと見ててね!」

せつかくだから、おもいっきり高く飛ばしたいよね。

「とりやー!」

わたしは大きく振りかぶって、スーパーボールを思いっきり石畳の道に叩きつけた。

「ええっ!?! いきなりなにをするの!?! そんなことしたらこわれ……。って、あれ?」

石畳にぶつかったスーパーボールは、ぴよん、と跳ね上がると、そのまま真下に落ちてくる。そしてまたぶつかり、同じくらい跳ね上がった。

「わふ！　なんですかこれ！　ぴよんぴよんとんでます！」

「うわわあ……！」

ふたりは跳ねつづけるスリーパーボールをびつくりした顔で見ている。

だんだんと跳ね上がる高さが落ちてきて、ちょうどいい高さになってきたところで、わたしはボールを受け止めた。

「どうかな？　こういう風に遊ぶんだよ！」

「すごい！　こんなのはじめてみたよ！」

「ともえさん！　もういつかい！　もういつかいなげてください！　こんどはわたしがきやつちしたいです！」

しつぽをばたばたさせるイエイヌちゃんは待ちきれないとばかりに、はふはふと息を
はく。

「よーし、いくよー？　とりやー！」

「わふっ！　わふうー……んっ！」

跳ね上がったスリーパーボールが一番てっぺんに行くのに合わせて、イエイヌちゃんは大きくジャンプしてボールをキャッチした。

「イエイヌちゃん、すごい！　そんな高く飛べるの!？」

「えへへ……、じよそうをつければ、もっとたかくとべますよ？」

「みたいみたい！ もう一回やろう!？」

「わふっ!? いいんですか!？」

イエイヌちゃんが少し腰を落とした体勢になるのを見てから、わたしは今度は角度をつけてボールを地面にぶつける。

「じゃあ、いくよー? それー!」

「わふっ! わふわわふっ! わふうううーんっ!」

すっごいスピードでかけ出したイエイヌちゃんは、ななめに飛んでいくスーパーボールをまた一番てっぺんのところでキャッチした。

「あはは、楽しいね! イエイヌちゃん!」

「わふっ! とつても楽しいです!」

「わあ・・・、とつてもよろこんでくれてる・・・!」

楽しく遊んでるわたしたちを見て、ロバちゃんはすっごいうれしそうな顔。

やっぱり、ロバちゃんはだれかの役に立つのがうれしい子なんだね。

いい子だなあ・・・!

――

「そういえば、ロバさんはどうしてわたしたちにおこえがけを?」

「あ、そうそう、そうなの。」

ボールでひとしきり遊んだ後、イエイヌちゃんがたずねると、ロバちゃんはすこし不安そうな顔になってお話をつづけた。

「ちかくに、セルリアンをみかけたってこがいたから。ふたりとも、はやくここからはなれたほうがいいんじゃないかなって。」

「おお、それはかたじけない！ ごちゆうごく、ありがとうございます！」

「・・・せるりあん？」

わたしは、はじめて聞いた単語に思わず聞き返してしまう。

「イエイヌちゃん、せるりあん、ってなに？」

「セルリアンというのは、われわれフレンズにきがいにくわえる、とてもきけんなやつらのことです。」

「へー、」

「セルリアンにおそわれて、たべられると、フレンズはサンドスターをうしなってしまう、うごけなくなったり、どうぶつにもどってしまったり、するらしいです。」

なにそれこわい。

ってか、襲う？ 食べる？ こんなにかわいい子たちを？

うーん、あたしにはそれ、ぜんぜん理解できないなあ。

「なんだか怖いね。その、セルリアンっていうの、どんななの？」

「すがたかたちはおおきかったりちいさかったり、いろいろありまして、いろもあおかつたりあかかったり、いろいろです。」

イエイヌちゃんはわたしの質問に、ていねいに説明を続けてくれる。

「けど、おおきなまるいめと、いしをもっていて、はんぶんすきとおったようないろをしてるのは、みんなきょうつうしてますね。いしはセルリアンのじやくてんなので、」

そこで言葉を区切り、ぶん、と軽くひつかくような動作をする。

「そこをねらえばいちげきでしとめられますが、おおがたのこたいは、いしにこちらのがとどかなかつたりするので、てごわいのです。」

「へー、そうなんだ。」

なるほど。なんとなくイメージできたかも。

「イエイヌちゃんの説明、すつごいわかりやすいね。ありがとう!」

「うん、あたしもそうおもう。きみって、すぐくものしりなんだね。」

「そ、そんなことありませんよお・・・、えへへ、」

わたしとロバちゃんにほめられて、今度はイエイヌちゃんが照れちゃった。

やっぱりこつちもかわいい・・・!

「イエイヌちゃん、よだれ、垂れてるよ?」

「わふ! おみぐるしいところを!」

わたしが教えてあげると、イエイヌちゃんは口の周りをごしごしした。

あー、こんなところもすつごいかわいいなあ……！

かしこい！　かわいい！　イエイヌちゃん！

「ロバちゃん、ありがとね！　荷物いっぱいで大変なのに、教えにきてくれて。」

「ううん。こまったときにはたすけあうのが、パークのおきて、だから。」

「そうなんだ。すてきな掟だね！」

どうやらこのジャパリパークというところは、わたしが想像してたより、もつとずつとすてきなところみたい。

さつき聞いたセルリアンみたいに怖いものもあるみたいだけど、こんなにかわいいフレンズさんたちが助け合ってけなげに生きてるなんて、それを聞いただけで……、

「はうう……、」

「……？　どうしました？　ともえさん？」

「……いや、ちよつと、ムズムズがね？」

「ムズムズ？　どこかかゆいんですか？」

「あはは、大丈夫だよ。すぐおさまるから。」

「そんな！　がまんせずについてください！　わたし、がんばってなめますから！」

「はい治りました！　かゆいの治りました！　だからなめなくてダイジョブです！」

「そうですか・・・、くうん、」

しよんぼりしてるイエイヌちゃんには申し訳ないけど、またよだれまみれになるのは、さうがにちよつと遠慮したい。

「・・・くうん？ くんくん、くんくん・・・、」

と、イエイヌちゃんは突然周囲の匂いを嗅ぎだした。

すごく、真剣な表情。

「・・・イエイヌちゃん？」

「どうかした？ かおいろが・・・、っ、」

わたしと同じように不思議そうな顔をしていたロバちゃんも、耳をびくびくさせたかと思うと、顔をハツとさせる。

「ともえさん、ロバさん、わたしからあまりはなれないでください。」

イエイヌちゃんは腰を落として両手両足をひろげた姿勢になると、注意深く周囲を警戒しはじめた。

「えっ？ それってどういう・・・、」

「すぐ、ちかくまできています。いまからでは・・・、」

言葉を区切つて、ちらつ、ちらつ、と、わたしとロバちゃんを見る。

「・・・たぶん、にげられません。」

「あたしのことは、きにしないで。ふたりだけでも、にげ——、」

「こまったときにはたすけあうのが、パークのおきて、でしょう?」

「・・・、こまったなあ。でも、ありがとう。」

どうも、イエイヌちゃんとロバちゃんには、わたしには感じ取れない何かがあったて
いるみたいだ。

わたしだけ、ぜんぜん状況を呑み込めていない。

「わたしが、もうすこしはやくきづいていけば・・・、」

「しようがないよ・・・。やつらにはおいもおとも、うすいから・・・。」

「やつら・・・?」

・・・けど、たぶん。

このふたりの雰囲気は・・・!

「・・・、きます! セルリアンです!」

それは、わたしたちの数倍以上はある、おおきな怪物だった。

——

青くて丸い大きな体に、感情の見えない大きな丸い目。体のあちこちからは触手のよ
うなものが伸びていて、その一本一本がわたしの腰とおなじくらいの太さをしている。

こわい。

どきどきで胸がくるしい。

手足がぶるぶると震える。

背中にはひやりとしたものが流れて、ぞくぞくが止まらない。

あの場所で目を覚ましてから、ひよっとして、はじめてかもしれない恐怖を、わたしは感じていた。

「ふたりとも！ うしろにとんでくださいい！」

イエイヌちゃんの大声にハッと我に返る。

となりのロバちゃんは大きな荷物をしよったまま、ぴよんと後ろに飛びのいた。

わたしも飛ぼうとする。

けど・・・、ダメだ。

動かそうとしても、ひざが、がたがたと震えるだけ。

力の入らない足で、それでもむりやり飛ぼうとすると、どすん、と尻もちをついてしまった。

「あいつつ、たあ・・・、」

「ともえさん!!」

イエイヌちゃんは倒れてしまったわたしをかかえて飛び上がる。

「うわあっ！」

さつきまでわたしたちがいた場所を、ムチみたいに振るわれた大きな触手が勢いよく通り過ぎた。

「……っ、だいじょうぶですか!?! ともえさん!」

「う、うん。あたしはへいき、だけど……っ、つ、イエイヌちゃん! 腕が……!」

イエイヌちゃんの腕を見ると、大きく擦りむいたような傷が目映った。さつきの触手に、ぶつけられちゃってみたいだ。

「このくらい……っ、なんてこと、ありませんよ。」

イエイヌちゃんにはっこり笑ってみせるけど、すっごい痛そう。

そんな……、あたしのせいで……。

「……ロバさん、ともえさんをおねがいます!」

「うん! わかった!」

何もできないわたしをロバちゃんにあずけて、イエイヌちゃんはセルリアンに飛びかかった。

「がああああああつ! がああうつ!!!」

イエイヌちゃんはキバをむき出しにした、見たこともないようなこわい顔で爪を振るう。

色の違う両目が、するどい爪が、ぼうつと光っている。

その爪が力強く振るわれるたび、セルリアンの振り回す触手が何本もちぎれ飛んだ。

「す、すつごい……！ イエイヌちゃん、これならやつつけられるんじゃない……！」

「……うん。たしかにすごいけど、でも……、」

「があああうつ!! ……つ、」

ほんの一瞬、イエイヌちゃんの動きが止まる。

その一瞬をセルリアンは見逃さなかった。

「ぎやうんっ!」

「イエイヌちゃん!？」

触手の一本が、びしつと大きな音を立ててイエイヌちゃんの体を打ち付けた。ふき飛ばされそうになるのを何とかこらえて、イエイヌちゃんは反撃の爪を振るう。けれど、その爪はかろうじて触手をはじいただけで、さつきのような勢いはなかった。

「ぐっ……、っ! いぎっ……!」

「イエイヌちゃん……っ! イエイヌちゃん!」

次々に襲ってくる触手を、イエイヌちゃんは体勢のとのわないまま、なんとか爪ではじいているけど、押されてるのは明らかだ。

「イエイヌちゃん! ……っ、うわあっ!」

余裕が出てきたのか、セルリアンはこっちにまで触手を振るいはじめた。

「あぶないっ！」

危うくぶつかりそうなところを、ロバちゃんがかばってくれた。

「ロバちゃん！ 大丈夫!?!」

「だ、だいじょうぶ……。にもつが、ふせいでくれたから。」

「あ……、」

見ると、ロバちゃんのリュックが切り裂かれていて、中身が外に飛び出してしまっていた。

どうしよう。どうしよう。

イエイ又ちゃんがつらそうなのは、きつと、さつきケガしたせい……。

それに、ロバちゃんの大切なリュックまで……。

ぜんぶ、ぜんぶあたしのせいだ……!

「なんとか、しなきや……!」

考えろ。考えろ、あたし。

この状況をなんとかするためには……。

逃げるのは難しいって、イエイ又ちゃんがさつき言ってた。

なら、あいつをやっつけるしかない。

「……そうだ、石を見つけないと!」

イエイ又ちゃんがさつき説明してくれたセルリアンの弱点。石を狙えば一撃でしとめられるって。

それにかけるしか……!

でも、どこに……?

わたしは注意深くセルリアンを観察する。と、

「……、あつた! 頭のとつぺん!」

頭のとつぺんに大きな石があるのが見えた。

「でも……、あの高さじゃ……、」

イエイ又ちゃんでも、たぶん、あの高さには助走をつけないと届かない。

そんな隙を、セルリアンが見せてくれるとは思えない。

どうすれば……!

と、地面にばらまかれたロバちゃんの荷物に、あるものを見つける。

……つ、そうだ……!

これなら……!

「ロバちゃん! さつきのアレ! また借りるね!」

「ええっ! いいけど、なんで!? あそんでるばあいやないよ!」

わたしは地面に転がってるスーパーボールを拾い上げ、大きく振りかぶってから大き

く息を吸い込んだ。

そして、はき出す！

「おーい！ そののでつかいの！」

わたしの大声に反応して、セルリアンの大きな目がこちらを向いた。

「これでも！ くらえーっ！」

その瞬間を狙って、わたしは渾身の力でスーパーボールを石畳に叩きつける。上手くいくか不安だったけど、スーパーボールは狙い通りの方向に跳ね上がってくれた。

「と、ともえさん！ なにを!？」

「イエイ又ちゃん！ ボールに向かって飛んで！」

「えっ!? ええっ!? どうしてです——、」

「いいから！ 早く！」

「わふっ！ わ、わかりましたあっ！」

イエイ又ちゃんは大きく後ろに飛びのいて、セルリアンから距離をとる。

そして助走をはじめた。

「わふっ！ わふわふわふっ！ わふっ！ わっふうふうんっ!!!」

一気にスピードに乗ったイエイ又ちゃんはその勢いのまま、大きく飛び上がる。

狙いはスーパーボール。

セルリアンの直上に跳ね上がった、スーパーボールだ。

「わふっ！ あれは・・・っ！」

イエイヌちゃんも石に気づいたみたい。

両目と爪に宿る光が輝きを増す。

・・・よかった。

これで、やつつけられるね、セルリアン。

——っ、

「・・・っ、ともえさん!？」

と、イエイヌちゃんは飛び上がった状態で視線をこちらに向ける。

ああ、もう。

こつちにも気づいちゃったかあ。

やつぱりイエイヌちゃんはかしこいなあ。

たぶん、イエイヌちゃんの爪が届くより前に、セルリアンの触手がこつちに届く。

フレンズさんたちみたいなチカラがないわたしは、たぶん一回やられただけで・・・。

「いいから! そのままやつつけて!」

イエイヌちゃんはすっごい泣きそうな顔をして、でも、既に空中にある体では他に選択肢がないことにすぐに気づいたんだろう。キバをぐいとむいて、大声で叫んだ。

「があああああつあああつ!!!」

セルリアンの大きな触手が視界いっぱい広がる。

そしてそのまま、わたしの意識は途切れた。

———
夢を見ていた。

森に囲まれた丸い建物。

それをじつと見つめるナニカの姿。

どうしてかその姿ははつきりと見えない。

うすぼんやりとした輪郭で、まるで幽霊みたいに佇んでいる。

それが何なのか、そもそも生き物なのかさえ分からないけれど、

どうしてだろう、わたしにはそのナニカが悪いものには思えなかった。

ただただ独り、何かを待ち続けているようなその姿からは、ひとつの悪意も感じなかった。

———
「うーん……、んう……?」

「はっ! きがつかれましたか! ともえさん!」

「んー、……んー?」

目を覚ますと、わたしはふわふわしたものを枕に、夕暮れの中寝っ転がっていた。頭上には私の顔を覗き込むイエイヌちゃん。

この視界とこの頭の後ろのやわらかな感触・・・、ひよつとしてイエイヌちゃんの膝枕？

・・・あれ？

もしかしてここ、天国・・・？

「おかげはありませんか!?! いたいところ！ ないですか!?!」

痛いところは特にならない。

しいて言うなら、突然の状況にどきどきしているくらい。

「えーと・・・、うん、大丈夫みたい。でも、どうして・・・?」

「ロバさんが、たすけてくれたんですよ。」

そう言って、イエイヌちゃんは視線を横に向ける。

わたしも頭を横に向けると、すやすやと眠ってるロバちゃんがいた。

「ロバちゃんか？ えっと、ケガとかは・・・、」

「だいじょうぶですよ。あの、おおきなにもつが、こうげきをふせいでくれたみたいですよ。」

「そうだったんだ・・・。」

言われてみて、気づく。

ロバちゃんのリュックは――、

「……、ごめんなさい。」

もう、物を詰めるどころじゃないくらいにぼろぼろになってしまったりリュックを見て、わたしは自分のしたことを後悔した。

あたし、なんとかしなきゃって、思つて。

あたしのせいで、イエイ又ちゃんも、ロバちゃんも、ふたりとも……、

そんな、言葉にできない思いを、

「ともえさん。」

イエイ又ちゃんは全部わかっているとでもいうような、優しい顔で微笑んでくれた。

「だいじょうぶです。ともえさんが、わたしたちをたすけようとしてくれたことは、わたしも、ロバさんも、ちゃんとわかってますから。」

それだけで、わたしは救われたような、とてもあたたかな気持ちになる。

「うん……、ありがとう。」

「でも、ああいうきけんなのは、もうにどとしちゃだめですよ?」

「はい……、ごめんなさい。わかりました。」

そのあと、日もすっかり沈んでしまつて、わたしたちもロバちゃんの近くで一緒に寝

ることにした。

けど、さつき起きたばかりだから、なかなか寝付けない。

ごろん、と寝返りをうって空を見上げる。

きらきらと、視界いっぱいにはひろがる星々。まんまるなお月様は少しまぶしいくらい。

こうして見上げていると、不安だったこととか、怖かったこととかが、ぜんぶ、すーつと、消えていくみたいだ。

「イエイ又ちゃん、まだ、おきてる?」

何の気なしに、イエイ又ちゃんに声をかけてしまう。

「はいいい……、おきてますよお……?」

返事をしてくれたけど、イエイ又ちゃんはすっごい眠そうだ。

ううん。ちよつと、わるいことをしてしまったかも。

「ロバちゃん、リュックなくなっちゃって、かわいそうだよね……。」

特に話しかける内容も考えていなかったわたしは、とっさに今一番気になっていることを口にする。言ってしまったから、ちよつと後悔した。

ううん。後悔とは、またちがうかも。

自分の発言に、自分でいきどおりを感じている、とでも言うべきじゃないかな。

だって、かわいそうも何も、ぜんぶあたしのせい、なんだから……。

「んー……、なにか、かわりになるものが、あればいいんですが……。わふう……。」「かわいらしいあくびの音が聞こえてくる。

これ以上、寝るの邪魔しちゃだめだよ。

「ごめんね。もう眠いよね？ おやすみ、イエイヌちゃん。」

「はい……。、おやすみなさい……。、。」

あたしも、もう寝ないよ。

なにか……。、かわりになるもの……。

お日様ののぼってすぐ起きたわたしたちは、ロバちゃんが分けてくれた『ジャパリまん』で朝食をとった。

そういうえば、色々あったから忘れてたけど、昨日から何も食べてなかったよね、あたし。

そもそもごはんをもらいに『ボス』のところに行こうとしてたんだっけ。

「なにこれ！ すっごいおいしいー！」

「わふー！ やはりジャパリまんは、いつたべてもおいしいですねー！」

はじめて食べたジャパリまんは、お腹がすっごい空いたのもあって、とってもおいしかった。イエイヌちゃんも、とってもおいしそうにほおばっている。

「肉まんみたいだけど・・・、ちよつと違うかな？ 冷めてるのにやわらかくて、あまくてしよっぱくて、なんだか幸せになる感じ！ ありがとね！ ロバちゃん！」

おいしい朝ごはんに上機嫌だったわたしは、そのままのテンションで話しかける。

「・・・ううん、どういたしまして。」

「・・・、っ、」

そして、ロバちゃんの表情に言葉がつまってしまった。

どこか寂し気な、その表情。

「ほんとうに、わけていただきたい、よかったですか？ ロバさんのぶんは・・・、」

「・・・だいじよぶだよ。ボスにあつたらすぐもらえるし。それにあたし、すくないたべものでも、へいきだから。」

「・・・そうなんだ。燃費、いいんだね。」

「ねんぴ？ うん、よくわからないけど、たぶんそうかな・・・。」

よくわかってない顔のロバちゃんは、やっぱり寂しそう。

それは、そうだよね。

だって大切なリュックがなくなっちゃったんだから。

すごく、いたたまれない気持ちになる。

わたしの、せいで・・・、

「あはは・・・、燃費つてがいねんは、フレンズさんたちにはないか・・・。」
場をつなぐように、つぶやくように言いながら、

「あ、」

と、思いついたことに声が漏れる。

・・・ええと、ひよつとして。

あれなら、ひよつとしたらリュックのかわりになるかも・・・!

「ねえ、ロバちゃん! このあと、一緒に来てくれる? 見てほしいものがあるんだけど
!」

「うわわ! うわわわわ! これすごい! これ、すごいよ!」

ロバちゃんは出会ってから一番のテンションで、すごいすごいと何度も言った。

「昨日、イエイヌちゃんに会う前に見つけたの。リュックの代わりになるかなって。」

あの建物からちよつと歩いた、わきの木陰。

すっごい古いけど頑丈そうなほろ馬車は、今日も同じ位置にあった。

「これがあれば、もつといっぱい、いろんなものはこべるかも・・・! ものだけじゃ
なくて、みんなをはこぶのもいいかなあ・・・!」

「良かったあ。すっごい喜んでくれてるみたい。」

「はい。わたし、こんなによくこんでるフレンズをみるの、はじめてかもしれません。」
馬車のつかいみちをあれこれ口に出してるロバちゃんの横で、わたしとイエイヌちゃんは顔を見合わせて笑った。

「こんなすてきなものをみつけてくれて、ほんとにありがとう!」

「いいからいいから、あたしのせいでリュック、壊れちゃったんだし」

わたしとイエイヌちゃんはロバちゃんのお願いを聞いた形だ。「だれかをのせてみたい!」というロバちゃんのお願いを聞いた形だ。

乗ってみてわかるけどやっぱりかなり頑丈で、揺れも少ない。

「ともえさん? なにをしてるんですか?」

「ん? ちょっとね。旅の思い出を絵に描いてるの。」

「わふ! みたいです!」

「まだ描いてる途中だからだーめ。」

「くうん・・・、そうですかあ・・・。」

別にいじわるをしてるつもりはないけど、しょんぼりしたイエイヌちゃんを見ると、とても悪いことをしてる気分になる。

見せてあげようとも思うのだけど、やっぱり、かいてる途中の絵を見せるのは、ちょっとはずかしいかな。

「がっかりしないの。かきおわつたら、見せてあげるから！」

「……はい！　ありがとうございませす！」

描きかけの絵には、ロバちゃんがうれしそうに引く馬車と、その荷台でにつこり笑っているわたしとイエイヌちゃん。

とてもすてきなロバ車の旅だった。

「ねえ、きみたち。ぼしやのかわりに、すきなものをもつていつてくれないかな？」

昨日、セルリアンにばらまかれてしまった荷物を手分けして荷台に載せていると、ロバちゃんがそんなことを言った。

「え、いいっていいって。あたしはただ見つけただけだし。」

「わたしもだいじょうぶですよ。わたしにいたっては、みつくてすら、いませんし。」

そう言つて断ろうとするわたしたちに、ロバちゃんは首を横に振る。ふわさらのポニーテールが一緒になつて揺れた。

「パークのものは、はじめにみつけたこのもの、なんだから。それに、きみはあぶないところをたすけてくれたでしょ？」

真剣な顔でそう言つて、かと思うと、すつ、と声のトーンが落ちた。

「えつと……、もちろん、こんなすてきなものの、かわりになるものなんてないし……、いらぬものももらつてもしょうがないし……。」

あわわ。

ロバちゃん、せっかく喜んでくれたのに、

また、しょんぼりした顔に！

「えーつと！ あたしは何にしようかな！ すてきなものがいっぱい目うつりしちゃうよね！ ね！ イエイヌちゃん！」

「わふっ！ そうですね！ なにがいいですかね！」

「そ、そう？ そういつてもらえると、うれしいな！」

顔をほころばせるロバちゃんの横で、またイエイヌちゃんと顔を見合わせて笑う。

うん。やっぱり遠慮するのはよくないよね。

せっかくのご厚意、甘えさせてもらおう！

——

「それじゃ！ あたしはこれで！ ふたりとも、げんきでね！」

元気な声でそう言って、ロバちゃんは馬車を引いて歩いていった。

姿が見えなくなるまで手を振り続けてから、わたしたちも歩き出した。

「それにしても・・・、イエイヌちゃんがもうもの、本当にそれでよかったの？」

「はい！ これがあれば、ともえさんのすけつちぶつくや、どうぶつずかんが、もちはこびやすいですから！」

ロバちゃんから馬車の代わりにもらったもの。

わたしはどうぶつ図鑑と、どうぶつプリントがちりばめられた水筒を、イエイヌちゃんは肩掛けかばんをもらった。

どうぶつ図鑑はどこどこ破れたり、色あせたりしてるけど、フレンズさんたちのことをよく知る為にはとつても役立ちそうだ。

そして、イエイヌちゃんがもらった肩掛けかばんは、スケッチブックや図鑑をしまうにはちょうどいいサイズだった。

「そんな気をつかわなくてよかったの……、スーパーボール、欲しかったんじゃない？」

「そ、そんなことはああありませんよお。わふ。」

ロバちゃんも「かばんだけじゃなくて、ボールももっていいよ」って言うてくれたのに、「そんなにいっぱいもらえませんか！」と断固拒否したイエイヌちゃんだった。

わたしなんか、どうぶつプリントがとつてもかわい水筒と、どうぶつ図鑑と、どっちにしようかえんえん迷ったあげく、両方もらっちゃったというのに。

「もう……、イエイヌちゃんは頑固だなあ。」

ひとりごとのようにつぶやいて、わたしはイエイヌちゃんの持つてるかばんを手にとった。

「なら、せめてこれはあたしが持つね!」

「だ、だめです! それではともえさんが、つかれてしまいます!」

イエイヌちゃんはかばんを手放す気はないみたいで、ちやうど引つ張り合う形になった。

「いいの! こればかりは譲らないからね! 中身があたしのものなら、あたしが持たなくちゃだめでしょ!」

そうやって強く言うと、かばんを引つ張るイエイヌちゃんの力が弱まり、しばらくしてその手がゆっくりとはなれた。

「わふ・・・、わかりましたあ・・・。」

「よしよし。ありがとね、イエイヌちゃん。」

「くうん・・・、ともえさんはがんこですう・・・。」

イエイヌちゃんから受け取ったかばんに、さつそく図鑑とスケッチブック、水筒をしまう。

・・・と、

「あれ・・・? このポッケ、何か入ってる・・・?」

かばんのポケットに何か入っているのに気付いた。

「なんですかね? あけてみてみたらよいのでは?」

「うーん、後にしようかな。よつ、と・・・！」

ベルトを肩にかけると、かばんがちょうど腰のあたりにくる。まるで昔から使ってたみたいにしつくりきた。

「どうかな？ 似合う？」

「はい！ とつてもよくおにあいです！」

こうしてみると、なんだか旅立ちの準備ができた、みたいな感じがして、気分が高まる。

うんうん。この感じ、わるくないわるくない。

「さて、これからどうしようかな。」

「あ、あの、もし、ともえさんさえよろしければ、わたしのおうちにいつてみませんか？」

「イエイヌちゃんの、おうち？」

「はい！・・・あの、せいかくには、わたしがフレンズになるまえに、ヒトとすんでたおうち、だとおもうんですけど。」

「イエイヌちゃんがフレンズになる前かあ・・・、」

言いながら、想像してみる。きつとすつごいかしこくてかわいい、ときどきアホっぽくて懐っこい、すてきな子だったんだらうなあ・・・。

ああ、またムズムズが・・・。

「ごまかすように顔をぶるぶる振る。

「いいね! いこうよイエイヌちゃん!」

「わふ! ありがとうございます!」

「そんな、お礼なんて。こちらこそ、だよ。案内してもらうのはあたしなんだから。それに、ヒトが住んでたつてくらいなら、パークのことも何かわかるかもだし!」

「そうですね! なにかヒトにしかわからないようなてがかりが——つ、」

「イエイヌちゃん? どうしたの?」

突然、イエイヌちゃんは息をのむように言葉を詰まらせた。

まさか……。また、セルリアン……?

なんて思っていると、イエイヌちゃんはあわてた様子で言葉を続ける。

「お、おもいだしましたあつ!」

「思い出したつて、ヒトのこと?」

「いえ! そうではなく! いや! たしかにヒトのことですが!」

がくぜん、という顔で、イエイヌちゃんはこつちを見る。

そしてそのまま——、

「えつ? ちよつと! イエイヌちゃん! 何してんのつ!」

「そのせつは! ほんとうにもうしわけありませんでしたあつ!」

ずさつ、と飛びのいたかと思うと、イエイヌちゃんは地面におでこをこすりつけた。

「ばつを！ なにとぞ！ わたしにばつを！」

「ええーっ!!? またあーっ!!?»

思い出したって、そつちのことー？

うーん、困った。

昨日は途中でロバちゃんが出来て、うやむやにできたけど・・・、これ、たぶん、実際に罰を与えるまでくり返すパターンかなあ・・・。

うーん・・・、罰かあ。

そのお耳やしつぽを、あたしに思うさま、もふもふさせなさい！

なんて言ったら、確実にドン引きだし・・・、主にあたし自身が。

「うーん・・・、それじゃあ・・・、」

しばらく考えて、

「その、呼び方さ、」

罰とは呼べないような、簡単なお願いをしてみることにした。

「ともえさん、じゃなくて、ともえちゃんって呼んでくれないかな？」

きよとん、とした顔でこつちを見るイエイヌちゃん。

「・・・、えつと、・・・それ、ばつですか？」

「そうだよ！ 罰だよ！」

「まったたく、ぼつになつてないような……。」

「いいの！ これは罰なの！ わかった!？」

「わ、わふ！ わかりました！」

大きな声に驚いたのか、イエイヌちゃんはがばつと顔を上げる。

「じゃあ、言つてみて、ともえちゃん」

「ともえ……、ちゃん」

「もう一回」

「ともえ、ちゃん」

「元気な声で！」

「ともえちゃん！」

「はい！ よくできました！」

そうして、ふたりで顔を見合わせて、にっこり笑った。

「えへへ……、これからよろしくね！ イエイヌちゃん！」

「はい！ よろしくおねがいます！ ともえちゃん！」

— — —

ここは、ジャパリパーク。

今日もたくさんさんのフレンズさんたちが、のんびり幸せに暮らしています。

ほかほかと暖かな日差しが降り注ぐ草原を、

ふたりのフレンズさんたちが、お話をしながら旅をしていました。

「センちゃん・・・、みち、ほんとにこっちであつてるのー?」

「そのはずですよ、アルマーさん。わたしがカルガモさんにきいたじょうほうによると、こちらでまちがないはずですよ!」

「ほんとかなー?」

「カルガモさんはみちあんないがとくいなんですから、まちがえるはずですよ。」
「いまみちあんないしてるのセンちゃんじゃーん・・・。」

どうやらふたりは何かを探しているみたい。

何を探しているのかな?

「それにしてもカルガモ、ぶじでよかつたよねー。」

「そうですね。くらいところで、ならんであるいてるなにかをみつけて、」

「つい、ついていつちやってー、」

「あかるいとところにでたら・・・、」

「ならんであるいてたのがー、じつはセルリアンだったなんてー!」

「きやーっ!」

あらあら、怖い話。

ふたりが探しているのもセルリアンなのかしら?

ふたりとも、あぶない目にあわない?

大丈夫?

「そしてならんでるせんとうにはー・・・!」

「きやーっ! きやーっ!」

「センちゃん・・・、これ、あたしがセンちゃんからきいたはなしなんですけどー?」

「きやーっ! きやーっ! きやーっ! ...ぷっ、くすくす・・・、」

「まったくもー・・・あはは、」

うふふ、よかった。

なんだかふたりとも楽しそう。

ふたりのフレンズさんたちの、楽しい旅は続きます。

けものフレンズR くびわちほー 第02話 「おおきな
けもの」アバン・Aパート

「ふんふん・・・、カラカルはネコ目ネコ科の動物で・・・、へー、お耳の先に、長いふさ毛があるんだね。」

「・・・あの、ともえちゃん。」

「目と耳が良くて・・・、3メートルくらいジャンプして、鳥をつかまえたりするんだって。すっごいなー。あたしのふたり分以上ってことだね？ それ、みてみたいかもー！」

「ともえちゃん。」

「しゅりようのうりよくは高く、自分の重さの2倍から3倍の・・・、」

「ともえちゃん！」

「ん？ どうしたの？ イエイヌちゃん。」

声をかけられて、わたしは手元の図鑑から、となりを歩くイエイヌちゃんに目を向けた。

「どうしたの、じゃないです！ ちゃんとまえをみてあるかないと、あぶないですよ！」

なんだかとっても心配してくれてるみたい。

手をぶんぶんと振ってみせるイエイヌちゃんに、少しほっこりした気分になる。

「だいじよぶだよ。イエイヌちゃんは心配性だなあ。」

「・・・はあ、さつきから、きにぶつかりそうだったり、いしにつまづきそうだったり、ぜんぜん、だいじようぶそうに、みえないのですけど。」

ひらひらと手を振るわたしに、イエイヌちゃんはちよつとあきれ顔だ。

「だいじよぶだいじよぶ、平気だつてー。えーと、なにになに・・・、キーウイはキーウイ目キーウイ科の鳥類で・・・。」

「もう！ またあー！」

「もうちよつと・・・、もうちよつとだけ・・・！」

「あとで、ゆつくりみればいいじゃないですか！」

しゅぼつ、と。目の前にひろげていた図鑑が、一瞬で視界から消える。

「あー！ かえして！ かえして！ もうしないから！ ごめんなさい！」

「ダメです！ しばらくこれはわたしがあずかります！」

「そんなあー！」

図鑑を取り上げられ、わたしの口からは思った以上に情けない声が出る。

「うう・・・、まだ読んでる途中だったのに・・・。」

「じいじとく、ですー！」

凶鑑をわたしから遠ざけるように持つて、イエイヌちゃんはもつともなことを言う。ホントその通りだから、さすがにそれ以上の文句は出なかった。がさがさ……、

と、わきの茂みから音がする。

「あれ……？ あそこに何か、いる？」

「ごあんしんを。このにおいは、ボスのものです。」

「ボスって、昨日言ってた、たべものを配ったりしてる子？」

イエイヌちゃんに聞いてみると、こくり、とうなずいた。

わたしが視線を茂みに戻すと、ぴよこん、という可愛らしい足音とともに、何かが飛び出してきた。

「か、かわいいーっ!!」

思わず大声をあげてしまう。

「なにこれなにこれ！ なんなの、この子！ すっごいかわいい！」

ボス、なんてこわそうな名前だから、こんな見た目をしてるなんて思ってもみなかった。わたしは、その一抱えサイズの縫いぐるみみたいな生き物(?)をまじまじ見つめる。

きれいなうす緑色をしたまるっとした体に、まつすぐ上に伸びた大きな耳。縦長のつぶらな瞳はふか緑色をしていて、なんだかきらきら輝いて見える。キツネかタヌキみたいな、ずんぐりとしたしっぽも、とても愛らしい。

お腹のまんなかには、丸いレンズみたいなものがついている。なんだか光ったり消えたりしてるのは、どういうことなんだろう？

「イエイヌちゃん！ この子もフレンズさんなの!？」

「たぶん、フレンズではないとおもいます。すがたかたちが、ヒトとはちがいますから。ですが、フレンズがすんでいるところのちかくには、だいたいいますね。フレンズにジャパリまんをくばったり、いろいろなものをなおしたりして、くらしているのです。」

「そうなんだ！ ボスって、すっごいんだね！」

相変わらずわかりやすいイエイヌちゃんの説明を聞いていると、ボスがこちらに近づいてきた。

わっ、歩くとびこびこ、音がするんだ！

やっぱりかわいい・・・っ！

「ボス、こんにちわ！ あたし、ともえつていうの。こつちの子はイエイヌちゃん。仲良くしてね！」

「あ、あの、ともえちゃん。ボスは・・・」

わたしがボスに話しかけると、イエイヌちゃんは少し残念そうな顔をして何かを言いかけた。

・・・なんだろう？

ひよつとして、恥ずかしがり屋であんまりしゃべってくれないとか？

なんて考えていると、わたしの足元までたどり着いたボスは、こちらを見上げながら話しかけてきた。

「ハジメマシテ、ボクハ、ラッキービースト。キミハトモエ、トイウンダネ。ヨロシク、トモエ。」

「こちらこそ！・・・って、ボスって名前じゃないの？ らっきー、びーすと？」

「ソウダヨ。ボクハ、ラッキービースト。キミハナニガ、ミタイカナ。キミノミタイモノヲ、オシエテネ。ボクガアンナイスルヨ。」

「わー！ ありがとー！ でも今はイエイヌちゃんに、おうちまで案内してもらってるから、またで後でいいかな！ ね、イエイヌちゃん！」

と、イエイヌちゃんに声をかける。

・・・あれ？

なんでだろう。イエイヌちゃんは口をあんぐりとあけて固まっていた。

まるで、信じられないものを見た、というような表情。

「イエイ又ちゃん・・・?」

もう一度声をかけると、イエイ又ちゃんは、すうつ、と大きく息を吸い込んで、
「しゃ・・・しゃべったあああああつ!?」

え、ええ・・・?

なにその反応・・・?

けものフレンズR くびわちほー 第02話「おおきなけもの」

「と、ともえちゃん! すごいです! ボスがしゃべってます!」

イエイ又ちゃんは、興味しんしん、という感じだった。

よほどびつくりしたのか、うれしいのか、その両方かもしれないけど、しつぽがもの
すごいスピードでばたばたと振られている。

まあ、残念なことにはわたしには何がすごいのか、ちんぷんかんぷんなんだけど。

「えーと、確かにしゃべってるけど、それって、何かすごいことなの?」

「あ・・・、えつとですね! ボスはこちらがはなしかけても、ぜんぜんおはなししてく
れないんです! だれがはなしかけても、いつしよで・・・。わたしもジャパリまんを
もらうときとか、おれいをいうんですけど、おへんじをもらったことはいちどもなく

て・・・」

「そうなんだ。じゃあ、なんで今は話してくれてるんだろ？」

「わかりませんが・・・、あの！ ボス！」

「ずいつ、とわたしとボスの間に割って入り、イエイヌちゃんはべこり、と頭を下げた。いつもジャパリまんをくださって、ありがとうございます！ わたしだけじゃなくて、みんなボスにはかんしゃしてます！」

お礼の言葉を元氣いっぱいに言うイエイヌちゃん。

けれど、ボスの反応は、

「・・・、・・・、」

「あの・・・、ボス・・・？」

「・・・、・・・、・・・、」

こわいくらいの、無言。

ああ・・・、なんでこの子がボスって呼ばれてるのか、わかった気がする。

たしかに、これは、ボスって感じた。

「くうん・・・、やつぱり、おへんじくれないです・・・。ひよつとして、わたし、きらわれてるんでしょうかあ・・・？」

しゅん、とお耳としつぽを下げて、イエイヌちゃんはわたしの方を見てくる。

「そんなことないよ！ だれだって、嫌いな子に食べものあげたりしないでしょ？」

「それは、そうですけど・・・」

「ねえ、ボス。なんでだまっちゃったの？ イエイヌちゃんに、お話してあげて？」

ひぎを曲げて、目の高さを落として話しかけると、ボスはぴこぴこ、と音を出しながら、

「トモエ、ソレハデキナイヨ。」

「わふ！ またしゃべりましたあ！」

「なんで？ あたしとはお話してるのに！」

「フレンズヘノカンシヨウハ、キンシサレテイルンダ。セイタケイノイジガ、ゲンソクダカラネ。」

「かんししょうは、きんし？ せいたい系の、いじ？」

「ソウダヨ。」

んー、と。それはつまり。

「ねえ、ボス。あなたのお仕事を教えて？」

「ワカッタヨ。」

ボスはまた、ぴこぴこと音を出しながら言葉が続ける。

「ボクノシゴトハ、オキヤクサマニ、パークノアンナイヲ、スルコトダヨ。フレンズタチ

二、タベモノヲハイキュウシタリ、シセツノテンケンヤ、シユウリモ、スルヨ。」
ああ、やつぱり。

「オキヤクサマガ、カイテキニフレズトフレアエル、カンキヨウツクルノガ、パーク
ガイドロボデアル、ボクノシゴトダカラネ。」

ぱーくがいどろぼ、という言葉が出てきて、なんとなくついていた予想が正しかった
ことを知った。

「・・・うーん、どうもそういうことみたい。」

と、イエイヌちゃんに振ってみる。

「つて、今の話の内容じゃ、わからないよね?」

ごめんね、と言葉を続けようとするけど、口に手を当てて考えるようなしぐさをして
いたイエイヌちゃんは、ぼふ、と両手を目の前で合わせて、

「いえ。だいたい、わかりました。」

「ええ!!? 今のでわかるの!?!」

「はい。おきやくさま、とはヒトのことですね? ボスはヒトをあんないすることがお
しごとで・・・、せいたいけいのいじ、とはなにか、よくわかりませんが、とにかくフ
レンズのおせわはできて、おはなしすることはできない、と。」

イエイヌちゃん! 察しよすぎ!

すっごいなあ。わたしは、記憶を失う前の知識がちよつと残ってたからわかったけど、そういうものなしに、今のでわかっちゃうなんて。

ホント、かしこいなあ。

・・・はて。

ヒトのえいちとは、いったい。

「ともえちゃん？ どうしました？ なんだか、おかがくらいです。」

「あはは・・・、大丈夫だよ。気にしないで。ありがと。」

「そうですか・・・？」

うん。だいじよぶだいじよぶ。

ちよつと、自分が情けなくなってるだけだから・・・、うう。

「トモエ。グアイガワルイナラ、イツテネ。ジャパリクリニツクニ、アンナイスルヨ。」

「ボスもありがと。でも、ホントにだいじよぶだから・・・。」

おねがいだから、これ以上優しくしないで・・・。

———

「・・・っていう感じのとき、らしいんだけど、ボス、どこかわかる？」

しばらくして落ち着いたわたしは、ボスにイエイヌちゃんのおうちがある場所について聞いてみた。と言っても、イエイヌちゃんから聞いた内容をそのまま伝えてるだけな

んだけど。

「ナルホド、ソレハ、キョジユウク、ダネ。ココカラダト、ダイブトオイヨ。」

「……って言ってるけど、イエイヌちゃん、そうなの？」

「わふ！ たしかにいっぱい、あるいてきました！」

「ココハ、ソウゲンチホート、チクリンチホーノ、サカイメダカラネ。キョジユウクマデ

ハ、アルクトナンニチモカカルヨ。」

「……、って、言ってるけど……。」

「はい！ いっぱい、あるいてきましたから！」

「そつかあ……。いっぱい、あるいてきたんだねえ……。」

てつきり、イエイヌちゃんのおうち、すぐ近くにあると思ってたんだけど……。

うーん、ジャパリパークって、かなり広いんだね。

「……、なんでそんな遠くまで来たの？」

「わふ！ わたしにもよくわかりません！」

「そつかあ……。わからないんじゃないよねえ……。」

とてもかしこいイエイヌちゃんだけど、こういうのん気な感じはイヌっぽいかも。

なんてことを思っていると、イエイヌちゃんの表情が、少しだけ暗くなった。

「あ……。やっぱり、わたしのおうちにいくの、やめましょうか？」

「え？」

イエイヌちゃんは暗い表情のまま、おはなしを続ける。

「ボスとあえて、おはなしもできたことですし……、いちど、ともえちゃんのめざめたばしょに、もどってみてはどうでしょうか。ボスにきいてみたら、なにかわかるかもしれません。」

しゅん、と。お耳としつぽを下に降ろしたイエイヌちゃんは……、なんとというか、とても心細そうだ。

「なに言ってるの？ イエイヌちゃん。」

ぴしやり、と言葉を返すと、イエイヌちゃんは、くうん？とか細かい声で反応した。

「今はイエイヌちゃんの案内で、イエイヌちゃんのおうちに向かっているんですよ？」

「いえ……、でも……。」

「あのさ、イエイヌちゃん。たしかに記憶のてがかりを探すのもたいせつかもしれないけど。そんなの、後でできるじゃない。」

そう、そんなのは後でできることだ。

イエイヌちゃんのおうちに行つて、一緒に日が暮れるまで遊んで、一緒に寝て。そうしてから、気が向いたらまた戻ってくればいい。

わたしはそう思うのだけど、イエイヌちゃんはどうにも違うみたいで、びつくりした

顔をしていた。

「そんなの、って……、ふあん、じゃないんですか？」

「不安？　なんで？　イエイヌちゃんがいるのに。」

つい、ぼろつと本音が漏れる。口にした後では飲み込むこともできない。

あんまりにもイエイヌちゃん頼りな発言に、恥ずかしくて顔が真っ赤になる。

「……っ、とにかく！　イエイヌちゃんのおうちに行くのが、今のたいせつなの！　あたし、すっごい楽しみにしてるんだからね？」

「は……、はい、わかりました。……わふう。」

イエイヌちゃんは、とてもかしこい。

けど、かしこいから、色々と考え過ぎちゃうみたい。

そんなわたしたちの会話を聞いていたのか、ボスが声をかけてくる。

「トモエ。キョジユウクマデハ、チクリンヲトルホウガ、ハヤイヨ。」

「ちくりん？」

「アレダヨ。」

と、ボスは体を傾けて遠くを示す。つられて目を向けた先には、大きな竹林が空に向かって伸びているのが見えた。

「そうなんだ。じゃあ、あそこまでの案内は、お願いしようかな？　イエイヌちゃん。い

「いよね?」

「はい! よろしくおねがいます!」

「だって。ボス、おねがいね?」

「ワカッタヨ。」

そうして、わたしたちはボスを先頭に竹林に向かうことにした。

「ソロソロ、チクリンニハイルヨ。」

「わあ・・・! すっごいおおきい・・・!」

見上げるように大きな竹に、思わず声が漏れた。遠くに見えていたときから大きなあお思っていたけど、近くに来るとよけいに大きく感じる。まるで空につき刺さっているみたいだ。

「チクリンハ、ホトンド、イツポンミチダケド、ワキミチニハイルト、マヨウカラ、デグチマデハ、アンナイスルヨ。」

「うん、ありがと! ボス!」

ぴこぴこ音を立てて歩くボスに続いて、わたしたちも竹林に入る。

「チクリンニハ、トテモユウメイナドウブツノ、フレンズガイルネ。」

「有名などうぶつの、フレンズ?」

「ソウダヨ。コノジカンナラ、アエルカモシレナイネ。」

ぴこぴこと音を立てて歩くボスを先頭に、竹林の中をゆつくりと歩く。ちょうどいいくらいに和らいだ陽の光が、とても心地いい。

「それにしても、竹がいつぱいだねー。」

「すごくいいにおいですね。なんだかおちつきます。」

「あ、それわかる。なんだか眠くなつてきちやうかも。」

青臭いような、すーつとする香りに安らぎながら、さらさらと風に流れる笹をながめる。となりを見ると、イエイヌちゃんは凶鑑のページをばらばらとめくっていた。

「イエイヌちゃん、ちゃんと前見て歩かないと危ないよ？ 凶鑑、あたしが持とうか？」

「ともえちゃん？ そのてにはのりませんよ？」

「あはは、やつぱりダメか。でも、危ないのはホントだよ？」

「ごしんぱいにはおよびません。わたしはにおいとおとで、みなくてもだいたいわかるので、だいじょうぶなのです。」

「どやー、という表情のイエイヌちゃん。

なにそれ、ずるい。

いやまあ、事実だろうから非難する声は出ないけど。

あと、どや顔かわいい。

「それと。あぶないのはほんと、なんて、どのくちがそんなことを？」

「あはは・・・、ごめんなさい。反省してます。」

いや、ほんとに。かえす言葉もございませぬ。

「それにしても、このずかん、かなりぼろぼろですねえ。」

イエイ又ちゃんは凶鑑を大事そうに持って、しげしげと眺めるようにしながら言った。

「そうだね。ヒトの手をはなれて、だいぶ経つてそんな感じかな。」

ひよつとしたら、この凶鑑の持ち主さんがあまり物を大切にしないヒトだった可能性もあるけど、たぶん、そうじゃないと思う。

さつき読んでいた時も、自然にできたものじゃなく、何度も何度も読み返してできたような汚れが目についたりしたから。

「ここなんて、かみがはんぶん、なくなっちゃってます。」

「あ、そうそう。あたしもそれ、気になったんだ。」

凶鑑の最初の方に、半分やぶれてしまっているページがあった。

気になったのは、やぶれていることはもちろんんだけど、それ以上に、

「たいせつな、ともだち。」

「と、ともえちゃん？ いきなりどうしました？」

と、びつくりした顔のイエイヌちゃん。なんだろう、ちよつぱり顔が赤い気がする。「た、たしかにともえちゃん、たいせつなおともだちですけど・・・、いきなりそんなこといわれると、てれちやいます・・・。」

「えつと、そうじゃなくて、あ、いや、もちろんイエイヌちゃんはたいせつなおともだちなんだけど・・・。そうじゃなくて、その、半分残ってるページに文字があるでしょ？そこに、そう書いてあるの。」

やぶれていること以上に気になるのは、残った半分に書かれた手書きの文字の方だ。クレヨンで書かれた、たいせつなともだち、という文字。

だいぶ下手なんだけど、見ているこつちまで幸せな気分になるような、そんな文字。「そ、そうなんですわね・・・わふ、おはすかしい。」

イエイヌちゃんは顔を赤らめながら、両手でそれを隠す。

「恥ずかしい？　なんで？　フレンズさんは元は動物なんだから、文字が読めないのは別に恥ずかしいことじゃないでしょ？」

「いえ、そういうことではなく・・・。」

なんだかイエイヌちゃんの顔がますます赤くなる。なんでだろ？

まあ、恥ずかしいって言ってるのを、あんまりこれ以上つつくのもよくないよね。うん、きにしない、きにしない。

「そ、それにしても、ここにはどんなどうぶつが、かかっていたんでしょうか。」

「うーん……、わかんないけど、きつと、すてきな動物だったんじゃないかな?」
たいせつなもだち。

なんて、持ち主さんが図鑑に書くくらいなんだから。

ふと、視界が明るくなる。見ると、林道のわきに大きくひらけた場所があった。

「ボス、あそこは?」

「アレハ、フレアイヒロバダネ。ユウグガイツパイアルヨ。ベンチャ、ミズノミバモ、アルカラ、アソコデチョット、キュウケイシヨウカ。」

「うん。わかったよ!」

ふれあい広場、とボスが言ったところは、色々な遊び道具のある公園みたいな感じだった。

「すべり台に、おすなばに……、てつぼうに……、」

ゾウの形をしたすべり台とか、ラクダの人形が寝そべる砂場とか、おサルさんの人形がしがみついている鉄棒とか、どれも動物をモチーフにしたデザインの遊具が並んでいるんだけど、

「あれは……、ブランコ?」

どうしてだろう、ブランコだけがとても簡単な造りだった。

木でできた枠組みに丈夫そうなロープ。先には大きなタイヤが括り付けられている。

「これって……、なんだか、」

どこかで見たことがあるような……？

「トモエ。アソコノベンチデ、キユウケイシヨウ。」

「あ、うん。そうだね。ついでにお昼にしよつか。」

「わふ！ ジャパリまん！ たのしみです！」

「あはは、イエイヌちゃんはジャパリまん、大好きだね。はい、イエイヌちゃんのぶん。」

かばんからジャパリまんを取り出して、イエイヌちゃんに渡す。

「わふ！ ありがとうございます！」

「……それとお、汚しちゃうといけないからあ、凶鑑はしまつちやおうかあ。」

「はい！ そうしましょう！」

うれしそうにぱたぱたとしつぽを振りながら、イエイヌちゃんは凶鑑をこちらに渡してくれた。わたしの含みのある顔には、気が付かなかつたみたい。

ああ……つ、おかえり！

あたしのどうぶつ凶鑑……！

ぎゅつ、と凶鑑を抱きしめて再会の喜びをかみしめる。このままさつきの続きを読みたくなるけど、なんとかがまんしてかばんにしまった。

食べながら読むのは、さすがにおぎようぎ悪いよね。
がさがさ……、

と、ベンチに腰かけてご飯にしようとしたところで、わきの竹林から音がした。
音のする方を見ると、

「おやー？ きみたちはー、だれだーい？」

のんびりとした声のフレンズさんが広場に出てくるところだった。せり出した笹の影になっていて、姿はよくわからない。

フレンズさんはそのままゆっくり、のそのそとこちらに近づいてきた。広場にあふれる陽の光に照らされて、よく見えなかった姿が、はつきりと見える。

あ、あれは……！

「はじめまして！ わたしはイエイヌのフレンズで、イエイヌといます！ こちらはヒトのともえちゃんです！」

「……っ、……、」

「……ともえちゃん？」

口を大きく開けたまま黙っているわたしに、イエイヌちゃんは不思議そうな顔。けれど、それに応じる余裕は、わたしにはなかった。

そのフレンズさんの姿に、昨日も感じたあのムズムズが――、

ムズムズを通りこしてキュンキュンになってしまっていたのだから。

「ぱ、パンダだあああーっ!!」

白いショートトの髪に、黒くてまあるいお耳。

ほんわかしたお顔にかかる前髪には、両目の上あたりに丸くて黒いアクセントがあつて、まるでマスコットキャラのおめめ、みたいな印象。

セーラー服みたいな服も、ふりふりと揺れる短くて丸いしっぽも、すっごい可愛い。

ああ・・・! これはもう、反則でしょ・・・!

「と、ともえちや—!?!」

夢中で駆け出したわたしは、イエイ又ちゃんの声を置いてけぼりにする。

そう、いまのわたしは、おとよりもはやい!

「んー? きみはー、ぼくをしつて、むぎゆ、」

パンダちゃんが何かを言いかけていたが聞こえない。

わたしは無我夢中でその体に抱き着き、一心不乱に、ふわふわをもふもふした。

「ぱんだだあつ! ぱんだだあつ! すっごい! すっごいふわふわ! もふもふ!

もふもふ! はわああ・・・、すっごい・・・、」

「ともえちやん!! いきなりだきついたりしてはだめです!」

「すんすん・・・、くんかくんか! いいにおい! においまでかわいい! だめ! こ

れだめ！ かわいすぎちゃう！ かわいいじぬ！」

「あやー。なんだかわかんないけど、たいへんだー。」

「ともえちゃん！ だめですって！ こまってますから！ ごめいわくですから！」

イエイヌちゃんが引きはがそうと腰のところをつかんでくる。けれど、キュンキュンの波動に目覚めたわたしに、その程度の妨害は無意味だ。

「アレハ、ジャイアントパンダダネ。クマカノドウブツデ、チクリンニセイソクシテイルヨ。」

「ボス！ ボスも、ともえちゃんをとめてください！」

「クマカニハ、ザツシヨクイキモノガオオイケド、パンダハ、タベモノノホトンドヲ、ササヤ、タケ、タケノコデ、マカナツテイル、トテモカワツタイキモノナンド。ソノ、オオキナカラダライジスルノニ、ヒツヨウナササノリヨウハ・・・、」

「せつめいはあとでいいですからあ！ なんとかしてください！」

「もふもふ！ ふわふわ！ あばばばば！」

あたふたしているイエイヌちゃんを尻目に、わたしはしばし、至福の時間に浸るのだった。

「ぼくはジャイアントパンダのパンダだよー？ よろしくねー？」

「あたしはともえだよ！　よろしくね！」

「あらためまして、イエイヌです……。さきほどは、ともえちゃんが、たいへんしつれいをいたしました……。」

改めてにつこりと自己紹介をするわたしたち。イエイヌちゃんだけが申し訳なさそうに頭を下げていた。

「えー？　パンダちゃん、怒ってないからいいじゃない。」

「おこつてなくても、しよたいめんのフレンズに、だきついたりしたらだめなんです！」「ええー……。？」

なんだか昨日、初対面のフレンズさんに、抱き着かれた上に思いつきりなめまわされたような気がするんだけど……。

つて、それ言うと、またイエイヌちゃん落ちこんじゃうだろうから、言わないでおこうと。

「ごめんね？　パンダちゃん。あたし、かわいい動物とかフレンズさんを見ると、つい、われを忘れちゃうみたい。」

「きにしてないよー？　ぼくもたけのこをみつけるとー、こうふんしちゃうからー。」

「たけのこ？　パンダちゃん、たけのこ食べるの？」

「たべるよー？　あれ、おいしいよねー。」

「フレンズハ、ジャパリマンイガイニモ、ドウブツダツタコロノ、シヨクセイニモトツイタ、シヨクジヲスルコトガアルヨ。ジャイアントパンダハ、ササヤ、タケ、タケノコガシヨシヨクダカラネ。」

「あれー？ ボスってしゃべれたっけー？」

フレンズさんの習性について説明をするボスに、パンダちゃんはぼわぼわとした声で疑問を口にする。やっぱりフレンズさんにとって、ボスがしゃべるのはびつくりすることみたいだ。

「あのですね。ボスは、ヒトであるともえちゃんとならおはなしを・・・。」

と、親切なイエイヌちゃんが説明を始めようとするのだけど、

「まー、そういうこともあるかー。」

「ええ!? きにならないんですか!？」

「んー？ ぼく、こまかいことってあんまりきにしないからー。」

と、ほわほわとした笑顔のパンダちゃん。

「んー、たけのこのおはなしをしてたらー、なんだかおなががすいてきちやっただけ。なるほど、パンダちゃんってこんな感じの子、なんだね。」

のんびりした感じが、すっごいかわいい・・・！

「良かったら、ジャパリまん、一緒に食べる？」

「わふ。そうですね。ごいつしよにどうですか？」

「ありがとう。えんりよなくいたたくよー？」

わたしが差し出したジャパリまんを手につけて、パンダちゃんはにつこり笑った。

お昼を食べた後、わたしたちは広場の遊具でひとしきり遊んだ。

すべり台に、お砂場に、てつぼうに、そしてブランコ。

やっぱり、というべきか、あのブランコはパンダちゃんのお気に入らしい。

「これでー、ぶーらぶらしてるとー、すつこきもちいいんだよー？ ふわあ．．．」

そう言いながら、うつらうつらしているパンダちゃんはとつてもかわいらしい。

「あー、そうそうー。ちくりんはー、よるになるとまつくらになるからー、きをつけてねー？ ぼくも、おきたときまつくらだったたりすると、たまにころんじやつてー。」

「そうなんだ．．．。大変だね。」

「パンダニハ、ヒルトヨルノクベツガ、アマリナインダ。ネタイトキニネテ、オキタイトキニオキルカラ、シンヤニコウドウスルコトモ、アルヨ。」

ボスが付け加えてくれた説明に、なるほど、とうなずく。マイペースな感じが、とつてもパンダちゃんらしい。

それに、ころん、と転んじやうパンダちゃん、すつごい見てみたい．．．、けど、

「あんまり真つ暗だと、あたしには何も見えないよね。」

「そうですね。くらくなるまえに、ちくりんをぬけたほうがいいかもしれませんね。」

「そうだね。そうしよつか。」

もう少しパンダちゃんと遊んでたいし、できればでんぐり返しするところも見てみたいけど、そのほうがいいよね。

・・・昨日も、危ない目にあつたばかりだし。

「・・・つて、言つてるそばから寝ちやつたね。」

さつきまでばたばたと広場を走り回っていたイエイヌちゃんは、パンダちゃんに誘われるまま一緒にブランコに腰かけると、すぐにいねむりしちやつた。

パンダちゃんもこつくりこつくりしてる。

お互いに体をあずけるようにして眠っているその姿は、なんとも幸せそうだ。

わたしはベンチに腰かけて、そのほほえましい光景をスケッチブックに描き始める。昨日、ロバちゃん馬車に揺られながら描いた絵に続いて、3ページ目だ。

こうやって、思い出が1ページずつ増えていく感じは、とても楽しくて、うれしい。

「・・・、あれ？ あのはしつこの、なんだろう？」

竹林のすてきな風景も一緒に収めようと思つて周りを見渡した時、広場の端っこにサッカーボールくらいの大きさの何かが落ちてるのを見つけた。

近くによつて見てみると、なんだか人工物っぽい。それに、落ちてるんじやなくて地面から生えてるみたいな……。

あつ、ひよつとしてこれ……、

「ねえボス、ちよつとお願ひがあるんだけど。」

「ナニカナ。」

その正体に心当たりがあつたわたしは、ひとつボスにお願ひをすることにした。

「……が、……から、……で、……、」

寝ちやつてる二人を起こさないように、ひそひそ声で話しかける。おかげでいつも以上にたどたどしい説明になつちやつたけど、ボスは黙つて聞いてくれた。

「ワカツタヨ。デモ、スコシジカンガカカルカモシレナイヨ。」

「大丈夫だよ。お願ひできる?」

「マカセテ。」

よかつた。できるみたい。

パンダちゃん、よろこんでくれるかなあ。

「あたしはおえかきの続き、しよつと。」

ふたりを起こさないように、小さな声で言いながらベンチの方に足を向ける。

「……あれ?」

と、ベンチの裏手の竹やぶに、さつきまでいかなかった子が隠れるようにしてこちらを覗いているのが見えた。

いや、こちら、というのは違うかも。その子は広場のまんなか、ブランコの方を見ているみたい。ひよつとして、あの子もブランコで遊びたいのかな？

「こんにちは。ひよつとして、あなたもブランコで遊びたいの？」

「……っ、！」

近くにいつて声をかけると、その子はびっくりした顔をこちらに向ける。そんなに静かに歩いたつもりもなかったけど、近づいて声をかけるまで、全然気づいてなかったみたい。

そんなに夢中になるくらい、ブランコで遊びたいのかな？

「驚かせてごめんね？ あたしはともえ。よろしくね？」

「あ、あああ……！」

自己紹介をしてみるんだけど、返事とはとれないような声が返ってきた。

ひよつとして、恥ずかしがり屋さん？

なんて思っていると、その子は――、

「フーーーーーッ！」

両手を大きく上に広げて、うなり声をあげた。

「かわいい！ かわいい！ すりすり！ もふもふ！ んー！ むちゅちゅちゅちゅー！」

「やめろっす！ やめてっす！ もー！ なんなんっすか！」

「どうしよう！ またキユンキユンが止まらない！」

「どうかしましたか！ ともえちちゃん！」

「なーにー？ どしたのー？」

騒ぎ過ぎたせいだろうか、イエイヌちゃんとパンダちゃんが起きちやつたみたい。

悪いことをしたなあ、と思いつつ。

けれど、わたしはもふふわの誘惑にあらがうことができない。

「はー、かわいいよお……！ 怖がらなくてだいじよぶだからね？ 痛くしないから！」

「そのはつげんがすでにこわいつす！ はなせっす！」

「ともえちちゃん！ またですかあ!？」

「あやー。なんだかたいへんだねー。」

すぐに駆け寄ってくるイエイヌちゃんと、のんびり近づいてくるパンダちゃん。

イエイヌちゃんはさつきのこととコツを覚えたのだろうか、今度はいとも簡単にわたしをレッサーパンダちゃんから引きはがしてみせた。

「ああ……、もふもふ、もふもふがあ……。」

「ともえちゃん！ いいかげんになさい！」

「あうう……、ごめんなさい……。」

とうぜん、イエイヌちゃんに叱られるわたし。

今度ばかりはぐうの音も出ない。

パンダちゃんと違って、レッサーパンダちゃん、嫌がつてたみたいだし……。

「あれー？ きみはー、」

「……っ、！」

見ると、倒れこんでいるレッサーパンダちゃんに、ちようどパンダちゃんが話しかけているところだった。

「……あのっ！ じぶん！ じぶんは！」

「なーにー？」

「……っ、また、こんどっすー！」

レッサーパンダちゃんは、わたわたと立ちあがり、竹やぶの中に走って行ってしまった。

「ああ……、にげちゃった……。」

謝らないと、と思つてたのに。

「だれのせいですか。ほんとにもう。」

「うう、はんせいしてます．．．。」

なんだか今日は朝からイエイヌちゃんに叱られてばっかりだ。

ホントに、心から反省してます．．．。

「あのこー、まえからみかけるこなんだけどー。そつかり、あのこもパンダっていうんだー。」

レッサーパンダちゃんが竹やぶに隠れちゃって、わたしはさつき聞いたことをパンダちゃんとイエイヌちゃんに話していた。

「うん。レッサーパンダの、パンダちゃんなんだつて。」

「パンダさんとおなじおなまえなのですね．．．、しゅぞくがちかいのでしょうか？」

「今まで、おはなししたことなかったの？」

素朴な疑問をぶつけてみると、パンダちゃんは、うーん、と考えるような顔をした。

「そうだねー。ときどきみかけるんだけどー。ぼくがはなしかけようとするとー、いそいでどつかにいつちやうんだー。」

「そうなんだ。やつぱり恥ずかしがり屋さん、なのかな？」

「ふむ．．．、それだけではないような、きもしますが。」

イエイヌちゃんと顔を見合わせていると、パンダちゃんのはほんとした顔で、

「それよりー、あのこー、ちよつとあぶないかもー。」

その顔に似合わない、不吉なことを言った。

「危ないって、レッサーパンダちゃんがどうかしたの？」

危ないって……、なんだろう？

たしか……、竹は地中に茎がはってるんだっけ？

たまに地面から出たりして、天然のワナみたいになってるから、たしかに竹やぶを走っちゃ危ないかもだね。

「ここはー、よるはまつくらでー、まようとあぶないんだけどー。それだけじゃなくてー。」

パンダちゃんはそこで区切ると、わたしの予想を大きく上回る言葉が続ける。

「さいきんー、よるになるとー、こわそうなけものがうろうろしてるんだー。」

こわそうな、けもの。

その言葉に、昨日であったセルリアンを思い出して、ぶるつと震える。

「なんかねー？　ぐるぐるって、こわいうなりごえでー。なにかさがしてるみたいでー。」

「それは、セルリアンでは、ないのですか？」

「ちがうとおもうー。　ぼくもちらつとみただけだからー、はつきりわかんないけ

どー。」

イエイヌちゃんも昨日のことを思い出したのか、心配そうな顔だ。

そんな様子に気づいているのかいないのか、パンダちゃんのはほんとした顔をしながら話を続ける。

「それにー、ここにまえにすんでたここにー。おしえてもらったんだけどねー？ このあたりにはー、むかし、おおきなけもの、がいたつてー。はなしがあるんだー。だからー。ひよつとしたらー、あぶないかもつてー。」

おおきなけもの・・・つて、それつて、やっぱり昨日のセルリアンみたいなの・・・。「たいへん！ あの子、探さないと!!」

———

フレンズ紹介くジャイアントパンダく

パンダちゃんねココ目クマ科ジャイアントパンダ属の哺乳類、ジャイアントパンダのフレンズだよ！

目の周りがまあるく黒い毛に覆われてて、とっても愛らしい見た目してるよ！

おまけにしっぽもお耳もまあるくて短くて、全体的にまあるい体型してるから、とってもかわいいよね！

ジャイアントパンダはほとんど笹とか竹とか、筒しか食べないみたい！ 毎日10キ

口から20キロくらい食べるみたいなんだけど、そんなに同じものばかり食べて飽きないのかな？

そんな食生活だから、野生のパンダはほとんどみんな、竹林に住んでるよ！

動物園だといつも寝てる印象があるから、夜行性だつてよく勘違いされるけど、実は違うみたい！ 眠い時は寝て、十分に寝たら起きて、気ままに暮らしてるんだつて！
かわいい！

そんな、かわいいジャイアントパンダだけど、クマ科の動物だから、実は獰猛な気性もあつたりするよ！

別名に大熊猫、なんて名前もあるくらいで、力もすつごく強いから、襲われたら、あたしなんてひとたまりもないかも！

でも、フレンズのパンダちゃんはずつごい優しく、そんなこわいこと、考えなくていいから、安心だよね！

【こえ】ともえちゃん（しゅくしちほー）

けものフレンズR くびわちほー 第02話 「おおきなけもの」B・Cパート

フレンズ紹介！レッサーパンダ！

パンダちゃんは今ネコ目レッサーパンダ科レッサーパンダ属の哺乳類、レッサーパンダのフレンズだよ！

元々はパンダって名前だったんだけど、後で見つかったジャイアントパンダの方が有名になっちゃって、「小さい」って意味の、「レッサー」が頭につくようになったんだって！

なんだか・・・、ちょっとかわいそうだよね・・・？

ジャイアントパンダと同じで、レッサーパンダも竹とか筍をよく食べるみたい！でも、そればかりじゃなくて、虫とか果物とかも食べるんだって！

夜行性で、昼間は木の上で寝てることが多いけど、夏になるとお昼もよく動いてるみたいだよ！

レッサーパンダも目の周りに黒い模様があって、すっごいかわいらしいんだけど、あたしが一番かわいいなあって思うのは、威嚇をしてるとき！

「パンダちゃん！ おーい！ レッサーパンダちゃん！」

そして、わたしは大声で呼びかけながら竹林を歩いていた。

抱き着いて驚かせちゃったわたしが呼びかけるのは逆効果かも知れないけど、もし反応で物音でもすれば、そばにいるイエイヌちゃんの耳に届くだろう。

「パンダちゃん！」

大声を出すわたしとは対照的に、音と匂いに集中したイエイヌちゃんは、とても静かだ。

ひそひそと、その耳に近づけてささやく。

「どう？ 反応はありそう？」

「音は・・・ありませんね。においはまちがいなく、こちらであつているとおもいます
が。」

「そっかあ・・・」

うーん、なにかヒントになりそうなもの、ないかなあ・・・。

何か目印になるものとか・・・、好みの場所とか・・・、

そもそもレッサーパンダって、どういういきものなんだっけ？

「あ、そうだ！」

ふと思いつき、肩掛けかばんから動物図鑑を取り出す。

「レッサーパンダの生熊が、これにのつてるかも！」

「わふ、たしかにそうですね。ちようきを、おねがいます。」

「りようかい！」

小声だけど元気よく答えながら、わたしは凶鑑をばらばらとめくっていく。

「えーつと、れ、れ、れ．．．、あつた！ レッサーパンダは．．．、」

目当てのページに辿り着き、レッサーパンダの説明を食い入るように見つめる。黙読で内容を頭に入れながら、ヒントになりそうなところを探した。

．．．あ、これなんて、ヒントになるかも。

「木登りがとくいで、外敵に襲われないよう、木の上で寝る、だつて！」

「なるほど、うえはもうてんでした。それをふまえて、もういちどさがしてみますね。」

そう言つて、イエイヌちゃんはすっかり静かになった。耳をぴくぴく、鼻をくんくんしながら、目をサーチライトみたいにゆっくり動かす。

．．．と、

「．．．、みつめました。」

そう時間もかからずに、イエイヌちゃんはうれしい報告をしてくれた。

「ともえちゃんは、ここでまつててください。すぐ、つれてきますから。」

「うん、わかつたよ。おねがいます。」

こくり、お互いに頷きあう。

そして、イエイヌちゃんは目で追うのも大変なぐらいの速さで駆け出して行った。

ほつ、と息が漏れる。少なくとも、暗くならないうちにレッサーパンダちゃんを見つけることはできたみたいだ。

こわいけもの、の正体はわからないけど、ひとりであるより、みんなでいたほうが安全に決まってる。

これでひと安心……、

ひと、安心……？

「……、えっと、ひとりであるのって、危ないんだよね？」

頭をよぎった考えに、ぶるり、と身が震える。

パンダちゃんは強いから、ひとりでも大丈夫かもしれないけど……、
あたしは……。

「うう……、イエイヌちゃん、はやくかえってきてえ……。」

われながらすっごい情けないことだけれど、ちよつと泣きそうだった。

……くいつ、と。

「ひうつー！」

とつぜん、後ろからシャツの裾を引っ張られて、とんでもなくびつくりする。

ひめいと一緒に、心臓が口から飛び出したのかと思つたくらいだ。

「なあ……、なあに……い？」

うるんだ視界で後ろを振り返る。

ひよつとして、パンダちゃんの言つてたこわいもの……、

と思つたけど、そこにいたのは小さな女の子だった。

髪も服も、全身がうす緑色つぼい色をしていて、大きな耳がまつすぐ上に伸びている。

ふか緑色のつぶらな瞳は、幼い顔立ちと相まって、まるでお人形さんのようだ。

今まであつたフレンズさんは、みんなわたしと同じくらいの背格好だったけど、その子はわたしより頭ひとつぶんくらい小さい。

しましまの模様があるしつぽは、体のはんぶんくらいの大きさがあつた。キツネかタヌキみたいなふんわりとした毛並みで、ずんぐりしてて、とつてもかわいらしい。

本当に、かわいらしいんだけど。

どうしてだろう、どきどきが収まらない。

どうしてか、わたしはその子に今まであつたフレンズさんとは違う何かを感じていてた。

「……、……、」

無言のまま、こつちを見つめる姿に、少し不安を感じたからかもしれない。

さつきまでひとりきりだったから、ただ考えすぎているだけかもしれない。

それとも、その、か細い首に巻かれた、他のフレンズさんにはない、

くびわ、が、

とても異質に思えたから、かもしれない。

「あの・・・、あなた、お名前は？」

わたしは不安をそのまま口にするかのように、その子に名前を聞いていた。

女の子は首をふるふる、と振り、小さな口を開けて、ぽつり、

「・・・すぐに、ここをはなれて。」

「ど、どういう、こと・・・、かな？」

思わず聞き返してしまふけれど、女の子は答えない。

ただ、無言のまま、じいっと、わたしの目を見つめてくる。

ふか緑色の、まるで宝石みたいな瞳。

見つめ返しているだけで、吸い込まれて行ってしまいそうな、深い輝き。

昨日、セルリアンを見たときに感じた、生命の危険を感じるようなものとはまた違う、漠然とした不安感が、わたしの体にまとわりついて――、

「ともえちゃん！ レッサーパンダさん、つれてきましたよ！」

「わっ！ わわっ！ あんまりひっぱんないでほしいっす！ ちゃんとひとりでいけ

るっす！」

と、背後から聞こえる声。

とたんに、すうつと、体が軽くなるのを感じた。

「イエイ又ちゃん！．．．っ、」

振り返り、大きな声で答える。と同時に、その場にへたり込んでしまった。

「ともえちゃん？．．．っ、どうしました!? おかおがまつさおです！」

「あつ、あんたはさつきなの．．．！ って、ほんとにまつさおっす！ だいじょうぶっすか!? ぼんぼん、いたいんすか!？」

わたしは、よつぼどひどい顔をしてたんだろう。イエイ又ちゃんに、レッサーパンダちゃんまで、とても心配そうな顔で駆け寄ってきてくれた。

「あ、あはは．．．、だいじょうぶ．．．、ちよつと、びっくりしちやって．．．。」

「ともえちゃん、たてますか？ それとも、すこし、やすみますか？」

「ありがと、イエイ又ちゃん．．．うん、立てる。」

差し伸べられたイエイ又ちゃんの手を取って、起こしてもらおう。

ふう、とひと息。

．．．うん、大丈夫。だいぶ落ち着いてきた。

「ともえちゃん。なにがあつたんですか？ おけがは．．．、ないようですけど。」

「ああ、ええっと、ホントになんでもないの。ただ、あの子が・・・、
言いながら、後ろを振り返る。

そこには、

「あのこと・・・、ですか？ どなたも、おられないようですけど。」

だれのすがたも、なかった。

ひう、と、漏れ出そうになるひめいをひっしにこらえる。

視界はうるみまくってひどいことになってるけど、がんばる。

「い、イエイヌちゃん・・・。」

でも、やつぱり、こういうのは、ちよつと・・・、

・・・ううん、かなり、きつついで、

「ともえちゃん・・・？ あ・・・つ、あの、ほんとうに、だいじょうぶですか？」

「だいじょうぶ・・・、だいじょうぶだから、ちよつと、このままで・・・おねがい。」

イエイヌちゃんにだきつくことで、いやしてもらうことにした。

———

それから数分もしない内に、わたしはさっきの状況を説明できるくらいには回復して
いた。

イエイヌちゃんのもふもふ癒し効果は、いだいである。

「くびわをつけたフレンズ・・・、ですか。」

「うん。お名前を聞いたんだけど、答えてくれなくて。なんの動物か、わかんないけど。」
続けて、くびわ以外の特徴も話してみるけど、ふたりの反応は薄かった。

「そういつたフレンズは、これまででみたことがありませんね。」

「じぶんも、みたことないっすね。」

「だよねえ・・・。あたしも、なんだか、夢でも見たような気分だし。」

はくちゆうむ、というには、夕方に差し掛かっている今は、時間が遅い気がするけど。さつき感じた感覚は、夢から覚めた後、何ともなしに感じる不安感に、とても似ていた気がする。

「そのこがパンダさんのいつていた、こわいけもの、なのでしょいか。」

イエイヌちゃんの言葉に、うーん、と首をひねる。

「たぶん、ちがうと思う。」

パンダちゃんが言ってたのって、昨日のセルリアンみたいな怖さ、だと思っただけど、あの子はそういうのとは違う感じだったから。

「こわいけもの？　って、なんっすか？」

「ああ、そうそう。それはね・・・。」

と、自然に会話をはじめてしまいそうになる自分に、ブレーキをかけた。まだ、言わ

なきやいけないことを言っていなかったのを、思い出したからだ。

「その前に……、さつきは、本当にごめんさい。いきなり抱き着いたりして、びつくりしちゃったよね？」

「え？……、ああ！……、んー、まあ、いいすいいす！ びつくりしたっすけど、そんなにいやじゃ、なかったっすから！」

そう言つて、レッサーパンダちゃんは照れくさそうに笑った。

この子も、とつてもいい子だなあ……。

「それで、こわいけもの、のことなんだけど……、えつとね、」

切り出した言葉に続けて、パンダちゃんから聞いた話をそのまま伝えた。

レッサーパンダちゃんは、ああ、と答えて、

「それなら、じぶんもころあたりあるっす。よるになると、ぐるる、ぐるる、つて、きこえてくることがあるっすよ。」

「パンダちゃんも？ 大丈夫だったの？」

「じぶん、ねるときは、うえにのぼってねるっすから。へいきっす。」

レッサーパンダちゃんは胸に手を当てながら、自信たっぷりと言う。

「そうなんだ。なら、余計なことしちやったのかな？」

「どういふことっすか？」

はてな?という顔のレッサーパンダちゃん。

ますますお節介かもと思いはじめるけど、せめて提案だけはしておきたい、かな。

「ねえ、よかつたら、あたしたちと一緒に、パンダちゃんのところに行かない? みんなで一緒にいた方が、危なくないと思うんだ。」

「どうかな?」と聞いてみるけど、レッサーパンダちゃんの顔は、さらに、はてな?に埋め尽くされたようになった。

「じぶんが、じぶんのところに、っすか? どういうことっすか?」

「えっと・・・、ああ! ごめんなさい!」

わたしはあわてて言いなおす。

「ジャイアントパンダちゃん、のところだね。さっき一緒にいた、ぼわぼわした感じの—」

「あのこっすか!? あのこも、パンダつてなまえなんっすか!」

と、レッサーパンダちゃんはとてもびっくりしたような反応を見せた。

「ひよつとして、あなたも知らなかったの?」

「しらなかつたっす!・・・、はー、そっすかー。あのこも、じぶんとおなじなまえ、なんっすねー。・・・えへへ、」

なんだかどうともうれしそう。

ひよつとして、さっきブランコの方を見つめてたのって、パンダちゃんとおともだちになりたいから、とかだったりするのかな？

おともだちになりたいけど、恥ずかしくて声をかけられない、とか。

なんて、微笑ましいことを考えていると、レッサーパンダちゃんは、でも・・・、と呟いて、急に暗い顔になる。

「じぶんなんか、おなじなまえだっけっていったら、いやじゃないっすかね？」

そして、そんなネガティブなことを口にした。

「・・・えつと、なんで、そう思うの？」

「だって、じぶん、パンダさんみたいにつよくないっす。からだも、ちっちゃいっす。きつと、めいわくかけるっす。」

「そんなこと——、」

「ないよ、と、口をはさむ間もなく、レッサーパンダちゃんは暗い顔のまま、おはなしを続ける。」

「じぶん、こっちに来たばかりのころ、おおぜいのセルリアンにおそわれたことがあるっす。じぶん、こわくて、なにもできなかつたっす。」

そのときのことを思い出したのか、今にも泣きだしそうな顔だ。

「そんなとき、パンダさんがたすけてくれたっす。あつというまにみんなやつつけ

ちやつて。パンダさん、すぐかっこよかつたす。」

そのときのことまた、思い出したのだろう、今度はうれしそうな顔をする。

ころころと表情を変えながら、けれど最後にはやっぱり、沈んだ顔でぽつりと。

「でも、じぶん、おれいもいえなくて、にげちゃつて……。」

レッサーパンダちゃんの気持ち、わたしにはわかる気がする。

怖かつたこととか、何もできなくて恥ずかしかつたこととか、色んな事が頭をめぐつて、パニックになつちやつたんだと思う。

それはたぶん、さつきまでの怯えてたわたしや、昨日、知らない場所で目が覚めて、心細かつたわたしと、同じだった。

「……、パンダちゃんは、あの子と、おともだちになりたい?」

「お、おともだちつすか? そんな、じぶんなんか……、でも……、」

そこで言葉を区切つて、えへへ、と恥ずかしそうに笑つた。

「そうなつたら、うれしいつす。すつごくすつごく、うれしいつす。」

本当にいい子だなあ。この子。

なんとかしてあげたいなあ……。

「あー、いたいたー。」

タイミングがいいのかわるいのか、広場に近い方の竹やぶから、がさがさと音を立て

てジャイアントパンダちゃんが現れた。

「パンダさん？ どうしてここに？」

「あんまりおそいからー、むかえにきたんだよー。そろそろ、くらくなつちやうよー？」
「エイヌちゃんにたずねられて、パンダちゃんは相変わらぬのんびりとした声で答える。

と、ぽやぽやと動く視線が、レッサーパンダちゃんに合わさった。

「あー、きみはー。」

声をかけられ、びくつと身を震わせるレッサーパンダちゃん。

それは、はじめて会ったばかりのときは、ただ恥ずかしがり屋なだけかな、と思った反応なんだけど。レッサーパンダちゃんの気持ちを知った今、その姿はとてもいじらしく思えた。

「よかったー。ちゃんとみつげられたんだねー？」

「あの・・・、あの！ じぶんは、じぶんは・・・！」

パンダちゃんにおはなしをしようとするレッサーパンダちゃん。

がんばって・・・！

と、声には出さず、応援するんだけど、

「・・・、また、こんどつすー！」

既視感を感じる姿を見せて、レッサーパンダちゃんはわたたと逃げ出してしまった。

「また、にげられてしまいましたね……。」

「そうだね……。」

顔を見合わせるイエイヌちゃんとわたしは、そろって浮かない表情だ。

それは、せっかく探したのに、ということではもちろんなくて。

レッサーパンダちゃんの気持ちは、痛いほどにわかるからで。

「どうしましょう？　まだ、おいかけられますけど。」

「……ううん、やめよう。上にいれば安全だと思うし。」

「あの、でも……。」

イエイヌちゃんの言いたいこと、すっごいわかる。

わたしも、何とかしてあげたいと思うし。

……でも、たぶん。

こういうのは、誰かに捕まえられてするものじゃ、ないから。

「あれー？　あのこ、こないのー？」

変わらずぼわぼわとした感じのパンダちゃんに、せっなさを感じる。

レッサーパンダちゃんの気持ちを、代わりに伝えてあげたいとも思うのだけど、なん

となくそれもダメなような気がして、「うん。ちょっと、都合が悪いみたい。」とだけ返した。

すると、

「そっかー。さんねんだなー。ぼく、あのことあそびたかったかもー。」

と、パンダちゃん。

「そうなの?」

「そうだよー?」

パンダちゃんのはのんびりとした表情で、えへへー、と笑った。

「ぼく、じつはさー、いままでほかのことあそんだりー、したことなくってー。ぼくって、いつも、ひとりであそんじゃうからー。」

パンダちゃんは近くの笹をむしって、ふりふりと振り回しながら、言葉が続ける。

「でもー、きょう、きみたちといっしょにあそんでー、ひとりのときよりー、たのしかったんだー。だからー、あのこもいっしょにあそんだらー、もつとたのしいかもってー。」

それって・・・、つまり。

「それって、あの子とおともだちになりたい、ってこと?」

「うん、そうだねー。ぼく、あのことおともだちになりたいな?」

その返事に、思わず顔がほころぶ。

となりを見ると、イエイヌちゃんもわたしと同じような顔でこちらを見ていた。

「ねえ、イエイヌちゃん。」

「はい、なんですか？　ともえちゃん。」

「なんだか、うれしいね。」

「はい、とつても。」

わたしたちが広場に戻るころには、すっかり日も落ちてしまっていた。

「これは……、ほんとにまつくらだね。」

パンダちゃんが言っていた通り、背の高い竹がお月様も、星の光もさえぎってしまった。本当に真っ暗だった。広場の上はまるく空いているから、そこから差し込む光で、なんとか影かたちがわかるくらいだ。

「そうですね……、きょうは、ここでやすむことにしましょう。」

「だね。」

てきぐりでベンチに腰掛けながら話していると、うすぼんやりした光がこちらに近づいてくる。イエイヌちゃんがくんくん、とはなを鳴らした。

「ボスも、もどつてきていたのですね。」

「ああ、あれ、ボスなんだ。」

イエイ又ちゃんの言葉に、その光がボスのお腹のまるいの中から出てくる光だと気づく。ぴこぴこ、と歩く音がはつきり聞こえるくらいになってようやく、わたしの頼りない目も、ボスの影かたちをとらえることができた。

「トモエ。オカエリ。セツビノシユウリガ、カンリヨウシタヨ。」

「わあ！ ありがとう！ お疲れ様、ボス！」

「せつびの、しゅうり？」

「えへへー、えつとねー。」

「なになにー？ なんのはなしー？」

二人が寝ている間にボスにお願いしていたこと。

それは……、

「スイツチ、おーん！」

うかれた声を出しながら、わたしはボスに案内された、せつび、についてるレバーをはね上げた。

ばちん、という音がして、広場を囲むように設置されているライトが、辺りに強い光を浴びせはじめた。

「わふー！ なんですか!?! まぶしいです！」

「わー。よるなのに、おひるになったー。」

ありや。まっくらなところにいきなり、眩しすぎたかも。

「ボス、光の調整ってどうするの？」

「トナリノポリユームデ、キョウジヤクツケラレルヨ。」

「ぼりゆるむ・・・、これのことかな？」

レバーの隣にはコタツの温度調整みたいなやつが並んでいた。見ると、全部が一番上までいつている。それをひとつずつ、まんなかよりちよつと下くらいまで下げる。

「わふう、さつきより、みやすくなりましたあ。」

「おおー。おひるが、あさになったー。」

ちようどいい明るさになったおかげで、イエイヌちゃんとパンダちゃんの、おどろいたような、ちよつと楽しそうな顔がはつきり見えた。

「えつと、夜になると真つ暗になるって言つてたでしょ？ だから、ボスにお願いして、

広場の照明を修理してもらったの。」

「そつかー。このよくわかんないやつ、しょうめいつて、いうんだー。」

パンダちゃんは足元にあつたライトを、しゃがみ込んでばしばし叩く。サッカーボールくらいの大きさの、スポットライトの投光器だ。わたしがお昼に見つけたのと、ちよつと同じもの。

「なおしてくれて、ありがとねー？ きみも、ありがとー。」

「えへへー。どういたしまして。」

ボスとわたしにお礼を言うパンダちゃんは、いつもどおりのほほんとした感じだけど、なんだかうれしそう。

よかった。これで、夜に起きても転ばなくてすむよね？

「・・・？ どうしたの？ イエイヌちゃん。」

と、イエイヌちゃんが考え事をしているような顔でボスを見ているのに気付いた。わたしが声をかけると、イエイヌちゃんはこちらに視線を向けて、

「ともえちゃん。ボスは、ずっとしゅうりを、していたのですか？」

「たぶん、そうだと思うけど。・・・それが、どうかしたの？」

「・・・いえ、あの、ええと。」

しどろもどろにお返事をして、不思議そうな顔で黙っちゃった。

うーん。なんだろう。けっこう気になるかも。

「ボスのことが気になるの？ 何かあったの？」

「ええと、ですね・・・。たぶん、わたしのかんちがいだとおもうのですが・・・。」

イエイヌちゃんはそう前置きをして説明をはじめようとする。

けれど、

「・・・ともえちゃん。おはなしは、またあとにしましょう。」

くんくん、とはなを鳴らしながら、真剣な顔で言うイエイヌちゃん。
「あやー。きちやったねー。」

そして、のんびりとした声のパンダちゃん。

その声に似合わず、パンダちゃんもまじめな顔をしている。

「アワ、アワワワワ……」

足元にいるボスは、何があつたのか、がくがくと震えている。

「こうふんした、けもののおい……。パンダさん、あれが？」

「そうだねー。」

「アワ、アワワワワ……」

みんなの視線の先には、フレンズさん、がいた。

……えつと、

フレンズさん……、で、いいんだよね……？

ふわふわつとふたつにまとめられた、茶、白、黒のしましまの髪。明るい茶色のまるいみに、白と黒のしましまの長いしつぽ。

ブレザーみたいなかわいい服に、髪と同じ色のしましまニーソックスを履いている。ふともものところにはちらつとガーターベルトも見えていて、せくしー、なような、かっこいいような、そんな印象。

そんな、かつこかわいいフレンズさんの姿をしているのだけど、どうしてか、わたしはその子を、すぐにフレンズさんだと判断できなかった。

その子は、今まで会ったどのフレンズさんとも違っていった。

今日、竹やぶで会った不思議なフレンズさんだって、ぜんぜん違う。

大きく見開かれた金色の瞳。

するどいキバをむき出しにした大きな口。

「ぐるぐるるるるう……、」

そして、おそろしいうなり声。

全身から、今にも襲いかかってきそうな気配を立ちのぼらせて、その子はわたしたちの前に立っていた。

「あれがー、こわそうなけもの、だよー?」

パンダちゃんが言うが早いか、その子は、わたしに目掛けて飛び掛かってきた。

「ともえちちゃん!」

身構えたイエイヌちゃんがわたしをかばうように前に出る。けれどそれより先に前に出る姿があった。

「さんにともー。ちよつとそこでじつとしててねー?」

さつきまでの、のんびりとした動きと打って変わって、パンダちゃんは機敏な動きでわたしたちの前に出ると、けもの突進を受け止めていた。

「ぐるるう．．．っ！　ぐがああああつ!!」

叫び声と一緒にくりだされたすごい爪は、けれど手首のところをつかまれて、中空にとどまる。そのままお互いの体を押し合うような、ちから比べみたいな体勢のまま、

「があう．．．っ！　ぐるるるう．．．っ！」

「おおー。きみー、すごいちからもちだねー。でもー、」

パンダちゃんのまんまるな目が、ぼうっとかがやく。

「あんまりおおくまねこをー、おこらせちやだめだよー？」

パンダちゃんに押されるがまま、けものはじりじりと後退しはじめた。

すっごい．．．!!

パンダちゃん。つよいつて言ってたけど、本当につよい!

あれだけ狂暴そうなけもの、簡単に押さえつけてる!

「パンダさん、すごいです．．．!!」

「だね!　これなら!　．．．、」

「これなら．．．?」

．．．あれ?

これなら・・・、どうなるの？

「ぐ・・・ぐるるう・・・、つ、があああうっ!!」

「おおっ、とー。」

けものは両手をつかまれた状態のまま首を伸ばし、大きく開けた口でかみつこうとした。するどいキバが勢いよくかみ合わさるけれど、既にパンダちゃんの体はそこにはない。がちん、という音を置き去りにして、大きく飛びのいていた。

「パンダちゃん！ あの一！」

さつきより近づいたパンダちゃんの背中に、わたしは思わず声をかける。

「なーにー？ とりこみちゆうだからー、てみじかにねー？」

パンダちゃんは、けものへの注意はそのままに背中越しに答えてくれる。その頼もしい背中に、わたしは自分がこれから聞こうとしてることを考えて、少し迷う。

・・・でも、聞かないと。

「あの一・・・、たおしちやうの・・・？」

それは、だめなきがする。

理由はうまく説明できないけど、それは、だめだ。

だって、あの子は・・・、

「ぶっそうな」というねー。そんなことしないよー？」

わたしの不安を吹き飛ばすように、パンダちゃんは、あははー、と笑った。

「ちよつと、こうふんしてるみたいだからー。おちつくまで、あいてしてあげるだけだよー。」

「パンダちゃん・・・、ありがとう。」

「きにしないきにしないー。それよりあぶないからー、もつとうしろにー、」

「があああうっ!!」

「つとー。あぶないあぶない。」

わたしと話しているパンダちゃんを見て、隙と判断したのか、けものが再び飛び掛かってくる。けれどパンダちゃんは余裕そうな表情で、またその突進を受け止めた。

「ともえちゃん、パンダさんのいうとおり、さがりましょう。」

こくり、頷く。このままだと、足手まといにしかならない。

「あ、ボスも一緒に、」

「アワ、アワワワワ・・・」

足元のボスはさつきと同じようにがくがく震えていて、動けないみたい。

「ボス、ちよつと持ち上げるけど、がまんしてね?」

「アワ、アワワワワ・・・」

両手でかかえるようにボスを持ち上げる――、

「がああああああああっつっつ!!!!」

その瞬間、けものは今までで一番大きな叫び声を上げた。体を大きくねじり、ふるわせて、つかまえるパンダちゃんの手から逃れようとする。

「あれー? これ、まずいかもー。」

変わらないのんびりとした声のパンダちゃんだけど、なんだかあわてているようにも見えた。なんとかつかみ直してはいるけれど、今にも振り切られそうさ。

「パンダちゃん! 大丈夫!?!」

「んー、だいじよぶだいじよぶー。…あ、でもちよつとねむくなつてきたかなー…、」
「ええーっ?! ここのでえーっ?!」

パンダちゃんの突然のカミングアウトに、思わず大声が出た。

どうしよう、どうしよう、

わたしとイエイヌちゃんだけであの子を押しえるのなんて、たぶんできない。

どうすれば…、

「そこまでつすーっ!!」

聞き覚えのある声と一緒に、何か竹やぶから飛び出してきた。

「パンダさんに、それいじょうのろうぜきは、じぶんがゆるさないっす!」

「パンダちゃん!?!」

わたしの耳の覚えの通り、飛び出してきたのはレッサーパンダちゃんだった。レッサーパンダちゃんはつかみ合っているふたりの前に立つと、

「フーーーーーッ!!」

と、いかくのポーズをしてみせる。

ああっ、やつぱりかわいいっ!?

・・・っ、じゃなくて!

「パンダちゃん! 危ないよ! さがつて!」

「いやっす!」

「パンダさん! さがつてください!」

「ぜっつたいに、いやっす!!」

わたしとイエイヌちゃんの言葉に、レッサーパンダちゃんは頑ななまでに首を振り、いかくのポーズをしたまま、けものを睨みつける。

「こんどは! じぶんがパンダさんをたすけるばんっす! じぶんはからだもちっちゃいけど! つよくないけど! ぜっつたいに、パンダさんをたすけるんす!」

「パンダちゃん・・・。」

その、レッサーパンダちゃんの真剣な声に、自分で自分が、はずかしく感じる。

そっだよね。

レッサーパンダちゃんも真剣、ひっしなんだ。

なら・・・、あたしも、ひっしに考えなくちゃ。

パンダちゃんを助ける方法を。

考えろ。考えろ、あたし。

あの子、あのけものは、すっごいおつかないけど、昨日のセルリアンみたいな感じじゃない。

セルリアンは、むきしつ、というか、感情がないようなこわさがあったけど、あの子はそうじゃない。

まるで、それこそ野生のけものみみたいな感じで・・・、

野生の・・・、けもの？

・・・あれ、そういえば、お昼にパンダちゃんが何か言ってたような。

たしか・・・、このあたりにはむかし・・・、

「あっ・・・、」

思いついたアイデアに、声が漏れる。

ひよつとしたら、いけるかも。

「パンダちゃん！ そのまま、威嚇し続けて!!」

わたしは抱えたままだったボスを地面に降ろして、レッサーパンダちゃんに声をかけ

る。

「な、なんつすか？ どうして——」

「いいから！ お願ひ！」

「わ、わかつたつす！．．．つ、フーーーーーッツ！！」

レッサーパンダちゃんは再びいかくの声を出しはじめる。その背中を捉えるように、近くにあつた投光器の角度を調整した。

もちろん、これだけじゃ、だめ。

「．．．つ、ともえちゃん！ ひとりになるのはきけんです！」

「大丈夫！ すぐすむから！ イエイヌちゃんはパンダちゃんをお願い！」

かけ出したわたしを、イエイヌちゃんは呼び止める。その声に背中ごしに答えながら、走る足は止めない。

ちらつとパンダちゃんの方を見ると、まだ持ちこたえてくれているみたい。でも、今にも寝ちやいそうだから、急がないと！

急ぐ足の向かう先は、もちろん、せつび、のところだ。

せつび、に辿り着くと同時に、一番左にあつたポリユームを一気に下げる。

広場を囲む光が、ひとつつ消えた。

「これがあそこのだから．．．、えつと．．．、ななばんめ！」

左から数えて7番目『以外』のボリウムを、次々に、ぜんぶ下げる。

残った光は、きつき角度を調整した投光器のものだけ。

そして、残した最後のボリウムを、一気に『上げ』た。

「ぐるるう・・・、つ、!？」

異変に真つ先に反応したのは、あの、けものだった。

組み合っていたパンダちゃんから離れ、大きく距離を取るように後退する。

まるで何かにおびえたような、何かを警戒するような、その動き。

きつとびつくりしているのだろう。

さつきまで何もなかったはずの場所にいきなり、異質なけもの、が現れたのだから。

「こ、これは・・・？」

続いて、イエイヌちゃんが気づく。

わたしの場所からは見えないけれど、きつとイエイヌちゃんの目にも映っているはずだ。

このあたりに、むかしたという、おおきなけもの――、

スポットライトに照らされた、レッサーパンダちゃんの大きな影が。

「今だよ！ パンダちゃん！ 大きな声で、威嚇して!!」

レッサーパンダちゃんに向かって大声で指示を出す。

何が起きているのかわからない、という顔をしていたレッサーパンダちゃんは、けれど意を決したように、大きく息を吸い込んで、吐き出した。

「がおーっ！！ たべちやうぞおーっ！！」

・・・、

・・・えつと、うん。

やっぱりあの子、すっごいかわいい・・・！

そんな、まったく緊張感のかけらもない、かわいらしい、いかくの声だったけれど、
「ぐるう・・・つ、るう・・・」

大きな影と、大きな声におどろいたのか。

けものはおびえたような、どこかくやしそうな表情で、竹やぶの中へ走り去っていった。

――

「よ、よかつたあ・・・、うまくいったあ・・・」

どうにかこうにか、思い付きのアイデアがうまくいったことを確認して、わたしはその場にへたり込んだ。

広場の真上をまるく切り取った夜空には、きらきらと星がかがやいていて、わたしは何となしにそれを眺めている。

「……ともえちゃん。」

イエイヌちゃんがいつの間にか近くに来ていた。スポットライトの当たらないこの場所では、明かりになるものは星だけで、その顔は、はつきりと見えない。

「えへへ、どうかな。うまくいったかな？」

「はい。みんな、パンダさんも、けがはありませんよ。ぜんぶ、ともえちゃんの、きてんのおかげです。」

「そんなことはないよ……。そっか。みんなぶじなんだね。よかったあ。」

安堵とともに体中の力が抜けてしまつて、ばたん、とそのまま後ろに倒れこんだ。

「ともえちゃん!? だいじょうぶですか!？」

「だいじょうぶだよ。ちよつと、つかれちゃっただけだから。」

寝転がったわたしのそばに座り込んで、イエイヌちゃんは顔を覗き込んでくる。さっきの距離じゃ見えなかった表情が、はつきりと目に映った。

「……、心配かけて、ごめんね?」

「ほんとですよ。もう。」

きけんなことはもうしない、つて、昨日約束したのにね。

ごめんね。ありがとう。イエイヌちゃん。

「あの一・じぶんは!」

と、広場の中央の方から、声が聞こえてきた。どうも、レッサーパンダちゃんがジャイアントパンダちゃんに話しかけているみたいだった。

「じぶん、レッサーパンダのパンダっす！ まえに、セルリアンからたすけてもらったことがあるっす！ あのとときは、すごくたすかったっす！ すごくすごく、かんしゃしてっす！」

ここからだどふたりの姿は見えない。それどころか声だって、レッサーパンダちゃんの大きな声しか聞こえない。

けれど、微笑ましいふたりのやりとりは、まるですぐ近くで見ているみたいに、わたしには感じられた。たぶん、きつと、イエイヌちゃんにも。

「それで……！ その、あの……じぶんは、じぶんは……！」

その言葉の続きを、わたしたちは今日、2回も聞いている。

けれどたぶん、今、それに続く言葉は、そこで聞いたものとは違うものになると思う。だって、レッサーパンダちゃんはあんなにこわそうなものに、立ち向かった。

自分に自信が、勇気がなくなつて逃げていたレッサーパンダちゃんは、もういない。

「じぶんは、パンダさんとおともだちになりたいっす！ おともだちに、なつてほしいっす！」

ほんの少しの静寂。

さらさらと、風に笹が流れる音だけが、かすかにあたりに響いている。

そして……、

「……、ほんとつすか!? ほんとにいいんすか!? わーい! うれしいつすー! すつ

ごくすつごく、うれしいつすー!」

本当に、本当に、うれしそうな声が耳に届いて、

わたしは、どうしてだか、なきそうになった。

「ねえ、イエイ又ちゃん。」

「はい、なんですか? ともえちゃん。」

「なんだか、うれしいね。」

「はい、とつても。」

そう言つて笑うイエイ又ちゃんも、少し涙ぐんでいた。

——

あの後、みんな疲れていたみたいで、パンダちゃんが本格的に眠りはじめると、誘われるようにすぐに寝てしまった。

翌朝、目を覚ました後でみんなで朝ごはんのジャパリまんを食べてから、わたしはスケッチブックをひろげて昨日の続きを書いていた。

「おお! トンちゃんもたけのこ、たべるんすね! じぶんもたまにたべるつすー!」

「フーちゃんもなんだー。あれ、おいしいよねー?」

「つすね! ジャパリまんもすきつすけど、たけのこもたまらないおいしさつす!」

パンダちゃんたちは楽しそうにおはなしをしている。

「おなまえ、きとってもらえてよかったですね。」

「うん。へんじやないか、ちよつと不安だったけどね。」

となり座っているイエイ又ちゃんに答えながら、ふたりがお互い呼び合っている名前に、ちよつとむずがゆさを感じた。

起きてすぐのことだけど、パンダちゃんたち名前が同じだから、わたしたちの呼びかけにふたりともが反応しちやったりで、色々困ったことになった。

だから新しい名前をつけよう、ということになったんだけど、何故かわたしにぜんぶお任せされてしまった。

「きみー、なまえつけるの、じょうずそうだしー。」

というのが、パンダちゃんの言い分だ。

そうして、うんうん唸って考えた、ふたりの新しいお名前。

ジャイアントパンダちゃんは、白と黒のモノトーンだから、トンちゃん。

レッサーパンダちゃんは、フーツ! って、いかくをするから、フーちゃん。

そんな、だじやれみたいなネーミングだったんだけど、ふたりともすぐ気に入って

くれたみたい。

「ぼく、のびたあとの、たけもすきかなー。もぐもぐするのいいにおいがしてー。」

「わかるっすわかるっす！ まいにちでも、かみかみしたいっす！」

にこにこどうれしそうに笑うトンちゃんたちを見て、じんわり、胸の奥があつたかくなるのを感じる。

すつかり、仲良しになったみたい。

ほんとうによかったね・・・、フーちゃん。

絵も描き終わり、まだ朝も早いけれど、わたしとイエイヌちゃんは出立することにした。昨日のボスの話だと、イエイヌちゃんのおうちはだいぶ遠いみたいだし、暗くならないうちに、ある程度進んでおきたかった。

「なまえ、ありがとねー。きをつけてー。」

「ほんとうに、ありがとごさいましたっす！ また、あそびにきてくださいっす！」

お礼を言うふたりに、こちらこそ、と昨日のお礼を返して、手を振りながらお別れをした。

歩きながら、ちらちらと振り返ってはだんだん小さくなっていく二人の姿を見る。ふたりとも、いつまでも手を振ってくれていた。

「すてきなフレンズさんたちだったね。」

「そうですね。とても、いいこたちでした。」

「トンちゃん、すつごいつよかったよね。」

「ええ。おかげさまで、みんなぶじでした。」

「フーちゃんも、とつてもかわいかったし。」

「トンちゃんさんと、なかよくなれて、ほんとうによかったです。」

「だね。」

なんて、おはなしをしながら歩いていると、あつという間に竹林の出口までたどり着く。

と、黙って道案内をしていたボスが立ち止まり、

「ソレジャア、ボクハ、ココデオワカレダネ。」

そう言つて、ぴこりとしつぽを縦に振つた。

・・・そつか。案内は竹林をぬけるまで、つて言つてたつげ。

「トモエ。チクリンハ、タノシカッタカナ。」

なんとなく物悲しいような気分になっていると、ボスがそんなことを聞いてきた。

「うん。おかげさまで。ありがとね？　ボス。」

「ソウ。ソレハ、ヨカッタヨ。」

せつかくだから、ボスも一緒に——、なんて言葉が出かかるけど、がまんする。

たぶん、ボスはこのあたりのフレンズさんや施設の世話をしている子、なんだろう。それをわたしの都合で連れ出したら、トンちゃんやフーちゃん、ロバちゃんにも迷惑がかかるかもしれない。

「コノママ、ミチナリニイケバ、ウミベチホーニデルカラ、ハシヲワタツテ、タイガンニイクトイイヨ。コウヤチホート、ミツリンチホーヲヌケレバ、キョジユウクニツクヨ。」
「わふ。なにからなにまで、ありがとうございます。」

「コマツタコトガアツタラ、チカクニイル、ラツキービーストヲ、サガシテネ。キット、タスケテクレルヨ。」

「うん。そうするね。ありがと、ボス。またね。」

しゃがみ込んで、視線を同じにして、ボスの大きな耳をなでながら、わたしはボスにお別れを言った。

「ソレジャ、ゲンキデ。」

ボスはそう言うのと、またびこびこ音を立てて、来た道に戻っていった。

「いっちゃいましたね。」

「そうだねえ。」

イエイヌちゃんの声色も、返すわたしの声色も、なんだかせつないような感じだ。

・・・でも、たぶん、また会えるから。

そのときまで、ボスがかけてくれた言葉の通り、元気でいよう。

「つぎは、うみべちほー、ですね。」

「だね。どんなフレンズさんがいるかな？ たのしみ！」

「また、いきなりだきついたり、しないでくださいね？」

「・・・う、うん。ぜんしよ、します。」

道の続く方へ歩き出しながら、わたしたちはおはなしを続ける。

「そういえば、きょうはどんなえを、かいたのですか？」

「あ、まだ見せてなかったっけ。あとで休憩のときに見せるよ。」

「わふー！ たのしみです！」

本当に楽しみにしてくれているのがまるわかりの笑顔に、わたしの顔も自然とほころぶ。

肩掛けかばんにしまったスケッチブックの3ページ目には、広場で一緒に眠っているみんなを描いた。トンちゃん、イエイヌちゃん、フーちゃん、ボスに、わたし、そして…、
「ねえ、イエイヌちゃん。」

「はい、なんですか？ ともえちゃん。」

「あたし、みんなと、おともだちになりたいな。」

唐突にそんなことを言うわたしに、イエイヌちゃんはちよつと不思議そうな顔で、

も、すぐに優しい顔になると、

「はい。ともえちゃんなら、きつとみんなとおともだちになれますよ。」

わたしの一番ほしい言葉を、言ってくれた。

肩掛けかばんにしまったスケッチブックの3ページ目には、

広場で一緒に眠っているわたしたち、

そして、

あの、不思議なフレンズさんと、

あの、けものさんが、

より重なつて眠っているところが、描かれていた。

――

――

――

ここは、ジャパリパーク。

今日もたくさんのフレンズさんたちが、のんびり幸せに暮らしています。

草原に伸びる石畳の道を、

ごとごとと小さな音を立てて、一台の馬車がゆっくり進んでいました。

ううん。

馬車、じゃなくて、ロバ車、かしら？

「ほうほう、それでセルリアンをやっつけたこたちは、あっちのほうこうにむかったと。」

「うん。こんなすてきなものまでもらっちゃって、とつてもかんしゃしてるんだ。」

「あたしたちもかんしゃしないとねー。おかげでとつてもらくちんだよー。」

ロバちゃんが引いている馬車にゆられて、

ふたりのフレンズさんたちは、とつても楽しそう。

「こまっているフレンズにてをさしのべる……、とてもすてきなフレンズさんですね。わたしたちたんでいいも、つねにそうありたいものです。」

「たんでいいはー、センちゃんだけ、だけどねー？」

「なにをいっているのですかアルマーさん！ たんでいとじよしゆは、ふたりそろってはじめてたんでいいのです！」

「あははー。センちゃん、いみわかないよー。」

あらあら。

ふたりでひとり、なんて。

センちゃんはアルマーちゃんのこと、大好きなのね？

「それより……、さつきのおはなしは、ほんとう？ さいきん、セルリアンがおおいの

は、りゆうがあるって。」

「よくぞきいてくれました！ そうなのです！ はやくみつけないと、たいへんなことになるのです！」

「このままでは……、このままでは……！」

「えつとー、あるひとからのじょうほうでー、いまー、このパークにはセルリアンのー、」
「パークのきき、なのです！」

あらあら、大変。

パークの危機、ですって。

危ないことにならないかな？

大丈夫？

「センちゃん。それ、いいただけだよねー？」

「そ、そんなことはありません！」

「どうだかー。……あはは、」

「もう、アルマーさんのいじわる。……ぷつ、くすくす……。」

うふふ、よかった。

やっぱり、ふたりとも楽しそう。

ふたりのフレンズさんたちの、楽しい旅は続きます。

けものフレンズR くびわちほー 第03話 「うみをは
しる」アバン・Aパート

「わあっ！ イエイヌちゃん！ みてみて、海だよ！」

「はい。とつてもあおくて、おつきいですね！」

「うん！ すっごいきれい！」

わたしとイエイヌちゃんは竹林を抜けてしばらく歩き、海辺に辿り着いていた。目の前いっぱい広がる海は、まるで空が溶け込んでるみたいにとつても青くてきれいで、見ているだけでわくわくしてくる。

そよそよと吹いてくる風は、ちよつぱりしょっぱいような香りがして、それもまた海に來た実感を高まらせてくれる。

「ねえ、せっかく海に來たんだし、ちよつと浜辺まで、降りてみない？ あたし、ちよつと遊びたいかも。」

「わふ！ いいですね！ わたしもあそびたいです！」

イエイヌちゃんのごきげんメーターこと、ふさふさのしつぽがぶんぶんぱたと横に振られる。メーターはすでに振り切っているみたい。

「えへへー、じゃあ、決まりだね！　いってみよう！」

わたしとイエイヌちゃんは堤防の階段をかけ足で降りていく。

降りた先は一面の砂浜で、踏みしめると、きゅっ、ととっても気持ちのいい感触。

「わー！　とってもさらさら！」

お砂場遊びしたらとっても気持ちのよさそうな、真っ白でさらさらの砂を靴の裏に感じながら、わたしは足の速いイエイヌちゃんを追いかける。

「ともえちゃん！　こつちになにかおちてますよ！　わふ！　こつちにも！」

「それ、貝殻だね！　ほんとだ！　いっぱい落ちてる！」

「わふ！　なんだかいっぱいあるのを見ると、あつめたくくなります！」

「いいね！　貝殻ひろい！　いっしょにあつめよ！」

「はい！　どんなのがあるか、たのしみです！」

イエイヌちゃんは言うが早いか、ぱたぱたと砂浜を駆けまわりはじめる。

わたしもその後を追いつながら、目についた貝殻をかたっぱしから拾い集めた。

巻き貝に、二枚貝、ツノガイに……

「わふう！　これ、うごきました！　ともえちゃん！　なんですすかこれ！」

と、イエイヌちゃんがびつくりした顔で足元を見る。そしてそのまま、かさかさと逃げていく巻き貝を、口をあんどぐり開けたまま見送った。

「あれはヤドカリだね。落ちてる貝殻をかぶって暮らす、海のいきものだよ?」
「やどかり、ですか! はじめてみました! おもしろいです!」

「ヤドカリは、捕まえちゃうとかわいそうだから、見るだけにしようか。」

「はい! そうしましょう! . . . わふう! あそこにもへんなものが!」

「まっつて、足はやいよイエイヌちゃん! あはは!」

また、ぱたぱたとかけ出していくイエイヌちゃんに、思わず笑みがこぼれた。

イエイヌちゃん、海ははじめてなのかな?

とつても楽しそうだね!

. . . あれ? でも. . .

居住区にあるおうちから歩いてきたのに、そのときはここ、通んなかったのかな?

「ともえちゃん! これです! これはなんですか!」

「えつとね、それは. . .」

ぴよんぴよんと飛び跳ねるイエイヌちゃんのところを追いついて、その影に隠れているものを見る。

——と、

「うう. . .、ひつく. . . あついよう、せまいよう. . .」

砂浜からひよっこり顔を出している、フレンズさんのうつろ気な目と目が合った。

・・・、えーと、

つまり、・・・どういうこと？

「・・・なつ、なんだあ、てめーらあ！　じ、じろじろみてんじやねーぞお!」

「・・・、ええ・・・?」

なんだかよくわからない状況にいる、そのフレンズさんは、なんだかとっても口の悪い感じに言ってきた。

その目がちよつぴりうるんで見えるのは、たぶん気のせいじゃあないと思う。

けものフレンズR　くびわちほー　第03話「うみをはしる」

じょうきようを、せいりしよう。

わたしの目の前にあるのは、まちがいなく首から下がすっぽりと砂に埋まったフレンズさんの姿で。

さつき貝殻を拾っててわかったけど、遮るもののない海辺の日差しに焼かれた砂は、とつてもあつくて。

そんな中に埋まつてるこの子は、ひたいから汗をだらだら流してて、当然のことだけど、とつてもあつそうで。

そんな状況にもかかわらず、そのフレンズさんはさつきから、

「・・・んだよお！ あたしのかおに、なんかもんくでもあんのかあ!? お？ やるか？

やんのかこらあ！ やったんぞこらあ！」

とつても口が悪い感じにののしつてきたり、

「・・・うう、なんだよお・・・、みてるだけかよお・・・、あついよお・・・、ひどい

よお・・・。」

かと思うと、涙目でぶつぶつと泣き言を言ったり。

このじょうきようを、まとめると・・・、

・・・うん、さっぱりわかんない！

「ええと・・・、きみ、なにしてんの？」

とりあえず、渦中の、ううん、砂中のフレンズさんに聞いてみる。

フレンズさんは話しかけられたのがうれしかったのか、ぱあつと顔を明るくして、けれど、すぐにけわしい顔を見ると、ぎろつと睨みつけてきた。

「・・・つ、んなの、みりや、わかんたろお!? おもいつきはしつてたら、いつのまにかうまつてたんだろがい！」

「ええ・・・、ええ・・・？」

ごめんなさい。さっぱりわかりません。

なんとさえばいいか。

追いかければ追いかけるほど、姿が見えなくなるような、

どんどんかしこきがうしなわれていくような、このかんじ。

「・・・イエイヌちゃん、だしてあげよつか。ほるの、てつだつてくれる?」

「わふ! あなほりですか!? わたし、あなほりだいすきです!」

「あはは・・・、とりあえず、いそいでたすけてあげようね・・・。」

なんだか、イエイヌちゃんの返しも、とつてもかしこくないような気がするよ・・・。
とりあえず、海でテンションが上がっているせい、と思うことにしようか。

イエイヌちゃんはさすがイエイヌのフレンズだけあって、穴を掘るのはお手の物みたい。
い。

言い出しつぺのわたしが添え物にもならないくらいすすごいスピードで、フレンズさんの周りの砂をまるつとかき出してしまった。

フレンズさんは体が自由になるとすぐ、頭の上の羽をばさばさとはためかせて、すつかり落とし穴みたいになった砂の中から飛びあがった。

・・・え? なにこれ?

空に浮いてる・・・の?

「ふうー、ひからびるところだったぜー。」

ふよふよとしばらく浮いていたフレンズさんは、また羽をばさばさつとしながら、わたしたちのすぐそばに降り立って、安堵の息をついた。

「あら、あなた、とりのフレンズなのですね。」

イエイヌちゃんの言葉に、なるほど、と思う。

その子は、うすい灰色の頭に濃い茶色の大きな羽と、これまた大きなとさかをつけていた。

まつ毛の長い大きな目は、丸っこい顔立ちと相まって、なんだか小さな子供のようなチャーミングさがある。

耳の横にはインディアンみたいな羽の髪飾りがついてて、羽先の朱色と根元の水色がとっても鮮やかだ。

青いTシャツに白い短パンみたいな服装は、なんだか夏休みの子供みただけけど、体を動かすのにはとっても合いそう。

おしりには頭の羽と同じ色の長い尾羽があって、ときおりぴこぴこ動くのがかわいらしかった。

鳥のフレンズさんだから、空も飛べるんだね。頭の羽が、鳥のあかし、なのかな？でも・・・、それなら、なんで埋まってたんだろ？

走ってたら埋まってた、なんて言ってたけど、ほんとにそんなことあるの？

鳥なのに？

なんて、げげんな顔で見ているのかもしれない。こちらの様子に気を悪くしたのか、そのフレンズさんはぶすつとした顔で答えてくる。

「んだよお、ほかのなんにみえるってんだよお。」

「いえ、わたしはてつきり、やどかりのフレンズなのかと。」

「はああ？ やどかりい？ てめえー、めんたまどうなつてんだあ？」

「く、くうん……、すみません……。」

強い口調で言われて、イエイヌちゃんはしよんぼりしてしまった。さつきまでばたばたと振られていたごきげんメーターも、すっかり下を向いてしまっている。

……うーん、なんだか、もやもやするなあ。

「えつと、あたしはともえつていうの。こっちの子はイエイヌちゃん。あなたは？」

もやもやをごまかすように、できるだけ元気よく話しかけたつもりだったけど、口から出たのはつつけんどんな感じの言葉で、それも、ちよつと早口になってしまった。

いけない、いけない。

まだ、この子がどんな子なのか、なんのフレンズさんかもわからないのに、こういう態度はよくないよね。

なんてことを思っていると、その、鳥のフレンズさんは、胸を大きく張るようなポー

ズをとって、すっごいどや顔で名乗りをあげた。

「へんっ！ あたしは、こうやのはしりや！ グレーター・ロードランナーだぜー！」

「・・・ぐれえたあ？」

「ロードランナー、ちゃん？」

「おう！ いかしたなまえだろお？」

うん、なんというか。

「とつても、つよそうななまえですう。」

そう、イエイヌちゃん。それぞれ。

和名はたしか、オオミチバシリっていうんだよね。昨日、どうぶつ図鑑で読んだ項目だ。

わたしとしては、イエイヌちゃんの感想はまったくもって妥当だと思うのだけれど、ロードランナーちゃんは何か気に入らないのか、またぶすつとした顔になる。

「へんっ、わかかってねえなあー。そこはつよそう、じゃなくて、はやそう、だぜー！」

ロードランナーちゃんはそう言つて、からからと大きな声で笑いだした。

「・・・、イエイヌちゃん、この子、へんな子だね。」

「はい、とつてもおもしろいこですな。」

ほそほそと小声でイエイヌちゃんに話しかけるけれど、意外にもイエイヌちゃんは楽

しそうな顔で返してくる。しつぽもゆつくり振られてるくらいだ。

「・・・いやまあ、

イエイヌちゃんがそう言うなら、いいんだけどさ。

助けたお礼を言ってくれないのは、ちよつと悲しいけど、そういうこともあるし。でも、その上でこんな横柄な態度をとられると、

やつぱりもやもやが・・・、うーん。

「ともえちゃん。ひろばでくんのおみず、まだのこつてましたよね?」

「あ、うん。まだいっぱいあるけど・・・、」

「ごそごそとかばんから取り出して、イエイヌちゃんに渡す。」

ロバちゃんにもらった水筒に、ふれあい広場の水飲み場で汲んだお水だ。竹林を抜けて海まで、たいした距離もなかったから、ほとんど減つてない。

イエイヌちゃんは水筒のキャップを器用にはずして、そこに中身を注いだ。

「はい、ロードランナーさん。よければ、おみず、どうぞ。」

「へ?」

イエイヌちゃんの提案に、ロードランナーちゃんは何故かびつくりした顔で固まっちゃった。

つていうか、わたしもちよつとびつくりしたくらいだ。

イエイヌちゃん・・・、
さすがに、いいこすぎない・・・？

たしかに、こんなにあつい砂に埋まって、あれだけ汗をかいてたら、喉もすっごい乾いてるだろうけど・・・。

あれ・・・？

ひよつとして、あたしがわるいこ・・・？

「へ、へんつ！ へいきだい！ このくらいあたしにはなんてこと、」

「いけません！」

「ひゃい！ ごめんなさい！」

強い口調のカットインに、ロードランナーちゃんは、ぴーんと尾羽を立てた。

「いっぱいあせをかいたのですから、おみずをちゃんとのまないと。いのちのきけんだって、あるのですよ？」

「ひっ・・・！ い、いのち・・・？ そ、そうなの・・・？」

「そうですよ。だから、ちゃんとおみず、のんでください。」

「・・・うん、わかった。のむ・・・。」

・・・うーん？

なんだか、この子の性格、さつきとまるで違うような・・・。

「んくつ、んくつ、ん……」

「ああ、そんなにいいそいでのおんじや、だめですよ。もつとゆつくり。」

「ん……、んくつ、……、んくつ、」

「そうそう、そのくらい。おかわりもありますからね？」

「……こくつ、」

うわあ……。なにこれ。

イエイヌちゃんが、やんちやな子供を優しくなだめるお母さんみたいに見えてきたよ。

それから、水筒の半分くらいを飲むまで、その不思議な光景は続いたのだった。

——

「へっ、へんっ！ れいは、いわねーからなあ！」

お水を飲んで元気になったからか、ロードランナーちゃんはさつきまでの調子を取り戻すように、さつきまでと同じ強い口調で、つよがりを言った。

そう、つよがり。

わたしはこの時点になってようやく、この子がどういう子か、わかってきた。

「おかまいなく。パークのおきてにしたがったまで、ですから。」

「……っ、ぐににに、」

何故かくやしそうなロードランナーちゃんに、くすくすと笑うイエイヌちゃん。それは、たぶんわたしがはじめて見る、いたずらっぽい笑顔だ。

パークの掟かあ。

困ったときには助け合おう、だったよね。

あたし、ぜんぜんできてなかったよ。

やっぱり、イエイヌちゃんはすごいなあ。

「へんつー！ こうしちやいらねえ！ はやくプロングホーンさまのところに、もどんねーと！ あばよおっ！」

大きな声でそう言つて、ロードランナーちゃんはかけ出した。そのスピードはひよつとしたら本気を出したイエイヌちゃんより早いくらいで、その背中があつという間に豆粒になった。

確かにあれだけのスピードで足を動かしてたら、いつの間にか埋まつた、なんてことも起きるのかもしれない。この砂、とつてもさらさらだし。

「……まつててくださいねー！ ……プロングホーンさまー！」

ほとんど見えないくらい遠くから、そんな声が聞こえてくる。

プロングホーン、つて、誰かの名前、なのかな。

様つてつけるくらいだし、あの子にとつてとつても大切な子、なのかも。

残されたわたしとイエイヌちゃんは、ふたりで顔を見合わせて、なんとなく笑ってしまふ。

「これ、埋めたら、あたしたちもいこつか。」

「そうですね。このままでは、あぶないですし。そうしましょう。」

すっかり落とし穴みたいになってしまった、ロードランナーちゃんが埋まっていた穴を埋め直す。誰か落ちちやつたらかわいそうだし。

そうして、海にかかる橋を渡るために、降りてきた階段に向かって歩き出した。

「ロードランナーちゃん、面白い子だったね。」

「はい。なんだかなつかしいかんじがしました。」

「懐かしい？ どういうこと？」

「ええと・・・、はつきりとおもいだせないのですが、むかし、あのようなせいかくのこ
と、おともだちだったような。」

「思い出せないの？」

あたしとおんなじで、イエイヌちゃんも記憶がないの？ なんて言葉を続けそうになるけれど、それを言うのはデリカシーに欠ける気がして、言葉を飲み込む。

「はい。・・・でも。」

「でもっ？」

オウム返しに問いかけると、イエイヌちゃんはじんわりと温かいものを包むように、胸に両手を当てて答えてくれた。

「とつても、たいせつな、おともだちだったとおもいます。」

「・・・そつか。また、会えるといいね！」

「はいー」

思い出せないのに、どうやって会うの？　なんて野暮なつつこみはナシで。

こういうのは、思っていること自体に、意味があるのだ。

それにしても・・・、

ロードランナーちゃんみたいな子かあ・・・、いったいどんな子なんだろ？

意地っ張りで、ついつい強がってしまうけど、ほんとは素直でかわいい子。

あんな子だったらあたしも会ってみたいし、おともだちになれたら、うれしいな。

堤防をのぼり、海岸線をしばらく歩くと、大きな橋のたもとに辿り着いた。

これがたぶん、ボスの言っていた、ハシ、なんだろうけど。

「これは・・・、あはは、」

その光景に、思わず乾いた笑いをあげた。それは誰が聞いても、がっかり、と感じる

声色だったと思う。

「くうん・・・、はしが、なくなっちゃってますね。」

「・・・、だね。」

海岸のこちらとあちらの岸を結ぶ橋は、たもとからほんのちよつとのところで、キレイに崩れてしまっていた。

その、ぎりぎりのところまで行ってみる。

眼下には何も無い中空と、その下の方には波に揺れる海面が見えた。堤防をのぼった時は気にならなかったけど、けっこう高い。

ぶんだんされた距離は長くて、わたしにはとてもじゃないけど飛び越えられなさそう
だ。

「・・・、イエイ又ちゃんなら、飛び越えられる?」

「たぶん、じよそうをつければ、いけるとおもいますが、ともえちゃんをかかえながらでは、さすがに。」

「だよねえ。」

まあ、そうだよね。

普通に考えて、そうでしょ。

・・・別にあたしの体が重いとか、そういうことじゃないからね?」

「うーん、どうしょつか。」

「かいがんをぐるつとまわれれば、ほんたいがわにたどりつきますが……」

こうして上から海岸線を見ると、はんぶんのお月様みたいな形になっていて、歩いて回るとけつこうな距離になりそうだった。

「んー、まあ、しようがないよね。そうしよつか。イエイヌちゃん。」

「はい……」

ふたりに来た道をしょんぼり引き返そうとしたところで、

——ぎっぱーん、

海面に大きな泡がはじけ、そこから飛び出てきた何か、こっちに向かって飛んできた。

「うわあっ!」

「ともえちゃん! うしろへ!」

とつさにわたしの体を引き寄せて後ろにさがらせながら、イエイヌちゃんは前に出る。

イエイヌちゃんは緊張した様子だったけれど、しだいにその緊張が解けていくのが背中越しにもわかった。ぴんと張ったお耳やしっぽも、こわばりが解けていく。

「きゆう? おどろかせちゃった? ごめんね?」

わたしたちの目の前に現れたのは、とってもかわいらしいフレンズさんだった。

空の色を映したような水色のセーラー服に、襟元のタイと首元のチョーカーが白く輝いている。

おへそ辺りにある船のイカリみたいなワンポイントとか、右手首の宝石みたいな緑色の腕輪とか、おしやれさんな感じがとつてもかわいらしい。

半袖ミニスカートから伸びる手足はとつてもすべすべ。海から出てきたばかりだからか、水にぬれた素肌の感じが、ちよつぴりせくしー。

そして、何より特徴的なのは、髪としつぽの形だ。

まるで背びれのような灰色のとさかと、同じ色をした胸びれみたいなサイドの髪。耳の上辺りから下は色が変わっていて、毛先に行くにつれてだんだんと濃い水色になっていく。

頭頂部と同じ灰色をしたしつぽは太くて、ちからづよい感じ。先つぽにはこちらもまた尾ひれのようなものがついていた。

この子つて……、もしかして……？

その姿、特徴を認識するにつれて、わたしの中にまた、ある感情が芽生えていく。

そう、昨日もパンダちゃんたちに感じた、あのキュンキュンが――、

「わたしはバンドウイルカのドルカ！ よろしくねー！」

そうやって名乗られたことで、一気にばくはつする。

「やっぱり！ いるかさんだあつ！」

「いけません！」

こうなることがわかつていたのか、機先を制して、ドルカちゃんに抱き着こうとしたわたしをイエイヌちゃんは抱き止める。

もふもふと柔らかい感触に包まれて少しだけキュンキュンが収まる。

けれど、あのすべすべそうな素肌に触れてみたい欲求は収まらない。

「やだー！ ちよつとだけ！ ちよつとだけさわらせてー！」

「だめです！ キのうもそういつて、ちよつとですまなかつたでしょう！」

ばたばたと取っ組み合いをはじめたわたしたちに、ドルカちゃんは不思議そうな顔だったけれど、しばらくして自分のことではたばたしてると気づいたのか、助け船を出してくれた。

「きゆう？ そのこ、わたしにさわりたいの？ べつにいいよ？」

「ほら！ このこもこう言ってるし！」

「・・・もう、わかりました。」

ため息交じりにそう言つて、イエイヌちゃんは拘束する手をゆるめてくれた。

「えへへー、ありがと。」

「でも、やりすぎだとはんだんしたら、すぐにとめますからね？」

「うんー！」

元氣よくお返事して、わたしはドルカちゃんの手を取った。

「わぁ……！ すっごいすべすべ……！」

両手で包みこむように取ったその手は本当にすべすべしていて、わたしは思わず遠慮なしに手をもそもぞ動かしてしまおう。

ドルカちゃんはそんな無遠慮な手の動きも気にしてないのか、満面の笑みで、

「わーい！ あくしゅあくしゅ！ たのしいね！」

……やばい。

この子、懐っこくてすっごいかわいい！

「……、ちよつと、ちよつとだけ、だきついても……？ うえひひ、」

「ともえちゃん！ はうす！」

「はい！ ごめんなさい！」

わたしの口から気持ち悪い声が漏れ出たところで、イエイヌちゃんからストップがかかる。

握っていた手を離して、ぴんと背筋を伸ばして固まるわたしと、あきれ顔のイエイヌ

ちゃん。

「きゅふふ！ きみたち、おもしろいね！」

そんなわたしたちを見て、ドルカちゃんはまた満面の笑みを見せてくれた。

「あらためまして、わたしはイエイヌのフレンズで、イエイヌといえます。こちらは、ヒトのともえちゃんです。」

「ともえだよ。よろしくね、ドルカちゃん。」

「イエイヌちゃんとー、ともえちゃん！ うん！ よろしくね！」

ドルカちゃんは改めて自己紹介をするわたしたちを交互に見て、また懐っこい感じに笑う。

イルカは好奇心旺盛だっというし、珍しいものが好きなのかも。

「にしても、さっきのすっこいジャンプだったよね！ 海からここまで、けっこう高いのに。」

「うん！ わたしジャンプするのときいな！ うみのなかでいっぱいはやくおよぐと、いっぱいいたかくとべるんだ！」

「なるほど。やはりじよそうがかんじん、なのですね。」

ふむふむ、と納得するイエイヌちゃん。やっぱりというか、イエイヌちゃんも高く飛ぶのには興味があるみたい。

「いつもここらでジャンプして遊んでるの？」

そうなのだとしたらちよつと申し訳ないことをしたかも。着地点にいたわたした

ちって、すっごい邪魔になっちゃってたんじゃないかな。

なんて思っていたのだけど、どうも考えすぎだったみたい。

「うんとね！ いつもはもつとおきのほうであそんでるんだけど、きみたちがみえたから！」

「え、あたしたちに会いに来てくれたの？」

「うん！ ひよつとして、はしがわたれなくてこまつてるのかなって！」

わあ・・・、やっばい。

この子、すっごいいい子だ。

「なにか、わたるほうほうがあるんですか？」

「あるよ！ ついてきて！」

そう言って、ドルカちゃんも堤防をさつきの浜辺とは反対の方に向かって歩き出した。てつきり橋のとぎれた部分を渡るものだと思っていたから、少しとまどう。

けれど、迷う必要はないよね。

懐っこくて、明るくて、いい子。

こんな子が助けてくれるっていうんだから、疑うことなんて何も無い。

「いこー！ イエイヌちゃん！」

「はいー！」

わたしたちはすぐにその後を追った。

「こちらは、こんなかんじになっていたのですね。」

橋を挟んだ反対側は、さっきの浜辺とは違って人工的な様子だった。コンクリートでできた波止場とか、建物とか、いわゆる港って感じ。

その光景を見て、なるほど、と思う。海を渡る方法に心当たりができたからだ。

「こっちは港、なのかな？」

「わふ。みなと、ですか。」

「うん。船がとまってるるところだよ。ここから船に乗ったり、降りたりするの。」

「ともえちゃん、ふね、しってるんだね！ うみのけものじゃないのに！ ものしり！」

「ふね？ ふねってなんですか？」

「えつとね・・・、ほら、あれが船だよ。」

そう言つて、波止場に一台だけとまっていた船を指さした。

「わふ！ うみにぶかぶかういてます！」

「あはは。船は海に沈まないようにできてて、風とか、燃料とかで動くんだけど・・・、」
その船は帆がなくて、いわゆるモーターボートみたいな形だから、たぶん後者だろう。

でも、だとすると・・・、

「ねえ、ドルカちゃん。あの船ってうごくの？」

「きゆう？ うごかないよ？」

「そっかあ。じゃあ、あれで海をわたるんじゃないんだね。」

「やっぱり、と思う。」

捨てられてた馬車だったり、壊れていた照明だったり、今まで見てきた状況から、パークがヒトの手を離れてだいぶ経っていることは明らかだ。

船も同じように動かなくなっているもおおかしくないと思っただけ、どうもその通りだったみたいで、ちよつとがっかりする。

せつかくだから乗ってみたかったなあ・・・、おふね。

なんて考えていると、ドルカちゃんは不思議そうな顔で、

「んーん？ あれでわたるよ？」

「え？ 動かないのに？」

「うごかないけど、うごくよ？」

「ええ？」

「きゆう？」

わたしとドルカちゃんは、お互いがお互いに、不思議そうな顔を見合わせる。

うごかないけど、うごく・・・、つてなに？

てつがく？

「えつとね。あのこ、もう、うごかないんだけど。たまにね？ わたしたちがおして、うごかしてあげてるの。」

なるほど。そういうこと。

ドルカちゃんの言うあのこ、つてのはもちろん、あの船のことだろう。

と、わたしがひとり納得していると、なんだろう、ドルカちゃんはちよつとせつなそうな顔をしていた。

「むかしはね？ あのこ、すつごくはやくおよげたの。でも、もうずっと、うごかなくて。」

そっか、と思う。

なんとなくだけど、ドルカちゃんの気持ちが変わる。

きつとあの船に、色んな思い入れや思い出があるのだろう。

船に対して、あのこ、なんていうくらいなんだから。

「でも、きみたちみたいにな、たまにうみをわたりたいこがいるでしょ？ そのときはあの

こにのせて、わたしたちでおして、わたらせてあげてるの！」

「わたしたちつて、ドルカちゃんのおともだち？」

「そうだよ！ みなとにいるから、しょうかいするね！」

元気な声で言うドルカちゃんは、またさっきの笑顔に戻っていた。

港に向かって堤防を降りながら、なんとなくイエイヌちゃんの方を見ると、イエイヌちゃんはちよつと難しそうな顔をしていた。

「イエイヌちゃん、どうしたの？」

「いえ・・・、あの、ともえちゃん、おみみを、」

言われて、イエイヌちゃんの口元に耳を近づける。

ひよつとして、さっきのドルカちゃんのお話に何か思うところがあつたのかと思つたけど、小声で伝えられた言葉は、その想像とはぜんぜん違つていた。

「あの、ドルカさん。くびわを、つけているようなんですけど、ひよつとして・・・、」

言われてみて、ああ、と思う。

たしかにドルカちゃん、白いチョーカー、つけてるもんね。

イエイヌちゃんが言っているのはもちろん、昨日わたしが竹林で会つた、不思議なフレンズさんのことだろう。

それを思い出して、イエイヌちゃんも不安になつてしまったのかもしれない。

ひよつとしてこの子がそうなら、またわたしが怯えてしまうのでは、と。

「大丈夫だよ。ドルカちゃんは、あの子じゃないよ。」

「そ、そうなのですね・・・。くうん、よかつたです。」

わたしの返答に、イエイヌちゃんは安心したみたいで、ほっと息を漏らす。

「イエイヌちゃんは心配性だね。でも、ありがとう。」

「いえ、そんな……。」

小声で会話を続けながら、あの不思議なフレンズさんのことを思い出す。

わたしや、フレンズさんたちよりちよつと小柄で、うすい緑色のふわふわで、大きな耳やずんぐりしたしっぽをつけたフレンズさん。

あのときは怯えてしまつて会話にもならなかつたし、それどころか、あいさつや自己紹介すらまともにできなかつた。

できればもう一度会つて、そのことを謝つて、ちゃんとおはなしをしたかつた。

「あのときはいきなりでびっくりしちやつたけど、たぶん、次にあの子に会つたら、ちゃんとおはなしできると思う。だから、心配しないで平気だよ?」

「はい。わたしも、おはなししてみたいです。」

今もあの子は、竹林にいるだろうか?

そうだとしたら、イエイヌちゃんのおうちにいつて、その後でまた行つてみるのもいいかもしれない。

トンちゃんフーちゃんたちとも、また遊びたいし。

……さて。

唐突に話は変わるけれど、わたしはあまり信心深い方じゃない。

神様というものはいるかもしれないけど、積極的に信じたりはしないし、お祈りをささげたこともない。

ひよつとしたら記憶を失う前にはそうじゃなかったかもしれないけど、祈るぐらいなら自分で行動する、というのが今のわたしだ。

けれど。

こうしてあの子に思いをはせているときにタイミングよく現れると、つつい、その存在を信じそうにもなる。

ただ・・・、その神様は、どうにもよくわからないお茶目をするみたい。

「てめー！ だまってつとなんかいつてんろこらあ！ ぼけったつてつとぶつたすぞらー！」

「まあまあ、そんなに大声を出さないの。落ち着いて、ね？」

「・・・、つ！・・・、つ！」

波止場に辿り着いて遭遇したのは、なんだかもめ事をしている、さんにんのフレンズさん。

大声でまくしたてるロードランナーちゃんと、それをなだめる、はじめて見るフレンズさんと、そして、

すっごい涙目で何かを言いたそうにしている、あの、不思議なフレンズさん。

ええと・・・、うーん、と・・・。

ええ・・・？

なにこれ・・・？

どういう状況・・・？

フレンズ紹介くバンドウイルカく

ドルカちゃんはクジラ偶蹄目マイルカ科バンドウイルカ属のすいせー哺乳類、バンドウイルカのフレンズだよ！

ハンドウイルカ、が元々のお名前みただけど、バンドウイルカって呼ばれることの方が多いよね！ 図鑑にもバンドウイルカって載ってることが多いから、どっちでもいいのかな？

ドルカちゃんも、そういうの気にしなさそうだよね！

バンドウイルカはイルカの中で一番速く泳げるんだよ！ 普段はゆっくりなんだけど、本気を出したらなんとその速さは時速70キロ！ すっごいよね！

速さの秘密はお肌がいつもつるつるすべすべだから、みたい！ しんちんたいしゃ？
がかっぱつで、2時間くらいでお肌が入れ替わるらしいよ！

あたしもさわらせてもらったけど、すつごくすべすべで気持ちよかったよ！

イルカは好奇心が旺盛で、遊ぶのが好きなんだって！ 水中で泡の輪っかをはいて、それをくぐって遊んだり、波に乗って遊んだりするんだって！

船がつくった波に乗るのも好きみたいで、よく船に並走してるのは、そういうことみたい！

いつも遊んで、きゅーきゅー、っていう鳴き声が笑ってるみたいでかわいいの！だからドルカちゃんもいっつも笑ってるのかな？

かわいいよね！

【こえ】ともえちゃん（しゅくしちほー）

けものフレンズR くびわちほー 第03話 「うみをは
しる」B・Cパート

フレンズ紹介〜カリフォルニアアシカ〜

フォルカちゃんはネコ目アシカ科アシカ属のすいせい哺乳類、カリフォルニアアシカのフレンズだよ！

名前の通りカリフォルニア州の南の方で繁殖してるんだけど、住んでるところはもっとひろくて、海岸線に沿ってもっと南の方とか、北の方の国にも住んでるみたい！

国をまたいで暮らしてるなんて、ぐろーばるだよね！

カリフォルニアアシカはアシカの中でも一番多くて、水族館にいるアシカはほとんどカリフォルニアアシカなんだって！

アシカは陸上では、はいはいして進むイメージだけど、足の力が強いから、体を起こして歩けるみたい！ 意外と速くてびっくりするよ！

もちろん泳ぎは得意で、前足を器用に動かして、すっごい複雑な泳ぎができるんだって！

あと、すっごい深く潜れるみたい！ 潜るときは鼻の穴を閉じて空気が漏れないよう

にするの！ 長い時は15分くらい潜ってられるし、300メートルくらいまで潜れるらしいよ！

アシカはとつても頭がいいから、色んな芸をすぐに覚えたりできるんだけど、それだけじゃなくて、一度覚えた芸はぜつたいに忘れないんだって！

フォルカちゃん、記憶力がいいんだね！

うらやましいな！

【こえ】ともえちゃん（しゅくしちほー）

あらためて、じょうきようをせいりしよう。

わたしの目の前にいるさんにんのフレンズさんたち。

ひとりは、きれっきれの暴言をはいているロードランナーちゃん。

ひとりは、困った顔でそれをなだめる、わたしの知らないフレンズさん。

そしてもうひとりは、何か言いたそうに涙目で睨み返してる、あの不思議なフレンズさん。

うーん・・・、

ごめん、さっぱりわかんない。

なんていうか、あの不思議なフレンズさんって、物語によくいる、とうとつに現れて

助言をして去つていく謎キャラみたいな印象でいたから……、

その印象とこの状況が、まったく結びつきません。

「きゆう？ フォルカちゃん、どしたの？」

「あら、ドルカちゃん。」

フォルカちゃん、と呼ばれたフレンズさんは、声をかけてきたドルカちゃんに向き直つて、ことの次第を説明しようとしてくれた。

「こちらのフレンズさんたち、ふたりとも船に乗りたみたいなんだけど、見ての通りケンカしちゃつてて。」

「きゆう！ ケンカはだめだよ！ ケンカしてたらふねにのせてあげられないよ！」

「私もそう言ってるんだけど、聞いてもらえなくて……、」

苦笑しながら答えるフォルカちゃんは、ドルカちゃんの後ろに立っていたわたしたちに気づくと、

「そちらの方たちは……、あら？ あなたはたしか……、」

「は、はじめまして！ あたしはヒトのともえです！ こっちはイエイヌちゃんです！」

「わふ！ い、イエイヌです！」

「このこたちも、うみをわたりたいんだって！ だからつれてきたの！」

「あら、今日はお客さんいっぱいね。」

そう言って、フォルカちゃんは口元に手を当てて、くすくすと笑った。

「私はカリフォルニアアシカのフォルカ。ドルカちゃんたちといつしよに、ここで海を渡るフレンズさんのお手伝いをしてるわ。」

青みがかった白の前髪に、黒い後ろ髪。サイドのところ髪がはねているのが、アシカの前足みたいでとってもチャーミングだ。

長い髪はおしりの辺りでまとめられてて、その先が二つに分かれてるのも、ふりふりしたしっぽみたいでかわいい。

けれどそんなかわいい印象を、理知的な顔つきと身に着けた白ぶちのメガネ、そしてその服装が、一気に180度変えてくる。

後ろ髪と同じ黒のワンピース水着に、同じ色をしたタイツみたいなニーソックスと、アームガード。その上からうす緑色のパレオと水色のパーカーを羽織っただけ、というその恰好。

それだけでもとってもどきどきする格好なのに、パレオはうっすら透けてて・・・、あれは、たしか、はいれぐ、というやつではなかるうか。

それに・・・、なんか、すっごいおつきいし。

「どうしたの？ 私の胸、何かついてる？」

「いえ！ なんでもありません！」

思わず敬語になつてしまふくらいに大きい。

何がとは言わないけど。

「うふふ、そう？ 宜しくね？ ともえさん。」

「はい！ きようしゆくです！ よろしくおねがいます！」

フォルカちゃんはなんだか、これまで会つたどのフレンズよりも大人っぽい印象だった。

わたしたちの自己紹介の間も、ロードランナーちゃんと不思議なフレンズさんのふたりは、いがみ合つたままだつた。

「それで、ふたりはなんでケンカしてるの？」

まずは、いちおう顔見知りのロードランナーちゃんに発言を促してみる。

「ケンカじゃねーし！ こいつがさー、ぶつかったのにぜんぜんあやまんねーじゃん？

だからよー、ちいーつと、きよーいくしてやってんだよ！」

「この子はこう言ってるけど、そうなの？」

もう一人の、不思議なフレンズさんの方にも聞いてみると、ふるふると小さな首を振つて、これまた小さな口を開けて、ぽそぽそと、

「……ふね、まつてるあいだ、うみ、ながめてた。」

「……そしたら、そのこ、ぶつかつてきた。」

「・・・すつごく、いたかった。」

そんな、たどたどしい、とぎれとぎれの説明を聞いて、

「・・・、ええと、ちよつと待つてね?」

と、仕切り直しの発言をさせてもらったのは、なにも双方の言い分が食い違っていることに混乱したからじゃない。

あのときは状況が状況だったから、気づかなかったというか、恐怖で何もわからなくなっちゃつてたけど、

・・・この子、ものすつごいかわいくない!?

小柄な体とか、パーツの小さい顔立ちとか、そのくせ大きくて丸い目とか、目を潤ませてぶるぶる震えてる感じとか、たどたどしい話し方とか、

・・・ああ、やっぱい。

すつごい守りたくなっちゃう。

こつくり、心が出した結論に、深々と頷く。

そして、不思議なフレンズちゃんをかばうようにその前に出て、

「この子は、わるくないよ。」

「なんでだよ!」

キリッ、とした顔で言うわたしに地団太を踏むロードランナーちゃん。

「あたしがふねにのろうとしてたのを、こいつがじやましたんだって！」
「つて、言ってるけど、そうなの？」

ふるふる、と首を振る不思議なフレンズちゃん。

「私も見てたけど、こちらの小さい子の、言う通りよ？」

と、フォルカちゃんからも援護射撃。

「ほら、やつぱりこの子、わるくないじゃない！」

「ぐぬぬう・・・！」

ロードランナーちゃんは悔しそうに声を上げる。

あきらめなさい。もくげき証言が出た以上、ほんほーてーの判決はくつがえりませ
ん。

なんて思いながら見ているのだけど、どうにもロードランナーちゃんはあきらめがわ
るみたい。

「そ、そんなことありませんー！ そんなところにつつたつてるほうがわるいんですう
ー！」

そんな子供のような反応を返してくる。

あーもう、どうしたものやら。

たぶん、あたしの言葉じゃ聞き分けてくれないだろうし・・・、

こうなったらまたイエイヌママに……、と改めてイエイヌちゃんを見ると、すごく警戒した表情で不思議なフレンズちゃんを見ていた。

あ、そっか。

昨日話した不思議なフレンズちゃんの特徴、まんまだもんね。っていうか本人だし。ドルカちゃんやんはチャーカー以外に合う特徴がなかったから、あの程度の疑問ですんだけど、さすがに本人を前にしたら……、

……あれ？

さつきは自分もおはなししてみたって、言つてたような？

不思議に思つて黙っていたのを勘違いしたのか、ロードランナーちゃんはそれ見たことかという顔で、言葉が続けてくる。

「だいたい、さつきまでなんもしゃべんなかったくせに、みかたしてくれそーなやつがきたらしゃべるって、どーなんだよ！ あ？ このひきよーもん！」

「ロードランナーちゃん、そんな言い方……、」

さすがにそれは言い過ぎだと思つて口を挟もうとする。

けど、

「……くそばーど。」

ぼそり、と後ろから聞こえてきた声に絶句した。

「なんだとてめーっ！ もっぺんいつてみるおっ！」

「・・・、っ！」

ぎゅっ、とわたしのシャツの裾が握られる感覚。何かが背中にひっしとしがみついているような感じ。

何か、というかもちろん、あの不思議なフレンズちゃんなんだけど。

・・・あれ？

「ケンカしないの。たしかに黙ったまま何も言わなかったのは、あなたも悪いのよ？」
「そうだそうだー！」

と、フォルカちゃんの仲裁に乗っかってくるロードランナーちゃん。

「ぶつかって謝らないあなたは、もつと悪いの！」

「うぐ・・・っ、いや、だからそれは、」

「・・・くそばーど。あやまれ。」

「あー！ またいったな！ てめえーっ！」

「・・・、っ！」

また背中に感じる、ぎゅっとなつかまれる感覚。

・・・あれ？

ひよっとしてこの子、けっこういい性格してる？

なんだかもう、どっちもどっちな気がしてきてしまい、ケンカの仲裁はさて置き、わたしはさつきから気になってたことを聞いてみることにした。

「それより、ロードランナーちゃん。なんで戻ってきたの？ さつき、あっちの方向に走ってつたのに。」

言いながら、さつきの浜辺の先を指さす。ロードランナーちゃんはうぐ、と呻くような声を出したかと思うと、よく聞き取れないくらいの声で、

「・・・んだよ!」

「え、何? なんて?」

「だからあ!」

聞き返すと、顔を真っ赤にしてその理由を言った。

「あっち! でっかいセルリアンがいたんだよ!」

なるほど。それならしょうがないか。

「そーなんだ! セルリアン、こわいもんね?」

「こ、こわい? はあ? そ、そんなわけねーだろ! あたしがほんきでしたら、あんなセルリアンなんてよゆーだしー。」

ドルカちゃんの問いかけに、明らかにウソとわかる声色で答えるロードランナーちゃんは、言い終わってから含みのあるような笑みを浮かべる。

「でも、あんまよわいもんいじめんのもかわいそーだろう？ そのの、ちびっこみたいにー。」

そして、いー、と口の横をひっぱってわたしの背後を挑発した。

「・・・よわいとりほど、よくほえる。」

「つ、てめ！ やんのか？ お？ やんだな？ やったんぞらー！」

「・・・、っ！」

「もう。やめなさいっての。」

ああ、これダメだ。相性最悪。

いつまでも仲直りできないパターンだ。

わたしがそう思ったのと同じタイミングで向こうもそう思ったのか・・・、

・・・うーん、違うか。

だいぶ、せつな的に生きてる感じのこの子が、そこまで考えたとは思えない。

「へんっ、もんどどうもいいかげんあきたぜ！ こんなとこであしどめくつてられるかっての！ あばよお！」

おそらくは言葉通りのことを思ったんだろう、ロードランナーちゃんは捨て台詞のようにならうと、頭の羽をはためかせて飛び上がり、海の方へと飛んでいった。

さつきといい、今といい、ほんと、忙しい子である。

「あの子、飛べたのね。なんで船に乗ろうとしてたのかしら？」

「えーと、オオミチバシリはたしか・・・、」

フォルカちゃんのもつともな疑問に、昨日読んだどうぶつ図鑑の内容を思い返していると、わたしのセリフに続くように、後ろから声が出た。

「・・・りくじようをはしるとり。とぶこともできるけど、あんまりとくいじゃない。」

「そうそう！ そう書いてあった！・・・って、」

びつくりして後ろを振り向くと、きよとんとした顔の不思議なフレンズちゃんと目が合う。

「あなた詳しいのね？ 他のフレンズのことって、皆あまり知らないものよ？」

「・・・、」

びつくりした顔で言うフォルカちゃんに、不思議なフレンズちゃんはまた黙ってしまった。

ほんと、不思議な子だな。

あたしだって図鑑で読むまで、オオミチバシリこと、ロードランナーちゃんの特徴なんて知らなかったのに。

あれだけ仲がわるい相手のことをそんなに知ってるなんて・・・、

・・・まあ、もつとも、

あれは完全にロードランナーちゃんが火をつけまくった結果だとは思うけど。

それに、ヒトにも物知りな子も、あたしみたいにかしこくない子も、色々いるし、ものしりなフレンズさんがいてもおかしくないよね。

「そっか。ロードランナーちゃん、飛ぶの苦手だったんだ。だから、走ったり、船に乗ろうとしてたんだねえ。」

・・・、

・・・あれ？

とぶの、にがて？

その言葉を反芻すると、わたしは慌てて、飛んで行ったロードランナーちゃんを探した。

その姿を見つけるとともに、遠くから声が聞こえて、

・・・なんとというか、脱力感を覚える。

「なんだよ！ むこうぎし！ おもったより！ とおいじゃんか！ うわ！ おちるおちる！ なみ！ こつちくん！ やめてやめて！ うみこわい！ やだあつ！ うわあんつ！」

羽ばたくたびにだんだん高度を落としているロードランナーちゃんは、とつても情けないひめいを上げていた。

「きゆうう？ あのこ、だいじょうぶかな？」

「あはは・・・、大丈夫じゃない？」

心配そうにロードランナーちゃんを眺めるドルカちゃんに、わたしは苦笑交じりに返す。

大丈夫でしょ、たぶん。

あの子、なんか生命力強そうだし。

ああもう・・・、

なんか、どつと疲れた・・・。

「きゆう。いちおう、おともだちにたすけてあげてつて、いつておくね？」

後で聞いた話だと、海に落ちちゃった泳げない子は、ドルカちゃんのおともだちが助けるんだそう。

「・・・くそばーど、じごくじとく。いいきみ。」

うんうん、その通り。・・・じゃなくて。

後ろから聞こえた声に思わず同意しかけるけど、なんとかこらえる。

振り返って、目線を同じ高さに落として、さとすように声を発した。

「こーら、そんなこと言っちゃだーめ。フォルカちゃんもさつき言ってたけど、何も言わないあなたも良くなかったんだから。」

「……ごめんなさい。」

「うんうん。今度会えたら、あの子にもごめんなさいして、仲直りしようね?」

大きなお耳ごと頭を撫でながら言うのと、こくこく、と頷いた。

……お返事は素直でかわいいけど、

たぶん、ムリだろうなあ……。

数分後、わたしたちは海を渡るモーターボートに乗っていた。

モーターボートと言っても、その動力はじんりきというか、イルカリキ、だ。ボートの後ろにはりついていたドルカちゃん、後ろから押す形で進んでいる。

ボートは海に浮くけど、かなり重い。ほとんど金属でできているのだから当然なんだけど。

でも、

「わーっ! すっごいはやい!」

「わふ! すごいです! うみをはしってます!」

ボートはわたしとイエイヌちゃんが驚くくらいのスピードで、海の上を走っていた。

「うふふ。ドルカは泳ぐのが速いから。あの子に泳ぎの速さで勝てるのは、シャチちゃんくらいじゃないかしら?」

船のへりに腰かけ、きれいな横座りをしているフォルカちゃん。短いパレオからすらっと伸びた足がとつてもなまめかしい。

うーん、やっぱりフォルカちゃん、すっごいせくしーだよ……。

「あとで私と交代するけど、私はあんまり早く泳げないの。ゆつくりになつちやうけど、ごめんなさいね?」

「そんな! 乗せてもらってるだけでじゆうぶんだよ! ……です。」

思わず普通に返してしまつて、あわてて敬語に直した。

「うふふ、無理して敬語、つかわなくていいのよ?」

「あはは、うん。ありがと。」

今まで会つたフレンズさんはみんな、わたしと同じか、わたしよりちよつと年下、くらしいのイメージだつたんだけど、こんなに大人な感じのフレンズさんはじめてだから、どうしても緊張してしまう。

大人だし、すっごい知的な感じだし。

やっぱりメガネかけてるから頭いいのかな?

なんて、おぼかなことを考えていると、

「そう言えば……、あなた、自分のこと、ヒトつて言つてたわよね?」

フォルカちゃんは長い髪をかき上げながら、急にそんなことを聞いてきた。

「あ、うん。そうだけど・・・」

「もしかして、このボート、直せたりする？」

直す？

このボートを？

あたしが？

「むりむり！ あたし、そんなかしこくないし！」

「あら、そんな風には見えないけど。」

「ほんとだって！ よくおぼかなこととしてイエイ又ちゃんに叱られるもん！」

「そうなの？ うふふ。変なこと聞いてごめんなさい？」

あわててしまつてすつごい情けないことを口に出してしまふけど、フォルカちゃんは優しい気な笑みを返してくる。

自分の名前が出たのを聞いたのか、水面の泡をしつぽを振りながら眺めていたイエイ又ちゃんが、くうん？とこつちに視線を向けた。

「な、なんでもないよ！ 気にしないで！」

「くうん？ そうですかあ？」

よかつた・・・。さっきのセリフ、ちゃんと聞き取れなかつたみたい。

あんな情けないの聞かれちゃつたら、恥ずかしくてイエイ又ちゃんの顔見れない

よ……。

「仲いいのね？ ふたりとも。昔からのおともだち？」

わたしたちを微笑ましげに見ていたフォルカちゃんは、そんなことを聞いてくる。

「ううん。違うよ？ つい……、おととい？ うん。おとといに、会ったばかりかな。」

「あら？ そうなの？ 私はてつきり……、」

と、フォルカちゃんは言葉を詰まらせるようにして、

「ううん。ごめんなさい。ふたりがあんまり仲良くみえたから、そう思っちゃったの。」

「えへへ。だつて！ イエイ又ちゃん！」

「わふ！ うれしいです！」

ばたばたとしつぽを振るイエイ又ちゃんと、顔を見合わせて笑う。

昔からのともだちみたいかあ……。

なんだかちよつと照れちやうね！

「私はそろそろ泳ぐ準備をするから、お暇するわね？ 三人とも、ゆっくりしてて？」

フォルカちゃんはそう言つて、水色のパーカーとパレオと、ビーチサンダルを脱いで、
デツキの後ろの方で体操をはじめた。

フレンズさんも、準備運動するんだ……。

つていうか、そんなきわどい水着で……、

そんな、やだ、足が……!

はわあ……!

「ともえちゃん?」

「みてません! みてませんから!」

顔を隠した両手の、指の隙間からちらちらフォルカちゃんを見ていたわたしは、突然話しかけられてびっくりする。

「くうん? なにをみてないんですか?」

不思議そうな顔で覗き込むイエイヌちゃんの澄み切ったオツドアイに、顔が真っ赤になるのを感じた。

やめて……!

そんな純粹な目で、今のあたしを見ないで……!

「あはは、なんでもないよ。それで、どうしたの? イエイヌちゃん。」

なんとか取りつくりうように答えると、イエイヌちゃんは少しだけ困ったような顔で、

「ええと、あのこの、ことなんですけど……。」

そう言って、わたしたちから少し離れた場所にちんまりと座っている、あの不思議なフレンズちゃんを示した。

ああ、と思う。

そういうえば、そうだよな。

港を出てからというものの、速いボートときれいな景色にはしゃいでしまったわたしたちは、すっかりあの子のことを忘れてたような形だ。

ちよつと、ひどいことしちやつたかも。

「うん。おはなし、してみよつか。」

「はい。わたしも、おともします。」

わたしたちが近づくと、不思議なフレンズちゃんは遠くの海を眺めていた視線をこちらに向けてくれた。

「あの、となり、座ってもいいかな？」

「・・・うん、いい。」

「ありがとう。」

ボートはあんまり広くないから、向き合って座るのは難しい。だから、どうしても三人横並びになる。

ちんまりと座るその子の横にはわたしが座り、そのとなりにイエイヌちゃんが座った。

「えつと、今日がはじめましてじゃ、ないよね？ 昨日、竹林で会ったよね？」

何を話していいかも分からなくて、いきなりそんなド直球を投げてしまう。

正直なところ、無視されちゃうかはぐらかされちゃうかな、なんて思ったけど、その子は思いのほか素直に、こくり、頷いてくれた。

「・・・うん、あった。」

「そうだよね。あのときはごめんね？ あたし、気が動転してたみたいで、すごく失礼な態度をとっちゃったと思うの。ほんと、ごめんなさい。」

「・・・いい、きにしてない。」

ぺこり、頭を下げると、その子はぼそぼそと感情の読めない声で答えてくる。

本当に気にしてないのか、社交辞令なのか、判断がつかない感じだった。

・・・えーと、こんなにもつかみどころのない子、だったっけ？

さつきはもつと・・・、なんとというか、子どもみたいな感じだったと思うんだけど。

えつと、さつきは・・・、

あ、

と声が出そうになる。

そっか。さつきはロードランナーちゃんがいたんだっけ。

ああやってかき回すような子の前だから、つい素が出ちやっつた、ってことなのかな

？

そうなるよ……、ここで正解となるのは、ひとつ。

「そっか！ 気にしてないならよかった！ じゃあ、改めまして、自己紹介するね！」
何も考えないおぼかになる。これでいこう。

……えっと、ロードランナーちゃんがそうだってことじゃないよ？ 念のため。

「あたしはともえ！ ヒトだよ！ こっちはイエイヌのフレンズで、イエイヌちゃん！
「わふ！ イエイヌです！」

「よろしくね！」

「……よろしく。」

「……、えっと、」

「……、？」

「……、くうん、」

……うーん！

会話、つづかない！

「えっとね！ あなたのお名前は？」

と、待ちきれなくて聞いてしまう。

名前を聞いたのはもちろん会話の流れもあるけど、単純にこの子の名前が知りたかったのもある。

やっぱり、いつまでもこの子とかその子とか、不思議なフレンズさんとかって、呼びたくないよね。

けれど、この子の反応は、ちよつと想定外だった。

「・・・ぼく、なまえ、ない。」

「あ、そ、そうなんだ・・・。」

・・・ああもう、ほんと、あたしって。

わりと軽めに踏み込んで、おもいきりじらい、踏んだじゃん！

なんて頭を抱えていると、横から助け船が差し出される。

「わふ。おとといのともえちゃん、おんなじですね？」

「・・・そうなの？」

「あ、うん。そうなんだ。そうげんの変な建物で目覚めたんだけど、なんだか、色々忘れちゃつてみたいで。名前も思い出せなかったんだけどね？ イエイヌちゃんが、」

そこで言葉を区切って、かばんの中身をこそごそする。目当てのものを手繰り寄せ、取り出した。

「これ、見つけてくれたの！」

もちろん、スケッチブックだ。裏表紙の下の方を指し示しながら、

「ほら、ここにあるでしょ？ ともえって。このスケッチブック、目を覚ました時にもつ

てたんだけど、だからこれ、あたしの名前だと思っただけ！」

ふふん、とつい得意げになってしまおう。

「ともえちゃん……。なまえのないこのこに、なまえをじまんするのは……。ちよつと、」

「……。あつ！ えつと！ そうじゃなくて！」

なんでそんなひどいことを……。と言わんばかりのイエイ又ちゃんの声に、あわてて言葉を返す。

わたしとしては、どうだイエイ又ちゃんはすごいだろう、というつもりだったんだけど、たしかに、そう受け取られてもしようがなかったかも。

「えつとね？ あたしが言いたいのは、名前がみつかったのはイエイ又ちゃんのおかげで、だからイエイ又ちゃんは、すっごいんだよつてはなしで、」

「わふ？ わたしはべつになにもしてませんでしたよ？ もじだつて、よめませんし。」

「そうじゃなくて！ 読めなくても、見つけてくれたじゃない！ だからえらいの！

かんしゃしてるのー！」

「ともえちゃん。なんだかおこってますう……。くうん、」

「だからちがうのー！」

「……。あはは、」

・・・あれ？

ひよつとして、今、この子、笑った？

はじめて見るその笑顔にびっくりして、その顔をまじまじと見てしまう。

ちよつと無遠慮すぎるぐらいに見てしまったから、はにかんだ笑顔を隠すように、くびわに口元をうずめてしまった。

「・・・ぼくのこと、すきによんで。ともえ、なまえつけて。」

そう言つて、また黙つてしまう。

ちよつと顔が赤い気がするの、気のせいじゃないと思う。

うーん。また名付けですか。

なんでか今日は名付けに縁があるようで。

今朝はだいぶ悩んでしまったけれど、今回はほとんど直感で、すぐに浮かんだ。

「じゃあ、くびわちゃん、で。どう？」

あんまりなネーミングかとも思ったけど、今こうして大きめのくびわに口元を隠しているその姿が、すつこいかわいく見えたから、それ以外の名前が浮かびそうになかった。「・・・くびわ、かわいい。」

不思議なフレンズちゃん、改め、くびわちゃんは、お名前を気に入ってくれたみたい。ちよつぱり恥ずかしそうにしながら、けれど、かわいらしい笑顔を見せてくれた。

「・・・ありがとう、ともえ。」

「えへへ、どういたしまして！」

それから、フォルカちゃんに押し手が変わって船のスピードはゆっくりになったけど、船の旅は順調に進んだ。

「・・・ともえ、なにしてるの？」

「んー？ これはね、お絵かきしてるんだよ？」

スケッチブックの4ページ目には、海を走るボートの上で楽しそうに笑ってるわたしたち、海面を飛び跳ねるドルカちゃんと、海にぶかぶか浮かびながらそれを見守るフォルカちゃん、そして、ちよつと半泣きで空を飛んでるロードランナーちゃんを描いていた。

まだ途中だけど、けっこううまく描けてる気がする。

「ともえちゃんは、えがとつてもおじょうずなんですよ？」

「えへへ・・・、あとで見せてあげるね！」

「・・・わかった。たのしみ。」

くびわちゃんはぼそぼそした声で、感情がわかりにくいのはそのままだったけど、少しずつ打ち解けてきた気がする。

はじめは警戒していたイエイヌちゃんも、すっかり笑顔で話しかけるようになっていた。

「そういえば、なんであんなに警戒してたんだろ？」

「気になったわたしは、ふねのなかをみてくる、とくびわちゃんが席を外したタイミングで聞いてみることにした。」

「ねえ、イエイヌちゃん。はじめ、すごく警戒してたよね、くびわちゃんのこと。なんで？」

「ええと、ともえちゃんがしんばいだったのもあるのですが……」

「イエイヌちゃんは歯切れのわるい感じに言う。そして口元に手を当てて、しばらく考えるようにしてから、言葉が続けた。」

「においが、はじめてかぐようなにおい、だったの。」

「はじめてかぐにおい？ はじめてのフレンズさんなら、そういうものなんじゃない？」

「それは、そうなんですけど。なんとというか、しつているふたつのおいが、まじってるようなかんじ、なのです。そんなこと、はじめてで。」

「それで警戒しちゃったんだ。」

「くうん……。しつれいなたいど、だったとおもいます。」

「そんなことないよ。あたしなんか、はじめて会ったとき、もつとひどかったもん。あは

は、

「……、たしかに、そうでしたね。くすくす、」

わたしが笑いながら言うと、ちよつとしよんぼりしちやつてたイエイヌちゃんも、つられて笑ってくれた。

知っている、ふたつのおい、かあ。

あるフレンズさんと、別のフレンズさんと、それぞれがまじった感じ、つてこと？
いわゆるハーフ、みたいな感じなのかな？

つていうか、くびわちちゃん、なんのフレンズさんなんだろう？

あとで聞いてみようかな。

——

「あれ、セルリアン!? あの子たち、大丈夫なの!?!」

向こう岸に辿り着いたとき、少し離れた海の上に大きなセルリアンが見えた。そのセルリアンは何人かのフレンズさんに囲まれていて、ちよつど戦っているところのようだ。

「大丈夫よ。あの子たち、ハンターだから。」

「はんたー?」

フォルカちゃんのセリフに、思わずオウム返しをしてしまう。となりにいたイエイヌ

ちゃんが補足の説明をくれた。

「ハンターというのは、セルリアンをたいじすることをおしごとにしていて、フレンズさんのことですよ。つよいフレンズさんがおおいので、たいいのセルリアンはやつつけられます。」

さすがイエイヌちゃん。とつてもわかりやすい。

「海の中なら、誰にも負けないわ。もつと大きいセルリアンだつて倒したことがあるのよ？」

「へー、すつごいんだねー。」

言いながら、セルリアンと戦っているハンターさんたちを見る。

「ホオジロ！ そつちいったぞ！」

「まかせてくださいシヤチさん！ でえええりやあああつ！」

シヤチさんと呼ばれたフレンズさんがセルリアンの動きをうまく抑えて、ホオジロと呼ばれたもうひとりのフレンズさんが、的確に攻撃を加えている。

戦いのことなんてぜんぜんわからないけど、そんなわたしの目から見ても、とつても息の合つた連携に見えた。

「きゆう！ シヤチちゃんとホオジロちゃん、やつぱりすつごいはやい！」

「うふふ。スピードだけならドルカちゃんも負けてないわよ？」

「フォルカちゃん、みてみて！ カツオドリちゃんもてつだってる！」

「あら、本当！ カツオドリちゃんも凄いわね。」

ふたりの視線につられて上を見ると、空を飛びまわるフレンズさんがいて、ときおりものすごいスピードで急降下してセルリアンの体を削っていた。

「うえは、わたしたちにまかせて。」

「なんでー!? なんであたしまでーっ!?」

・・・ええと、

ちよつとまつてね？

何だか見覚えのある子がいるような・・・？

「ええと、あの子は？」

「きゆう？ あの子ね、さっきうみにおちて、マルカちゃんがひろつたみたいなの！」

「・・・、なんでたまたかに混ざってるの？」

「あの子、セルリアンなんてよゆー、っていったから。きょうりよくしてくれるかもつて、おしえてあげたの！」

「そっか・・・。」

そういえばイルカは、すごい遠くまでおはなしができるんだっけ。マルカちゃん、というのはドルカちゃんとは別の、イルカのフレンズさん、かな。

その子にも会ってみたみたい気持ちがあわくけど、今のこの光景を見ると、なんだかどつと疲れてしまつて、また今度でいいかなつていう気分になる。

「ひゃあ！ まつてまつて！ いまかすつた！ かすつたから！ ひゃい！ たんまたんま！ たんまだつて！ うわあん！ こわいよおつ！ もうやだあつ！」

見覚えのある子、海上にいるもうひとり、ロードランナーちゃん。

とつても情けないひめいを上げながら、ばたばたと羽ばたいて海上を右往左往していた。

「あのご、あんまりつよくないね！」

「そうね……。大丈夫かしら？」

ああ……、

あの子はホントに……。ホントにもう。

「……つよくいきろよ、くそばーど。」

「だからやめなさいって。」

——

あのあと、セルリアンはあつさり退治されていた。ロードランナーちゃん含めてみんな無事みたいで、ほつとする。

……もつとも、ロードランナーちゃんはまた海に落ちちやつて、ハンターさんたち

に助けられていたんだけど。

「送ってくれてありがとね！ すっごい助かっちゃった！」

「ほんとうに、ありがとごうございます！」

「・・・」

船から降りて、わたしとイエイヌちゃんは船で送ってくれたドルカちゃんとフォルカちゃんにお礼を言う。くびわちゃんもとなりで、こくこく、と頷いている。

「お礼なんていいのよ。いつもしてることだから。」

「きゆう！ またわたりたくなったら、いつでもいつてね！」

ふたりはとつてもすてきな笑顔で答えてくれる。

ふたりとも、すっごい良い子だなあ・・・。

このままだとお世話になりっぱなしだし、何かお返しできたらいいんだけど・・・。

「うーん・・・」

「ともえちゃん、どうしました？」

「えつとね？ できればお返しをしたいなって思うんだけど・・・」

言いながら、今日ふたりとおはなししたことを思い出す。

色々考えてはみるけど、ふたりが喜びそうなこと、っていうと、やっぱりひとつしか思いつかなかった。

「やつぱり、船を直すのが一番かな。」

「ふねを？　ともえちゃん、なおせるんですか？」

「そんな、あたしにはムリだよ。でも、ボスにお願ひすればなんとかなるかなって。」

「ふむ。たしかにそうかもかもしれません。でも……」

くんくん、とはなを鳴らして匂いを探るイエイエちゃん。

「くうん、ちかくに、ボスはいないみたいです。」

「そっかあ……」

イエイエちゃんのおはなはこれ以上なく信用できる。少なくとも、日が沈むまでに行ける距離にボスの姿はないだろう。

「……ともえ、」

どうしようかなと考えていると、くいくい、とシャツの裾を引っ張りながら、くびわちゃんが話しかけてきた。

「どうしたの？　くびわちゃん。」

「……、」

無言のまま、手をこいこいと動かして、耳を近づけるように伝えてきた。

「なにかおはなし、あるの？　……、ふんふん……、えっ？」

その通りにしたわたしの耳に、くびわちゃんの、びつくりする内容の言葉が入ってく

る。

「くびわちゃん、なんでそんなこと知ってるの？」

くびわちゃんはふるふると首を振って、

「・・・ひみつ、」

とだけ答えた。

———

「わふ！ すごい！ ふねがうごいてます！」

「ほんと！ すっごいスピードだね！」

もう一度動くようになったモーターボートは、ドルカちゃんが押してたときよりずつと速いスピードで、海の上を走っていた。

その横を並走するように、ドルカちゃんが泳いでいる。ボートを運転しているのはフォルカちゃん。フォルカちゃんは前に運転を覚えただけで、それを忘れてなかったみたい。

「わーい！ はやーい！ たのしー！ きゅふふ！」

「ドルカちゃん！ あんまりはしゃいじゃダメよー！ うふふ！」

ドルカちゃんもフォルカちゃんも、ふたりとも、とつても楽しそう。

わたしとイエイヌちゃんは港から、その光景を眺めている。

そして、とがりにはくびわちゃん。

「……、？」

わたしの視線に気づくと、どうしたの？とでも言いたげな顔で見返してきた。

くびわちゃんがさつき耳打ちで伝えてきた通り、港の建物の中にはボートを動かすための予備のバッテリーがあった。

燃料とか必要なんじゃないとも思ったけど、ぜんぶ電気で動くタイプみたいで、満タンのバッテリーに交換するだけでボートは動くようになった。

ボートは別に壊れてたわけじゃなくて、単に電池切れなだけ、だったみたい。くびわちゃんはどうして、そんなことを知ってたんだろう？

本当に、不思議な子だ。

「ともえちゃん、ありがとう！ あのこ、またうごくようになったよ！」

「他の子たちも、きつと喜ぶと思うわ。本当に、ありがとうね？」

試運転を終えて港に戻ってきたふたりは、口々にお礼の言葉をかけてくれた。

「いや、これはあたしじゃなくて……、」

言葉を区切つてくびわちゃんを見るんだけど、ふるふると首を振って意思を示してくる。

さつきも内緒話で伝えてきたくらいだし、目立ちたくないみたい。

「・・・うん。気にしないで！ せめてものお礼だから！」

なんだか手柄を横取りしたみたいで気が引けるけど、あまり気にしてもしょうがないかな。

「おかげ様でソーラー充電の仕方覚えたし・・・、よかったわね、ドルカちゃん。これでいつでもこの子と遊べるわよ？」

「きゆうー！ たのしみ！」

こうしてふたりが喜んでくれることが、一番なんだから。

「それじゃ、あたしたちはそろそろ行くね！」

「はい。そうしましょうか。」

わたしとイエイヌちゃんのセリフに、ドルカちゃんはちよつとがっかりした顔をした。

「もういつちやうの？ ふね、うごくようになったよ？ のらなくていいの？」

「うん、あんまり遅くならないうちに次のちほーにいきたいから。でも、」

わたしは言葉を区切って、満面の笑みと共に本心からの言葉を口にした。

「またうみべに来たら、そのときは乗せてね！ ぜったいね！」

ドルカちゃんとフォルカちゃんはわたしのお願いを聞いて、ふたりともわたしと同じ

ような顔で、お返事をくれた。

「わかった！ まってるよ！ げんきでね！」

「本当に、色々とありがとう。旅の無事を祈ってるわ。」

うみべから伸びる道を、わたしたちは歩いている。

わたしたち、というのは、わたしと、イエイヌちゃんと、そしてくびわちゃんのさん
にん。

海辺から歩き出したわたしとイエイヌちゃんに、くびわちゃんは、ついてく、とだけ
言って一緒に歩きはじめたのだった。

もちろん、断る理由なんてないんだけど、

「くびわちゃん、ほんとにあたしたちと一緒に来てよかったの？ 船に乗りたかった
のって、どこか行きたかったとこ、あつたんじやない？」

ちよつと気になったので、歩きながら聞いてみる。くびわちゃんはふつとこつちに視
線を向けて、あいかわらずぼそぼそとした小声で答えてくれる。

「……だいじょうぶ。」

そうして、言葉を続けた。

「……ともえのこと、すこし、わかったから。」

「あたしのこと? どういうこと?」

聞き返すけれど、返事はない。少しの間黙ったままだ。たくびわちゃんは、ちよつとうるんだような目になると、

「・・・ぼく、じゃま?」

「そんなことないよ! むしろ一緒に来てくれてうれしい!」

「わふ! そうですよ! いっしょにいきましょ!」

わたしとイエイヌちゃんがあわてて声を上げると、くびわちゃんはほつとしたような顔で、またその大きなくびわに口元をうずめた。

「・・・ありがと、ともえ。いえいぬ。」

・・・ああ、この子。

やっぱりすっごいかわいい・・・!

色々と思議なところがある子だし、まだ何のフレンズかもわからない。

どういう子かも、ちゃんとはわかってないけど。

たぶん、

・・・ううん、

ぜつたいに、すてきな子だ。

「えへへ。これからよろしくね、くびわちゃん!」

「よろしくおねがいます！ わふ！」

「・・・よろしく。」

そうして、わたしたちはおともだちになった。

――

――

――

ここは、ジャパリパーク。

今日もたくさんのフレンズさんたちが、のんびり幸せに暮らしています。

あたたかな木漏れ日が差す竹林の、ふれあい広場。

たくさんのお遊具が並んでいるその場所で、

フレンズさんたちが楽しく遊んでいました。

「アルマーさん！ アルマーさん！ みてください！ きれいなおだんごができました

！」

「おー。これはとってもまんまるだねー。センちゃん、がんばったねー。」

「えっへん！ だろあそびなら、おてのものです！」

ふたりはお砂場で遊んでるみたい。

どろんこ遊びが好きなかしら？

うふふ。

センちゃん、おはなに泥がついちやってるわよ？

「センちゃん、ちよーつとうごかないでねー？」

「な、なんですか？ おだんご、とるきですか？ ……わっぷー！」

「はいはい。じーつとしててねー？」

「く、くすぐつたいです！ じぶんでふけますから！」

「どろだらけのでふいたらー、もーつとどろだらけになるよー？」

「うにゆにゆ……！」

あらあら、やっぱりふたりは仲良しさんね？

アルマーちゃんもセンちゃんのこと、大好きみたい。

「……って、こんなことをしてるばあいじゃないのです！」

……あら？

センちゃん、どうしたの？

「ついどろんこのゆうわくにまけてしまいそうになりましたが！ さっきのおはなし！

くわしくきかせるのです！」

「かんぜんにまけてたけどねー。」

「おだまりなさいアルマーさん！ あれはめをあざむくための、かもふらーじゅです！」

「そーなんだー。すつかりだまされたよー。」

センちゃんはなんだか気になることがあるみたい。

ひよつとして、ふたりが探してるものに、関係あるのかしら？

「さっきのはなしって、ここをとおったこ、のことつすか？」

「あのこたち、とつてもいいこだったよねー。ボスとおはなししてー、しようめいなおしてくれたりー。」

「おはなし!?!」

「らっきーびーすととー?」

トンちゃんとフーちゃんのお話に、ふたりはびっくり。

「・・・っ! こうしてはいられないのです! はやくおいかけないと!」

「センちゃん、はしつたらあぶないよー? それにおてて、あらわないとー。」

「・・・ぐべっ!」

センちゃん、あわててかけ出して、転んじやった。

アルマーちゃんの言う通り、竹林で走つたら、危ないのよ?

「だからいったのに・・・。」

「このくらいへいきです・・・。でも、あぶないからあるいていきましょう・・・。」

「もー、しよーがないなー・・・。じゃー、あたしたちはこれでー。じょうほうありが

とー。」

「どういたしましてっす！ きをつけてっす！」

「セルリアンがでたらー、ちゃんどにげるんだよー？」

ちよつと転んじやったけど、平気みたい。

これからは、あんまり慌てて走ったりしちや、ダメよ？

ふたりのフレンズさんたちの、楽しい旅は続きます。

けものフレンズR くびわちほー 第04話「はーど
らつくとだんす」アバン・Aパート

たとえば、陽の光に照らされてきらきらと輝く大草原を見たとき。

たとえば、見上げて先が見えないほどに伸びた竹林を見たとき。

たとえば、空との境界が曖昧になるほどに広い大海原を見たとき。

ヒトが大自然に向かい合って胸に抱く感動というのは、すべて自分にはないものを感じた結果で、ある意味で自分を映す鏡のようなものだ、わたしは思う。

そしてここ荒野においても、その広大な景色はまた、わたしに新鮮な感動を与えてくれた。

見渡す限りにひろがる光景は、近くの地面も遠くの山も、ほとんどが赤茶色で、そこに目を奪うような綺麗さはない。けれど、心を揺さぶられるような美しさがある。

風が吹けば砂ぼこりがたつような、ひび割れた大地にも、草木は生え、花も咲く。

まさに自然の力強さ、雄大さをまざまざと見せつけられているような――

――なんて、

かたくなるしい文章にしたらそんな感じになるだろう内容を、うつすら考えていても、

「わあ……！ すっごいけしき……！」

わたしの口をついて出るのは、けつきよくはそんな子供っぽい感想である。

おのれのこいりよくのなさに、ちよつぱり遠い目になるけれど、

ともあれ、こうやちほーの光景はとてもゆうだいで、心をふるわせるものだった。

「わふ！ とつてもひろいですね！ かけっこしたらたのしそうです！」

「あはは。イエイ又ちゃん、走るの好きだよね。」

「はい！ なんだかうずうずします！」

イエイ又ちゃんは、はふはふと息をしながら、とつても楽しそうな顔だ。ごきげんメーターの調子もいいみたく、さつきからぱたと左右に振られている。

「遠くの方には岩山がいつぱいだね。あれ、どのくらいの大きさかな？ たぶん、すっご

いおつきいよね？」

「ちよつと、ちかづいてみますか？」

「うーん、けつこう距離あるから……、まずは道に沿って歩こつか。」

ドルカちゃんとフォルカちゃんのおかげで、日の高いうちにこうやちほーにこれたけど、あんまり寄り道してると、この辺りで夜を明かすことになりそうだ。

「あたし、あんまりひろいところだと、寝るときちよつと落ち着かなそうだし。」

「そうなんですか？」

「うん。なんかこう、ちよつとせまいくらいで…、屋根があるともつといいんだけど。」
大自然の中で眠るのもいいんだけど、やっぱりわたしは建物の中の方が落ち着く気がする。

まあ、パークで目覚めてから、ずつと野宿なんだけどね。

「なら、わたしのおうちは、ともえちゃんにぴつたりかもしれませんね。」

「そうなんだ。えへへ、楽しみにしてるね！」

「・・・ともえ。」

くいくい、とシャツの裾を引つ張られて振り返る。

「ん？ なーに？ くびわちゃん。何か見つけたの？」

「・・・さぼてん、」

くびわちゃんが指さした方を見ると、道端にまあるいサボテンが生えているのが見えた。

「・・・おはな、さいてる。かわいい。」

「ほんとだ！ とつてもきれいな！」

白いトゲをいっぱい生やしたサボテンは、ちょうどてつぺんのところにおひさまみたいな形の黄色い花をいくつも咲かせていた。

「サボテンの花って、はじめてみたかも！ たんぽぽみたいだね！」

「・・・しゅるいによって、いろんなかたち、してる。いろも、いっぱい。とげのかたちも、いろいろ。とげのない、さぼてんもある。」

「そうなんだ！ しらなかつた！」

「わふ！ ものしりです！」

「・・・、」

「イエイヌちゃんの誉め言葉にくびわちゃんは無言だったけど、その顔はちよつと照れてるような感じ。」

「そもそも、サポテンってなんでトゲがあるんだっけ？」

「フレンズにも、とげをもっているこがいるみたいですけど・・・、やはり、がいてきにおそれないように、でしょうか？」

「・・・それもある。あと、ひぎしをやわらげて、たいおん、ちようせつしたり、すいぶんほきゆうするのに、つかう。」

「水分補給？ どうやって？」

と、素朴な疑問を口に出してみる。

「あんなとげでどうやって水分をとるんだらう。」

「・・・まさか、むしとか、どうぶつの血、じゃないよね？」

「なんて、おそろしい想像をしていると、くびわちゃんはたどたどしい口調で、けれど

すごく丁寧に教えてくれた。

「・・・さばくや、こうやでは、あめはめつたにふらない。けど、ちゆうやの、かんだんさがおおきくて、あさぎりや、よぎりがでる。それを、とげでつかまえる。」

「すっごい！ そんなことよく知ってるね！ すっごいねくびわちゃん！」

「わふ！ くびわちゃん、はくしきですう！」

「・・・」

わたしたちの反応に、またくびわちゃんは照れたような顔で、口元をそのぶかぶかのくびわにうずめた。

うみべからこうやまでの道中も、くびわちゃんは道端の色々な草木やどうぶつの巢などについて、たまにこうして説明をしてくれた。

そのどれもがわたしにとって、はじめて知ること、とつてもためになる。イエイヌちゃんがさつき言った通り、すっごい博識だ。

くびわちゃんは何でそんなにいっぱい知ってるんだろう。

もとなつたどうぶつがすっごい頭がよかった、とか？

・・・っていうか、まだくびわちゃんが何のフレンズか、聞けてなかったっけ。

そろそろ、聞いてみてもいいかもしれない。

そう思って話しかけようとしたんだけど、くびわちゃんはサボテンの説明に夢中みた

い。

「・・・さぼてんのとげをつかって、すをつくるとりもいる。くちばしでとげをあつめて、すをつくる。」

「ええ!! それ痛くないの!?!」

わたしもその話に興味がわいてしまって、考えていた質問は頭から飛んで行ってしまった。

まあ、また今度でいいか。

「・・・とげは、すのそとがわにつけて、がいてきをよせつけられないように、つかう。だから、すのうちがわは、いたくない。」

「へー、頭いいんだね。」

くびわちゃんは、とり、って言ってたけど、どんな鳥なんだろう？

サボテンのトゲで巣を守るなんて、かしこい鳥なのかな？

「くびわちゃん! みてください! あれって、そのすじやないですか!?!」

と、イエイヌちゃんが大きな声を出しながら、遠くにあるサボテンの方を指さした。見ると、たしかにサボテンの影に大きな鳥の巣みたいなものがある。

「ほんとだ! ねえくびわちゃん! あれって、そうだよね?」

ちよつとわくわくしながら聞くと、くびわちゃんは、こくこく、と頷いて答える。

「行つてみよ！ あたし見てみたい！」

「わふ！ わたしも、きょうみありますう！」

言うが早いのか、わたしたちはかけ出す。一緒に走りだすんだけど、くびわちゃんはわたしたちより背が小さいから、ちよつと遅れがちだ。

わたしはその歩幅にペースを合わせるように速度をゆるめながら、先を行くイエイヌちゃんを追つた。

「わふ！ ともえちゃん！ くびわちゃん！ とりさん、いますよ！」

既にサボテンの所に辿り着いたイエイヌちゃんは、手としっぽを振りながら大きな声をかけてくる。わたしたちも遅れてそこに辿り着き、

「もう、はやいよイエイヌちゃん。あと、そんな大声出したらとりさんが……」

驚いちやうでしよ、と続けようとしたんだけど、そこにあつた想定外の光景に、言葉が出てこなかった。

「……、くう、くう……、ぴゅい……、ふにゆにゆ……、んあ？」

とりの巢で寝ていたのは、とりさんじゃなくて、とりのフレンズさん。イエイヌちゃんの声で起きちやつたのか、目をぱちぱちしてこつちを見てくる。

しばらくぼーつと眺めていたその子は、だんだん意識がはつきりしてきたのか、がばつと体を起こしながら慌てたような声で言った。

「な、なな、なんだてめーらあ！ あたしのおうちに、どそくではいってんじゃねーぞ！」
・・・えつと、ちよつとまってるね？

・・・えつと、・・・、ええ？

また、このパターン・・・？

混乱するわたしの前にいたのは、あいかわらず口がわるい感じにまくしたててくる、
ロードランナーちゃんだった。

けものフレンズR くびわちほー 第04話「はーどらつくとだんす」

フレンズ紹介くG・ロードランナーく

ロードランナーちゃんはカツコウ目カツコウ科ミチバシリ属の鳥類、グレーター・
ロードランナーのフレンズだよ！

和名はオオミチバシリって言って、名前の通り、地上を走る鳥だよ！ 飛ぶこともで
きるけど、あんまり得意じゃないみたい！

大きいくちばしと力強い足をしていて、頭にはとさかがあるんだ！ ぴん、とまつす
ぐ伸びた尾羽がぴこぴこしててかわいいよね！

走る速度はとっても速くて、時速30キロ以上で走れるんだって！ あたしじゃ、自

転車があってもおいつけないかも。

この子をモデルにした有名なキャラクターのおかげで、「ミツミツ（beep beep）」って鳴くって誤解されてるけど、本当は「クークー」って鳴くんだよ！

ハトの鳴き声に、ちよつと似てる感じ！

カツコウの仲間では珍しいみたいなんだけど、オオミチバシリは巣を作って自分で卵を育てるよ！

巣の材料にサボテンのトゲを使って、外敵から卵やヒナを守るようにしてるんだって！
痛くないのかな？って思うけど、巣の中は内ばりをしてるから、痛くないみたい！
頭いいよね！

【こえ】ともえちゃん（しゆくしちほー）

じょうきようを、せいりしよう。

わたしたちが見つけた、サボテンのトゲを材料にした巣には、くびわちゃんが話していたとりのさんがいるはずで。

けれどそこにいたのはとりさんではなく、とりのフレンズさんであるロードランナーちゃん。

・・・まあ、うみべでの状況にくらべたら、だいぶわかりやすいかな。

つまり、さっきのくびわちゃんの話は、オオミチバシリに關しての説明で、

「ええと・・・、ロードランナーちゃん、なにしてんの？」

「みりやわかんذار！ おうちでおひるねしてたんذارがい！」

その返答の通り、つまりこの大きめの鳥の巣が、オオミチバシリのフレンズであるロードランナーちゃんのおうち、であるらしかった。

「くうん、せつかくのおひるね、おこしてしまつてすみません・・・。」

「まつたください！ ほーんと、いーめいわくだあー。」

平謝りするイエイヌちゃんと、半眼でぶつきらぼうな言い方のロードランナーちゃん。

イエイヌちゃんはイエイヌのフレンズだけあつて、おひるねには思い入れがあるみたい。邪魔をしちやつて本当に申し訳なさそうだ。

「ロードランナーちゃんのおうち、こうやにあつたんだね？ なんでうみべにいたの？」
「へんつ、そんなしつもんにこたえてやるぎりはありませんー。・・・でもまー、」

ロードランナーちゃんは唇をとがらせながら言つて、そこで言葉を区切る。そしてわたしの後ろにいるくびわちゃんに視線を向けて、含みのある感じに笑つた。

「そのちみっこいのが、ひるまのことあやまるつてんなら、おしえてやらなくもねーぜ？」

「・・・おまえがあやまれ。くそばーど。」

「ああ!?　こんにやる、またいったなあ!?　くそつていうほーがくそなんだぞお!」

「だからあ、ホント、やめなさいつて。」

もー、やっぱりこうなつちやうか。

予想どおり過ぎる展開に、わたしとイエイヌちゃんは互いに目配せをして、こくり、頷き合う。

「くびわちゃん、おひるま、今度会ったら謝るつて言つてたでしょ?」

「・・・、」

わたしの問いかけに、黙ったまましよんぼりするくびわちゃん。

「ロードランナーさん、わるいことをしたら、ちゃんとあやまらなきゃダメですよ?」

「んだよ!　べつにあたしわるいことなんか・・・、えっと、その・・・うう、」

につこり笑うイエイヌママの無言の圧力に、次第に押され始めるロードランナーちゃん。

わたしたちの顔をそれぞれ見ながら、ちらちらとお互いの様子をうかがつて、ふたりはほぼ同時に同じことを言ってきた。

「・・・そのが、さきにあやまつたら、」

「そいつが、さきにあやまつたら、」

そして、無言のままお互いを視線の中心にとらえると、ふたりとも一步前に出て顔を
見合わせた。

背の高さが違うから、くびわちゃんは見上げるような形。

対するロードランナーちゃんは、見下ろすような形。

「・・・おまえがさき、」

「あ？ おまえがさきだろ？」

「・・・とりあたま、」

「みじんこのーみそ。」

「・・・っ！」「ああんっ!？」

キツ、とお互いに顔を近づけて睨み合い、肩をいからせた。

ああもう・・・、

ホントこの二人、相性わるすぎ。

「さわがしいこえがきこえるとおもったら、かえっていたのか、ロードランナー。」

そんな、わたしただけではどうしようもない状況に、天からの助けのような声が響く。

こちらに向かって近づいてくるその声の主は、もちろんフレンズさんだ。

まず目につくのはその大きなツノ。クワガタみたいな力強い二本の角が、前髪の

ちよつと上あたりから伸びている。

ツノのわきにはびよこん、と長いお耳が伸びていて、なんだかかわいらしい。

肩口で切り揃えられたうす茶色の髪は風にさらさらなびいていて、また前髪の茶褐色やサイドの白がアクセントになって、その凛々しい顔立ちをいつそう際立たせている。

白い体操服とベージュのブルマの上に、オレンジ色のジャージを上だけ羽織っている。足元の運動靴も相まって、はつらつとしたスポーツ少女のような印象だった。

なんというか、すっごい、かっこかわいい感じ。

ロードランナーちゃんはそのフレンズさんの呼びかけに振り返ると、見る間に顔をほころばせ、きらきらと目を輝かせる。その瞳からは、親愛と尊敬の情がはつきりと見て取れた。

……ってことは、ひよつとして、

この子がロードランナーちゃんがうみべで口にしていた子、かな？

おなまえはたしか……、

「プロングホーンさまあつ！」

きいろいひめい、のようなロードランナーちゃんの声に、わたしはその想像が正しかったことを理解した。

「ロードランナー、たびはもう、おえたのか？」

「はい！ ぶじにもどってきました！」

「そうか。げんきそうだなによりだ。」

まるで別人のようなロードランナーちゃんの態度に、わたしは口を大きく開けて固まってしまう。となりを見ると、イエイヌちゃんも似たような顔をしていた。

「こちらのかたがたは？」

と、プロングホーンと呼ばれたフレンズさんがわたしたちを手のひらで示すと、ロードランナーちゃんは一瞬とても嫌そうな顔をして、また笑顔に戻った。

けれどさつきまでの満面の笑みと違って、

なんだかちよつと、いやらしい感じの笑顔、のような。

「いえいえ．．．、こいつらは、ただのちんけなやつらでして．．．。プロングホーンさまのおみみをよごすようなことはありませんよ。」

ロードランナーちゃんの発言に、文字通り、開いた口がふさがらなくなる。

この子の前だとロードランナーちゃんはだいぶ大人しいけど、なんだかステレオタイプな子分みたいになってしまうようだ。

．．．っていうか、ちんけなやつら、って、きみねえ。

もう少し言い方つてものが、あるでしょうに。

なんてことを思っていると、フレンズさんはまじめな顔で、

「そういうわけにもいかないだろう。せめてあいさつくらいはさせてくれ。」

「ぐぎぎぎ……つ、わかりました……。」

何故か悔しそうにしてるロードランナーちゃんを尻目に、フレンズさんはこちらに向かつて一歩前に出た。

「はじめまして。わたしはプロングホーン。この、こうやをなわばりにするフレンズだ。」

堂々とした感じを受けるプロングホーンちゃんの名乗りにも、わたしはちよつと、どぎまぎしてしまつた。

お昼間のフォルカちゃんの時もそうだったけど、どうにもわたしは、口調とか雰囲気とか、大人っぽい感じのフレンズさんに会うと緊張しちゃうみたい。

そんなわたしに気づいてか、イエイヌちゃんが前に出て、かわりに言葉を返してくれた。

「はじめまして。わたしはイエイヌのフレンズで、イエイヌともうします。こちらはヒトのともえちゃん、こちらはくびわちゃんです。」

「は、はじめまして。ともえです。」

「……よろしく。」

イエイヌちゃんに続いて、わたしとくびわちゃんもぺこり、と頭を下げる。プロングホーンちゃんは、うむ、とでも言わんばかりに深く首肯すると、

「イエイ又さんに、ともえさんに、くびわさん。ごしようかい、うけたまわった。あらためまして、ようこそこうやに。なにもないところではあるが、ゆるりとくつろいでいてくれ。」

そんな古風な物言いで、歓迎の言葉をくれた。

プロングホーンちゃんは、とつても礼儀正しくて、見た目通りにかっこいい感じのプロングズさん、みたいだね。

「ありがとうございます。ここはとつてもひろくて、わくわくするところですね？はしったら、きもちよさそうです。」

「おや、きみもはしるのがすきなのか？」

イエイ又ちゃんの言葉に、プロングホーンちゃんは凜とした表情を少しゆるめる。

「はい！ はしるの、だいすきです！」

「きぐうだな。わたしもはしるのほだいですきだ。こうやでも、いち、にをあらそう、あしをもっている、じふしている。」

ずい、と張った胸に手を当てて、自信たっぷりな顔で言うプロングホーンちゃん。

たしかにこの子、見た目からしても運動神経ばつぐんそうだ。

あれだけ足の速いロードランナーちゃんが尊敬しててくらいだし、きつとすつごい速いんだらうなあ。

「そうなんですか!？　すごいです！　わたしはそんなに、あしにじしんがないので、うらやましいです！」

「はは、はいおそいをきにするひつようはないよ。そんなものはただのけつかだ。きみのように、はしることをじゆんすいにたのしむことこそが、かんようなのだ。」

「わふ！　ほめられました！　うれしいです！」

そうして、イエイヌちゃんとプロングホーンちゃんはほがらかに笑う。

なんだかすつかり意気投合しちやったみたいだね。

こうしてイエイヌちゃんが他のフレンズさんと仲良くしてるのを見るのは、とってもうれしい。

ねえ、あたしのおともだち、とってもすてきでしょ？

・・・なんて、

ちよつとほこらしい気分になるのだ。

「プロングホーンさまあ・・・、こんなやつらほつといて、いきましようよう。」

と、さつきから面白くなさそうな顔でそわそわしていたロードランナーちゃんが、横から口をはさんできた。

「まあまで。せつかくきやくじんがきたんだ。ゆつくりしようじゃないか。」

「うう・・・、でもお・・・。」

ぶすつと口をとがらせたロードランナーちゃんに、プロングホーンちゃんは呆れたような表情を見せて、

「それに、ロードランナー。おまえ、またほかのフレンズと、いさかいをおこしたな？」と、低い声で言った。

ロードランナーちゃんは、ぎくり、と音が聞こえそうなほどに体をこわばらせる。

「な、なんのはなしですか？ あたしにはさつぱり・・・、」

「とぼけてもムダだ。おまえがこちらのくびわさんに、ごめいわくをおかけしていたこと、このめとみみがしっている。きょうというきょうは、どうりをとかねばなるまい。」そう言って、険しい表情でお耳をびこびこ動かす。かわいい。

そのアンバランスさがちよつと可笑しかったけど、言っている内容を見ると、あんまり笑ってもいられなかった。

「あの、あのね？ ロードランナーちゃんだけがわるいんじゃないんだよ？ お互い素直になれないだけって言うかなんというか・・・、」

「そうですね。わりとどつちもどつちなきがしますう。」

あらイエイヌちゃん、けつこう辛辣ね。

あたしも、おんなじ意見だけどき。

「ふむ・・・、そうだとしても、ロードランナーはくちがわるい。こんかいもおそらく、

そのせいで、よけいにあいてをおこらせたのだろう。」

はい、その通りです。

さすがわたしたちより付き合いが長いだけあって、ロードランナーちゃんのこと、よくわかつてるみたい。

「そんなあ！ あたしがわるいんじゃないですつてばあ！」

「わたしも、なにも、おまえがすべてわるい、といっているわけではないよ。」

プロングホーンちゃんはそう言って、優しいな笑みを浮かべた。

「ただ、みとめるべきところはみとめたうえで、たいわをしなければ、わかりあえるものも、わかりあえないだろう？」

「・・・、ぐぬぬ・・・、ぎににい・・・！」

色々とせめぎ合ってるのか、ロードランナーちゃんは歯を食いしばりながら頭を抱える。しばらくそのままだったかと思うと、がくつと肩を落として言葉を返した。

「・・・はあ、わかりましたよ。プロングホーンさまがそこまでいうなら。」

そうして、再びくびわちゃんの前へ。

「なあ、おまえ。」

「・・・なに。」

お互いにぶすつとした表情で顔をむかい合わせる。

くびわちゃんは見上げて、ロードランナーちゃんは見下ろして、

その姿だけならさつきとまるで同じ状況だけど、でも。

今度はお互いに、ちゃんと素直にはなしできそうな空気を感じた。

ロードランナーちゃんは、すーはーすーはーと息を整えて、意を決したように謝罪の言葉を――、

「あんときは、ぶつかってわるかつ……」

「どいてどいてええええーっ!?」

口にしようにとしたところで、とつぜん聞こえた大声と、とんでもないスピードで通り過ぎる何か。巻き上がった砂ぼこりが視界をふさぐ。

「びいっー」

見えづらくなった視界の端に、鳴き声なのかひめいなのか、みじかく声を上げながら、ふっ飛んでいくロードランナーちゃんが見えた。

「ロードランナー！ だいじょうぶか!?」

「うう……、いたいよお……、なんだよお……?」

「……、うん。おおきなケガは、なさそうだな。よかった。」

心配そうなプログラミングホーンちゃんの声と、よわよわしいロードランナーちゃんの声
が、砂ぼこりの向こうから聞こえてくる。

いちおう、あつちもなんとか無事みたい。

「くびわちゃん、へいき？ 痛いところない？」

「・・・へいき。」

わたしも近くのかくびわちゃんに声をかける。

くびわちゃんはこくこくと頷いてみせるけど、目の前を何かがあるものすごいスピードで通り過ぎたせいか、その顔はすつごく怯えていた。

体をぶるぶる震わせながら、わたしの腰あたりにぎゅつと抱き着いてくる。

その頭を大きなお耳ごと撫でていると、イエイヌちゃんが不安げな顔で聞いてくる。

「な、なんだったんでしようか・・・？」

「わかんないけど・・・、つ、あいたつ！」

と、ちくつとした痛みを右目感じて、ひめいを上げる。

「ともえちゃん！ だいじょうぶですか!？」

「・・・ともえ、いたそう。」

片目をぎゅつとしながら涙を流すわたしの顔を、イエイヌちゃんとかくびわちゃんは心配そうな顔で覗き込んできた。

「あいたあ・・・、うん、目に砂が入っちゃったみたいで・・・、いったあ。」

「たいへんです！ ともえちゃん！ ちょっとみせてください！」

わたしの肩を抱くようにしたイエイヌちゃんは、息が当たるとかなりの距離に顔を近づける。

「め、あけられますか？ だいじょうぶですか？」

「あ、うん。・・・つ、いたたつ！」

「・・・ともえ、だいじよ、ぶ？」

うるんだ視界いっぱいイエイヌちゃんの顔がひろがる。

「ちよつとそのまま、めをあけててくださいね。いま、とりますから。」

「あ、うん。ありがとう。」

ちよつと恥ずかしいけど、心配そうなその表情を見ると、黙って言うことを聞いてあげたかった。

・・・でも、

「・・・イエイヌちゃん？」

「うーいちゃだめです。じつとしてくださいね？」

わたしの肩をがっちりつかまえて、イエイヌちゃんはさらに顔を近づけてくる。小さく開けた口から、かわいらしい舌がべろつと伸びてきた。

そして、その舌がわたしの顔に・・・、

「ひゃう！ い、イエイヌちゃん！ なに!? なんなの!? なにする気!？」

「くうん、うごかないでくださいよう。」

あわててのけ反ると、イエイヌちゃんはしょんぼりした顔で舌をしまった。

その雰囲気から、なんとなくイエイヌちゃんのやりたいことが伝わってくる。

「ひよつとして・・・、なめて取るつもり？」

「はい！ めをきずつけてはいけませんから！」

「だめ！ それはなんかだいぶアウト！」

イエイヌちゃんの気遣いはとつてもありがたいけど・・・、

それは、さすがに恥ずかしすぎる！

「すなをとらないと、いつまでもいたいままですよ？」

「いや、そうだけど、でも、」

「ほら、じつとしてください。」

「いや、だから、だめだってえ・・・、」

ママみをはつきするイエイヌちゃんに流されるわたしは、すでに涙で砂が流れていることにも気づかないまま、文字通りの押し問答を続ける。

腰にひつついてるくびわちゃんも、様子をうかがうようにまじまじと見つめてくるだけだ。

そろってそんな状態だから、収まってきた砂ぼこりの中から現れたフレンズさんの姿

「あはは、気にしないで。こっちも、勘違いさせちゃうような感じだったし。」

「くうん、もうしわけありません・・・。」

「・・・ごめんなさい。」

わたしたちもまた、さつきまでの状況を冷静に判断できるくらいには落ち着いていた。

息がかかるくらいに顔を近づけているふたりと、その片方に抱き着いているさんにんめ、という状況がはたから見えてどう見えるか。

はつきりいって、そうぞうにかたかない。

ていうか、あんまりそうぞうしたくない。

みんなおんなじように思ったのだろう、わたしたちは気恥ずかしさをごまかすように、いずまいを正して、その、砂ぼこりの中から現れたフレンズさんにむかい合っていた。

さらさらのロングヘアはクリーム色で、毛先の方に行くにしたがって、だんだんと濃い茶色になっている。光の加減で金色にも見えて、きらきらしてとつてもきれいだ。

前髪には薄茶色のポイントがいくつかあって、ぴよこんとした小さなお耳にも、同じく薄茶色のラインが入っている。

シャツにネクタイ、ミニスカート、アームカバーとニーソックスを身につけていて、白いシャツ以外はぜんぶ、クリーム色の地に濃い茶色の水玉模様だ。おしりから伸びた長いしっぽもまた、おんなじ柄。

ちよつと奇抜な格好に見えるけど、とてもスタイルがいいから、むしろかっこよく見える。手足とか腰とか、しなやかですらつとしてるんだけど、おむねとか出るところは出ている、とても理想的な体形に思えた。

それと、きりつとしたつり目の上、長いまつ毛に隠れるように、うつすら紫のアイシャドウが見えて、ドルカちゃんとはまた違った感じのおしゃれさを感じる。

なんとというか、すっごいクールでかっこいい感じのフレンズさんだった。

「ほんとにごめんなさいね？ おまえはしやがせまい、なんてプロングホーンにはよくいわれるんだけど。」

「そうだぞ。まえばっかりみているからこういうことになるんだ。」

「あら、プロングホーン。あなたもいたのね？」

苦笑ぎみに話しかけてくるプロングホーンちゃんに、そのフレンズさんは親しげに返した。

ふたりの、この感じ。

この子も、こーやに住んでる子なのかな？

なんて思っていると、フレンズさんはプロングホーンちゃんのとなりにいたロードランナーちゃんに気がついて、ちよつと驚いたような表情を見せた。

「・・・あら？　ロードランナーもいるじゃない。あなた、いつこうやにもどってきたの？」

「つてめ！　ぶつとぼすぞ！　まずぶつかったことあやまれよ！」

「ぶつかった？　あたしが？　ぜんぜんきづかなかった。あなた、たびをして、からだか
るくなつたんじゃない？　ちゃんとごはんたべてる？　けがとかしてない？　だい
じょうぶ？」

「つ、この・・・、」

やつぎばやに質問を投げかけてくるフレンズさんに、いつもなら反論をまくしたてて
るだろうロードランナーちゃんも、たじろいでしまっている。

「そういえば、ロードランナーのおうちつてこのあたりだったわよね。たびのあいだこ
われてなかった？　きようはちゃんとおうちでねるのよ？」

「いや、だから・・・！」

「それよりごはんたべる？　じゃぱりまんあるわよ？　とりのこようのものの、むり
いつてもらつてたの。いつあなたがかえつてくるかわからないし。あ、あとぶつかつて
ごめんね？」

「っ、んーっ!」

早口で次々にかけられる質問に答える間もなく、異論を唱えるスキすら与えてもらえず、ロードランナーちゃんはばたばたと地団太を踏む。

「はあ・・・、もーいいよ。」

そうして、大きなため息をつくとき、あきらめたように言った。

「そうなの？ それならよかった。じゃあごはんにしましよつか。あつ、でも、こんなにおおにんずうだと、たりないかも。どうしよう、プロングホーン。」

「はは、やっぱりしやがせまいな、きみは。」

からからと笑いながら言うプロングホーンちゃんに、わたしは大きく頷いた。

わたしたちは持ち寄ったジャパリまんできちよつと遅めの昼食をとりながら、あらためて自己紹介をすることになった。

「はじめまして、あたしはチーター。このあたりで、はしつたり、じゃぱりまんたべたり、はしつたりしながらくらししてるわ。」

そう言って、チーターちゃんは、うふふ、と笑う。

見た目はクールでかっこいいけど、なんだかとてもかわいい。思わずこっちの顔もほころんじやうくらい。

チーターってたしか、地上最速のけもの、なんて呼ばれてたと思うんだけど、そんな仰々しい感じはいっさい受けない、かわいらしい感じの子だった。

「あたしはともえだよ！ よろしくね、チーターちゃん！」

「わふ！ イエイヌです！ よろしくおねがいます！」

「・・・くびわ。よろしく。」

さんになんそろって挨拶をして、それからジャパリまんをほおぼる。あまじよっぱい味が口の中にひろがって、とつても幸せな気分だ。

「ほほほめほめーふあ、はりひりほうはひひは、」

「ロードランナー。ちゃんとのみこんでからしやべりなさい。」

と、口をジャパリまんていっばいにしながら話しはじめるロードランナーちゃんに、それをたしなめるプログラミングホーンちゃん。

やっぱりこの子、ちっちゃい子供みたいだなあ・・・。

「んぐつ・・・、ところでおめーら、なににしようやにきたんだよ。」

「何しに、っていうか、旅の途中、かな？ この先のみつりんを抜けて、イエイヌちゃんちに遊びに行くところなの。」

「あら、あなたたちもたびをしてるの？ ロードランナーもついさつきまで、たびをしていたのよ？ たびのもくてきは・・・、なんだっけ？ ロードランナー。」

「ほんらほんひまつへふらへーは！ あはひほはひほふへひ、」

「だから、のみこんでからしやべりなさい。」

「んぐつ・・・、あたしのたびのもくてきは、もつとはやくはしるために、あしじまんのフレンズと、かけっこしようぶ、することだぜ！」

なるほど。

いわゆる、むしやしゆぎよう、つてやつですか。

つてことは、うみべの他にもいろんなところに行っていたのかも。

「して、ロードランナー。たびのせいかは、えられたのか？」

「もちろんですよプロングホーンさま！ いろんなちほーで、さまざまなもさたちを、ぶつちぎってやりました！」

プロングホーンちゃんに問いかけられたロードランナーちゃんは、とてもうれしそうに、ほこらしそうな顔を見せる。

「そうか。それはすごいな。・・・、それで、その、とも、」

「すごいじゃないロードランナー！ じゃあ、ひさしぶりにあたしたちとかけっこしない？ たびのせいかをかくにんするなら、それがいちばんはやいでしょ？」

と、チーターちゃんが元気な声で提案する。その顔はにこにこしてて、とっても楽しそう。

「・・・、そうだな。どうだ？　これからひとつ、はしってみるか？」

「はい！　もちろんです！」

ロードランナーちゃんもとってもうれしそうな顔だ。もちろん走るのが好きなのもあるだろうけど、何よりプロングホーンちゃんに誘ってもらえたのがうれしいみたい。

本当にロードランナーちゃんは、プロングホーンちゃんのこと、大好きみたいね。

「せっかくだから、きみたちもどうだ？」

「いいんですか!?　ともえちゃん！　どうしましょう!?!」

プロングホーンちゃんのお誘いに、イエイヌちゃんはしつぽをばたばたと振りながら、こちらに視線を向ける。

「いいんじゃない？　楽しんでおいでよ。」

「わふ！　ありがとうございます！」

これでたぶん、今日も野宿決定だけど、ぜんぜんかまわない。

いつも迷惑かけちゃってるイエイヌちゃんに、せめてもの恩返しだ。

もつとも、こんな、ちよつとのあいだ遊ばせてあげるくらいのことしか、してあげられないのが、とてももどかしいけれど。

「あたしはあんまり走るの速くないから、見学してるね？」

「・・・ぼくも。」

足に自信がないわたしとくびわちゃんがそう言うのと、チーターちゃんがとても残念そうな顔をする。

「そうなの？ ざんねんね。でも、フレンズによつてとくいなことはちがうから、しかたないわよね。」

「ごめんね。かわりに誰がいちばん速いか、ちゃんと見ておくから。」

わたしがそう言うのと、チーターちゃんはにつこり笑った。

「うん、おねがいね？ あ、でもでも、みのがさないように、ちゆういするのよ？ あたしたち、とつてもはやいんだから！」

「あはは、うん、気をつけるよ。」

こうして、わたしとくびわちゃんを除くよにんで、かけっこ勝負をすることになった。プロングホーンちゃんいわく、勝負をするのに適した場所がある、とのこと、そこまではみんなで歩いていく。

道中のみんなの顔はとつても楽しそうで、見ているこつちまで笑顔になる。

好きなことがあるっていうのは、それだけで自分も周りも、幸せにするのだろう。

そんなことを考えて、ふと、思う。

記憶を失う前のわたしは、どうだったんだろうか。

みんなと同じように、夢中になれる好きなことがあったんだろうか。

今のわたしには、フレンズさんとおはなししたり、絵を描いたりっていう、好きなことがあるけれど、前のわたしは、どうだったんだろう？

・・・まあ、あんまり考えてもしようがないか。

そのうち、なにか思い出すでしょ。

———

フレンズ紹介くプロングホーンく

プロングホーンちゃんはクジラ偶蹄目プロングホーン科プロングホーン属の哺乳類、プロングホーンのプロレンズだよ！

プロングホーンって名前の通り、大きなツノをもってるよ！　せんごくぶしょう、の飾りみたいでかっこいいよね！

プロングホーンは陸上の草食動物の中で、いちばん速く走れるんだよ！　最高時速はなんと約100キロ！　すっこいはやい！

おまけに持久力もあって、時速70キロくらいで長い距離を走ることができるみたい！　すっこいよね！

いつせつによると、チーターから逃げるために、足が速くなったんだって！

プロングホーンちゃんも、いきるためにひっしだったんだね・・・。

野生の草食動物はだいたいそうだけど、プロングホーンも群れをつくってくらしてる

よ！

危険をさっちした時には、おしりの白い毛を逆立てて、群れに知らせるみたい！
なんだかちよつとかわいいよね！

【こえ】ともえちゃん（しゅくしちほー）

けものフレンズR くびわちほー 第04話 「はーどらつくとだんす」 B・Cパート

フレンズ紹介〜チーター〜

チーターちゃんはネコ目ネコ科チーター属の哺乳類、チーターのフレンズだよ！

チーターっていう名前のゆらいは、「胴体に斑点がある」っていう意味の言葉なんだって！ そのまんまだね！

ライオンとかトラとか、ネコ科の大型動物はいっぱいいるけど、チーターはその中でもとってもスリムな体形をしてるよ！

チーターちゃんもすらすらとしてて、すっごいきれいな体形してるよね！ うらやましいな！

チーターは「地上最速のけもの」って言われてるだけあって、すっごく足が速いよ！最高時速はなんと時速120キロ！ びっくりするほど速いよね！

あんまり長い距離を走るのはとくいじゃないみたいなんだけど、そのぶん瞬発力がすごいから、短い距離ならどんな動物より速いよ！

ネコ科の動物は爪をしまうことができ、足音を消したり木登りしたりできるんだけ

ど、チーターはネコ科ではゆいいつ、爪をしまうことができななんだって！

そのおかげでスパイクみたいに地面をつかんで速く走ることができるんだけど、木登りとかはあんまりとくいじゃないみたい。

チーターちゃん、ぶきょうなのかな？ ちよつとかわいいかも！

【こえ】ともえちゃん（しゆくしちほー）

「はー。すつごいね、こら。」

プロングホーンちゃんの案内で辿り着いた場所は、崖のように切り立ったふたつの岩の間だった。

いわゆる、きょうこく、というやつかな。

ふたつの岩山、というより、もともとひとつの岩山だったものが川か何かに削られて、今の形になったんだろうか。

見上げるような岩山がここまで削られるなんて、どれだけ時間をかけたら、こんな地形になるんだろ？

あらためて、自然のちからのすごさを感じる。

入り口からちよつと行つたところに立て看板が見えるけど、このきょうこくのできた経緯とか、説明とか、書かれてたりするんだろうか？

ちよつと興味あるかも。

そんなことを考えていると、プロングホーンちゃんが上機嫌な顔で話しかけてくる。

「この、たにのみちはいつぽんみちでな。みちはばもあるから、かけっこするのはちよつとおいしいんだ。」

なるほど。

たしかに一本道ならコースアウトもないし、このくらい道幅があれば、よにんで横並びに走つても余裕そくだ。

「そうなんだ。道の向こうはどうなってるの?」

そんな興味本位な質問に、代わりに答えてくれたのはチーターちゃん。

「みずうみにつながってるわね。もし、みずうみにおちちやつても、あしがつくくくらいのふかさだから、およげないこでもへいきよ?」

みずうみかあ……。

あとで行つてみたいかも。

そろそろ汗とか、匂いとか、気になるし。

「でも、それだとゴールはみずうみになるの? なら、あたしたち先に行つてた方がいい?」

審判を任せられたからには、ちゃんとゴールを見届けないと申し訳ない。そう思つて聞

いてみるけど、

「へっ！ てめーらのあしであるいてったら、しょうぶはじめるまえにひがくれちまうぜ！」

と、ロードランナーちゃん。

いつもの癖で言ってるのかと思ったけど、プロングホーンちゃんもチーターちゃんも、難しそうな表情でだまっっちゃってるから、本当みたい。

んー、と考えながら、思いついたことを口にしてみる。

「なら、みずうみのことまで行って、そこからここまで戻るようにする、とかは？」

「みずうみまで行って、もどってくるの？」

「そうそう！ 道の入り口までいちばん最初に戻ってきた子が勝ちなの！ どうかかな？」

完全に思いつきの提案だったから、反対されてもしようがないと思ったんだけど、
「なるほど。おもしろいかもしれないな。」

「そうね。おもしろいかも。ここからみずうみまでだと、いつもプロングホーンとはひきわけばっかりだし。」

「わふ！ いっぱいはしれてたのしそうです！」

「へっ、チーターはたいりよくがねーから、とちゅうでバテるんじゃねーの？」

「ふっふーん。そんなことないわよーだ。ペースをかんがえてはしれば、あたしだってけっこうながいきより、はしれるんだから。」

反応は意外といいみたい。

みんな楽しそうな顔で同意してくれる。

ルールも決まったところで、いよいよ勝負開始の時間になった。

「じゃあ、くらくらならないうちにはじめるとするか。」

「プロングホーンさまあ。かいしのあいずはどうしますか？」

ロードランナーちゃんが尾羽をびこびこさせながら問いかけると、となりにいたイエイヌちゃんが、わふ、と聞きなれた声を上げた。

「せっかくですから、ともえちゃんにおねがいしましょう！」

「そうね。それがいいかも。おねがいできる？」

「うん。まかせて！」

思い思いに走り出す体勢を取るみんなの横に立って、わたしは息を整える。

そして、みんなの準備が整ったのを確認して、大きく息を吸い込んだ。

「かけっこしようぶ！ よーい、すたーと！」

かけ声とともに、砂けむりをおきみやげに走り出したよにんのうしろ姿は、あつという間に見えなくなった。

あとに残されたのは、あまりのスピードにびっくりしているわたしと、砂けむりにけほけほしてるくびわちゃん。

「あはは・・・、みんな、すっごいね・・・。」

苦笑しながらぼつりとこぼすと、くびわちゃんがこくこくと頷いて同意してくれた。さて・・・、どうしようかな？

いくらみんなの足が速いって言っても、戻ってくるまではしばらく時間があるだろう。

その間じつとしてるのもたいくつだし、あんまり離れない程度のところなら、ちよつとおさんぼしてみてもいいかもしれない。

「ねえ、くびわちゃん。ちよつとそのあたり、探検してみない？」

わたしの提案に、くびわちゃんはこくこくと頷いた。

峡谷を駆けるフレンズたちは、それぞれに走法の違いはあれ、皆が皆、風のように速い。つい先ほど走り始めたばかりにも拘らず、既にその足は往路の半分に差し掛かろうとしていた。

先頭を走るのはロードランナー。そのすぐ後ろにイエイヌが続く。

「わふー！ ロードランナーさん！ はやいですー！」

「へへっ！ おめーもなかなかはしれるじゃねーか！ しょーじき、みなおしたぜ！」
一般的なヒトの体力からすれば、まともに会話などできない速さで走っているのだが、ふたりとも、まだまだ余力があるようだ。

ロードランナーは体を大きく前に傾け、脱力した両手を後ろにさげる形で走っている。バネのようにしなる足を地面に練り出し、極端に傾けた体を押し出すように、飛ぶように走るその姿は、まるで重力が横に向いているかのようだ。

一方のイエイヌは軽く握った両手を振り、バランスを取りながら走っている。この速度であつて体幹が全くぶれないのは、その走法は勿論のこと、小さく振られている尻尾に依る所が大きい。一歩ごとに揺れそうになる全身を、両手と尻尾を振ることで見事に一所に留めていた。

そして、ふたり以上に余裕を感じさせる走りを見せるのは、少し離れた後方にいるプロングホーンとチーターだ。

「ふふっ、あいつも、いぜんよりペースはいぶんがうまくなったな。みごとなものだ。」
「そうねえ。はやくはしることばかりだったから、すぐバテちやつてたものね？ それに、イエイヌちゃんもすごいわ？ あんなにはしれるこ、だったのね？」

「そうだな。あしにじしんがない、といっていたが、どうやらけんそんだつたらしい。」
息が切れた様子もなく言葉を交わすふたりは、先頭からは数歩分の距離があるもの

の、それ以上離れず、ぴったりと追走している。

プロングホーンの走りは長距離走に於いておよそ理想的と言って良いものだった。両手を振る形はイエイヌと同じであるが、ひざを柔らかく使い、足裏全体で地面を受け止めるように走ることで、重心の上下動と脚力の消耗を最小限にしている。

チーターの走りもまた見事である。やや前傾姿勢であるが、傾けた上体の重さを利用することで、無駄な力を入れることなく、重心の動きが地面と平行になるよう足を運んでいる。その独特な走法を可能にしているのが、鋏でもあるかのように地面を捕らえる、つま先の力だ。

「チーターさんたちもすごいですう！ ぜんぜん、つかれがないみたいですわね！」

「へへっ、プロングホーンさまのほんきのはしりは、まだまだこんなもんじゃねーぜ？ なんて、ぜんりよくではしったあたしが、ぶつちぎられんだかなー！」

「わふ！ すごいです！ みてみたいです！」

「それなら、しゅうばんまで、バテねーようにしねーとなー！」

「はい！ とつてもたのしみです！」

「うふふ。いわれてるわよ、プロングホーン。これは、きたいにこたえないとね？」

「はは。しようしよう、みにあまる。だが、ぜんりよくをもつてこたえよう。」

未だ全行程の四半を過ぎたばかり。峡谷を吹き抜ける向かい風を苦にもせず、皆とも

に余力は充分にあり、勝負の行方は見えない。

みんなが走り去ってからしばらくして、わたしとくびわちゃんはさつき見かけた看板の前に立っていた。

そこには、このきょうこくができた由来とか、そういつたものが書かれているものだとばかり思っていたのだけど、その予想は大きく外れてしまったみたいだ。

「・・・、川下りたいけん、あとらくしよん？」

看板に書いてある文字を読み上げるも、思わず、はてな？と首をかしげてしまう。

「川なんて、どこにもないよね？ どういうことだろう？」

あらためて周りを観察してみるけど、どこを見ても赤茶色の岩壁や地面があるばかりで、それらしい川はなかった。

パークがヒトの手を離れる前のなごり、とかなのかな？

ひよつとすると、このきょうこくができる前、ここには川があったのかもしれない。そうだとしたら、なんだか少し残念な感じだ。

せつかくなら、やってみたかったかな。川下り。

声に出さずにそんなことを考えていたのだけど、どうもわたしのがっかり感はいぶ表に出ってしまったみたいだ。

「・・・ともえ、かわくんだり、やりたい？」

となりになんたくくびわちやんが声をかけてくる。いつもの通り感情が読めない声だけれど、なんとなく、気を遣ってくれているのがわかるような声色だった。

「あはは、そうだね。せつかくなら、やってみたかったかな。」

素直に言葉を返すのだけど、そうは言っても、川のないところで川下りなんてできるはずもない。残念だけど、あきらめるほかないでしょう。

そう思うのだけれど、くびわちやんはくいくい、とわたしのシャツの裾を引っ張って、
「・・・っち。」

と小さく言って歩き出した。

走り続けるフレンズたちは、その順位を変えることなく、またペースを乱すこともなく、余力を残したまま折り返し地点である湖の岸边に差し掛かっていた。

「へへっ、みずうみ、いちばんのりだぜ！」

先頭を走るロードランナーは湖がその視界に入るとともにペースを上げた。

「ロードランナーさん！ そんなにいそいだら、あぶないですよ！」

すぐ後方でそのペースアップを見たイエイエヌが声を上げる。その発言は勿論駆け引き等ではなく、純粹な心配から来るものだ。

折り返し地点、と云うことは即ち、ターンを必要とされる。湖の岸辺、といつてもその造形は切り立った崖のようになっていゝ。然程高さはないものの、落ちれば大幅なタイムロスになる。

そして、今ここで敢えてペースを上げるとは、湖に落ちるリスクをわざわざ迎へ入れるようなものだ。

そのイエイヌの考えは間違つていない。しかし、ことフレンズに於いてその限りではない。

そして、ペースを上げる者がもうひとり。

「させないわー！」

後方から聞こえた声にイエイヌが反応する間もなく、その横を一陣の風が通り抜ける。

チーターだ。

前傾寄りの姿勢を更に前に傾けると、飛び出すようにイエイヌの横を駆け抜け、ロードランナーに並ぶ。

「つてめー！ あたしのいちばんのりー！ じゃますんじゃねーよー！」

「ふふんー！ これくらいおおめにみなさいよー！ いままでさきをゆずつてあげたんだからー！」

「ゆずってあげただあ？ やっぱおめー、あとでぶつとばす！」

「チーターさんまで！ あぶないですから！ すぴーど！ だしすぎですからー！」

その様子を後方から眺めるイエイヌは競り合うふたりに声を飛ばした。彼女自身は折り返しの準備として走るペースを緩めた為、最後尾にいたプロングホーンがすぐ隣にまで追いつく。

「いや、あいつらは、あれでいいんだよ。」

その、静かに発せられた言葉の意味を、イエイヌは直後に理解することになる。

「ふっふーん！ いっちばーん！」

高らかに発せられた宣言とともに、チーターの体が深く沈む。そして小さく飛び上がったかと思うと、身を翻し、地面に張り付いた。

鉾の如く地面に食い込むつま先と、そして両手を以て、地面に四つの直線を描く。

チーターはネコ科では唯一、爪を収納できない動物であるが、それ故、急な方向転換や瞬発力に優れる。

巻き起こる砂煙と急制動をもともせず、その体は崖の数センチ手前でぴたりと止まる。そして、そのクラウチングスタートのような体勢から、復路の先駆けとなるべく飛び出した。

「おっさきー！」

「くっそ！　まてこらあ！」

続くロードランナーは崖の数歩手前で膝を使い大きく飛び上がる。そのまま湖に飛び込む勢いであつたが、しかし。

これまで自由にしていた両手が大きく弧を描く。柏手でも打つかのような形だ。

一見して意味のない行動に見えるも、その両手が前方に出されると、鳥が羽ばたき急旋回をするのと同様に、その体は空中でぴたりと止まり、翻つて復路の地面へと降り立った。

そう、ロードランナーは鳥のフレンズである。飛ぶことは苦手な彼女であるが、空中での姿勢制御程度なら、この通り自在にこなせた。

湖から峡谷へと通り抜ける風を追い風にし、彼女はすぐさまチーターの後を追つた。

「わ、わふ・・・！　ふたりとも、すごいですう・・・！」

「ふふ。あいつらならではの、きりかえしだな。」

たつた今起きた出来事に目を丸くするイエイヌと、未だ余裕を崩さないプロングホン。ふたりもまた復路へと足を踏み入れる。

無理なく折り返すべくスピードは落ちていたが、体が完全に向き直り、視界の中心に遠く前方の背中を捉えると、ふたりの脚には往路以上の力が宿る。

「わたしたちもまけていられない。・・・イエイヌさん！　ペースをあげるぞー！」

「はい！ がんばりましょう！」

走力勝負に於いて、こうして大きく引き離されることは、ときにその力の発露を大きく損なわせる。離された差がそのまま重圧として、その身に押し掛かる為だ。

実力が競っている者同士の勝負であれば、それは尚更である。

しかし、

「わふ！ おいかけっこ！ たのしいです！」

「はは！ そうだな！ たのしいな！」

小さくなった背中を追いかけるふたりの顔からは、その重圧は一欠けらも感じ取れない。

くびわちゃんの後ろについていくと、看板の裏手にある岩壁に、ぼっかり空いている穴が見えた。

「ん？ あれって……、」

その穴は、おとなひとりがちょうど通れるくらいのもので、まるで岩壁に隠れるように存在していた。

「……このなかで、かわくんだり、できる。」

「そうなんだ！ くびわちゃん、やっぱりものしりだね！ 前に来たことあるの？」

くびわちゃんは、こくこく、と頷く。

その頭越しに穴の中を覗き込むと、中は洞窟みたいになっていて、なんだかひんやりしてそんな空気を感じた。

「なんだかこれ、ひみつきち、みたいだね。なんで見つけにくくなってるのかな？」
頭に浮かんだ疑問をそのまま口にする。

看板の前からだど、せり出した手前の岩壁に遮られて、まったくその存在に気づけなかったくらいだし。

わざと入り口を見えにくく作ってるようにしか思えなかった。

「・・・あとらくしよんは、ぱーくのせいたいけい、かえないようにつくられてる。」

「パークの、生態系?」

わたしのオウム返しに、またくびわちゃんは、こくこく、と頷く。

「・・・いりぐち、みつけやすいと、ふれんずが、まよいこむから。」

「ああ、そっか。」

なるほど、と思う。

「だから洞窟の中、なんだね。」

「・・・そう。」

くびわちゃんはみたび、こくこくと頷いてくれた。

川下り体験、なんて明らかにヒト向けのアトラクション施設を作るのに、パークの生態系を変えないようにしようとしたら、まず地表には作れない。

だから地中につくる、というのは、とても自然な考えに思えるのだけど、でも、なんで川下り、なんだろう？

こうやにつくるなら、もつと違う感じのも、あると思うんだけど。

「……ここは、ちかすいみやくをりようした、あとらくしよん。」

アトラクションのせんでいりゆうに、なんとなく違和感を感じていると、まるでその考えを読んだかのように、くびわちゃんが説明をしてくれた。

「……ひよつとしてあたし、考えがものすつごい顔に出やすいのかな？」

「そうなんだ。それって、むかしはこのきょうこくを作った川だった、とか？」
気恥ずかしい気分をごまかすように質問をすると、くびわちゃんはまたこくこくと頷く。

「……そうだとおもう。いまもずつと、ちかをながれてる。」

「へー！ すつごいね！ 見てみたいかも！」

「……はいつてみる？」

「うん！ でも、みんなが帰ってきたら、かな？」

そう言つて、きょうこくの入り口まで戻ろうとしたわたしは、

「・・・ともえ、まっつて。」

けれど、シャツの裾を引っ張られて、足を止めた。

フレンズたちは走り続ける。

復路もその半分以上を過ぎ、終盤に差し掛かかっていた。

「へえ、へえ・・・、へへっ、おめー、そろそろバテてきたんじやねーか？」

「はあ、はあ、そういう、あんたこそ、いきが、あらいわよ？」

前に行くのはロードランナーとチーター。見事な切り返して大きくリードしたふたりであるが、その息は荒く、ここへ来てペースを大きく落としていた。

「はふ、はふ、ちよつとずつ、さが、ちぢまっつてきましたあ。」

「そうだな。そろそろつかれてくるころあいだろう。」

後方を走るイエイヌもまた、息も絶え絶え、と云った様子であるが、唯一プロングホーの呼吸だけが、一切乱れていない。

プロングホーンはけして足の速さだけに優れた動物ではない。自動車に並走する程の速度で長距離を移動できる持久力こそが、その真価と言えるだろう。

「では、そろそろほんきではしろうか。」

その声は静かなものだったが、びりびりと肌を震わせるような迫力を、イエイヌは感

じた。

そしてその声を機に、復路に入つてこれまでの間ずっと隣を走っていたプロングホーンの姿が、少しずつ前方へと離れていく。

けしてイエイヌがペースを落としたわけではない。これまでと同様に、往路以上のハイペースで走っている。

しかし、一步、また一步と足を進める度、その差は大きく広がっていく。

「わ、わふ、ぷろんぐ、ほーんさん、はふ、はやい、はやいですう！ すごいですう！」
気づけば、イエイヌから見えるプロングホーンの背中中は、チーターたちと同じ大きさにまで縮まっていた。

「はあ……、つく、やつぱりきたわね？ プロングホーンー！」

「へえ、へえ……ぐえほ！ さ、さすがです……！ プロングホーンさまあ……！」
前を行くふたりは気配だけでそれを察知してか、振り返ることもなく声を上げる。未だ勝負の途中であり、振り返る余裕などありはしない。

そして加えて言うのであれば、既にふたりに、プロングホーンのペースアップについていくだけの余力は残されていなかった。

「すまないな。さきにかせてもらおう。ふたりとも、いいはしりだったぞ。」

その、淡々と事実を告げるような声色は、ともすれば非情にも聞こえるものだ。

しかし、走ることを愛する者、走ることに矜持を持つ者にとつて、それは紛れもなく、心を揺さぶる賛辞であつた。

ぐん、と見えない何かに引つ張られるように、プロングホーンの体がふたりの前に出る。そして見る間にその背中は離れていった。

「はあ、はあ、やつぱり、ながいきよりだと、こうなつちやうわよね。」

「へえ、へえ、なんだ？　もう、まけおしみかよ。」

「そうじゃ、なくて、あたしも、もつと、ながいきより、はしれるように、ならないとつて。」

「へつ、へへつ、ちげーねえ。．．．ぐえほ！　ぐおほ！」

「わ、わふ。ろーど、らんなーさん、だいじようぶ、ですかあ？」

横から聞こえた声に、呼吸を荒くしながら会話をしていたふたりは視線を向ける。ひとり最後尾にいたイエイヌが、すぐ隣にまで追いついていた。

「はあ、はあ、あなたも、おいついて、きたのね？　すごいじゃない。」

「へえ、へえ、そーいう、おめーも、だいぶ、げんかい、そーだな。」

「はふ、は、はい。でも、たのしい、ですからあ。」

「はあ、はあ、そのとおり、ね。きついけど、たのしいわね！」

「へへつ、だな！」

プロングホーンとの差は然としてあり、既に首位は決まっていると行って良いだろう。しかし、彼女たちにとって、それは走ることを止める理由にはならない。

彼女たちにとって走ることは、ただそれだけで幸せなのだ。

けれど、

「はふ、はふ、．．．くうん? ．．．はふっ!」

そんな幸せな時間は、唐突に終わりを迎える。

「ふたりとも! きをつけて、ください!」

「へえ、へえ、なんだあ? どうか、したかよ。」

先程までと様子が違うイエイエに、ロードランナーもチーターも怪訝そうな顔だったが、

「はあ、はあ、いきなり、どうしたの? なにか、あつ．．．っ!」

イエイエから少し遅れてチーターが気づく。匂いに敏感でないロードランナーだけが、不思議そうな顔でふたりを見ていた。

「このさきに、セルリアンがいます!」

――

ずしん、と地面が揺れる感触が足裏から伝わってくる。

バランスを崩して倒れそうになるけど、なんとか持ちこたえる。

再び舞い上がった砂けむりに、思わず目をつむりそうになるけど、今それをしてしまうと危険な気がして、なんとかかうす目を開けてその中に見える大きな影を睨んだ。

さつきまで何もなかったはずのきょうこくの入り口に見える、大きな影。

たぶん、岩山の上から飛び降りてきたのだろう。そういえば、そうげんで出会ったものと同じくらい大きな、セルリアンだった。

「……ともえ、いまのうちに、こつち。」

わたしのシャツの裾をつかんだまま、くびわちゃんと言う。

砂の中の大きな影は、ふらふらと揺れているだけで何もしてこない。どうも、自分でまき上げた砂のせいでこつちを見失っているみたいだ。

くびわちゃんの顔をまっすぐに見返して、わたしは、こくり、頷いた。

なるべく足音を立てないように歩いて、洞窟の中に入る。入り口のそばで外の様子をうかがうと、ようやく砂けむりが収まってきたところだった。

セルリアンはふらふらと揺れながら、あたりを見回している。たぶん、あたしたちを探してるのだろう。

その様子に背筋がぶるりと震えるけれど、洞窟の入り口はあのセルリアンが入れるほど広くないから、この中に隠れていけばひとまずは安全だろうか。

もちろん、近くで暴れられでもしたら、ひよつとしたらこの洞窟が崩れてしまうかも

しれないし、絶対に見つからないようにしないと、だけど。

そう思っつて、洞窟のもう少し奥の方に進もうとしたときだった。

「ふたりとも！ ぶじか!？」

大きな声が聞こえて、わたしはセルリアンとは反対の方向を見る。

プロングホーンちゃんがものすごいスピードでこっちに走ってくるのが見えた。

ついさつきスタートしたばかりのように思うけど、いったいどれだけの速さで走ってきたのか、もうこんなところまで・・・、

なんて、そんなことを考えられる余裕は、とうぜん、ない。

「プロングホーンちゃん！ こっちに来ちゃダメ！」

わたしは思わず、大きな声で呼びかけてしまった。

それはもちろん、やってはいけないことだった。

ぎろり、

セルリアンの大きな目が、洞窟の入り口から身を乗り出すようにしてしまったわたしの姿をとらえる。

セルリアンはその大きな体をひるがえして、まっすぐにこっちに向かってきた。体当たりでもするつもりだろうか、そのスピードはとても速い。

わたしはあわてて洞窟の中に隠れようとするのだけど、

「っ！．．．、いったあ．．．。」

足がもつれてしまい、その場で尻もちをついてしまった。

お尻の痛みにつむき、顔をしかめて、再び顔を上げたときには、セルリアンはもうすぐそこまで迫ってきていた。

「ひっ．．．！」

見上げるような形で、その大きな目と、目が合い、小さなひめいがもれる。

その瞬間、

「どおおおりやああああっ!!」

迫力あるおたけびとともに、セルリアンの体がふつとんだ。

一瞬、何が起きたかわからなかったけど、セルリアンともつれるように飛んでいくプログラミングホーンちゃんが見えて、理解する。

走ってきた勢いをそのままに、セルリアンに体当たりしたのだ。

「プログラミングホーンちゃん！」

ずしん、と再び地面が揺れる。さつきよりも揺れは大きい。

プログラミングホーンちゃんの体当たりで進行方向を逸らされたセルリアンが、そのまま岩壁に衝突してみたかった。

——そして、

ばらばらと上から砂や小石が落ちてくるけど、気にしてられない。

「助けなきゃー！」

「……っ、ともえ。だめ……！」

うしろから聞こえるくびわちちゃんの制止をふりきり、洞窟の外へ駆け出す。目に映るのは、セルリアンのすぐ近くで倒れているプロングホーンちゃん。

プロングホーンちゃんは体当たりの勢いそのままに、セルリアンと同様、その体を岩壁に打ち付けてしまっていた。

あんな勢いで壁にぶつかつたら、どんなことになるのか。

その疑問の答えとでもいうかのように、プロングホーンちゃんの体は、さつきからひとつも動いていない。

気絶してしまっているのか、それとも……。

……ううん、そんなこと、ありえない！

頭をよぎる不安を、すぐさま自分で否定する。

「はあっ、はあっ……！」

急に走り出したせいかわたしの息は荒く、胸のどきどきはうるさいくらいだ。

勢いを緩めずに倒れているプロングホーンちゃんのところへすべり込む。少し足を擦りむいちゃったけど、そんなのはまったく気にならない。

おねがい・・・！

どうか無事で・・・！

祈りながら、わたしはプロングホーンちゃんの体に、両手で抱え込むように触れた。

「はあ、はあ、はあ・・・、よ、よかった。いき、してる。」

遠目にはわからなかったけど、プロングホーンちゃんはちゃんと息をしていた。

長い距離を走った後だからか、わたしと同じように荒い息だったけど、呼吸とともに上下に動く体は、たしかに触れている手を押し返してくる。

ほっと息をつくけれど、まだぜんぜん、安心できる状況じゃないことを思い出す。

セルリアンが起き上がってくる前に、プロングホーンちゃんを連れて逃げないと。

「よっ・・・と、」

倒れているプロングホーンちゃんの腕を取り、頭の後ろに回して持ち上げる。ちょうど、肩を貸すような形。

相手が脱力している状態だからか、ものすごく重く感じる。

歩き出すと、どうしてもプロングホーンちゃんの足を引きずるようになってしまう。

申し訳なく思うけれど、ひりきなわたしにはこの運び方がげんか이었다。

ちからを込める足が震える。息も荒いままだ。

それでも、一歩ずつ確かめるように、地面のでこぼこに注意しながら歩く。

「……ともえ。」

聞こえた声に顔を上げると、くびわちゃんがいつの間にか近くまで来ていた。

かけあしで来てくれたのだろう、その顔は少し赤くて、吐く息の音もいつもより大きい。

「……ぼくも、てつだう。」

そう言つて、くびわちゃんはプロングホーンちゃんの腰の所にひつつくようにして、その体を持ち上げてくれた。

くびわちゃんのちからは、へたしたらわたしよりも弱くて、肩にかかるプロングホーンちゃんの重さはまったくといって変わらない。

でも、

「はあ、はあ、くびわ、ちゃん。あり、がと。」

手伝つてくれるというその気持ちは、それだけでうれしい。

「ともえちゃん！ くびわちゃん！ だいじょうぶですか!？」

遠くから聞こえてきたのはイエイヌちゃんの声。その方向に顔を向けると、こつちに走ってくるイエイヌちゃんと、すぐ後ろを走るロードランナーちゃんとチーターちゃんが見えた。

「プロングホーンさまあー！ ぶじですかあ!？」

「みんなー！　へいきー!？」

次々に声が上がるけれど、大声で答えるよゆうがなくて、とにかくぶんぶんと頭をタテに振った。

よかつた。みんなも無事、みたいだね。

いっぱい走って疲れてるだろうに、心配して急いで来てくれたのだろうか。

プロングホーンちゃんもそうだし、くびわちゃんもだけど、本当にすてきな子たちだ。胸にじんわりと温かいものを感じながら、わたしたちは足を進める。

急がなければいけない。

さつきから、ずっと、と何かを引きずるような音が、後ろから聞こえているのだからでも、足はなまりみたいに重くて、ぜんぜんいうことを聞いてくれない。

急がないといけないのに、気持ちばかりが前に行ってしまうと、体がついてこない。

ふと、気づいた時には、大きな影がわたしたちをすっぽりと覆っていた。

思わず、足を止めて振り返ってしまう。

立ち止まったわたしたちを、セルリアンの大きな目が見下ろしていた。

「ともえちゃん！　にげて！」

遠くから、ひめいみたいなイエイ又ちゃんの声が聞こえる。

けれど、

逃げるのはどうも間に合いそうにないみたい。

視界の上の方に、セルリアンがその触手を大きく振りかぶるのが見える。

その光景に、わたしはそうげんでのことを思い出して、

とつさにプロングホーンちゃんと、くびわちゃんの体を抱き寄せた。

セルリアンに背を向けて、ふたりをかばうような形で。

その行動に、たしかな理由はなかったと思う。

あたしはあんまりかしこくないから、考えるより先に体が動いてしまった。

けれど動いた後で、それを後悔するような気持ちにはならない。

ひよつとすると、あたしはこれでおしまいになつちやうかもだけど、

でも、

それでも、

『——え。どうしたらいいか迷ったらね？ まず、自分が今何をしたいか、考えるの。』

ふと、そんなことを、昔だれかに教えてもらったのを思い出す。

『自分がやりたいと思うこと、それを考えて、やってみるの。』

この声の主は、だれだったか。

記憶にもやががかったみたいで、その答えはわからない。

たぶん、とても、大切な人だったと思うのだけど。

びゆうん、と風を切るような音が聞こえる。

振り返らなくても、うしろでセルリアンが触手を振り下ろしたのがわかる。

ああ、この音、すつごく痛そうだなあ。

できれば、ぶつかる前にやめてほしいけど。

できれば、そのまま何もしないで、いなくなつてほしいけど。

そんなことをお願いしても、たぶん、きいてくれないよね？

だから、わたしは目をつぶつて覚悟を決める。

目をつぶる直前、遠くに見えた、イエイヌちゃんの泣きそうな顔に、

心の中はごめんなさいという気持ちでいっぱいになるけど、

でも、

それでも、

ふたりを助けない。

それがあたしが今やりたいことだった。

ちよつとむずかしいはなしをしよう。

生き物が生命の危険を感じたとき、時間の流れを遅く感じることがあるという。

視覚から色が遮断され、触覚や嗅覚、聴覚や味覚が鈍化し、脳が一度に処理する量を

少なくすることで、生き残るために必要な視覚情報を高速で処理する。

その為に、普段感じているものより、何分の一、何十分の一速度で、時間が流れているように見える。

言い換えると、意識が加速する、のだそうだ。

そんな、どこかで聞いたことがあるまゆつばな話を、正直なところ、わたしはあまり信じていなかった。

けれど、実際にその場面に直面してみると、どうも本当らしい、と思ってしまった。目をぎゅつとつぶったまま、わたしは衝撃が来るのを待っていたのだけど、いつまで経ってもそれはやってこなかった。

ああ、これがそうなのか、と思う。

今は目をつむっているから、ひよつとしたら意識だけが加速しているのかもしれない。

そのしように、こうしてしよっかくやきゅうかくは……、

「……あれ？」

抱き寄せているプロングホーンちゃんや、くびわちちゃんの体の感触は、ある。

顔を埋めるくらい近くにいるから、とうぜん、匂いもする。

音だって普通に聞こえるし、さつき食べたジャパリまんの後味も口の中に残ったまま

だ。

「・・・ともえ、くすぐつたい。」

ぼそり、くびわちゃんの声が聞こえて、わたしは目を開けた。

感触を確かめようと手をもぞもぞさせてしまったせいか、くびわちゃんは、ひなんの目でこつちを見ていた。

「ご、ごめん！　へんなどこ、さわってないよね!?　だいじょうぶ?」

「・・・へいき。」

状況はさっぱりわからないけれど、とにかく動かしていた手を離してくびわちゃんに謝る。

くびわちゃんはまたぼそりと答えて、照れたように口元をぶかぶかの首輪に埋めた。

・・・ええと、つまり、どういうこと?

「ともえちゃん！　くびわちゃん！　だいじょうぶですか!?　いたいとこ、ないですか!?」

「プロングホーンさまあ！　おけがは、ありませんかあ！　へんじをしてくださいよお！」

「ちよつとロードランナー！　あんまりうごかしちゃだめよ！　あたま、うつてるかもしれないんだから！」

気づけばイエイ又ちゃんたちもわたしたちの体にひつついていて、まるでおだんごみたいになっていた。みんな、そろって心配そうな顔だ。

「あたしも、くびわちゃんも、だいじよぶ。プロングホーンちゃんも、たぶん気絶してるだけだと思う。」

あいかわらなずちんぷんかんぷんなままだったけど、とりあえず状況を伝えると、みんなは少しほつとしたみたい。

緊張の糸が切れたのか、そろってその場にへたり込んだ。

「よかったですう．．．、いちじは、どうなることかと。」

すっかり安心してこちらを見上げるイエイ又ちゃんに、ますます状況がわからなくなる。

だって、今もあたしたちのうしろには．．．、

．．．えっ？

振り返ってうしろを見ると、近くにいた筈のセルリアンの姿はそこにはなくて、代わりに、ずらず、と引きずるような音がきょうこくの入り口の方から聞こえてくる。

「えっと、どういうこと？ セルリアンは？」

「なんだかよくわからないけど、むこうにいつちやつたわ？ あなたがなにか、したんじゃないの？」

「ええ!？」

びつくりしてプロングホーンちゃんの体を離してしまいそうになる。となりにいたくびわちゃんがあわてて支えてくれたけれど、ちからが足りなかったみたい。

「つてめ! あぶねーだろーが!」

そのままずるずる倒れそうになるわたしたちを、飛び起きたロードランナーちゃんが抱き留めてくれた。

「ごめん! そんなつもりじゃなくて!」

「びい!・・・っ! るっせーなこらあ! みもとでおおごえ、だすんじゃねーよ!」
「ご、ごめん!・・・。」

思わず大声を出してしまったわたしに、ロードランナーちゃんはひなんの声を上げる。

その声はもちろん、いつもの感じでひじょうにやかましくて、耳がキーンつてなった。
・・・ええと、

これはたぶん、つつこんじゃだめなタイミングだよね?

なんて、くだらないことを考えていると、ロードランナーちゃんが耳打ちするように顔を近づけてくる。

「つたく、ほそっこいのとちんまいのとで、ちからもねーくせに、むりすんじゃねーつつ

の。」

そして、わたしとくびわちゃんにだけ聞こえるような小さな声で、言葉が続けた。「・・・でも、あんがとな。プロングホーンさまを、たすけてくれて。」

その顔は、たぶん、出会ってからはじめに見るもので、

見ているこつちがありがとうと言いたくなるくらい、深い感謝があふれていた。

――

それからしばらくして、プロングホーンちゃんは目を覚ました。

けがとかしてないか聞いたのだけど、どこも痛いとはなかったみたい。

さすがフレンズさん。あたしなんかとちがって、とつても体が丈夫だ。

そのあと、わたしはあらためてセルリアンから守ってくれたことのお礼を言ったのだけど、その後のてんまつを聞いたプロングホーンちゃんからとても感謝をされてしまった、くびわちゃんともども、逆に何度もお礼を返されてしまった。

わたしは、何もしてないし、運よくセルリアンがいなくならなかったら、どうなっていたかわからない、なんてことを言ったのだけど、プロングホーンちゃんは「けんそんなどしなくていい」と、何度も何度も深々としたおじぎとともに感謝の言葉をかけてくれた。

けんそんなかじゃなくて、ホントにじじつなんだけど・・・。

そう。じじつ、なんだよね。

事実、セルリアンは何故だかわたしたちをおそうことなく、どこかへ行ってしまった。それを運のひとことで済ませていいかはわからないけれど、どうしてそんなことが起こったのか、まったくわからない以上、運というほかにないだろう。

あのとき、何を思ってたしたちをおそわなかつたのか。

そもそもセルリアンに、あの無機質な感じのするものに、意志はあるのか。

声だつて出さないし、こつちの声も、物音として認識してるだけのようない気がするし。ひよつとしてこつちの考えが読めたり、とか？

・・・ううん、まさかね。

あのとき、まさにおそれそうになつていたときに考えていたことを思い返して、ひよつとしたら、なんてことを思うけれど、すぐにその考えを否定した。

そんなご都合、あるわけないでしょ。

こつちの夕焼けは、さすがに絵になる姿だった。

赤茶色の地面や岩肌がますます赤く染まって、あちこちにルビーがちりばめられたようなきらきらした世界の中で、わたしはスケッチブックを取り出した。

5ページ目になるそこには、赤く染まるこつちの中で楽しそうにかけっこをする、ロードランナーちゃん、プロングホーンちゃん、チーターちゃん、イエイヌちゃんのよ

にんと、それをにこにこと眺めるわたしとくびわちゃんを描いた。

そうこうしてる内に日が落ちて、わたしたちはあの洞窟で一晩を明かすことにした。野宿なのはあいかわらずだけど、ちよつと狭くて天井があるだけで、なんだか落ち着く感じがした。

おかげで昨日までよりもつとずつと、ぐつすり眠ることができた。

そして、翌朝。

「もう、いつちやうの？ かわくだり、せつかくみつ付けてくれたのに。まだあそんでないわよ？ そんなにいそぐたびでもないんでしょう？」

「あはは、うん。ありがと。でも、そろそろいかなないと。」

チーターちゃんのお誘いを、やんわりことわる。

しようじきに言うのと、すつごいやってみたかったんだけどね。川下り。

でも、くびわちゃんいわく川下りの終着点はみずうみらしいから、わたしの足だところまで戻ってくるのに、すごく時間かかっちゃいそうだし。

それに、あんまり遊んでばかりだと、いつまで経ってもイエイヌちゃんのおうちに、たどり着けなさそうだしさ。

「またいつでもくるといい。そのときは、いつしよにかわくだりしよう。」

「そうね。またきたら、こんどはいつしよにあそびましょう？」

「うん！　こんどは一緒に遊ぼうね！　約束だよ！」

「わふ！　わたしはまた、かけっこしたいです！」

「はは、もちろんだ。またいつしよにはしろう。」

わたしたちは別れを惜しみながらも、つぎの約束をする。

それはなんだか、とつてもすてきなことのように思えた。

そして、もうひとり。

「へっ、くちのわりーちっこいのが、よーやくいなくなるかとおもーと、せーせーすらあ。」

昨日、ちよつとだけ素直な顔を見せてくれたロードランナーちゃんは、またいつもの調子に戻っていた。

「・・・それは、こつちのせりふ。」

うりことばにかいことば、みたいな感じで、くびわちゃんが言葉を返す。

ふたりとも、あいかわらずだ。

でも、気のせいかもしれないけど、なんだか昨日より、ふたりの表情はやわらかい気がする。

ひよつとして・・・とあわい期待をいだきながら、わたしはふたりの様子を見守る。となりにいるイエイヌちゃんも、プロングホーンちゃんたちも、たぶん同じように

思っているのだろう。みんな、会話を止めて、視線をふたりに向けていた。

「あのさ……、その、おまえよお。」

まるで気恥ずかしさをごまかすように頭のうしろをぼりぼりとかきながら、ロードランナーちゃんは声をかけて、そしてまっすぐにくびわちちゃんの顔を見る。

「……？」

くびわちちゃんはいつもの感情の読めない表情のまま、その顔を見返す。

ふたりはそのまま、しばらくの間だまって見つめ合っていたのだけど、

「……っ、なんでもねーよー！」

ロードランナーちゃんがぶつきらぼうに言いながら、顔をそむけてしまった。

そして、そのまま頭の羽をはためかせ、飛び上がる。

「へんっ！ とつとどどこへでもいきやがれてんだ！ あばよおっ！」

うみべで出会ったときみたいなのに、今度も捨て台詞のようにそう言つて、ロードランナーちゃんはどこかへ飛んで行ってしまった。

「……うーん。ダメだったか。」

ちゃんと仲直り、できそうな気がしたんだけどな。

そんなことを思いながら、わたしは残されたくびわちちゃんを見るのだけど、

その姿に、なんとというか、

言葉にしなくても伝わるものもあるのだな、と、ちよつとおませなことを考えてしまう。

くびわちゃんも小さくなつていくロードランナーちゃんの背中に向けて、バイバイと小さく手を振っていた。

「・・・またね。ろーど、らんなー。」

その、ぽつりと眩いた言葉が示すとおり、

ふたりはあれで、じゆうぶん仲直りできてみたい。

あはは。

ホント、素直じゃないなあ。

ふたりとも。

ともえたちが旅立って暫くの後、荒野にはふたりのフレンズの姿があった。

チーターとプロングホーンだ。

「それにしても、めずらしいものばかりだったわね？ フレンズをおそわないセルリ

アンもそうだけど、あたし、あんなにすなおなロードランナーなんて、はじめてみたわ

？」

「そうだな。それだけでも、たびのせいかはあったのだとおもうよ。」

遠い目をするプロングホーンの脳裏には、今朝、ともえたちの居る洞窟に向かう途中で、ロードランナーが見せた姿が浮かび上がる。

その姿は、恐らく誰よりもロードランナーとの付き合いが長い彼女でさえ、これまで見ることのなかったものだった。

いや、誰よりも付き合いが長いからこそ、と言うべきか。

それ故、常日頃の自分以外に対するロードランナーの粗野な振る舞いに、プロングホーンは心を痛めていた。

プロングホーンはこれまで、その事についてチーターに相談を持ち掛けたことはない。弱っているところを見せられない草食動物の気質が、そうさせていた。

普段の仰々しい物言いですら、その弱さを隠すための意味合いが強い。

「また、ふたりになっちゃったけど、でも、あなたもすこし、ほっとしたんじゃない？」
けれど、チーターの言葉は、そんなプロングホーンの悩みを、悩みだったものを、そのままに理解しているが故に出てきたものだった。

言葉に出さずとも、案外伝わってしまうものなのだ、と、プロングホーンは苦笑する。

「はは、まあ、ほっとしたのと、ちよつときみしいきぶんと、りようほうかな。」

「あらー！ めずらしいものがもうひとつふえたわ!? うふふー！」

「いつてくれるなよ。じぶんがすなおじゃないことくらい、わたしがいちばんよくわかっているさ。」

そう言つて、プロングホーンは密林へと向かう道の先を眺める。

「よかつたなあ、ロードランナー。ちゃんと、ともだち、できたじゃないか。」

巣立つ子を見送る父のような声で、プロングホーンは呟いた。

――

――

――

ここは、ジャパリパーク。

今日もたくさんさんのフレンズさんたちが、のんびり幸せに暮らしています。

お日様にきらきら輝く波間を、

フレンズさんを乗せたボートが走っていました。

「はやい！ はやすぎます！ すごくいです！」

「おぉー、すごいねー。」

うふふ。

ふたりは初めて乗るボートに興味しんしんみたい。

ボートの縁につかまって、キラキラした目で海を眺めてちやつてる。

でもセンちゃん、あんまり身を乗り出したら、危ないわよ？

「おみずが！ おみずがいっぱいとんできます！ あはは！」

「センちゃん。たのしいのはわかるけどー、もうちよつとからだをこっちにー。」

「あはは！ あはは！ たのしいです！ たのしいです！ あはは・・・、うわあつ！」

「センちゃん!?!」

まあ、たいへん！

ボートが波に乗り上げた勢いで、センちゃんが海に落ちちやつた！

「きゆうー！ まかせて！」

でもでも大丈夫。

ボートの横を泳いでいたドルカちゃんがセンちゃんを抱えてジャンプ！

ちゃんとボートに戻ってくる事ができました。

「けほ、けほ、けふ・・・はあ、はあ、」

「もー、だからいったのにー。たのしいからって、あんまりみをのりだしちやだめだつてー。」

「ご、ごじようだんを、アルマーさん・・・、けほ。これは、ごほ、このボートのあんぜんせいを、げほ、たしかめたにすぎません・・・。」

「そーなんだー。」

「そうです……。でも、あぶないから、もうちよつとてまえで、うみをみましょう……。」
「そーだねー。」

センちゃんは海に落ちちゃって、ちよつと怖くなっちゃったみたい。

ボートの縁からだいぶ後ろでおっかなびつくり海を見る。

最初からそうすれば良かったのにね？

あんまりアルマーちゃんに心配かけちゃ、ダメよ？

「そーいえばー。このボートをなおしてくれたのつてー。」

「ともえちゃんのここと？」

「そうそう、その、ともえちゃんって、なんのフレンズなのー？」

「きゆう？ たしか、ヒトっていつてたよ？」

「そっかー。ヒトかー。」

「ヒト!? ヒトといいましたか!？」

あらあら、センちゃん。

そんなにびつくりして、どうしたの？

「こうしてはいられませんか！ アルマーさん！ はやくいきましよう！」

「いくつていつてもー。ここ、うみのうえだからー。」

「なら、およいでいきましよう！ はやくおいかけなくては！」

「わたしたち、およげないよねー？」

「そ、それは！・・・なら！ はまべをあるいて！」

「あるいていくよりボートのほうがはやいんだからー、きらくにいこーよー。」

「ぐにゆにゆ・・・！」

そうそう、アルマーちゃんの言う通りよ？

あの子が動くようにしたボートは、とっても速いんだから。

「しかたありません！ もっとその、ともえさんのこと、おしえてください！」

「きゆう！ いいよ！ なにからはなす？」

「まずはそのかたのこうぶつを！」

「センちゃん、そのしつもん、なんのいみがあるのー？」

ああ、よかった。

無茶はしなくて済んだみたい。

ふたりのフレンズさんたちの、楽しい旅は続きます。

――

――

――

幕間く対岸にてく

対岸に着き、ふたりのフレンズたちを見送ったドルカとフォルカは、荒野へと続く道を眺めている。

「あのこたち、いつちやったね！」

「そうねえ。急いでたみたいだけど、あの子に無事会えるかしら？」

ふたりのフレンズの道中を案じるフォルカに、ドルカは「そういえば、」と前置きをして話しかける。

「フォルカちゃん、さいしょ、ともえちゃんみて、びつくりしてたよね？」

「あら？ わかつちやった？ うまく誤魔化せたと思ったんだけど・・・。」

「わかるよ！ ずっといつしよにいるもん！」

「うふふ。そうね。確かにちよつと、びつくりしたかも。勘違いしちゃって。」

と、フォルカは苦笑ぎみの顔を見せる。対するドルカは、不思議そうな顔をしている。

「かんちがい？」

「えつと、前に見た見たヒトの子と同じ子だと思ったんだけど、違ったみたい。」

フォルカは「それもそうよね、」と言葉を区切り、苦笑交じりにその先を続けた。

「だって、ヒトがそんなに長く生きられるはずないもの。」

けものフレンズR くびわちほー 第05話「かぞくのきずな（前編）」アバン・Aパート

「わあ……！ すっごい、きがいつぱいだね！」

みつりんの手前までやってきたわたしが、まず口にしたのはそんな感想だった。

あいかわらず、ごいがたりない、と思うけれど、視界をぜんぶ覆うくらいに密集して生えた木々を見て、それ以外に感想がうかばなかった。

そうげんやこうやでまばらに生えていた木とも、ちくりんの竹ともまるで違う、表面にツタやコケがまとわりついている木々が、スキマを探す方が大変つてくらい密に生えている。

こうやからてくてく歩いてきた道だけがみつりんの中に続いているけれど、その道もなんだかうっそうとしていた。

まさしく、みつりん、って感じ。

「なんだか、むこうのくうきはしつとりしてますねえ。ひんやりしててきもちいいですう。」

くんくん、と匂いをかいでいたイエイヌちゃんは、なんだかちよつとうれしそうな顔

だ。

やっぱり、おはながしつとりするのが好きなのかな？ イエイヌのフレンズだし。そんなことを考えながら、わたしは前に出て、みつりんとこうやの間、ちょうどさかじめのところを横を向いて立ってみる。

右半身はみつりに、左半身はこうやに、といった感じだ。

「ほんとだ！ こつちとそつちで、空気がぜんぜん違う！ なんだかおもしろいね！」
右はひんやりしつとり、左はあつあつからつと、まるで右と左でぜんぜん別の場所にいるみたいな感触がとても面白い。

「わふー！ほんとですね！ おもしろいです！」

ぱたぱたとかけてきたイエイヌちゃんも、わたしのとなりで同じように横を向いてその空気の違いを体験していた。

テンションが上がったのか、ぴよんぴよん飛び跳ねるのがすつごいかわいい。

「・・・りんせつする、ちほーのきこうが、おおきくことなるばあい、ちほーのさかいめが、こうしてはつきりわかる。」

ととて近づいてきたくびわちゃんは、やっぱりこのことも知ってたみたいで、いつものように説明してくれた。

うーん。やっぱりくびわちゃんは物知りだなあ。

「へー。なんだか不思議だね。これもサンドスターのちから、なんだっけ?」

わたしが感心しながら聞き返すと、くびわちゃんは、こくこく、と頷いてくれた。

「・・・さんどすたーは、どうぶつをふれんずにする、だけじゃなくて、ちほーのきこうをへんかさせる。こうやと、みつりん。まったくちがうきこうが、となりあうことがで
きるのも、さんどすたーのおかげ。」

「すっごいね、サンドスターって。どうやって生まれたの? ヒトが作ったの?」

あいかわらずくわしい説明をしてくれるくびわちゃんに、思いついた質問を投げ
てみる。

もしかしたらくびわちゃんなら知ってるかな、なんて思っ
て聞いてみたのだけど、

「・・・さんどすたーは、ぱーくで、はっけんされただけ。ぱーくで、かざんがふんかす
るとき、さんどすたーがうまれる。けど、どうしてうまれるのかは、わかってない。」

「そうなんだ。ありがと、くびわちゃん。」

ふるふると首を振って、それでも知ってる範囲で答えてくれたくびわちゃんに、素直
にお礼を言う。

すっごい物知りなくびわちゃんだけど、やっぱり知らないことはあるみたい。

みつりんの中は、外から見えたとおり、とてもうす暗い感じだった。お日様が
ぼつてる時間なのに、まるで明け方くらいの明るさだ。

「それにしても、ほんと木がいつばいだね。こうやからちよつと歩いただけなのに、ぜんぜん別のとこみたい。」

「ですなえ。こうやとちがつて、あしもとも、ちよつとすべりやすいです。」

イエイヌちゃんの言う通り、歩いていると、ときおりするつと滑るような感覚がある。ついさつきまでの乾いた地面とはまるで違う感覚に、ついつい転んでしまいそうだ。

「・・・みつりんは、みつしゅうしたきぎで、ひのひかりが、さえぎられるから、じめんに、こけがよくはえる。」

見ると、たしかに地面のあちらこちらには緑色のコケが生えていた。

「そうなんだね！　じゃあ、気を付けて歩かないとだね！」

ちくりんとはまた違う天然トラップに気を引き締めながら、わたしがそう言ったときだった。

「にやはは、せやで？　そんなずかずかあるかんと、いちげんさんはもーちよい、おつかなびつくりあるかなあかんわ。」

その声は、上から聞こえてきた。

見上げると、近くの大きな木の枝に、フレンズさんがふたり、腰かけているのが見えた。ネコ科のフレンズさん、だろうか。チャーターちゃんにちよつと似てる感じ。

「よっ、と。」

そのフレンズさんたちは軽く体を揺らして、一気に地面まで飛び降りる。

わたしじやまず飛べる高さじゃなかったけど、そのフレンズさんたちにはなんともなかったみたい。音もなく着地して、こちらに話しかけてくる。

「いきなりすまんー。おはなしちゆうんとこ、わりこんでもーて。」

「あ、えっと、そんなことは、ないけど。」

とつさのことでうまく返答ができないでいると、フレンズさんたちはずんずんとつちに近づいてきた。

にまにまと懐っこい笑みを浮かべているんだけど、どこかふおんな感じがする、その表情。

なんというか、こちらがどういうものなのか、探っているような・・・。

「ウチらはここらをなわばりにしとるもんや。ほんで、いきなりついででかんにんやけど、」

フレンズさんは体を軽く曲げて、覗き込むような体勢になると、にやりと音が聞こえそうな顔でその先の言葉を続けた。

「ねーちゃんら、ちよーつとツラ、かしてくれへんか？」

けものフレンズR くびわちほー 第05話「かぞくのきずな (前編)」

ちよつとツラ貸しな。

なんて言葉がそのフレンズさんの口から出るのを聞いて、わたしは思わず耳を疑った。

フレンズさんの姿がちよつとチーターちゃんに似てて、かわいらしい感じだったのもあるけれど。それ以上に、そんな言葉をこの穏やかなジャパリパークでかけられるなんて、思ってもみなかったから。

ひよつとしたらわたしが考えてるのと、別の意味で言ってるのかな、なんてことを思ったくらいだ。

でも、その言葉にはたぶん、ちよつとついてこい、という意味以外に別の用法なんてなかったと思う。

よく、物語とかで、アウトローぎみな方たちが使うセリフだ。

もちろん、あんまりガラの良い表現じゃない。

「なんやけつたいなかおしとんなあ。こわがらんでええつて。ただちよつと、ツラかしてくるだけでええんやから。な？」

「えつと、あの・・・つ、」

ずんずんと近寄りながら話しかけてくるフレンズさんに、息をのんで後ずさる。

言葉がおつかないのと、それから、さつきフレンズさんが言ったことに、わたしはちよつと不安を感じていた。

さつき、フレンズさんは、なわばり、と言った。

それはつまり、わたしたちはそのなわばりに入ってきた侵入者ということに他ならぬい。

これまで会ったフレンズさんからは感じ取れなかったことだけど、フレンズさんのもとなつた野生動物は、基本的になわばり意識が強い。

自分の、あるいは自分たちのなわばりに入ったものに対して、非常に攻撃的になる。

野生のなわばり争いの苛烈さは、ヒトもよく知る所だ。

・・・ひよつとしたら、フレンズさんでも同じことがあるのだろうか？

そんな想像に、すごく悲しい気持ちになる。

——と、

ぎゅつと手が何かに包まれる感触。

見ると、そばにいたイエイヌちゃんかわたしの手を握ってくれていた。

「だいじょうぶですよ、ともえちゃん。てきい、ないとおもいます。」

「いや、そうは言っても・・・。」

少なくとも、あのフレンズさんの言葉を聞くぶんには、とてもそうは思えないだけ

ど。

「においが、こうげきてきではありませんし、きんちようしているだけのような。」

「へ？ 緊張？」

思わずオウム返しをする。

そんな気配、ぜんぜん感じなかったけど。わたしにはわからない何かで、イエイヌちゃんはそれを察したのだろうか？

そう思っつてフレンズさんたちの方を改めて見やると、ちようどこちらに近づいてきていた足が止まったところだった。

「ヒヨウねえさま。」

前を行くフレンズさんの肩をつかみ、もうひとりのフレンズさんが呼び止めていた。

ヒヨウねえさま、と呼ばれたフレンズさんはつかまれた肩越しに振り返り、にやりと笑う。

「なんやクロちゃん、ねーちゃんにまかせゆーたやろ。あんたはだまつとき。」

「まかせたけっかがこれでは、くちをだしたくもなります。」

クロちゃんと呼ばれたフレンズさんの声色と表情は、なんだか呆れているようだった。

「さきほどからなんです。あれではまるで、やからではないですか。」

「やかからて……、あんたくちわるいなあ。どこでおぼえたそんなもん。」

「どこって、ここにいるチンピラみたいなあねのくちからにきまつているでしょう。」

「だれがチンピラやねん！ どつくぞこら！」

「ほら、やつぱりチンピラではないですか。」

「いやいや、クロちゃん。ちゃうて。ただのツツコミやんか。」

ほんぽんと息の合った会話をする二人の様子を見て、なるほど、と思う。

状況はいまだによくわからないままだったけど、少なくとも、イエイヌちゃんが言っていたことが正しいみたい、ということにはわかった。

おっかない言葉にびびくりして見えなくなってたけど、たしかにふたりの顔からは敵意のようなものは感じられない。

となりを見ると、イエイヌちゃんが笑顔で「ね？」と呟く。

その笑顔で、緊張していたわたしの表情も一気にゆるんだ。

どうも、深刻に考えすぎちゃってたみたいだね。

改めて、ふたりのフレンズさんを見る。

ヒヨウちゃんと、クロちゃん、って言ってたっけ。

それと、ねえさま、とか、あね、とか言っていたし、ふたりは姉妹なんだろうか。

そう思っただけで、たしかにふたりの容姿はとてもよく似ていた。

ふたりとも、顔はそっくりだし、頭の後ろでふたつしぼりにした髪型も、半袖のシャツにミニスカートという服装もおそろいだ。

けれど、色が違っている。

ヒヨウちゃんの髪は金色にも見えるクリーム色で、しばつたところから先は雪みたいに白い。前髪にはところどころ黒い斑点があつて、耳にも黒い模様があつた。

半袖のシャツは真っ白で、襟元の赤いリボンのアクセントが眩しい感じ。

ミニスカートとアームカバー、ニーソックス、そして長いしつぽは髪と同じくクリーム色で、梅の花みたいな形の黒い模様がちりばめられている。いわゆる、ヒヨウ柄というやつだ。

その恰好はやっぱりチーターちゃんに似てるけど、受ける印象はだいぶ違うかな。チーターちゃんはクールな感じだったけど、ヒヨウちゃんは、なんとというか、元気な感じ、だろうか。

対してクロちゃんの髪は吸い込まれそうになるような真っ黒で、しばつたふたつの房はヒヨウちゃんのものよりちよつと長くて、髪質もヒヨウちゃんより柔らかい感じ。しつとりとツヤがあつて、撫でたらとても気持ちよさそう。

シャツも髪と同じく真っ黒だ。シャツだけじゃなくて、襟元のリボン、ミニスカート、アームカバー、ニーソックス、そして長いしつぽと、全身が真っ黒に染まっている。た

ぶん、夜に会ったら、わたしじゃ、どこにいるかもわからないかもしれない。

不思議なのは、ヒヨウちゃんと顔もそっくりで、恰好も色違いなだけでほとんど同じなんだけど、受ける印象がまるで違うこと。

元気な感じのヒヨウちゃんに対して、クロちゃんはとても落ち着いた感じの子だった。

「ともかく、あたかもくちもわるいねえさまは、しばらくだまっていてください。あとはわたくしがおはなしをしますから。」

クロちゃんはため息交じりに言う。ヒヨウちゃんは眉をへの字にして抗議の声を上げようとするんだけど、

「クロちゃんひどいわー。あんたはいつつもそーやっておねーちゃんをじゃけんにあ、」

「おだまり。」

「はいっ。」

ぎろり、睨まれてしまっておぎょうぎよくお返事をする。そして、なんやもークロちゃんこわいなあ、とかなんとか、ぶつぶつ呟いて黙ってしまった。

代わりにクロちゃんが一步、前に出る。

「うちのあねが、たいへんしつれいをいたしました。おろかなあねにかわり、わたくしクロヒヨウのクロが、おはなしをつづけさせていただきます。」

「ウチはヒヨウのヒヨウやでー。」

「ぷっ、あはは。」

ぴよこん、とクロちゃんの肩越しに顔を出しながら言うその姿に、なんだか可笑しくなつて笑つてしまう。

いきなり笑い出したせいか、ふたりはきよんとした顔でこちらを見る。

わたしは取りつくろうようにいずまいを正して、笑顔でふたりに向き合つた。

「えっと、いきなり笑つちやつてごめんさい。あたしはヒトのともえだよ。こっちは
イエイヌのイエイヌちやんと、」

「わふっ、イエイヌです！」

「こっちの子はくびわちやん。」

「・・・、くびわ。」

「よろしくね！ ヒヨウちやん！ クロちやん！」

わたしが元気よく挨拶をすると、ヒヨウちやんとクロちゃんはちよつと考えるような顔をして、お互いに顔を見合わせた。

「ヒト・・・、やはり。」

「せやな・・・。」

「・・・？ どうしたの？」

ふたりの表情が気になって問いかけると、クロちゃんが申し訳なさそうな顔で口を開いた。

「ぶしっけなおねがいでもうしわけありませんが、どうか、わたくしたちといっしょにきていただけないでしょうか？」

それは、ついさつきヒヨウちゃんが口にしたことと意味は同じだったんだけど、言葉づかいが違うだけで、受ける印象はこうも違うということだろう。

わたしは、もちろん、とばかりに頷いて、

「うん。それはかまわないけど、何かあるの？」

「それはなあ・・・、きくもなみだかたるもなみだの、」

「わたくしたちのリーダーに、あっていたきたきたいのです。」

わたしの問いかけに何やら語りだしたヒヨウちゃんを、クロちゃんは華麗にスルーした。

「なあなあクロちゃん、いまウチがかんるいひっしのくろうばなしをやね、」

「ぜんかいいっちのむだばなしのまちがいでしょう。」

「クロちゃん、なんやつめたいなあ。おねーちゃんちよつとなきそうやわあ。あんたはいつつもそうやってねーちゃんをじゃけんにして、」

「おだまり。」

「はいっ。」

また、ぎろりと睨まれて、ヒヨウちゃんはおぎようぎよくお返事をする。

あはは、なんだろ。

ふたりのこの感じ。

仲がわるそうで仲がいいというか。

お互いにきのけない感じが、なんだかすてきかも。

とりあえず、わたしたちはふたりについていくことにした。

くわしい事情はリーダーに会ってから、とのこと。

気になるけど、ここまでのやり取りでふたりがわるい子じゃないってことはわかったから、ついていくことに不安はひとつもなかった。

「うわっ、と。」

と、苔むしたところを踏んでしまい、足をすべらせそうになる。となりを歩くイエイヌちゃんがすかさず手を取ってくれたおかげで、転ばずにすんだ。

「ともえちゃん、だいじょうぶですか？」

「うん。へいき。ありがと、イエイヌちゃん。」

そんな様子を気配で察してか、前を行くヒヨウちゃんが振り返りつつ声をかけてく

る。

「あしもときいつけや？　ここらはすべりやすいからなあ。」

「もし、ころんでけがをしたら、おつしやつてくださいます。ジャパリまん、たくさんありますので。」

続けて聞こえたクロちゃんの台詞に、はてな？と思う。

「ジャパリまん？　なんで？　お腹はそんなに空いてないけど。」

「ああ、それは。．．ええと、ジャパリまんにもサンドスターがふくまれていますから。」
と、代わりに答えてくれたのはイエイヌちゃん。まだ頭にはてなを浮かべるわたしに、イエイヌちゃんは説明を続けてくれた。

「サンドスターは、どうぶつをフレンズにしたり、ちほーのきこうをととのえたりしますが、そのほかに、けがやびょうきをなおしたりもできるのです。」

「ケガや、病気？　そうなの？」

「はい。ですので、けがをしても、ジャパリまんをたべていれば、たいていはなおってしまいうのです。」

「へー、そうだったんだね。あたし、ぜんぜん気づかなかったよ。」

けれどなるほど、言われてみれば、と思う。

そうげんでイエイヌちゃんが受けた腕のキズだったり、昨日あたしがすりむいちやつ

た足だったりすがすぐ治っちゃってるのって、そういうこと、だったんだね。

「サンドスターってすつごいんだね。パークみんなの役に立ってるって感じ。」

「・・・さんどすたーは、なぞがおおい、ぶっしつ。やくにたつ、だけじゃなくて、きけんもある。」

わたしが素直な感想を口にする、イエイヌちゃんを挟んで反対側を歩くくびわちゃんが、ぼそぼそと声を発した。

「くびわちゃん、危険って?」

「・・・さんどすたーが、いしとか、むきぶつにあたると、せるりあんになる。」

「わふ!? そうなんですか!?!」

イエイヌちゃんがびっくりした様子で声を上げる。わたしはもちろんそうなんだけど、イエイヌちゃんも知らなかったみたい。

「ん? なんやじぶん、しらなかったん?」

と、これはヒヨウちゃん。そのとなりを歩くクロちゃんも驚いた様子はないし、ふたりともそのこと、知ってたのかな?

「しりませんでした! いつも、セルリアンがどこからうまれるのか、きになっていたんです。・・・。」

「あー、そっかそっか。ふつうはしらんなあ。ウチらもシーラにおしえてもらわん

かったら、たぶんずっとしらんままやったし。」

「そうですわね。シーラねえさまは、はくしきでいらっしやいましたから。」

と、ふたりの話になる単語がひとつ。

「シーラ、さん？ その子もこのみつりんにいる子なの？」

ぶんみやくからすると、シーラ、というのはたぶん、フレンズさんの名前だろう。そう思っただけ。

「あー、なんちゆうたらええか・・・、ま、そのはなしはおいしい、な。」

ヒヨウちゃんはなんだか難しそうな顔でそう言っただけ。黙ってしまった。となりのクロちゃんも同じような顔で、何も言わない。

んー、なんだろ。

ひよつとして、そのシーラさん、っていう子がなわばりのリーダー、とか？

なんてことを思うけど、あんまり考えてもしようがないかな。

話をにごすからには、何か事情があるのだろうし、それをあれこれじゃすいたり、せつつくのはよくないと思うし。

そんなことを考えている内に、話の流れは元に戻ってみたい。

「それにしても、どうしてセルリアンはフレンズをおそうのですか？ もともとがいしならば、なにかをこうげきするいしは、うまれないうなきがするのですか？」

イエイヌちゃんが興味しんしんという感じに疑問を口にする、何故だかヒヨウちゃん、プツ、とふきだした。

「もとがいしだけに、か？ なかなかうまいこというなあじぶん！ にやはは！」

「ヒヨウねえさま。ひとりでウケてないで、ちゃんとしつもんにとたえてくださいまし。」

「ええ？ いまのおもんない？ うそやん。」

クロちゃんに冷静に返されたヒヨウちゃんは、まじかー、さよかー、とぶつぶつ呟いて、それから、うーん、と唸りながら腕を組む。

「えーと、セルリアンがなんでフレンズをおそうか、やろ？ しってるしってる。んー、でもなんやったかなー？ このあたりまでできとんねやけど・・・。」

「ああ、コレしりませんわね。ごめんなさいね、イエイヌさん。」

「ちよー！ ちよい、クロちゃん！ おねーちゃんをコレよばわりせんといて！」

しどろもどろのところを冷静につっこまれたヒヨウちゃんは、あわてて声を上げる。けど、否定しないってことは、ホントに知らないみたい。

わたしは苦笑ぎみにふたりの様子を眺める。

「ヒヨウねえさまは、しったかぶりをしてくせがありますので、おはなしは、はんぶんくらいできいたほうがよろしいかとおもいます。」

「なんやもー、そんなんいわれたら、ウチのかぶ、だださがりやん。」

「あんしんしてくださいな。ヒヨウねえさまのかぶは、さがりようがありませんから。」

「おお、なんやクロちゃん、やっとウチのことほめてくれたん・・・ちやうなコレ。ハナからさがりきつとるいいたいんやろ？」

「あら、ヒヨウねえさまにしては、さっしがよろしいですわね。」

「あんたなあ。」

あはは。ふたりとも、ホント仲いいなあ。

さて。イエイヌちゃんの質問の答えだけど、

「・・・さんどすたーは、あつまることであんていする、せいしつがある。」

やっぱりというか、物知りのくびわちゃんは知ってたみたい。くびわちゃんはいつもの感情のこもらない声で説明を続ける。

「・・・せるりあんは、もともと、いしをもたない、むきぶつだから、そのせいしつにしたがって、よりおおくの、さんどすたーをあつめようとする。」

「なんやくわしいなじぶん。あー、せやせや、まえにシーラもそんなんいうてたわ。」

なるほど、と思う。

たしかにそれを聞けば、セルリアンの行動にも説明がつく。

「だからセルリアンは、フレンズさんをおそって、サンドスターを奪おうとするんだね。」

「くうん。セルリアンにも、そういうじじじょうが、あつたのですね。」
けれどそこで、はて、と思つた。

昨日こうやで出会つたセルリアンは、はじめはわたしたちに襲いかかつたハズなのに、けつきよくサンドスターを奪うことなくどこかへ行つてしまつた。

こうして説明を聞くど改めて思うけど、あれはいつたい、なんだつたんだろう。

その疑問をそのまま聞いてみようかとも思うけど、くびわちゃんの説明は続いていて、話をはさめそうにない。

まあ、また後でいいかな。

「・・・あと、さんどすたーが、どうぶつや、どうぶつだったものに、あたると、ふつうは、ふれんずになる。けど、ふれんずに、ならないこも、いる。」

「フレンズに、ならない。どうぶつのまま、ということですか?」

イエイヌちゃんの質問に、くびわちゃんはふるふると首を振る。

「・・・ふれんずには、りせいがあつて、ひとやほかのふれんずと、かいわができる。けど、まれに、りせいをもたずに、かたちだけ、ひとのようになる、ことがある。」

え、

と声を上げそうになる。

それつて、ひよつとして。

「・・・けものほんのうをもったまま、ひとのかたちをもった、どうぶつ。」

頭に浮かんだ想像に困惑していると、くびわちゃんは淡々とした声で言葉が続けた。

「・・・びーすと、とよばれている。」

「ビースト・・・。」

思わずオウム返しをしてしまったわたしに、くびわちゃんの視線が合わさった。

「ひよつとして、ちくりんにいた、けものさんって、その・・・、ビーストさん、なの？」
想像してしまったことをそのまま聞いてみると、くびわちゃんはこくこくと頷いて、

「・・・そう。」

とだけ言って、また黙ってしまった。

あのときちくりんで出会った、こわいけもの。

トンちゃんとフーちゃんのおかげで、だれもケガすることなく追い払うことができたけど、もしふたりがいなかったら、わたしもイエイヌちゃんも、ひよつとしたらケガをしちやっつてたかもしれない。

あの、どうもうなけものそのものみたいな姿は、なるほど、そういうことだったんだね。

フレンズではなく、ビーストだから、暴れていた。

・・・でも、どうしてだろう。

なんというか、そんな理屈だけで片付けていいような気には、どうしてもならない。自分でもわからないけど、あのときのビーストさんの姿を思い返すと、なんだか胸を締め付けられるような思いになるのだ。

最後の方なんかものすごく興奮してみたいだったし、ケガだけじゃすまなかったかもしれないのに、自分でも不思議だけど。

だって、あのビーストさんは・・・、

「おはなしをささげぎって、もうしわけありません。そろそろリーダーのところにつきますわ。」

と、クロちゃんに声をかけられて、わたしはいったん考えを保留することにした。

ふたりに案内されて辿り着いたところは、少しひらけた場所だった。うっそうと草木がしげる中を歩いてきたから、さえぎるものもない太陽がちよつとまぶしい。

その場所の中央には、石で組まれた台があつて、その上にひとりのフレンズさんが座っていた。

台の上には木でできたログチェアみたいなものがあつて、そこにどっかりと腰を落ちて着けている。がばりと開いた足に頬杖をつくような形で、なんというか、とても貫禄があつた。

あのフレンズさんが、このみつりんのリーダー、なのかな？

なんてことを考えていると、

「おーい、リーダー、おきやくさんつれてきたでー。」

というヒョウちゃんの言葉に、その想像が合っていたと理解した。

「きやくか、めずらしいな。」

リーダーさんはひとり言のようにつぶやくと、姿勢を崩さないまま視線だけでわたしたちを見て、言葉を続ける。

「みつりんへようこそ。わたしはこのなわばりをあずかるリーダーのゴリラだ。」

その声は低くて重い響きがあつて、それだけでもなわばりのリーダーとしてのいげんが感じられるものだ。

いげん、という意味では、そのふうぼうもそうだった。

ゴリラちゃんの服装は、下は白い長ズボン、上は白いミニのタンクトップに濃い灰色のアームガードといった感じ。

おへそや肩が丸出しになってて、せくしーな感じも受けるのだけど、どちらかという機能美というか、動きやすさを優先したような印象を受ける。

そう思うのは、たぶん、そのきりつとした目が、とても強い意志を感じさせるからだろう。

それに、筋肉のりんかくが見える二の腕だったり、うつすら割れている腹筋だったり

と、なんというか、せくしーさより、ちからづよきの方が先に来る感じだった。

さらさらの黒いショートヘアは、目鼻が整った理知的な顔立ちを更に際立たせている。濃い灰色のニット帽をかぶっているんだけど、それもまた落ち着いた雰囲気を感じさせるものだ。

頬杖をつきながらこちらを見やる姿勢もあつて、たしかに、リーダーとしてのふうかが、ゴリラちゃんからは感じられた。

「リーダー、こちら、ともえさんとイエイヌさん、それからくびわさんです。」

はくりよくのあるその感じに気おされていると、クロちゃんが代わりにわたしたちの紹介をしてくれた。あわててわたしもそれに続く。

「えっと、ともえです。よろしくね。」

「わふ、イエイヌです！」

「・・・くびわ。」

「ふむ。よろしく。」

「ゴリラちゃんは短くあいさつを返すと、続けて質問を投げかけてくる。

「で、きみたちはなにをしてみつりに？」

「えっと、わたしたちは今、旅をしているんだけど、その途中、って感じかな。もうちよつと行くと、きよじゅうく、つてところがあるらしいんだけど、そこに行きたくて。」

敬語で話すべきかとも思ったのだけど、つつい普通で答えてしまう。

どうにもわたしは敬語が苦手みたいで、こうして緊張してしまうと、余計にダメだった。

けれど、ゴリラちゃんは気にした様子もなく、質問を続ける。

「たび、か。どこからきた？」

「えっと、そうげんとか、ちくりんのほう、かな。」

「それは、だいぶとおいな。つかれただろう。」

と、返ってきたのはこちらを気遣うような声。

わたしはあわてて両手を前に出し、ふるふると横に振る。

「ううん、そんなそんな。途中で休みながら来たから、へいきだよ。」

「そうか。だが、むりはきんもつだ。このさきなにがあるともわからないだろうし。し

ばし、からだをやすめていくといい。」

そう言つて、ゴリラちゃんは優しい気な笑みを見せてくれた。

ゴリラちゃん、最初はちよつとおつかない感じなのかなって思ったけど、ぜんぜんそんなことはなかったみたい。

なんていうか、とつても優しい子だった。

— — —

「いかがでしたか？ わたくしたちのリーダーは。」

ちよつと用事を思い出した、とゴリラちゃんが席を外し、しばらくしてからクロちゃんそんなことを聞いてきた。

「なんだか、カツコよかったね！ それに優しいし！ 頼れるリーダーって感じ！」

それは他意のない素直な感想だったのだけど、けれどクロちゃんたちはどうしてか、びみょうそうな顔でお互いの顔を見合わせた。

それはどこからどう見ても、苦笑い、と言えるような表情だ。

ひよつとして、わたしの感想、だいぶ的外れだったのかな？

「んー、まあ、そうみせてる、ちゆうかな。」

「イエイ又さんや、くびわさんはどうおもわれました？」

クロちゃんに振られたイエイ又ちゃんは、少し答えづらそうな顔をして、

「くうん・・・、しつれいながら、だいぶ、むりをしているようにおもいました。」

申し訳なさそうな声で、そう答える。となりのくびわちゃんもこくこくと頷く。見ると、ヒョウちゃんとクロちゃんも、うんうんと頷いていた。

「ええ？ あたしにはせんせん、そう見えなかつたけど。」

「たたいふるまいは、そうなのですけど。きんちようしているにおいがありましたから。」

緊張している匂い・・・って、ひや汗の匂い、とか？

なるほど。それは、わたしにはわからないや。

正直なところ、はんしんはんぎ、なのだけど、わたしより感覚に優れたフレンズさんたちが言うのだから、たぶん、それは間違いないことなのだろう。

そして、それを裏付ける証拠が、もうひとつ。

「そうなのよ。やつぱり、はながいいこには、わかっちゃうのよね。」

聞こえてきた声は、わたしたちのものでも、ヒヨウちゃんたちのものでもなかった。

声の聞こえた方に視線を向けると、はじめて見るフレンズさんがふたり、こちらへ歩いてくるところだった。

「あのこ、ほんとはすつごくこわがりで、プレッシャーにもよわいの。」

ひとりは、なんだかカツコイイ感じの見た目をしてるフレンズさん、

「リエちゃんのいうとおりです。いまごろ、おなががいたくて、ひとりでごろごろしてるとおもいます。・・・かわいそう、ぐすん。」

もうひとりは、眼鏡をかけたおとなしそうな感じのフレンズさんだった。

「リエ、メイ。あんたらもきたんか。」

「かぎなれないにおいがしたからね。ひよつとして、って、おもったのよ。」

ヒヨウちゃんの言葉に、カツコイイ感じのフレンズさんが反応する。

「それで、やつぱり?」

「ああ、このともえっちゅーんが、ウチらのさがしてた、ヒトや。」
「へ？」

思わず声を出してしまう。

探してたつて、ヒトを？

どうして？

そんなわたしの疑問は、言葉に出さなくても伝わってしまったみたいだった。

こちらに向き直ったヒヨウちゃんは、腕を組んでしばらく考えるようなそぶりを見せると、意を決したような表情でこう言った。

「あんな、ちよつと、たのみがあんねんけど。」

——
ゴリラは繊細な動物である。

性格は非常に温厚で、繁殖期を除けば他者に攻撃的な行動を取ることは滅多にない。

しかし警戒心は強いいため、外敵や障害に対して過敏に反応する。温和な性質上、あまり攻撃的な対応が取れないにも関わらず、である。

その為か、ゴリラは非常にストレスに弱い。直接的な危険にさらされずとも、神経性の病気や心臓の負担などで死に至る例もある程だ。

そして、フレンズは基本的に、基になった動物の性質を受け継ぐものである。

「うう……、おなかいいたい……。」

皆の所をひとり離れ、苦しうに腹部をさする彼女も、基となる動物であるところのニシローランドゴリラの性質を色濃く受け継いでいた。

「いきなりおきやくさんとか、ほんとやめてほしいよ……。ただでさえ、いっぱいっばいなのにさ……。」

警戒心の強いゴリラはささいな環境の変化にも神経をすり減らしてしまう。

彼女もまた、迎える場では体裁を保ったものの、突如現れた客人への応対によって引き起こされた胃痛に、その場を離れざるを得なかった、というわけだ。

「ヒョウねえは、いっつもいきなりなんだもんなあ……。せめて、つれてくるまえに、はなしてくれればさあ……。」

彼女はぶつぶつ愚痴を呟きながら、ごろごろと地面を転がる。さながら他者との関わりに思い悩む思春期の様相だ。

そんな有様であったから、ヒトより感覚に優れたフレンズでありながら、姿が目に入る程の距離になるまで、近づいてくる足音にも匂いにも気づかなかった。

「……っ、だれだ!」

木の陰から覗き込むように視線を向ける何者かを視界に収めると、ゴリラはあわてて身を起こし、警戒心もあらわに声を上げる。

大声に驚いたのか、何者かは覗き込んでいた頭を引つ込めて、木の陰にすっぽりと隠れてしまった。

ゴリラは訝しむような眼をそちらに向け、じつと様子を伺う。

その何者かは逡巡しているかのようにはばらく隠れたままだったが、「よし、」という意を決したような声を発するとともに、木の陰から姿を現した。

敵意がないことを示すかのように、にこにここと笑顔を見せ、そして、再び声を発する。

「ゴリラちゃん、ただいまー」

その姿は、白衣を着こみ、眼鏡をかけたフレンズのようだった。

フレンズ紹介くヒヨウく

ヒヨウちゃんはネコ目ネコ科ヒヨウ属の哺乳類、ヒヨウのフレンズだよ！

ヒヨウは森の中とか草むらがあるとところによく住んでるんだけど、ネコ科の動物の中ではいちばん、せいそくいき、がひろいんだって！

さむいところ、あついとこ、しめつたところ、かわいたところ、色んなところに住んでるよ！

かんきよーてきおーりよく？がすごいみたい！

木登りがとくいで、狩りしたら横取りされないように、えものをくわえて木の上に

登っちゃうんだよ！ せいかつのちえ、ってやつなのかな？

大きなえものをつかまえたら、木の上に引き上げたり、枝とか葉っぱで隠したりして、何日もかけてすっかり食べきっちゃうみたい！

たべものをそまつにしないのは、いいことだよね！

体中にあるとくちょう的な模様は、そのままずばり、ヒヨウ柄って言われてるよ！

チーターの水玉と違って、よく見ると梅の花みたいな形をしてるんだよね！

すっごい綺麗な模様なんだけど、そのせいで、ヒヨウは昔から毛皮を取る目的でヒトに狩られちゃうことも多かつたんだ……。

ひどいよね……。

【ちえ】ともえちゃん（しゅくしちほー）

けものフレンズR くびわちほー 第05話 「かぞくの
きずな（前編）」 B・Cパート

フレンズ紹介〜クロヒヨウ〜

クロちゃんはネコ目ネコ科ヒヨウ属の哺乳類、クロヒヨウのフレンズだよ！

クロヒヨウはヒヨウのこくへんしゅで、体中の毛が真っ黒なんだ！

クロヒヨウって種類がはつきりあるわけじゃなくて、とつぜんへんいで生まれた毛皮の黒いヒヨウが、クロヒヨウって呼ばれるみたいだね！

クロヒヨウは全身真っ黒だからヒヨウ柄がないようにも見えるんだけど、実はおんなじ梅の花みみたいな模様がうつすらあるんだって！

にくがんだと光の加減が丁度よくないと見えないし、カメラで撮るにしてもとくしゅな光を当てないと分らないくらいなんだけどね。

ちなみに、ヒヨウにとつてもよく似た動物にジャガーがいるんだけど、ジャガーは梅の花みみたいな模様の中心に小さい斑点があつて、ヒヨウにはないんだって！

普通のヒヨウとジャガーならそんな模様のびみょうな違いで見分けられるんだけど、ジャガーにもこくへんしゅのクロジャガーがいるみたいなの！

クロヒヨウとクロジャガーが並んだら、もうぜんぜんわかんないよね！

【こえ】ともえちゃん（しゅくしちほー）

———
———
———
さて。

わたしが今置かれた状況を説明する前に、ほんの少し前のことを話そう。

「あんな、ちよつと、たのみがあんねんけど。」

と、めずらしくまじめな顔をしたヒヨウちゃんが言った、そのすぐ後のこと。

頼みって、どういうことだろう？

ヒヨウちゃんはヒトを探してたって、さつき言ってたけど、ヒトにしか頼めない用事、ってことなのかな？

そんなことを考えていると、ヒヨウちゃんはまじめな顔のまま、

「あなたにしかたのまれへんことやねん。いきなりこんないわれてこまるおもうけど、ちからになつてくれへんやろか。このとおりや。」

深々と頭を下げながら頼みこむ姿に、わたしはあわてて返事を返す。

「そんな！ 頭なんて下げなくていいよ！ あたしにできることなら手伝うから！」

「ホンマか!? なんやあなたむつちやええやつやなあ！ おおきに！」

わたしがふたつ返事でかいだくすると、ヒヨウちゃんはがばつと顔を上げて、にこに

こ顔でわたしの手を取りぶんぶんと振る。

ヒヨウちゃんのころころと変わる表情は、なんとというか、見ていてとてもほがらかな気分になる。自然と表情がゆるむのが、自分でもわかった。

「あはは。でも、あたしに頼みって、何すればいいの？ 言つとくけどあたし、大したこ
とできないよ？」

「あー、それはやね、」

「ねえさま。くわしいはなしをするまえに、まずはふたりのしようかいを。」

話を続けようとするヒヨウちゃんを、クロちゃんが遮る。クロちゃんのとおりにはつ
いさつきやつて来たふたりのフレンズさんがいた。

「こちら、イリエワニのリエと、メガネカイマンのメイですわ。リエねえさま、メイねえ
さま、こちらはともえさんとイエイヌさん、そしてくびわさんです。」

「リエよ。よろしくね。」

クロちゃんの紹介に続いて、カツコイイ感じのフレンズさんが口を開く。この子がリ
エちゃんで、

「あ、あの、わたし、メイです。よろしくおねがいます・・・。」

こつちの眼鏡をかけたおとなしそうなフレンズさんが、メイちゃんというみたい。

「ともえだよ。こちらこそ、よろしくね！」

「イエイヌです！ よろしくおねがいます！」

「・・・くびわ、よろしく。」

いつもの通りに名乗りながら、わたしはふたりのフレンズさんを見る。

リエちゃんは黒いライダースジャケットにダメージジーンズという格好だった。袖口やブーツのトゲトゲと、けばだったジーンズの穴がなんだかワイルドな感じ。

イリエワニのフレンズだけあって、ジャケットはもちろんワニ革だ。太くて長いしつぽにもワニらしくぎざぎざしたウロコがあつて、すごくちからづよい印象だった。

うすい黄色の髪を後ろでまとめているんだけど、二つに分かれた長い前髪はワニの大きなおくちみたいで、それもなんだかすつごいカッコイイ。

きりつとしたつり目には緑色のアイシャドウが引かれていて、大人っぽいきれいな顔立ちをよりいっそう印象深くさせていた。

メイちゃんは、上はミリタリーっぽい緑色のジャケットに、下は黒いスパッツの上からデニムのホットパンツを履いている形だ。

リエちゃんとおんなじでトゲトゲの飾りが穴あきグローブやブーツについている。しつぽもリエちゃんとおんなじで太く長くぎざぎざしてて、なんだか攻撃力が高そうな感じ。

でも、顔を見るとその印象ががらつと変わる。

かわいらしい顔立ちにトップリムのメガネをかけていて、何故かちよつと涙目でうるうるしているのもあってか、やっぱりおとなしい感じ。

緑色の髪をふた房の三つ編みにまとめていて、頭の上に赤いリボンを着けてるんだけど、それも主張の強くないおしやれというか、すごくまじめな子なのかな、という印象だった。

まとめると、リエちゃんはワイルドでカツコイイお姉さん、メイちゃんはおとなしめだけど服装はアクティブな女の子、って感じだろうか。

あと……ふたりとも、その、なんていうか、おつきい、かも。

ふたりともジャケツトの下に何も着てないのに、ジツパーをおへその上あたりまで下げてるから、余計にそれが強調されて、なんだか目のやり場に困る。

「た、たにまが……、はわあ……、」

「くうん？ どうしました？ ともえちゃん。」

「う、ううん！ なんでもないよ！」

思わず声を漏らしてしまい、イエイヌちゃんに、げげんそうな顔で見られてしまった。いけないいけない。

今はまじめなおはなしをしてるんだから、こんなこと考えてる場合じゃないよね。

それにしても……、こんなにフレンズさんがいっぱいいて、あたしに頼み事って、な

んなんだろう。

しようじき、あたしにできることなんて、大したものはないんだけどな。

せいぜい、ボスとおはなしできること、くらい？

フレンズさんにできないことで、あたしにできることなんて、たぶんそのくらいだ。

だからなんとなく、そういうたぐいのことなかなって思ってたんだけど、

「ほんじゃ、じっしよかいもすんだことやし、さくせんかいぎといこか。」

ヒヨウちゃんの言葉からすると、どうも違うみたい。

「さくせん、会議？」

どういうことだろうと思って聞き返すと、ヒヨウちゃんは「せやで、」と短く答えて、にまにまとした笑みを浮かべながらその先を続けた。

「これからあんに、ちよい、ひとしばいうってほしいんやわ。」

———
そうして、現在に至る。

ヒヨウちゃんたちの頼みごとの内容をひととおり聞いた後、それを実行に移す段になり、こうしてやってきたわけだ。

ゴリラちゃんのところへ。

「ゴリラちゃん、ただいま！」

なんて元気に言ってみたはいいけれど、この後どう会話を続けたらいいものやら。ヒヨウちゃんから聞いたさくせん、というかおしばいの内容を簡単にまとめると、こうだ。

『以前ここにいたシーラさんというフレンズさんの真似をして、ゴリラちゃんに会うこと。』

そのためにわたしはメイちゃんからメガネを借りて、白い布きれを白衣に見えるようにまとって、ゴリラちゃんのところへやってきた、ということになる。

ヒヨウちゃんが言うには、「そのかっこやったらだまされてくれるやろ。なーに、あとはきとーに、かいわしとったらええねん。」とのことだった。

さくせん、なんて言ってたけど、しようじき、さくせんなんて言えるようなものじゃあないでしょ、それ。

それにぜんぜん、はなしがちがう。

「ど、どうしたのー？ ゴリラちゃん、久しぶり過ぎて顔忘れちゃったー？ ほらほらわたしわたしー、」

いぜん、いぶかしむような眼をこちらに向けるゴリラちゃんに、わたしはしどろもどろになりながら、無理やり会話を続けてみる。

さつきからイヤな汗をかきつばなしだった。

自分でも何やってんだろとか、思わなくもないけど、引き受けたからには最後まで役をまっとうして――、

「……、なんのつもりだ？」

「ご、ごめんなさい！ つい、できごところで！」
ムリだった。

ゴリラちゃんの険しい表情と唸るような低い声にびびったわたしは、あわてて白い布とメガネを取って平謝りする。

たぶんそれは、みるものがほれぼれするような、てのひらがえしだったことだろう。うう……、やつぱりゴリラちゃん、怒っちゃったかな？

下げた頭のまま、ちらちらと上目づかいにゴリラちゃんの顔を見るも、そこには変わらず険しい表情があり、こちらを睨んでいる。

あの……、すいません。

ちよつと、ちびりそうなんですけど。

そんな情けないことを考えていると、ゴリラちゃんは「はあ、」とひとつため息をついて、少しだけ表情を柔らかくしてくれた。

「すまない。あいつらにたのまれたんだらう？ まったく、あいつらときたら……、」

どうも、色々と察してくれたみたい。

ほっとする反面、苛立たしげなその言葉に少しどきっとする。

「あの、みんなは悪くなくて。ゴリラちゃんのことを心配して……。」

「わかってる。ありがとう。きみはやさしいな。」

静かに答えるゴリラちゃんの顔に浮かぶのは、申し訳なさとか色々なものが混じつて
るような表情だ。

けれど、いちばん色濃く見えるのは……、なんと云えばいいか、

たぶん、不甲斐なさ、というのが近いだろうか。

「わかってるんだ。むりをしてリーダーなんかやつても、わたしなんかがシーラねえみ
たいになれるわけがない。それで、みんなにめいわくをかけてることも。」

そう言って、ゴリラちゃんは自嘲するように笑った。

「迷惑なんて……。」

「じじつ、しんぱいされてるだろうか？　リーダーしつつかくだよ。」

とつさに反論しようとしたのだけど、すぐにゴリラちゃんに返されてしまう。

わたしはすぐにまた反論しようとする気持ちを抑えて、ゴリラちゃんの言葉を心の中
で反芻した。

みんなに心配されたら、リーダー失格。

そんな風にゴリラちゃんは言った。

けれど、そんなことはない。

誰にも迷惑をかけず、みんなをまとめる。そういうリーダーも、たしかにいるのかもしれないけど、それはたぶん理想のはなしというか、あくまで目標でしかないと思う。それに、さつきシーラさんを演じるにあたり、そのひととなりは簡単にだけど聞いている。

けど、それはゴリラちゃんの言っているようなリーダーではなくて……。

「もともとはな。このみつりんは、シーラっちゅうヤツがしきつとつたんや。」

と、昔を懐かしむような顔で、ヒョウちゃんは言った。

「シーラはチンプンジューのフレンズでな。ほんにんがいうには、みためはヒトのようにてるらしい、ゆうとつたわ。」

「わたくしたちはヒトにあったことがありませんでしたので、はんしんはんぎ、でしたけど。」

クロちゃんがそう言うと、その言葉に続けるように、リエちゃんがこちらをまじまじと見ながら口を開く。

「たしかに、これといつてとくちようがないかんじは、シーラににてるかもね。」

「リエちゃん……。そういういいかたは、しつれいですよ?」

「おっと、ごめんね？ わるぎはないのよ？」

「あはは。気にしないで。」

たしかに見た目にとくちようがないのは、そのとおりだし。

フレンズさんには個性的な見た目の子が多いから、逆にヒトは目立つのかもしれない。

それに、チンパンジーって、たしかヒトにすごく近い動物なんじゃなかったっけ？

それを考えると、なるほど、感覚に優れたフレンズさんたちが、似てると判断するのは頷けるもののように思う。

「シーラはいろんなことをようけしつとるヤツやったさかい、ウチらもいろんなことをアイツにおそわつとった。そんで、しぜんとアイツがリーダーになった。」

「ほんとうに、いろいろなことをしてましたわね。さきほどの、セルリアンのはなしもそうですけど、ボス・・・、ラッキービーストのやくわりとかも、おしえてもらいましたわ。」

「ヒトのことも、シーラにおしえてもらったんだよね。むかしはパークにいった、とかいってたけど。」

「ほかに、ジャパリまんがどうやってつくられてるのか、とか、シーラちゃんにおしえてもらったことは、かぞえるときりがないです。」

みんな、ヒョウちゃんに続いて口々にシーラさんの思い出話をする。

みんなの顔はとても穏やかで、なんだか心に温かいものを感じるようなものだった。けれど、

「でも、シーラはいなくなつたの。あるひ、とつぜん、ね。」

リエちゃんが淡々とした声でそう言うと、急にみんなの顔が暗くなる。

「わたくしたちも、あちこちさがしまわつたのですけど、いまでも、みつかつていませんの。」

クロちゃんがおはなしの先を続けると、みんなの表情がますますどんより曇つてしまつたのを感じる。

そんな空気のまま、みんなのおはなしは続く。

「アイツは、リーダーはな。シーラのこと、シーラねえ、シーラねえ、ゆうてしたつてな。どこいくくんにもひつついててな。」

「いつもうれしそうにわらつていたのをおぼえています。なのに……」

「シーラがいなくなつてからは、メイみたいになつとないてばつかりになつちやつたのよね。」

「じぶんが、ふがないばかりに、シーラねえさまがいなくなつた……と。」

クロちゃんはそう言うと、唇を噛むようにしながら目を閉じる。

まるで、悔しがるようなその仕草。それはたぶん、クロちゃん自身もまた、同じような思いを持っているから、なのだと思う。

そして、みんなの表情もまた、個性の違いこそあれ、同じようなものだ。

「そんであるひ、きゆうにげんきになったおもうたら、じぶんがリーダーになつてシーラをあんしんさせるーて、いいでしたんよ。」

「どうみても、からげんき、なのよね……。」

ヒヨウちゃんの言葉にリエちゃんが続き、その後はみんな黙つてしまう。

そこで、おはなしは終わりみたいだった。

そう、なんだね。

わたしはそこまで聞いてようやく、どうしてプレッシャーに弱いゴリラちゃんがリーダーをやつてるのか、とか、なんでみんながわたしにシーラさんの真似をさせようとしてるのか、とかを理解した。

ようするに、こういうことだろう。

「みんな、すごく仲がいいんだね。」

色々なものをまとめてしまったひとことに、みんなはきよとん、とした顔でこちらを見る。わたしはその視線を受け止めながら、言葉を続けた。

「なんていうか、お互いのこと、大事にしてるっていうか。思いやつてるっていうか、そ

んな感じ。」

それは、とても素敵なことだと思う。

とまではさすがに気恥ずかしくて言えなかったけど、好意的なニュアンスは伝わったみたいで、暗かったみんなの顔が少し、明るくなるのがわかった。

いちばんわかりやすく表情を変えたのは、やっぱりというか、ヒヨウちゃんだった。

にまにまとした笑みを浮かべながら、

「せやな。うちら、かぞくやからな。」

「かぞく？ 別のどうぶつのフレンズなの？」

発せられた言葉に、思わず率直な質問を返してしまふ。

ちよつと失礼な質問だったかも、と思ったけど、ヒヨウちゃんは気にしてない様子で、にやははと笑う。

「せやで？ あー、なんやゆうたらええかなー、」

「なんとなくうまがあうかんじ、なのよね。」

詰まった言葉の後をリエちゃんが続けると、ヒヨウちゃんはぽんと手を打って、満面の笑みを浮かべた。

「そう、それやそれ！ なんやリエー、ウチのことばとつたらかなんでー。」

「ぜつったい、おもいついてなかったですよね、あれ・・・。」

「いつものことながら、ヒヨウねえさまのしったかぶりは、わかりやすいですわ。」
かわいらしい知ったかぶりをするヒヨウちゃんに、ひそひそと小声でそれを指摘する
メイちゃんにクロちゃん。

さつきまでの暗い雰囲気がウソみたいに感じられるような一幕だ。

「でもじつさい、そんなもんちゃうかな？」

と、区切るように言葉を発したヒヨウちゃんの顔は、どこか感慨深げなものだ。

「ウチとクロちゃんかて、おなじとこでうまれたんとちゃうしな。けど、なんかうまが
うた。メイとリエかておんなじ。もちろんリーダーも、シーラもそうや。」

みんなの顔をひとりひとり見るようになってから、その先の言葉が続けた。

「そんなんが、ようさんあつまったら、そらもう、かぞくいがいのなんでもないやろ。」

その表情は、なんというか、とても満ち足りたものだった。

そっか。

うん、そうだよね。

かぞく、かあ。

「ヒヨウねえさま。それ、シーラねえさまのうけうりでしょう？」

クロちゃんが呆れたような顔で口を挟むと、ヒヨウちゃんはまた、にやははと笑う。

「せやで？　せやけど、それがウチのほんしんや。クロちゃんかておんなじやろ？」

「つ……ま、まあ？　そうですわね？」

にまにまと笑いながら、けれどまじめな声色で返されて、クロちゃんは少しどきつとしちやつたみたい。気恥ずかしいのか、その頬が少し赤くなっているのがわかる。

「お、クロがあかくなってる。ひさしぶりにみたけど、やつぱこういうところかわいいよね。」

「そうですねえ。クロちゃん、いつもこうだといんですけど……。」

「おねえさまがた？　ふだんのわたくしに、なにかもんくがおありで？」

「ひつ、なんでもないです……、うるうる。」

「ふふ、おこってるクロもかわいいなあ。」

静かな迫力を見せるクロちゃんに、涙目で怯えるメイちゃんと動じないリエちゃん。

うーん。この子たちって、やつぱり。

「あはは。みんな、ホントに仲いいね。」

「わふ。すてきなかんけいですう。」

わたしとイエイヌちゃんの言葉に、くびわちゃんもこくこくと頷く。

ホント、素敵な関係だと思う。

このかぞくの助けになるなら、わたしはできることを全力でやろう。

心からそう思えた。

だから、

「ねえ、シーラさんって、どんな子だったの？」

できる限りシーラさんの真似ができるように、ちゃんと聞いておかないと。

……って、ちゃんと聞いたはずだったんだけど。

結果は知ってのとおりです。

ごめんなさい。あたしじゃ、やくぶそく、だったみたい。

……あれ？ やくぶそく、じゃなかったっけ。ちからぶそく？

まあ、どっちでもいいか。

ともかく、シーラさん本人を知らないわたしに、その真似なんて最初からムリな話だった、ということだろう。

けれど、だからと言って、諦めてゴリラちゃんの悩みをそのままにしておく、なんていうことも、それもまたわたしにはムリな話だった。

わたしはゴリラちゃんの言っていたこと、それからヒョウちゃんたちから聞いたシーラさんのひととなりを頭の中で照らし合わせて、自分の中で考えをまとめてから、口を開いた。

「……あの、シーラさんって、どんな子だったの？」

いきなりの質問にゴリラちゃんはきよとん、とした顔だったけれど、

「そうだな……」

と呟いて、昔を懐かしむような顔になる。その顔はさつきみんなが思い出話をしてい
たときに浮かべていたものと、まるきり同じもののように感じた。

「シーラねえは……、すごくあたまがよくてな。いろんなどうぐをつかったり、なおし
たりできたんだ。」

「そうなの？ すつごいね！ ボスみたい！」

「ああ、そうだ。たしかにラツキーピーストみたいのに、いろいろなことができた。」

ゴリラちゃんはうんうんと頷きながら思い出話を続ける。

「ひろばに、イスがあつただろう。」

「うん。ゴリラちゃんがすわつてたやつだよね？」

「ああ。あれもシーラねえがつくつたものでな。みんなのためにつくつたんだが、しつ
ぽのみじかいフレンズしかすわれなくてな。けつきよく、わたしとシーラねえしかすわ
れないんだ。」

「あはは。リエちゃんたちとか、しつぽすつごいおつきいもんね。」

「ああ。でもリエねえもメイも、かわでおよいでることがおおいし、ヒヨウねえもクロ
も、きにのぼつてることがおおい。それに、シーラねえもあんまりじつとしてないフレ

ンズだったから、もとよりつかうのはわたしくらいだったんだけどね。」

「そっか。ならそれって、はじめからゴリラちゃんにあげるつもり、だったんじゃないの？」

「うーん、そうかな？ そうなのかも、しれないね。」

おはなしを続けているうちに、ゴリラちゃんの表情や口調がなんだか柔らかくなってきたのを感じる。

ヒヨウちゃんも言ってたけど、ホントにシーラさんのこと、好きだったんだなあ。

ゴリラちゃんの緊張がほどけてきたのを見計らい、わたしは本題に移ることにした。

「でも、そんなにいろいろできるなら、きつとすっごい頼りになるリーダーだったんだね。」

わたしがそう言うと、ゴリラちゃんは「うーん、」と唸り、ちよつと苦笑交じりの顔で答えてくれる。

「それでもないよ？ シーラねえはいろんなことをしりたがるから、ひとりでかかってあつちこつちにでかけちゃって、みんなにおこられたりしてた。」

「心配させるな、って？」

「そうなの。ほんとうに、いつつみんなにしんぱいされて・・・、」

そこまで言って、ゴリラちゃんはハツとした顔をする。

どう、かな。

言いたいことは、うまく伝わっただろうか。

あらためて、わたしは口を開き、自分の気持ちを口にした。

「ねえ、ゴリラちゃん、心配されるリーダーって、あたし、わるいことじゃないと思う。それって、それだけみんなに好かれてる、ってこと、なんじやないかな。」

「・・・ありがとう。ほんとうにきみは、やさしいな。」

ゴリラちゃんは優しい笑みを浮かべて、そんな言葉をかけてくれる。

けれど、すぐにその笑みは消えて、次にその顔に浮かんだのは、すごく真剣な表情だった。

真剣・・・、というか、どう表現するのが正しいだろう。

たぶん、思いつめた表情、というのが、いちばん近いかもしれない。

「それでも、わたしはリーダーとして、めざすじぶんをまげるわけには、いかないんだ。」
そして、その表情のまま、ゴリラちゃんはそう言った。

「そっかあ。ダメやったかあ。」

ゴリラちゃんのところから戻ってきて、いちぶしじゆうを説明すると、ヒョウちゃんが残念そうな顔で言った。

「うん。ごめんね。あたしじゃ、上手くできなかったみたいで……。」

「きにせんでええよ。もとよりさくせんがアカンかっただけやし。まったく、だれや。あんないきあたりばつたりなさくせん、かんがえたんは。」

「ヒヨウねえさま。ごじぶんのむねにきいてみては？」

「ウチのむねに？ おーい！ そだつとるかー！」

「そういうことではなく。」

ヒヨウちゃんとかロちゃんとは相変わらずぼんぼんと会話をするのだけど、その表情はやっぱり、どこことなく暗い。

見ると、リエちゃんもメイちゃんも、おんなじだった。

落ち込んでしまっているみんなを見てみると、すごく、悲しい気持ちになる。

ゴリラちゃんも、みんなも、

お互いがお互いのことを思っているはずなのに、すれ違っている感じ。

そのことをあらためて認識すると、胸の奥になんだかもやしたもののが生まれたような気がした。

なんだろう、この感じ。

ただ、みんなが落ち込んでいるのが悲しい、というだけじゃなくて、

胸が締め付けられるというか、何か、大切なことを忘れているような気分というか。

あたしは、こんな光景を、どこかで・・・、

記憶をなくしたわたしには、それが何だったのか、まるでわからない。

大切なことだったと思うけど、でも、それを思い出せるようになるには、まだ時間が
必要みたいだ。

なら、とりあえずはさて置こう。もやもやが残っているのは気持ちが悪いけど、でも、
今は自分のことなんか、どうでもいい。

今、わたしがやることは、ううん。

あたしがやりたいことは、もう決まっている。

「あの、お願いがあるんだけど。」

ただよわせていた視線をみんなの方に向けて、わたしはそのお願いを口にした。

「みんなが最後にシーラさんを見た場所に、連れてつてもらえないかな？」

———
こーやちほーは今まであまり来る機会のなかった場所だ。

今ボクが生活の拠点になっている場所からだ、みつりんをぐるっと迂回しないといけ
ない、というのもあって、遠出をするときに通り過ぎさえしても、立ち寄ることはあま
りなかった。

なのにどうして今日ここに来ているか、と言えば、とあるふたりのフレンズさんたち

と待ち合わせをしているからだだった。

「……って、そんなかんじだったかしら。」

「ありがとうございます。とても参考になりました。」

今はふたりを待ちながら、こうやで出会った別のフレンズさん、チーターさんというのだけど、彼女から昨日ここであった話を聞いていたところだ。

簡単な話はラツキーさんを通じて報告を聞いているけれど、詳しい話を当事者である彼女から聞いておきたかった。

「話は済んだのか？」

と、バスの方から声が聞こえてくる。彼女はボクの知り合いのフレンズで、今は一緒に行動している。

「すみません。少しでも情報を、と思ひまして。」

「いや、いい。キミの目的は私も理解している。優先すべきはそちらだろう。」

バスの運転席に乗り込んで、ボクは右手首に巻いた腕時計のようなもの、ラツキーさんに話しかける。

「ラツキーさん。ふたりは湖の方みたい。そつちまで迎えに行きたいんだけど、運転おねがいできるかな。」

「ワカッタヨ。ミズウミマデ、ダネ。」

ラッキーさんはぴこぴこと音を出しながら答えてくれた。

見た目は腕時計みたいだけど、この子は、ボクの大切な友だちだ。

「それじゃ、チーターさん。ボクたちはこれで。ありがとうございます。」

「はいはい！ きをつけてね！ あ！ あと、どこかでロードランナーっていう、くちのわらいとりのフレンズにあつたら、がんばるのよつて、つたえてね！」

「はい。わかりました。それでは。」

バスを発車させると、聞きなれたエンジン音と振動が伝わってくる。

思えばこのバスとも、だいぶ長く一緒にいるんだよね。

ラッキーさんと一緒にまめに整備や修理はしているから、今のところ動かなくなつちやうようなこともないけど。

それでも、いつかはお別れをしないといけなくなるだろう。

そのとき、ボクはまた、泣いてしまうかも知れない、かな。

少し感傷的な気分になっていると、バスの進行方向からさんにんのフレンズさんたちが歩いてくるのが見えた。

ひとり知らないフレンズさんだけど、残るふたりはボクが待ち合わせをしていたフレンズさんだった。

「センちゃん、なんであそこでみをのりだしちやうかなー。うみでおちちやつたこと、わ

すれてないでしょー?」

「だって! かべがひかってるんですよ!? きになるじゃないですか!」

「まあまあ。こんかいはざんねんだったけど、またこんど、さいごまでのろうじやないか。」

さんには何故かびしょ濡れで、楽しそうに笑っている。湖に行っているという話だったから、ひよつとしたら水浴びでもしたのかも。

と、こちらに気づいたのか、さんには立ち止まる。ボクはバスをさんになの横にゆっくり停めて、運転席から降りる。

「オオセンザンコウさん、オオアルマジロさん。お久しぶりです。」

「これはこれはいらいぬしさん! おひさしぶりです!」

「ひさしぶりー。げんきだったー?」

「ええ。おかげさまで。」

待ち合わせをしていた筈なのに何故か驚いているのがオオセンザンコウさんで、のほほんと話しかけてくるのがオオアルマジロさんだ。

普段報告してくれるのも、待ち合わせを伝えたのも、オオアルマジロさんの方だから、多分、オオセンザンコウさんにそれを伝えてなかつたんだろう。

今朝がたの連絡で、今はお昼だから、そういうこともあるかな。

ひよっとすると、わざと伝えてなかった可能性もあるけど。

ふたりはボクの友だちのフレンズさんたちにとっても良く似てて、明後日の方向に全力疾走するひとりを、もうひとりが上手にフォローする、という関係だから。

「それで、ほんじつはどのような感じでしょう？」

「ええと、それなんですけど・・・」

オオセンザンコウさんの問いかけに、ボクは今日ここに来た用事を伝えた。

依頼は、ここで終わりということ。

――

詳しい話をする前に、はじめて会うフレンズさんと軽く自己紹介をしあった。

彼女はプロングホーンさんといって、このこうやを縄張りしているらしい。

挨拶ついでに軽く話をしたのだけど、彼女もまた、

「どこかでロードランナーという、くちのわるいひとりのフレンズにあったら、あんまりむちやはするなよ、とつたえてやってくれ。」

なんてことを言っていた。

チーターさんも同じことを言ってたけど、そのロードランナーさんは、そんなに口が悪いのかな？

それに、ふたりにとっても大切に思われてるみたいだね。

勿論、プロングホーンさんのお願いは了承した。

それから、オオセンザンコウさんとオオアルマジロさんに正式に依頼を終了する旨を伝え、依頼料のジャパリまん30個は全て支払うことと、その受け渡しについての取り決めた。

「たのしいたびだったねー。」

「・・・、なにやらふにおちませんが、いらぬしがおわりというなら、したがうまでです。」

オオアルマジロさんは相変わらずのほほんとしてたけど、オオセンザンコウさんは言葉通りに腑に落ちない表情をしていた。

「それじゃあ、ボクたちはこれで。」

さんいんのフレンズさんたちに手を振りながら、ラッキーさんをお願いしてバスを降車させる。このままみつりんの方へ向かうつもりだった。

「楽しい旅・・・か、」

ふと、オオアルマジロさんの言葉が引つ掛かり、声に出してしまう。

「みんな、元気にしてるかなあ。」

鼻の奥がツンとするような感覚がして、少しの間だけ、目を閉じた。

フレンズ紹介くイリエワニく

リエちゃんのはワニ目クロコダイル科クロコダイル属のはちゅー類、イリエワニのフレンズだよ！

イリエワニはその名前のとおり、入り江とかの海水と淡水が混ざってるようなところに住んでるんだよ！

ワニの仲間は基本的に川とか湖とか、淡水の水辺に住んでるんだけど、イリエワニは海水も平気で、海流に乗って沖合に出たりもするみたいだね！

イリエワニは、はちゅー類の中でいちばん大きい体をしていて、成体で全長4メートル、大きい個体は7メートルにもなるんだよって！

あたしがよにんぶん以上、ってことだよね？ すっごい！

泳ぎもすごく得意みたい！ 筋肉のカタマリみたいな太いしつぽをくねらせて、猛スピードで水の中を泳ぎ回るよ！

大きくて重い体なのに、泳いだ勢いでイルカみたいに水面から飛び上がることだってできるんだよって！ すごいよね！

尻尾のちからだけじゃなくて、アゴのちからもすっごいんだよ！

イリエワニの噛むちからは陸上の生物の中でもいちばん強いって言われていて、犬歯のあたりで1へいほーセンチあたり7トン、奥歯のあたりだと12トンにもなるんだよ

て!

とんでもないよね!

【こえ】ともえちゃん（しゆくしちほー）

— — —

— —

—

ここは、ジャパリパーク。

今日もたくさんさんのフレンズさんたちが、のんびり幸せに暮らしています。

ぎらぎらした日差しが照り付ける荒野を、

ふたりのフレンズさんたちが歩いていました。

「ねー、センちゃん。」

「なんですか？ アルマーさん。」

「かつてにあとをおいかけてたりしてー、だいじょうぶ？」

ふたりはさつき別れたばかりの依頼主さんを追いかけてるみたい。

勝手なこととして大丈夫？

怒られたり、しないかしら。

「だいじょうぶですよ。わたしたちはいま、きろについているだけです。そのほうこうがたまたま、いらぬしのむかうさきと、おなじであるだけですよ。」

「そっかー。でも、わたしたちのじむしよはー、ぎやくほうこうだけどねー。」

「・・・つ、こ、こまかいことはいいんです！ とにかく！ こんな、ちゅうとはんぱなおわりかたは、たんでいのながすたります！」

「あはは、ほらー、やつぱりおいかけらんじやーん。」

あらあら。

センちゃんったら、案外ちやつかりしてるのね？

アルマーちゃんもここにこ笑って、お茶目さんなんだから。

「まー、いいさー。わたしはセンちゃんにつきあうよー。」

「と、とうぜんです！ ゆうしゅうなたんていには、ゆうしゅうなじよしゆが、つきものですから！」

「あははー、ほめられたー。わーい。」

「もう・・・、くすくす・・・。」

うふふ。よかった。

やつぱりふたりとも楽しそう。

ふたりのフレンズさんたちの、楽しい旅は続きます。

けものフレンズR くびわちほー 第06話 「かぞくのきずな（後編）」アバン・Aパート

ヒョウちゃんたちの案内で辿り着いたのは、広場からだいぶ離れたところだった。

ここまで歩いてきた道もうっそうとした様子だったけれど、ちょうどそれが途切れたかと思うと、ごつごつした岩肌が見えている山のふもとに出た。

密に生えた草木はその枝葉を山の方までは伸ばしておらず、その間には少しだけひらけた場所があった。ひよつとしたら、この辺りがとなりのちほーとのさかい目なのかもしれない。

「いーが……、」

「せやで。」

思わず呟いた声にヒョウちゃんが反応する。

そのひらけた場所には、明らかに人工物と思われるものがいくつも置かれていた。

立てられた金網だったり、整えられた木材だったり、重機だったり。

それから、わたしやフレンズさんのふたりかさんにんぶん、くらいの大きな穴が地面に空いていたり、山肌に大きく崩れたようなところがあったりと、

「ここが、ウチらがシーラをさいごにみたばしよや。」

まるで建築現場のようなその場所が、シーラさんを見た最後の場所、であるらしかった。

リエちゃんとメイちゃんはゴリラちゃんのフォローに行つてくるとのこと、ここまで案内してくれたのはヒヨウちゃんとクロちゃんのふたりだ。

「ここって、どういう場所なの？」

わたしは先を行くヒヨウちゃんたちの背中に声をかける。ヒヨウちゃんは頭の後ろで手を組みながら振り返った。

「わからん。シーラは『いせき』やゆうとつたわ。」

「遺跡？ それって、ヒトの、ってこと？」

「たぶんな。ウチらもくわしいはなしはきいてへんから、わかれへんけど。」

ヒヨウちゃんは苦笑交じりの顔で続ける。

「シーラはおもろそうなもんみつけると、ぜったいにひとりでしらべるんよ。ウチらにてつだわせゆうても、きくみもたん。んで、ひとりでしらべおわつたら、ウチらをおつめてとくいげにせつめいしだす。それがいつものパターンやね。」

「シーラねえさまは、いぜんからこのばしよをきにかけていたのですけど、ながいこと、なにもわからないままみたいでしたの。」

ヒヨウちゃんに続いてクロちゃんが口を開く。

「それが、このあいだのサンドスターのふんかのときから、ちょうさにしんてん、がでたとかで、それから、ほとんどこのばしよにいりびたるようにしていましたわね。」

うーん。

見た感じ、何かを建設しようとしていた場所だということはあるのだけど、それとシーラさんが行方不明になった事実が、どう繋がるんだろう。

ええと、こういう場合、考え方を変えた方がいいかも。

この場所自体、というよりも、ここを調べていたというシーラさんの行動から、何かわかることはないかな？

「シーラさんはここに入り浸って、何をしてたの？」

「うーん、せやなあ。」

眩くように答えると、ヒヨウちゃんは辺りを見回すようにして、

「なんやら、あつちのやまのほうをいろいろしらべたり、してたようにおもうわ。」

「それから、いちごうくん、をよくつれてきましたわね。」

「1号くん？」

オウム返しに聞き返すと、クロちゃんは「ええ。」と短く答え、それから説明をしてくれた。

「おおきなからだをしていて、シーラねえさまのめいれいでいろいろなことができるんですけど、むかし、シーラねえさまがつくった、ろぼつと？とかいうもの、らしいですわ？」

「ええ!? ロボット!？」

その説明に思わず声が大きくなる。

じぶんでロボットを作るなんて、わたしにはもちろんムリだし、ヒトにも難しいことなのに、そんなことができるだなんて……。

「せいしきめいしようは、なつくるうおーくんーごう、やったかな？ ウチがシーラと、でおうたときには、すでにつれとつたな。」

「へえー、シーラさんって、ホントにすごいフレンズなんだね。」

本当に、とつても頭のいいフレンズさん、であるらしかった。

そんな頭のいいフレンズさんがいなくなったことと、その直前まで調べていたこの場所、やっぱり何か関係があるように思う。

だとすると、やっぱりここで何をしていたかがもう少し詳しくわかれば、シーラさんの行き先について、手掛かりがつかめるんじゃないだろうか。

そう思い、ふたりに質問を投げてみる。

「その、1号くんって、今はどこにいるの？ 今まで通ってきた場所にはいなかったと思

うけど……。」

「それが、シーラねえさまといっしょに、いなくなってしまったのですわ。」

「せやね。ふしぎなはなしやけど。」

「不思議？ どうして？ シーラさんと一緒にどこかにいった、つてことなんじゃないの？」

頭に浮かんだ疑問をそのまま投げかけてみると、ヒョウちゃんは「んー、」と考えるようにして、

「ーごうはずうたいがでかいぶん、うごきがのろくてな。さすがになわばりからでていこうとしてたら、ウチらのだれかがきづくおもうわ。」

「なるほど……。」

少なくとも、その1号くと一緒に、感覚に優れたフレンズさんのおめめをかいぐつて、なわばりの外に出ていくのは難しいみたいだね。

であれば、いなくなつたその日も、シーラさんは1号くと一緒にこの場所にいた可能性が高いだろう。

となると、やつぱりシーラさんがここで何をしていたのか、それを理解することが、第一歩のような気がする。

「シーラさんは1号くんをここに連れてきて、何をさせてたのかな？ あと、いなくなつ

た日のこととか、何か、覚えてること、ない？」

わたしが再度質問を投げかけると、ヒヨウちゃんはしばらく思い出すように空を仰いで、それから口を開いた。

「せやなあ．．．、おらんくなるちよつとまえから、なんやらーごうに、つちをようさんあつめさせとつたね。そのあたりのじめん、でつかいあな、あいとるやる？」

ヒヨウちゃんが指さした先は、さつき見た大きな穴のところだった。

さつきは建設現場だし穴くらい空いているものかなと思つたけど、なるほど、あれはシーラさんが空けた穴だったみたい。

「いなくなつたひ、のことといえは．．．、」

と、次はクロちゃんが声を発する。

「なにか、どーんと、すぐくおおきなおとがしたのをおぼえています。また、サンドスターのふんかがおきたのかとおもつたくらい、でしたわね。」

どーんという、大きな音、かあ。

建築現場でする大きな音って言うのと、重機だったり、ボーリングマシンだったりの立てる音なんかが思い当たるけど、少なくとも後者は見当たらないし、前者も土埃が運転席をすっかり覆っていて、誰かが使つたような形跡はない。

だとしたら．．．、なんだろ。

少しでも手掛かりがないか辺りを見渡していると、となりにいるイエイヌちゃんの顔色があまり良くないことに気づいた。

「イエイヌちゃん、どうしたの？ お腹いたいの？」

「いえ、たいちようがわるいとかでは、ないのですが……。さきほどから、すごくイヤなおいがして……。」「

「イヤな臭い？」

それって、あたしのあせのにおい、とかじゃないよね……？

こうやで水浴びできなかったから、そうげんで目覚めてからずっと着のままだし、さすがに自分でも気になってきたくらいなんだけど……。

なんてことを思ったのだけど、取り越し苦労だったみたい。

「くうん。あちらのほうから、においます。きけんなかんじのにおい、というか、きなくさいにおい、なのですけれど。」

きな臭い……、

えっと、それって、ひよつとして。

ふと、わたしの頭にある考えが浮かんだ。

ここは山のふもとにある建築現場だし、ひよつとしたらそういうモノも、あるかもしれない。

でも、

その考えが正しいとしたら……。

ぶんぶん、とかぶりを振る。

まだ、そうだと決まったわけじゃない。

なら、せめてその真偽だけでも、確かめないと。

わたしは険しい表情をするイエイヌちゃんの手を取って、その顔を覗き込みながら言った。

「イエイヌちゃん。その匂いの元まで、案内してくれる？」

イエイヌちゃんは少し困ったような顔をしたけれど、こくり、頷いてくれた。

ちよつと待つて、とみんなに伝えて、イエイヌちゃんの案内で辿り着いたのは、建築現場で使用するのだろう、いろんな資材が置かれている一画だった。

整理されて置かれた資材をひとつひとつ確認していくと、わたしが予想した通りのものが、びっしり詰まった箱を見つけてしまった。

ああ……、やつぱり。

わたしは自分の予想が合ってしまったことに顔をしかめながら、箱を見る。

箱の側面には、文字とか絵が入っているひし形の模様が、オレンジ色の塗料で描かれ

ている。

そして、中身をよくよく見ると、いくつか使われたのだろうか、少しだけスキマが空いていることに気づいた。

「ともえちゃん。それです。その、ぼうみたいなものから、イヤなおいぎします。」

「ありがと、イエイヌちゃん。もう大丈夫だよ。みんなのところに帰ろう。」

これ以上イエイヌちゃんに嫌な思いをさせたくないし、すぐにその場を離れることにする。

本当にわたしは、いつもイエイヌちゃんに助けられてばかりだ。

みんなのところに戻るわたしたちの表情は、たぶん暗いものだったと思う。

イヤな匂いを近くで嗅いってしまったイエイヌちゃんと、当たってほしくない予想が、当たってしまったわたし。

そんな様子だからか、戻ってきたわたしたちを見るヒョウちゃんの表情は、とても心配そうなものだった。

「なあ、ともえ。」

ヒョウちゃんはすごく真面目な顔をして、かけた言葉の先を続ける。

「あんたのきもちはうれしいけど、これいじょうしらべても、しゃーないおもうわ。」
ゆつくりと首を横に振りながら、ひとり言のように呟く。

「シーラはいろんなもんしりたがるやつやったさかい、なんやおもしろいもんでもみつけて、ふらふらどつかいってまったんかしれんし。」

そして、とてもつらそうに、ぎゅっと目を閉じる。

「・・・どこぞで、セルリアンにでもくわれたんかしれん。せやから、もうええねん。」
まるで覚悟を決めたかのような言葉だけれど、ヒヨウちゃんの唇は、少し震えていた。
真つ先に反応したのはクロちゃんだった。

「ねえさま！ それはありえませんかとわたくしはなんども・・・！」

その声は怒っているような、すごく心配しているような、どっちもが混じっているものだ。

ヒヨウちゃんはきつと、そんな声色の意味を痛いほどに理解しているのだろう。目を細めながら、言葉を返す。

「せやな。このなわばりんなかで、ウチらにきづかれずにシーラをいてこます、なんてのは、いくらなんでもむりやろな。」

「でしたら、」

「せやけど、アイツがじぶんでなわばりをでたんなら、そのさきはウチらにもわからん。」

「それは・・・、そうかも、しれませんが・・・。でも・・・！」

淡々とした口調で返されて、クロちゃんは泣きそうな顔で押し黙ってしまった。

なんとなくわかる気がする。

ヒヨウちゃんがそんな口調で話しているのは、きつと、これ以上の心配をさせないためだ。

クロちゃんはもちろん、あたしたちにも。

みんなに心配をさせないために、さも仕方のないことのように装っている。

本当は、ヒヨウちゃんだって、とつてもつらい筈なのに……。

けれどそれが、ヒヨウちゃんの覚悟なのかもしれない。

その握りしめた拳が、ふるふると震えているのを見て、わたしもまた覚悟を決める。

わたしなりに考えた、真実を話す覚悟を。

「ヒヨウちゃん。それは違うよ。」

わたしが口を開くと、ヒヨウちゃんの視線がこちらに向く。その視線をまつすぐに捉えながら、わたしはおはなしを続ける。

「自分で言ってたでしょ？ 1号くんが一緒にいたなら、誰かが気づくって。」

「それは、そうやけど……。」

そう。ヒヨウちゃんは言っていた。

1号くんと一緒になわばりを出ようとしたり、誰かが気づくと。

「シーラさんがいなくなったとき、誰もそれに気づかなかった。それはつまり、可能性が

ふたつに絞られるということだよね。」

指を2本立てながら、わたしはその先を続ける。

「ひとつは、1号くんを置いて、シーラさんひとりでなわばりを出たという可能性。でも、そうだとしたら、1号くんがなわばりのどこかに居ないとおかしいんだ。だから、その可能性はないと思う。」

立てていた指の1本を下ろし、人差し指だけを残しながら、わたしは言った。

「そしてもうひとつは、シーラさんがなわばりを出していない可能性、だよ。」

「なわばりを……、でてへん?」

ヒョウちゃんがわけのわからないという表情で、こちらを見る。

「なんやそれ。どういうこっちゃ。それこそ、ありえへんやろ。」

「そうですね。げんにシーラねえさまは、このみつりんのどこにもいないのですよ?」

クロちゃんもまた、怪訝そうな顔でこつちを見る。

たしかに、クロちゃんの言うことももつともなんだけど、でも、これ以外に全てのつじつまが合う答えはない、と思う。

「みんなが知らない場所にいるんだよ。だから、見つけれなかったんだと思う。」

わたしがそう言うと、ヒョウちゃんは呆れたような顔をして、

「あんたなあ。ウチらがただけながいこと、ここにおるおもてんねん。このみつりん

でウチらのしらんばしよなんぞ、」

『いせき』・・・、ですか?」

ハツとした表情で、眩くように言ったのはクロロちゃんだ。

わたしはこくり、首を縦に振る。

「シーラさんは面白そうなものを調べるときは、ひとりで調べるんだよね? 調べ終わるまでは手伝わせてもくれない。そして、この場所はまだ調べてる途中だった。」

つけ加えると、シーラさんがいなくなる直前までいたのも、この場所だ。

それはつまり、シーラさんはこの『いせき』のどこかにいるということ。

「いやいやいや、それはおかしい。げんにここにはだーれもおらんやん。シーラのおいもせーへんし、かくれられるようなばしよもないやん。」

そんなわたしの考えは口にしなくとも伝わったのか、ヒョウちゃんは手をぱたぱたと振りながら否定する。

「シーラねえさまは、つちをあつめていましたわ。つちのなかなら、においももれないし、みつからない。つまりそういうこと・・・、ですか?」

口元に手を当てながら考えるようにしていたクロロちゃんは、すごく深刻そうな顔で言う。

その表情から、言外に言い含めたことがわかる。

ヒヨウちゃんもそれに気づいたのか、とても不安そうな顔でわたしの答えを待っていた。

「はんぶん当たり・・・、かな。」

「そんな・・・!」

それはたぶん、ヒヨウちゃんがさつき話していたようなことよりも、ひよつとしたら残酷な出来事かもしれない。

ふたりにそれを突き付けるようなことを平気で行っているあたしは、とても残酷なヒトなのだと思う。

こんな場面で、ここまで冷静でいられることに自分でも驚くけれど。

でも、その方がいい。

つらいのは、ふたりや、みんななのだから。

今は、あたしがうろたえていい場面じゃない。

真実を伝える役を、ちゃんと演じないと。

このままみんなが、シーラさんを見つけれないままでは、

何よりも、シーラさんがかわいそうだ。

「ふたりとも、ついてきて。さつきわかったんだ。シーラさんが、どこにいるのか。」

けものフレンズR くびわちほー 第06話「かぞくのきずな（後編）」

フレンズ紹介！メガネカイマン！

メイちゃんは何ニ目アリゲーター科カイマン属のはちゅー類、メガネカイマンのフレンズだよ！

メガネカイマンっていう名前は、目の間の骨が盛り上がっていてまるでメガネをかけてるみたいに見えるからつけられたんだよ！

メガネカイマンは川とかに住むことが多いんだけど、イリエワニと同じで海水が入り混じった、きすいいきに住むこともあるんだって！

やっぱり姉妹、だよね！

体はイリエワニほど大きくなくて、大きい個体でも全長2メートル50センチくらい、みたい。それでもじゅうぶんおっきいよね！

卵を産むときには大きな塚みたいな巣を作るよ！ 落ち葉とか木の枝を泥に混ぜて作るんだけど、その内に葉っぱや枝が発酵して、そのときの熱で卵をあたためるんだって！

頭いいよね！ やっぱり、メガネかけてるからかな？

メガネカイマンを映した写真で、すつごく素敵な写真があるんだけど、チョウとハチ

がメガネカイマンの涙をすすっていると、撮ったものなの！

虫さんにとつて動物の涙に含まれる塩分とかミネラルはすごく貴重みたいで、飲もうと近寄ることも多いんだけど、大抵の動物は嫌がって逃げちゃうみたい。

でも、ワニはそういうのぜんぜん気にしないで、嫌がって暴れたりもしないみたいだよ！

ふところがおつきいよね！

「こえ」ともえちゃん（しゅくしちほー）

「シーラねえがみつかったというのはほんとうか!？」

息を切らせて駆け込んできたゴリラちゃんは、開口一番、弾むような声でそう言った。その勢いに気おされながら、けれど、なるべく声のトーンを落とすようにして答える。

「うん。これからみんなで、と思つて。」

「そうか！　ありがとうともえさん！　きみはおんじんだ！」

ゴリラちゃんはそう言うと、両手でわたしの手を握り、ぶんぶんと振る。

この様子だと、ヒヨウちゃんもクロちゃんも、ゴリラちゃんたちにはまだちゃんと話せてないみたいだった。

その表情はとても嬉しそうで、とても居たたまれない気分になる。

わたしはこれから、その表情を失わせるような真実を伝えなくてはいけない。それがとてもつらくて、今にも倒れそうなほどだ。

でも、このまま何もしていないことは、あたしにはできない。

「つたく、おそいぞおまえら！ やつとシーラねえがみつかったというのに！」

「はあ、はあ、リーダーが、はやすぎるんですよお・・・。」

「ホント、シーラがみつかったからって、はりきりすぎよね。」

「ハハ、せやな・・・。」

「そうですわね・・・。」

にっここと嬉しそうなさんんに対して、ヒヨウちゃんとクロちゃんの表情はとても暗い。

「どうしたの？ ふたりとも、かおいろわるいけど。」

「・・・なんでもあらへん。」

ヒヨウちゃんの元気がない返しに、リエちゃんはしばらく不思議そうな顔をしていたけれど、

「うん。わかったよ。」

とだけ言うと、ふたりのところを離れる。そしてそのままこっちに近づいてきて、こっっそり耳打ちをしてきた。

「ふたりのあのかんじ。そういうことよね？」

全てを察したようなその言葉にびっくりして、思わずその顔をまじまじ見てしまう。

「あたしは、かくごしてたからさ。ありがとう。つらいやくをおしつけて、ごめんね？」

ぼん、と肩を叩かれたかと思うと、リエちゃんはそのまま何事もなかったかのようにわたしのところを離れ、メイちゃんのとなりに戻った。

そんな、ひとことふたことくらいのおねぎらしい言葉だったけれど、肩にのしかかっていた重荷がだいぶ軽くなったように思う。

リエちゃんは、見た目以上におとなで、カッコイイ子だった。

「それで、シーラねえはどこにいるんだ？ この『いせき』のどこかにいるんだろう？」

ゴリラちゃんは待ちきれない様子で、その場で足踏みをしている。わたしはそんなゴリラちゃんに背を向けながら、

「うん。ついてきて。」

と言って歩き出す。

わたしのとなりには、イエイヌちゃんとかくびわちゃん。ふたりとも心配そうな顔でわたしの様子を伺っていた。

だいじょうぶだよ。ふたりとも。

リエちゃんにも励ましてもらったし。

あたし、ちゃんとやるから。

「それにしてもシーラねえはこんなどこにかくれて、なにをしてたんだろうな。」

「いつものようにごはんもわすれて、ちょうさにぼつとう、してたのではないでしょうか？」

後ろからゴリラちゃんとメイちゃんの声が聞こえてきたけど、わたしたちは無言のまま歩く。

目指すのは山の裾、さつきまで山肌に大きく崩れたような跡があつた場所だ。

今はそこには、ぼつかりと大きな穴が空いている。洞窟の入り口のようなそこは、ゴリラちゃんたちを呼びに行く前に、みんなで掘つたところだ。

いつもなら楽し気に穴掘りに興じていただろうイエイヌちゃんも、そのときばかりは沈痛な面持ちで、黙って穴を掘っていた。

「ここに、はいるのか？」

「そうだよ。明かりはあるけど、暗いから気をつけてね。」

「ああ、わかつた。きをつけよう。」

「あと、ここからは静かにね。おねがい。」

「うん？ ううん。よくわからんが、わかつた。おんじんのきみがいうんだ。そうしよう。」

ゴリラちゃんの言う、おんじん、という言葉が胸に刺さる。

わたしは、そんなものでは、けっしてないというのに。

中はこうやの地下水脈と同じように、ところどころ明かりが設置されていて、夜目が効かないわたしでも歩ける程度の明るさはあった。

おそらくは、ここも何かのアトラクションを建設中だったのだと思う。建設中のまま遺棄されて、それをシーラさんが『いせき』として調べていたんだろう。

入り口が埋まっていたのは、たぶん、シーラさんが埋めたのだ。

埋めた理由は、この洞窟の続く先にある。

「はいだよ。」

道中無言のまま歩いて辿り着いたのは、まだまだ洞窟の途中と思えるような、これまで通ってきたところとほとんど変わらない場所だった。

違う点を挙げるとすれば、奥の方に大きなロボットが、まるで通せんぼをするかのように向こうを向いて立っていること、ロボットとは別に、サッカーボールみたいな形の機械が地面に転がっていること、それから、

その機械の傍らに、シーラさんのものらしき白衣と眼鏡が、無造作に置かれていること。

「な、なあ。これって……。」

「ゴリラちゃん。おちついて聞いてね。」

白衣と眼鏡を視界に収め、明らかに挙動不審になったゴリラちゃんに、わたしは話しかける。

思わず声が震えそうになるけど、なんとか平静を装った声を絞り出せた。

「あたしたちがさつき来たとき、この洞窟の入り口は埋まっていたの。きっと、シーラさんが埋めたんだと思う。その理由は、この先にあるんだ。」

奥の方で通せんぼをしている1号くんを指さして、

「あそこに、ロボットがいるよね。1号くん、だつたかな。あの子の立つてる場所から少し先に、大きな空洞があるんだけど、」

大きな声にならないように注意しながら、わたしは言葉が続けた。

「そこに、大きなセルリアンが、たくさんいるの。」

「せるりあん……?」

ゴリラちゃんはわたしの話に、わけがわからないという表情を向ける。

「えつと、まって……? これ、シーラねえのだよね? いりぐちがうまってたって、

どういふこと? たくさんのセルリアンって、なんなの……?」

ゴリラちゃんの泣きそうな顔をまっすぐに受け止めながら、わたしは説明を続ける。

「外にね、爆薬っていう、ヒトが作った道具があつたんだ。すごく大きな衝撃を出す道具

で、穴を掘ったり、埋めたりできるんだけど、巻き込まれたら大ケガしちゃうような、すごく危険なものなの。」

資材が置かれていた一画にあった、あの箱。側面にオレンジ色をしたひし形のマークが描かれている箱の中には、筒状の爆薬が詰まっていた。

そして、それはいくつか使われた形跡があった。

「シーラさんはこの『いせき』を調査していて、セルリアンを見つけたんだと思う。だから土を集めて、この洞窟を埋めようとした。でも、その途中でセルリアンに気づかれて、爆薬を使って、急いでここを埋めたんだ。」

シーラさんは色んな道具を作れたり、使ったりできるフレンズだと言っていた。1号くんみたいなロボットを作れるぐらいなんだから、爆薬を使うことだってできただろう。

でも、たぶん、そのときに、

「たぶん、そのとき、巻き込まれちゃって、シーラさんは……、」

言いよどんでしまった言葉の先は、どうしても続けることができなかった。

わたしの説明を聞いて、ゴリラちゃん顔から表情が失われる。

目に光がなくなつて、まるで夢でも見ているかのように、視線をさ迷わせる。

そして、ふらふらと歩き出したかと思うと、遺された白衣と眼鏡の前で立ち止まり、が

くりと膝をついた。

ヒヨウちゃんたちがあわてて駆けよるんだけれど、視界には入らない様子で、黙ったまま白衣と眼鏡を持ち上げると、そのまま両手で抱きしめた。

「ひよつとしたら、そうなのかもって、おもってたんだ……。」

ひとりごとのように、ぽつりと。

ゴリラちゃんは消えりそうな声で呟く。

「シーラねえは、かってにいなくなることはあつたけど、こんなにながく、いなくなることはなかつたから……、だから、そうなのかも、って……、でも……！」

ぎゅつ、と。

白衣を抱きしめる腕に力がこもる。

その背中小さく震えていて、まるで迷子の子供のようだ。

「どうして!? なんで!? なんでいつてくれなかつたの!? みんなでたちむかえば! ううん! みんなでにげることだつてできたはずなのに!」

その問いに答えてくれるシーラさんは、もういない。

それはきつと、ゴリラちゃんにもわかつていることだ。

それでも、問かけずにはいられない。

その気持ちは、痛いほどにわかつた。

あたしだって、たいせつな誰かを失ったら、きつと……。

「なんでだよお……！ シーラねえ……っ！」

ゴリラちゃんの慟哭が洞窟にこだまする。

その目からは、大粒の涙がぼろぼろとこぼれていた。

「ゴリラちゃん……、」

たまらず声をかけようとするのだけれど、ゴリラちゃんの周りに立つヒヨウちゃんたちみんながこつちを見て、ふるふると首を振った。

……うん。わかったよ。

これは『かぞく』のこと、だもんね。

これ以上、あたしがでしゃばるのは、よくないことだ。

こくり、頷いてヒヨウちゃんたちに答えると、みんなも同じように頷いて、返事を返してくれた。

「なあ、リーダー。もうええやろ。」

ヒヨウちゃんが、ぽんと肩に手を置きながら声をかけると、ゴリラちゃんはぼろぼろと涙をこぼしながらふり向いて、すごく怒ったような声で言葉を返す。

「なにがだ!!? なんにもいいことなんてない! シーラねえは、シーラねえは……！」

「そのシーラが、あたしたちをきけんなめにあわせないように、ひとりでなんとかしよう

としてくれたんでしょ？ そのきもちもちは、わかってあげないと。」

すぐ横にしゃがみ込んだりエちゃんやんが、ゴリラちゃんの顔をのぞき込む。

とても真剣な顔なのだけど、どこか慈愛を感じさせる、その表情。

「でも……！ わたしはシーラねえに、なにも……！」

ぶるぶると肩を震わせて、ゴリラちゃんは言葉を詰まらせる。

「なにもしてあげられなかった。なにもきづかなかったのは、わたくしたちもおなじです。ねえさまただけではありません。」

「そ、そうです……。あまりじぶんを、せめちやダメです……。ぐすん、」

クロちゃんもメイちゃんも、ふたりとも泣きそうな顔で、けれどゴリラちゃんのことをすごく心配しているのが伝わってくる。

「わたしは……。わたしは……。！」

ゴリラちゃんはまだ、言いたいことがいっぱいあるという表情をしていたけれど、このままみんなに任せていけば、ちゃんと落ち着いてくれると思う。

こうして、つらいとき、泣きたいとき、

それを分かち合い、一緒に泣いてくれる誰かがいる。

それはたぶん、何よりも素敵なことだと、わたしは思う。

かぞく……。かあ。

『グオオオオオオオオオン!!』

——と、

洞窟の奥の方から、唸り声のような大きな音が聞こえる。

全身をびりびり震わせるような迫力のある声、けれどどこか無機質な響きのある声。洞窟の奥には、大きな部屋にいつぱいのセルリアンがいる。

これだけ大きな声で話をしていたら、さすがに気づかれてしまったみたいだった。

「ともえちゃん。」

となりに立つイエイヌちゃんが真剣な顔でこちらを見る。

「うん。急いで逃げよう。」

わたしはこくりと頷いて答える。反対側にいるくびわちゃんもまた、こくこくと頷いた。

わたしはゴリラちゃんたちのところに駆け足で近づき、声をかける。

「ねえ、みんな。」

つらいと思うけど、今は逃げよう。戻ったら何か対策を立てないと・・・、

なんて、考えていたセリフを言おうとしたのだけど、それよりも先にヒヨウちゃんが

口を開いた。

「あー、あかんわ。さすがにセルリアンがこっちにきづいたかもしれんなー。」

ヒヨウちゃんはさつきまでの真面目な顔はどこへやら、にやははと笑う。

「かも、ではなく。かくじつにきづかれましたわね。あれだけのおおごえですもの。」
クロちゃんもまた、いつもの取り澄ましたような顔で、

「でしようね。まったく、うちのリーダーときたら。・・・うう、なさけなくつてなみだが、」

メイちゃんも、うるうると目を潤ませながら、

「ホント、こういうとき、たよりにならないのよね。」

そしてリエちゃんは、苦笑交じりの顔を見せる。

「おまえたち・・・、そんな、わたしは・・・、」

ゴリラちゃんひとりだけが、取り残されたような表情でみんなの顔をきよろきよろと見ていた。

そんな。

なんでみんな、そんなひどいことを。

あんまりにも驚いてしまって、わたしが何も言えないでいると、ヒヨウちゃんがまたにやははと笑って、

「せやからウチらは、そんなあんたをほっとかれへんのや。」

その台詞に、みんなは頷きあつたかと思うと、ものすごい勢いで走り出した。

「ええっ!? みんな、そっちはダメだよ!」

「あんたらはリーダーつれて、はよにげ! あとはウチらがなんとかしたる!」

捨て台詞のような言葉を背中越しに投げかけながら、ヒヨウちゃんたちみんなは1号くんの横をすり抜け、奥の空洞へ飛び出していった。

いきなりの行動に呆気に取られてしまっていたのだけど、なんとか事態を飲み込み始めたところで、イエイヌちゃんが声をかけてくる。

「ともえちゃん! わたしたちも!」

「うん! くびわちゃんはここでまって!」

こくこくと頷くくびわちゃんと、今も呆然としているゴリラちゃんを置いて、わたしたちは駆け出す。もちろん向かう先はみんなの向かった先、奥の空洞だ。

1号くんの横をすり抜けて、空洞の入り口に立つ。

見ると、すでにみんなはセルリアンとの戦いをはじめていた。

ヒヨウちゃんとクロちゃんはふたりで一体の大型セルリアンと向かい合っている。

ヒヨウちゃんに向かって振り下ろされた触手をクロちゃんが横からいなし、ヒヨウちゃんはその隙に胴体に爪の一撃を与えていた。

「にやはは、ないすふおろーやでクロちゃん。」

「まったく、ヒヨウねえさまはあいかわらず、つめがあまいですわ。」

「ほんまに？　ぺろぺろ・・・、うえ、まつず！」

「だからそういうことではなく。」

戦いの最中だというのに、ふたりともいつもの調子でぼんぼんと会話をしている。

それだけ余裕があるということなのか、それとも。

ひよつとしたら、悲しみとか、怒りとか、色々な感情が混ざり合って、一周まわって素に戻っているだけなのかもしれない。

リエちゃんとメイちゃんも同じように、ふたり一組で一体のセルリアンと対峙していた。

「メイ、あんまりむりはしないようにね。」

「はい。リエちゃんも、やりすぎないようにちゅういしてくださいね。」

ヒヨウちゃんたちと同じように会話をしながらの戦闘なのだけど、こちらは更に余裕があるように思う。

『グオオオオオオオオン！』

と、対峙する大型セルリアンが突進してきた。メイちゃんはぴよんと飛びのいて距離をとるのだけど、リエちゃんはそのままだ。

あぶない！と思わず声が出そうになるけれど、ぜんぜん、取り越し苦労だったみたい。

リエちゃんは自分の倍以上ある大きさのセルリアンの突進を難なく受け止めていた。

両足と太いしつぽを地面に突き立てて、ものすごいちからでセルリアンを押し返している。

「ひさしぶりのおおがただし、あれ、やろつかかな？」

少し楽しそうな顔をしたリエちゃんは、セルリアンに突き立てていた両腕をぎりぎりと絞り始める。両腕に挟まれた箇所が、つねられた皮膚のようにつぶれ始めた。

うわあ・・・、なにあれ、すごいいたそう。

それだけでもセルリアンに十分にダメージがあるように思うのだけど、リエちゃんはセルリアンを掴んだまま、しつぽを地面に叩きつけて全身をものすごいスピードで横回転させた。

「めつ、なんとかぼつとうがー。」

わざめい、なんだろうか。気の抜けた掛け声とは対照的に、とんでもない技だ。

セルリアンは回転の勢いに負けて一緒にぐるぐると回ったかと思うと、そのままはじけ飛ぶように明後日の方向に吹っ飛んで、そのままごろごろと転がって行く。

それだけじゃなくて、回転がおさまったりリエちゃんの手には、セルリアンの体の一部が残っていた。千切れちゃった、ということなんだろうか。

・・・うええ。

「あー、くらくらするー。」

「もう、だからやりすぎないようにっていったのに。」
「うーん。もうしないのよー。」

回転のダメージはリエちゃん自身にもあるみたいで、頭に手を当てながら足元をふらつかせていた。

と、さつきまで向かい合っていた一体をしとめたんだらう、ヒヨウちゃんたちがリエちゃんたちのすぐ近くまで来ていた。

「しっかし、ケンカふっかけたんはええけど、こりやけっこうしんどいで？ どないしよ？」

「どないもこないも、やることはひとつですわ、ヒヨウねえさま。」

にやはは、と笑いなから言うヒヨウちゃんに、クロちゃんはいつもように澄まし顔で、「わたくしたちのたいせつなかくぞくをなかせたこと、こうかいさせてあげるだけです。」

けれどぞつとするような声色で、そんなことを言う。

そして、ぼうつと目を光らせながら再び口を開くと、

「おどれらまとめてボテくりまわしたんぞゴラアアア——ツ!!!」

一瞬、誰がその怒声を発したのかわからなかった。

けれど聞こえてきた声と、目で見たものは確実にそれで。

ええ？ ええ!?

あれ、あのおっかないの、クロちゃんなの!?

「お、でたでた。おっかないほうのクロだ。」

「あ、あいかわらずこわいです……。」

「ほんまぐちわるいなあ……、おねーちゃん、クロちゃんのしょうらいがしんぱいやわあ。」

わたしは目をぱちぱちしながらその光景を見るんだけど、みんなは見慣れてるかのような雰囲気だ。リエちゃんは相変わらず動じてないし、ヒヨウちゃんもいつもどおりの感じだし。

メイちゃんだけが、なんだかいつもより怯えているようにも思うけど。

「わたし、こつちのクロちゃんにがてです……、ぐすん。」

「そう? あたしはけっこうすきだけど。かわいくない?」

「わかるわあ。いつものかしこまったクロちゃんとのギャップがたまらんね。」

「わたしにはまったくくりかいできません……。」

「メイはよく、こつちのクロになかされてたもんね。」

なるほどねえ。

そういうことなら、メイちゃんの態度もわかるかも。

「せやったねえ……、しみ、しみ。」

うんうん。

しみ、しみ。

「しみ、しみ。ちやうわボケあねども！ さつさと『やせいかいほう』したらんかいっ！」

「『はいっ。』」

はいっ、とわたしまでお行儀よくお返事しそうになって、われに返った。

あらためてみんなの戦いぶりを見るのだけど、みんなとても強い。

ひとりひとりの強さももちろんだけど、うみべで見たハンターさんたちの戦いぶりに負けないくらいに連携が取れていて、あんなにいっぱいいるセルリアンたちと互角以上に渡り合っている。

でも……。

「はあ、はあ……、さすがに、きつついで、これは。」

「おねーちゃん、もうへばったん？ はあ、まだまだ、てきはあ、ぎよーさんおるでえ？」

「ふう、さすがに、つかれてきたわね。」

「うう……、でも、もうひとぶんばり、がんばらないと。」

やっぱり数の不利はどうにもならないみたい。みんな、だんだんと疲弊していつてい

る。
このままじゃ、誰かケガしちやうかもしれない。

となりで様子を伺っていたイエイヌちゃんも、同じことを思ったんだろう。

まっすぐに目が合い、こくり、頷きあう。

「イエイヌちゃん。お願いできる？」

「はい！ ともえちゃんは、さきにふたりを！」

「りようかい！」

言うが早いか、わたしは元来た方へ駆け出す。イエイヌちゃんはわたしとは逆方向、セルリアンのひしめく空洞の方へ駆け出した。

ここはイエイヌちゃんに任せよう。

まだ疲れていないイエイヌちゃんなら、みんなのフロアに入って、逃げるための時間を稼げるはずだ。

わたしは先にくびわちちゃんとゴリラちゃんを連れて、外に逃げないと。

「くびわちちゃん！ ゴリラちゃん！ こっちは大丈夫!？」

1号さんの横を通り抜け、すぐにふたりのところに辿り着く。

「・・・だいじょうぶ、こっちは、せるりあん、きてない。」

「そう。よかったあ・・・。」

ふたりはさつきと変わらない様子でたたずんでいる。

そう、変わらない。

ゴリラちゃんは今も白衣と眼鏡を抱きしめたまま、地べたに座り込んでいた。「むこうは、どうなってる……?」

うつろな視線を向けながら、ゴリラちゃんが聞いてくる。

焦燥しきったその表情を、とても見ていられなくて、わたしは視線を外しながら答える。

「……、セルリアンと戦ってるよ。みんな強くて、何体かは倒せたけど、でも、疲れてきているから、いちど逃げない」と。

だから、わたしたちは先に逃げるよ。そう続けようとした言葉は、ぽつぽつと呟くよ。うなゴリラちゃんの声に遮られた。

「みんな……、みんなたたかってる……、なのにわたしは……、なんで……!」
「ゴリラちゃん……、」

ゴリラちゃんはわたしの方に腕を伸ばす。

「みろ。ふるえてるだろ……? さつきから、こわくてたまらないんだ。」

どうぶつ図鑑で読んだけれど、ゴリラはとても温厚な動物だ。ちからはすごく強いけど、痛みに弱いのと、温厚な性格だから、戦ったりすることはほとんどない。

臆病な動物、と言ってもいいかもしれない。

でも、

「わたしは、こんなじぶんが、だいきらいだ。たいせつなかぞくを、うしなうかもしれないのに、うごけない、こんなじぶんが、ほんとうにきらいだ。」

ゴリラちゃんは、きつとそんな自分を変えたくて、リーダーをはじめたんだと思う。

シーラさんがいなくなつて、すっかりしなきやつて思つて。
そうしてここまでやつてきたんだと思う。

だから、

「こんなおくびようものが、リーダーなんて、さいしょから……！」

「ダメだよ！」

ダメだ。それだけは言わせない。

わたしはゴリラちゃんのそばまで行つてしやがみ込む。視線の高さを同じにして、さつきそむけてしまった顔を、今度はまっすぐに見た。

「ゴリラちゃん、自分で言つてたよ？ 目指す自分を曲げるわけにはいかないつて。ゴリラちゃんの目指す自分は、ここで諦めちゃうような子なの？」

ハツとした顔で、ゴリラちゃんはわたしの顔を見る。

その目に、少しずつだけ、光が宿っていくように見えた。

「わたしは……、わたしは……！」

——ぶん、と。

何か、虫が羽ばたくような音が聞こえた。

つられて音のした方を見ると、信じられないような光景が目に見え込んでくる。

なに？ あれ……。

なにが、おきてるの……？

起きていることの意味もまったくわからないまま、わたしは問いかける。

「くびわちゃん……？　なんで、ひかっているの……？」

くびわちゃんの体が、ぼうつと緑色に光っていた。

けものフレンズR くびわちほー 第06話「かぞくの
きずな（後編）」B・Cパート

フレンズ紹介くニシローランドゴリラく

ゴリラちゃんは霊長目ヒト科ゴリラ属の哺乳類、ニシローランドゴリラのフレンズだよ！

ニシローランドゴリラは学名がとても有名だよね！ その名も『ゴリラ・ゴリラ・ゴリラ』って、三回も言うの！ おかしいよね！

あと、ゴリラっていう名前のゆらひは、毛深い女部族、って意味の言葉みたいなんだけど、ちよつと失礼すぎると思うかな・・・。

体がすつごい大きいイメージがあるけど、身長はちよつと背の高いヒトと同じくらいで、1メートル80センチくらいなの！

でも、筋肉がいつぱいあるし、何より腕が太くて長いから、ヒトよりだいぶ大きい印象だよね！

腕を広げるとその長さは2メートルから3メートルくらいにまでなるみたい！ ヒトの場合は腕を広げた長さがだいたい身長と同じくらいだから、すつごい大きいのがわ

かるよね！

ゴリラは狂暴な動物だって、ずっと思われてたんだけど、実はとても繊細で温厚な動物なんだって！ とっても優しいんだよ！

動物園で檻に落ちちゃった子供を、ゴリラが助けたっていう例もあるくらいなんだ！でも、温厚で繊細だから痛みにも弱いし、ストレスで病気にかかったり、心臓の負担で倒れちゃったりもするんだって……。

かわいそうだよね……。

【こえ】ともえちゃん（しゅくしちほー）

くびわちゃんの体が、光っている。

そして、それだけじゃなくて、その体の前には、ぼんやりした光の輪郭が浮かんでい

る。その輪郭はしばらくして、はっきりとした像を結んだ。

「りつたい、えいぞう……？」

頭に浮かんだ言葉を思わず声に出してしまう。

そう。立体映像。何もないところに、立体的な映像を映し出す技術だ。

しょうじき、わたしもどういう原理でできることなのか、まったくわからないけれど、

少なくとも普通のヒトにも、フレンズさんにもできることじゃない。

どうして、くびわちゃんはそんなことができるの……？

何もわからないままただ驚いていると、そばにいたゴリラちゃんの口から、ぼつり、

「シーラねえ……？」

名前を呼ぶ声が聞こえた。

ゴリラちゃんの視線の向かう先は、くびわちゃん。じゃなくて、くびわちゃんの目の前に浮かぶ、立体映像だ。

たしかに、ちゃんとした目で見ると、その立体映像はフレンズさんの形をしていた。

黒いショートヘアの横には大きなお耳がついていて、かけた眼鏡は右目だけを覆っている。たしか、こういうのをモノクルというのだったか。

ワイシャツの上から黒いニット地のベストを着こみ、その上から白衣を羽織っている。襟元のネクタイとミニスカートは紺に近いような紫色だ。

スカートの下には黒いタイツを履いていて、足元には黒い飾り紐のついたベージュのブーツと、とても真面目な理系の学生、というような印象。

そして、白衣と眼鏡はゴリラちゃんが今抱えているものと同じものだ。

このフレンズさんが、シーラさん。

シーラさんは、今まで会ったどのフレンズさんより、理知的な顔をしていた。

『あー、あー、てすてす。聞こえるか？ てか、ちゃんと撮れてる？』

と、立体映像から声が聞こえる。いや、音の響く感じからすると、くびわちゃんの方から、だろるか。

ううん。今はそんなことはどうでもいい。

「やっぱりシーラねえだ！ みて！ ともえさん！ シーラねえ、いきてたよ!!」

顔をぱあつと明るくするゴリラちゃんに、わたしはできる限りの説明をはじめ。

「ええと。違うの。ゴリラちゃん。あれは立体映像っていつて、あそこにシーラさんがいるわけじゃないの。」

「え……、そう、なの？」

「うん。ヒトとかフレンズさんとかの動きや声を録画……、とつておいて、後で見たり聞いたりできるようにするものなの。だから……、」

説明を続けるにつれて、明るくなったゴリラちゃんの顔が、また少しずつ曇っていく。けれど、さつきほどじゃない。

こうして、映像越しとはいえ、シーラさんの顔を見られたのが、よかったのかもしれない。

「そっか。シーラねえはもう、いないんだね。」

ゴリラちゃんは、はつきりと、明確にその言葉を口にする。

とても健気なその様子に、たまらず抱きしめたくなるけど、がまんする。

だって、あの立体映像には、まだ続きがありそうだったから。

「ゴリラちゃん。あれはたぶん、シーラさんの最後の言葉、なんだと思う。だから、一緒に聞こう？」

わたしが提案すると、ゴリラちゃんはこくりと頷いた。

立体映像はこの洞窟の中で撮られたものようだった。

はつきりした像を結ぶシーラさんの周りには、ぼんやり洞窟の壁が映し出されている。

『こちら、チンパンジーのシーラだ。例の遺跡を探索していたら、とんでもないものを当てるってしまった。見えるか？』

被写体を変えたのだろう、奥の空洞の様子が映し出された。そこにはもちろん、ひしめき合うセルリアンの姿がある。

『大量のセルリアンが発生している。．．いや、こないだの噴火で土砂が崩れ、セルリアンの群生地に繋がってしまった、というのが正しいかも知れないな。』

映像がまた、シーラさんのワンショットに戻る。歩きながら撮っているのか、片手を白衣のポケットに突っ込みながら、足を交互に動かしている。もつとも今は映像だけ

ら、足踏みしているようにしか見えないけど。

『私はここを封鎖することにした。この映像を見ているキミ、悪いことは言わない。1号くんが立っている先には行かないことだ。・・あぁ、1号くんつてのは、あの子のことな。』

映像がまた切り替わり、今度は1号くんの背中が映る。とうぜんだけれど、奥にいる1号くんとまったく同じ姿だ。

『封鎖にかかる期間は、ざつと10日というところだろう。セルリアンは音によく反応する。それに多少の土砂はすり抜けることもある。なるべく慎重に埋めてやらないとだから、動きのおおざっぱな1号くんじゃ、通せんぼくらいしか役に立たんのが苦しいところだな。』

そう言つて、シーラさんは、くつくつと笑つた。

映像のはじめからこれまで、シーラさんの様子はとても普通に思えた。とても大量のセルリアンの横で撮影しているとは思えないような、緊迫感のなさだ。

それは、ひよつとしたらこれを見るかもしれない『かぞく』に、余計な心配をかけさせたくないから、という演技なのかもしれない。

そう思うのは、本当にわずかになんだけど、ぎゅつとこぶしを握つた腕が、小さく震えているのが見えたから、だつた。

『方が一、封鎖の途中で気づかれた場合、洞窟の入り口を爆破、完全に封鎖する。その場合、ひよつとしたら私は逃げられないかもしれないが・・・、仕方がない。』

シーラさんは声のトーンを落としてそう言うのと、しばらく目を閉じて黙っていた。そしてゆっくり目と口を開き、続ける。

『・・・、もしキミが、この映像を、土砂に埋もれた洞窟の中で見ているなら、そういうことだ。』

「シーラねえ・・・、」

思わず漏れ出てしまったのだろうか。今にも消えそうなゴリラちゃんの声に、わたしはその手に両手をかぶせ、ぎゅつと握る。

『そして、もしそうなら、近くにいる私の家族に、すぐに逃げるように、間違ってもやらと闘ったりしないようにと伝えてくれ。あと、私の我儘で迷惑をかけたことを、謝っていたと伝えてほしい。』

シーラさんはこの映像を撮ったときにはもう、覚悟を決めていたんだ。

もしも失敗しても、この映像を見た誰かによつて家族に危機を報せられるよう、保険をかけて。

いったいどれだけの強い気持ちがあれば、そんな覚悟が決められるんだろう。

その答えは、映像の続く先にあった。

シーラさんは優しげな笑みを見せながら、その先を続ける。

『お調子者に短気者、呑気者に泣き虫、そして、心の優しい臆病者。』

誰のことと言わなくても、それぞれをいとおしく思っているのがわかる。

それがたぶん、『かぞく』というものなんだろう。

『私は、みんなを、たいせつな家族に住むここを、どうしても守りたかったんだ。』

そしてそれが、シーラさんの強い気持ちの答えなんだ。

みんなで逃げることだってできたかもしれない、そうゴリラちゃんは言ったけど、シーラさんは、みんなと、このみつりんと一緒に暮らしたかった。

だから、みんなには内緒で、ひとりでがんばって、

そして……、

『……なんてな。ダメだな、こういうのは。どうしても考えが悲観的になる。』

シーラさんはまた、くつくつと自嘲するような笑い声を漏らしながら、前かがみになって手を伸ばす。

録画のはんいを越えているのか、腕は途中で途切れてしまつて何をしているのかわからないけど、さつきより映像がアップになっているから、たぶん、カメラを操作しているんだろう。

『今から作業を始める。大丈夫。きつと、うまくいく。』

カメラの近くで眩くように発したその言葉を最後に、映像は途切れた。

立体映像の光が消え、声もなくなると、洞窟はうす暗闇に戻る。

かすかな明かりが辺りを照らす中で、わたしはぎゅつと目を閉じて、シーラさんの最後の言葉を思い返す。

大丈夫。きつと、うまくいく。

まるで自分に言い聞かせるみたいに発せられた、その言葉。

終わってしまった今となつては、その言葉の響きが、たまらなく胸を締め付ける。

そう。終わってしまった。

けれど、全てが終わってしまったわけじゃない。

かんしよう的になる気持ちをごつとこらえながら目を開けると、ずっと握ったままだったゴリラちゃんの手が、もぞりと動いた。

その感触に、わたしはゴリラちゃんの顔を見る。

「ありがとう。ともえさん。もう、だいじょうぶだよ。」

うつすら涙を浮かべたその目には、けれど、はつきりと強い意志の光が宿っていた。

わたしは、セルリアンたちとたたかっていました。

さきにたたかいはじめていた、ヒヨウさんやクロさん、リエさんやメイさんたちと

いっしょに、がんばってみなさんのフォローができるように、あちこちかけまわっています。

なんとか、みなさんがにげられるようにしたいのですけど、いかんせんセルリアンのかずがおおくて、なかなかたいきやくのタイミングをつかめません。

と、いつてるそばから、

「ヒヨウさん！ いっぴき、そっちにいきました！ はさまれないようにちゅういを！」
「わかった！ おおきに！」

ヒヨウさんはわたしのこえにはんのうして、クロさんといっしょに、きょうげきされないようなところまで、うまくこうたいしています。

それをよこめでかくにんしながら、わたしはセルリアンたちのあいだを、ぬうようにはしりまわります。

ときどき、つめでこうげきしたりしながら、セルリアンのちゅういが、みなさんからそれるようになっているのですけど、なかなかうまくいきません。

わたしがこうしてあぶないことをするのを、あんまりともえちゃんはよろこびません。ちいさなセルリアンがでたときだって、たたかおうとするわたしをとめたりします。

わたしも、たとえば、そうげんとか、こうやのときみたいなあぶないことをされると、

おなじきもちになりますから、おあいこなのですけれど。

けれど、さつき、ともえちゃんどめをあわせたとき、

なんとなくなのですが、ともえちゃんのかんがえがつたわってきました。

みななでにげるよ、てつだって。

そう、いつているきがしました。

こんなじようきようなのに、ふきんしんかもしれませんが、なんだかこころがつうじあつたみたいで、むねがぼかぼかします。

・・・わふう。

おっと。いけませんね。

いまは、たたかいにしゅうちゅうしないと。

「あーん、もう。たおしてもたおしても、きりがないのよ。」

「リエちゃん・・・、わたし、もうかなりげんかいですう。」

「メイねーちゃん、きばらんとそのしつぽ、ウチがかみつくで？」

「ひいつ！ わたし！ もうちよつとがんばれます！」

「あいかわらずこつちのクロちゃんは、メイにあたりキツイなあ。」

みなさん、いつものちようしで、おはなしをしながらたたかっているのですけど、だんだんと、くちかすがすくなくなってきたようにおもいます。

なにか、だかいさくをかんがえないと、とおもうのですが、なにもうかびません。

ともえちゃんみたいに、いろいろなことをおもいつけるかしこさが、わたしにもあればいいのですが。

そう。ともえちゃん、ほんとうにすごいんです。

そうげんのときだつて、ちくりんのときだつて、そしてさつきも、

わたしがかんがえもしないようなことを、つきつきにおもいついてしまうのですから。

いまもひよつとしたら、このきゆうちを、なんとかするてだてをかんがえて、すでにこうどうしているかもしれませんね。

そんなことをかんがえていたら、くうどうのいりぐちのほうから、なんだかおとがきこえてきました。

ポコポコポコ、ポコポコポコ、と。

りずみかゝるに、なにかをたたくようなおと。

そのおとをきいて、わたしは、やつぱり、とおもいました。

なんのこんきよも、りゆうもないのですけれど、

ともえちゃんがまた、なにかをしてくれたんだということ、

そして、それはきつと、みなさんをたすけてくれるということ、

わたしは、かくしんしていました。

先に行くゴリラちゃんの足はとても速い。ときおり両手で胸をポコポコポコ、と叩くのは、ドラミングというゴリラの習性だろうか。

わたしもひつしで追いかける。何もできないかもだけれど、一緒に戦いたいと思う。

ゴリラちゃんの向かう先は、セルリアンがひしめく空洞だった。

「ん？．．．っ！ ちよい！ なんてきたん!? はよにげやゆうたやろー！」

空洞に飛び出したゴリラちゃんを見つけて、ヒョウちゃんが大声を上げる。けれどそのせいで注意がそれてしまったからか、セルリアンの触手の一撃をまともに食らってしまった。

「にゃあ！．．．っ、いったあ。」

「おねーちゃん！」

あわててクロちゃんやんがヒョウちゃんを抱え、後ろにさがる。

ピンチを察したイエイヌちゃんがカバーに入るけれど、あれだけ大きいセルリアン相手では、ひとりでは抑えるのも大変そうだ。

どうしよう。

わたしが考えなしに戻ってきてしまったせいで、ヒョウちゃんが．．．！

今からでも遅くない。何か、何か考えないと。

たとえば、そう、昨日のセルリアンみたいに、大人しくさせるとか。

あたしがセルリアンとそうぐうしたのは、そうげんのとくと、昨日のこうやの2回。

どちらもはじめは襲われたけど、そうげんでは最後まで暴れていたのに対して、こうやでは結局なにもせずに去っていった。

その違いは、なに？

・・・ううん、ダメだ。

場所、時間、その場にいた子。

どれもが違い過ぎて、これだという答えが見つからない。

どうしよう、このままだと・・・、本当に・・・。

ポコポコポコ、と。

ぐるぐると考えを巡らしているわたしの耳に、そんな音が飛び込んでくる。

ポコポコポコ、ポコポコポコ、と。

何度も繰り返し聞こえてくる。

「ゴリラちゃん・・・？」

その音は、ゴリラちゃんのドラミングの音だ。

たしかそれは、いかく行動だったと思うけど、今この場においては、たぶん、他に意

味がある。

たとえばヒトの場合、自分の胸を叩く行動は「任せろ」というジェスチャーだったりする。それは周りに頼もしさをアピールする、というだけじゃなくて、鼓舞しているのだ。

自らの心臓を、ハートを、心を。

その証拠に、ゴリラちゃんの背中では、ぶるぶると震えている。

けれどそれは、恐怖からくるものではなくて、きつと。

「よくもきずつけたな・・・！ わたしのたいせつな、かぞくを!!」

背中越しに聞こえてきたゴリラちゃんの声に、びりびりと肌が震える。

ゴリラちゃんは、とっても怒っていた。

「アアアアアアアアアア——ツ!! ガアアアアアアアアアアアア——ツ!!!」

れっぱくのきあい、とでもいうのだろう。肌どころか、地面さえ揺れるようなものすごい雄叫びを上げながら、ゴリラちゃんは飛び出していく。

両拳を地面に突き立てながらのその移動は、ナツクルウオークというゴリラの移動方法だ。それはゴリラの長くて大きい腕があつてのもので、フレンズさんの体形では、むしろ二足歩行の方が速いようにも思うのだけど、さつき一緒に走っていたときよりもだんぜん速い。

さすがにそれは、強すぎでしょ。

・・・えつと、

しようじき、ゴリラちゃんのこと、なめてた気がします。

はい。

めそめそしてるとこみて、ちよつとかわいいとかおもっちゃったり。

いままでいろいろ、すいませんでした。

なんて、困惑する頭であれこれ考えている内にも、ゴリラちゃんのかいしんげきは続いてる。

拳をひとつ振るうたびに、セルリアンが一体、ぱつかーんと粉々にはじけ飛ぶ。あとに残るのは、サンドスターのかけらだけだ。

ゴリラちゃんの顔は怒りに満ちていて、見ているだけでも背筋が震えるようなものなんだけど。

きらきらとサンドスターのかけらを舞わせながら空洞を駆けまわる姿は、なんだかとっても美しいもののように思えた。

そこからはあつというまだった。

次々にセルリアンたちを倒すゴリラちゃんと、それを援護するみんな。

あれだけいた筈のセルリアンは、もう全て倒し終わっていた。

辺りにはセルリアンの残したサンドスターのかけらがちりばめられていて、きらきらしていても綺麗だ。

思わずスケッチブックを取り出してお絵かきしたくなるけれど、ぐつとこらえる。今、それをしてしまうのは、さすがにふきんしん、だと思っから。

「アアアアアア——ツ!! アアアアアアアアアア——ツ!!」

全てのセルリアンを倒した後も、ゴリラちゃんは雄叫びをやめなかった。

ポコポコポコ、と胸を叩きながら、天を仰いで叫んでいる。

かちどきのこえ、というわけではないだろう。

だって、ゴリラちゃんのあの姿は……、

「ローラちゃん……、」

「ローラねえさま……、」

「ローラ……、」

みんなが、誰かの名前を口にしながら、ゴリラちゃんに近づいていく。

ポコポコポコ、と胸を叩く音が、

空洞に響き渡る叫び声が、

少しずつ、少しずつ、小さくなっていく。

「アアアア……、ああっ、あああああ——っ、」

ふるふると震える背中が、たぶんもう、怒りによつて震えているのではなかった。となり立ったヒヨウちゃんが、ゴリラちゃん——ううん、ローラちゃんの肩を、ぼん、と叩く。

「ええんやで、ローラ。もう、がまんせんで、ええ。」

涙ぐみながら言うヒヨウちゃんに、ローラちゃんは肩越しに振り返つて顔を見せる。

その目からは、大粒の涙がぼろぼろとこぼれていた。

「ああーっ！ あああーっ！」

「よしよし。つらかつたなあ。しんどかつたなあ。」

ローラちゃんを優しく抱きしめて、頭をぼんぼんと撫でるヒヨウちゃんの目から、涙が一筋こぼれ落ちた。

——
——
——
洞窟から出ると、外はもう夕暮れ時くらいになっていた。シーラさんを探して穴を掘つたりしてたから、思った以上に時間が過ぎていたみたいだ。

あの後、遅れてやってきたくびわちゃんが持つてきた機械で、みんなもシーラさんの立体映像を見ることができた。

みんなは立体映像に驚いたり、シーラさんの姿にうれしそうな顔をしていただけど、シーラさんの言葉を最後まで聞くと、みんな揃つて泣いてしまった。

けれど、それでいいと思う。

遺したものの遺志を知ることが、遺されたものにとって、救いだと思うから。

それと、その、くびわちゃんが持ってきた機械なのだけれど、シーラさんの白衣や眼鏡と一緒に残されていた機械だった。

サッカーボールみたいに見える目のその機械は、くびわちゃんいわく、

「……りつたいえいぞうの、とうえいき。かめらもかねてる。」
とのこと。

てつきりわたしはくびわちゃんが、何か不思議なちからで立体映像を出したのかと思つてただけど、この機械で映し出してみたい。

くびわちゃんの体がぼんやり光つてたように見えたのも、投影機の近くにいたから、ということかな。

不思議に思つていたことが解消されて、セルリアンも倒せて、なんとなく、ひとこちついたような気分になる。

それはたぶん、みんなも同じだったようで、洞窟から出る頃にはすっかりいつもの調子に戻っていた。

「にしても……、ホンマ、シーラはひとさわがせなやつちやで。」
ヒョウちゃんがやはは、と笑いながら言う。

ケガももうへいきみたい。あの空洞に充満したサンドスターのかけらのおかげで、完治まではしなくても、大きな痛みがなくなっていくにはなったそうだ。

「ヒヨウねえさま、それをいうならフレンズさわがせ、なのでは？」

「わたしたちも、ヒトかしたどうぶつなんだから、べつにいいんじゃない？」

細かいところにツツコミを入れるクロちゃんに口をはさんだのはゴリラちゃん、じゃなくて、ローラちゃんだ。

ローラちゃんはあの後、なんだかつきものが落ちたみたいにすっきりした顔になって、こうしてみんなと普通におはなしするようになった。

いや。なった、というか、戻った、というのが正しいんだろう。

わたしと話していたときも、ときどき柔らかい口調になってたし、たぶん、こっちが素のローラちゃん、なんだと思う。

「そうです。クロちゃんはこまかいことをきにすぎです。」

「おやメイねえさま。いつになくつよきですわね？」

「ひいつ！ リエちゃんたすけて！」

ぎろり、とクロちゃんに睨まれたメイちゃんがリエちゃんに抱き着く。リエちゃんは呆れたような顔で笑うと、ぽんぽんとメイちゃんの肩を撫でた。

「はいはい。もー、クロとメイは、いつもこうなんだから。」

「せやねえ。」

「あ、でもさ。むかしクロがメイになかされたこと、あつたよね？」

と、ローラちゃんが思い出したように言う。つられて思い出したのか、ヒヨウちゃんがとても楽しそうな顔で笑った。

「あつたあつた！ あれやろ？ メイのメガネ、クロちゃんがとつて、」

「ああ、あれね。あたしのなかじや、クロヒヨウのくつじよく、つてよんでるヤツよね。」

「にやはははは！ なんやそれ！ はじめてきいたわ！」

「おねえさまがた！ そういうはなしは、ほんにんがいなところでした。ごさいまし
！」

みんな、とても楽しそうに騒いでいる。お昼に見たときより、もつとずつと騒がしい
ような気がする。

ううん。気がする、じゃなくて、きつとそう。

それって、ローラちゃんが元気になつてくれて、みんなうれいから、だと思ふから。
こうして、『かぞく』みんなの楽しそうな姿を見ると、じんわり胸があたたかくな
るのと同時に、なんだか切ないような気持ちにもなる。

あたしにも、こんな風に分かり合える家族が、いたんだろうか。

記憶を失つてからこれまで、それらしいことを思い出せたためしはないけど、

でも。

こういう素敵な家族が、あたしにもいたんだとしたら、

はやく、思い出したいな。

わたしが物思いにふけっている間も、おはなしは続いていたようだ。

「たしかにあれは傑作だったな。あんなにびーびー泣いてるクロを見るのは初めてだったよ。」

「もう！ そのはなし、なんどめですの!! あとわたくし、ないてませんからね!」

・・・あれ?

なんだかひとり、増えてるような?

っていうかあのフレンズさん、すっごく見覚えがあるんだけど・・・。

「そうやってかえされるんも、なんどめやろねえ? なあシーラ?」

「そうだな。毎度のことながら、クロの強がりは見えていて可愛らしい。」

「もう! シーラねえさままで!」

と、クロちゃんが大声を出したところで、あれだけ騒がしかった声がぴたりとやむ。

そして、

「「「シーラ!?!」ちゃん!」ねえさま!」ねえ!」

みんなぴったり同じタイミングで、目と口をまんまるに開けて叫んだ。

どうりで、見覚えがあると思ったら。

とうぜんだよな。ついさつき洞窟で見た立体映像、そのままなんだから。

「その様子だと、みんな健勝そうだな。良き哉良き哉。」

シーラさんはそう言つて、映像で見たのと同じように、くつくつと笑う。あまりにも自然にそこにおいて、みんな、びつくりして声も出ない様子だった。

そんな中、ローラちゃんが唇を震わせて、小さく声を漏らす。

「え……？　なんで……？　うそ……！」

「おお、私の眼鏡と白衣じゃないか！　ということは、あの洞窟に入ったな？　ダメだぞローラ、あそこは……、」

ローラちゃんが抱えている眼鏡と白衣を見て、シーラさんは真剣な顔になつて注意をしようとするんだけど、

「セルリアンがいるのよね。しつてるわよ。はあ……、んで、あたしたちでみんなたおしました！」

「リエ、それは本当か!？」

珍しく、ごきを強めたりエちゃんがそれを遮る。その顔に浮かんでいるのは、まぎれもなくあきれ顔だ。

リエちゃんの話に驚いているシーラさんに、クロちゃんとメイちゃんがかけよつた。

シーラさんがローラちゃんから白衣と眼鏡を受け取り、それを身に着けたところで、「そんで、どないなつとん。なんでいきとんねんワレ。」

かいこういちばん、そんなあんまりな言いぐさをしたのはヒョウちゃんである。

ヒョウちゃんももちろん、シーラさんと再会できてうれしいんだけど、色々思うところがあるみたいで、なんだか複雑そうな表情だ。

まあ、言いぐさはアレなんだけど、実はわたしも気になっていた。

立体映像に残されたシーラさんの言葉は、わたしのすいりを裏付けるものだったし、だとしたら、どうしてここにシーラさんがいるのか。

だから、あえて口を挟まずに、シーラさんの口から正解が出るのを待つことにした。

「久々に会ってだいぶご挨拶だが・・・、仕方ない。非は私にある。」

シーラさんは苦笑交じりにヒョウちゃんに答え、シーラさんは自分の身に何が起こったかの説明をはじめた。

「大体の事情は察してると思うから、かいつまんで説明する。洞窟の奥に大量のセルリアンを見つけた私は、封じ込めるために入り口で爆薬を使ったんだが・・・。」

と、そこでシーラさんは何故かわくわくした表情になると、急に早口になって続ける。「てか、あれ、凄いで。とんでもなく威力があるんだ。それこそ大型セルリアンを吹っ飛ばすくらいに。流石は山を砕くための道具というところだな。原理は分らんがやは

りヒトの作る道具は素晴らしい。ってか、ハナからあれを使えばあいつら倒せてたん、」
「あー、もう！ はなしがぜんぜん、すすみませんわ！」

とつぜん爆薬についての話をはじめたシーラさんを、クロちゃんが大声で遮る。

「あいかかわらずシーラねえさまの、だっせんぐせはひどいですわね！」

「どこが、かいつまんだせつめいやねん！ おまえのあたま、つまんだろかい！」

ぶんぶん、といった感じに怒るクロちゃんとヒヨウちゃんに、思わず笑ってしまいうになる。

なんというか、これまで見てきたヒヨウちゃんは、ずっとみんなに気を遣っていたように思う。

クロちゃんに嫌味を言われても上手に受け流したり、とかさ。

たぶんそれは、姉の立場があるから、なんだろうけど。

イエイちゃんがはじめてヒヨウちゃんに会ったとき、緊張しているだけ、と言っていたのは、ひよつとしたら、そういうことなのかもしれない。

だから、そのヒヨウちゃんがクロちゃんと一緒になって怒っている姿は、なんだかとても新鮮で、少しうれしかった。

まあ、もちろん、怒られるシーラさんはたまったもんじやないかもだけどね。

そう思っつてシーラさんを見るのだけど、シーラさんはいたって平然としていて、ふた

りのおこも気にしてないみたいだった。

「ああ、すまない。ともかく爆薬を使ったんだが、」

シーラさんはそんな、いたって自然体のまま、とんでもないことを口にした。

「威力がありすぎて私も吹っ飛んだわけだな。」

頭に浮かぶのは、爆発の衝撃で、あーれー、と飛んでいくシーラさんの姿。

・・・あのさ、

さすがにそんなの、すいりのしようがないでしょ。

いや、別にすいりが当たらなかつたことが不服なわけじゃないし、むしろシーラさんが生きててくれたのはうれしいし。

でも・・・、なんだかなあ。

とりあえず、今度同じようなことがあったら、フレンズさんの体の頑丈さをこうりよした上で、考えをまとめるようにしよう。

「それで、縄張りの外まで飛ばされた所を、運よく親切なヒトに拾ってもらつてな。つい先日までそのヒトの所で治療を受けていた、というわけだ。」

みんな、怒っていたふたりも含めて、啞然とした顔でシーラさんを見ている。

それはそうだよな。

勝手にいなくなつたと思つたら爆発で吹っ飛んで、それからずっとヒトのところ

治療を受けてただなんて・・・。

・・・うん？

ええと、シーラさん、なんだか今、かなり重要なことをさらつと言ったような気が。

「うん。だいたいわかったけど、どうくつのなかのめがねとはくいは、なんだったのよ」

と、眉根を寄せながら聞いたのはリエちゃんだ。

うん。たしかに、眼鏡と白衣は洞窟の中にあつた。でも、たぶんそれは、

「あれは囷だ。セルリアンは音に敏感だが、多少なり匂いにも反応する。爆破の準備が整うまでの時間稼ぎくらいにはなつたと思うが・・・。」

やつぱり、シーラさんが自分で置いていったみたい。あらためてシーラさんの姿を見ると、白衣は土ぼこりはついていてもすすけてないし、眼鏡も割れたりしていない。

今になって気づいたけど、爆発に巻き込まれたんだとしたら、もつとぼろぼろになっている筈だつたんだよね。

はあ、やつぱり、あたしはかしくくないなあ。

「ま、まぎらわしいよ！ シーラねえ！」

そうだそうだ！ ミスリードにもほどがある！

と、一緒になって騒ぎそうになるけど、ローラちゃんのその台詞は、もちろんそういう意味で言ったわけじゃない。

単に、心配させるな、ということだろう。

「そ、そうです！ わたしてつきり、かわりはたてたすがた、つてものかとおもっちゃったじゃないですか！」

「変わり果てた・・・と言うと、即身仏的なものか？ それは興味深いな。私の知る限りフレンズが即身仏化した例は・・・」

「まあただっせんしとる。ほんまビョーキやでこいつ。」
なるほど、と思う。

こういう、良くも悪くも色々なことを気にしない子だから、この個性的ななわばりのリーダーとして、みんなをまとめられるし、みんなから慕われるんだろう。

たしかに、この子の代わりをしようとしたら、へとへとになっちゃうよね。

おつかれさま。ローラちゃん。

それから、ヒョウちゃん。

心の中でふたりに呟いて、そして、わたしは口を開く。

さつきシーラさんが言っていたことを、わたしは確かめなくてはならなかった。

「あの一！」

わたしが大きな声を出すと、みんなと、そしてシーラさんの目がこちらを向く。

「うん？ キミはたしか・・・、あつ、」

「あの、はじめまして。あたしは、ともえって言います。こっちはイエイヌちゃんと、くびわちゃんです。」

「イエイヌです。はじめまして。」

「・・・くびわ、です。」

わたしたちが自己紹介をすると、シーラさんはまるで奇妙なものでも見るかのように、わたしとイエイヌちゃんを交互に見た。

なんだろう、何か、変なことを言っただろうか？

そんなことを思うのだけど、気のせいだったのかな。

「そうか。私はチンパンジーのシーラだ。よろしく。」

シーラさんは体の向きを変えて、こちらに正面を向けると、挨拶を返してくれた。

「それで、あの、いきなりこんなこと聞いて申し訳ないんですけど、」

わたしは前置きのようにそう言っ、急かすように早鐘を打つ胸をぎゅうつと抑えながら、言葉が続けた。

「さつき、シーラさん、ヒトのところまで治療を受けたって・・・、ヒトって、あたし以外にヒトって、パークにいるんですか!？」

自分でも、どうしてここまで焦ってしまうのか、わからない。

今まで、ぜんぜん気にしないでいたのに。

・ ・ ・ ううん、

気にしないでいたからこそ、気にしないフリをしていたからこそ、なのかもしれない。たぶん、わたしもヒヨウちゃんたちと同じで、だいぶムリをしていたのかもしれない。かった。

「なるほど、そういうことか．．．。」

シーラさんは小さく呟くと、あごを触りながらしばらく考えるようにして、

「事情は何となくだが理解した。ならば、私が説明するよりあの子と話した方が早いだろう。」

そう言って、すう、と息を大きく吸い込んだ。

「聞いての通りだ！ こちらへ来てくれないか！」

その、大きな声に反応するかのように、近くの茂みから、がさがさと音が聞こえた。

音のした方を見ると、そこからフレンズさんが出てくるのが見えた。

飾り羽のついた帽子に、赤い半袖シャツ。黒いタイツの上から大きめのハーフパンツを履いている。

そして、その背中には、大きなかばん。

この子は何のフレンズなのだろう。

これといって、とくちようがないように思うけど．．．。

・・・とくちようが、ない？

たしかりエちゃんだが、そんなことを言っていたような。

あれって、たしか・・・、っ！

思いついた考えを上手く整理できないでいるわたしを尻目に、そのフレンズさんはシーラさんのところに辿り着き、話しかけていた。

「・・・、すみません。何か盗み聞きしてるみたいになっちゃって・・・、」

「何を言う。自分の用事をさせて置いて、私と、家族との再会を邪魔せずにくれたのだろうか？ 感謝こそしても、怒る道理はないさ。」

「あはは・・・、そう言ってもらえると、助かります。」

そうして、こちらの方に向き直ると、にっこりと笑った。

「ボクは、かぼんっていいいます。ヒトのフレンズです。」

ヒトの・・・、フレンズ？

耳に入ってきた新しい単語に、ますますわけがわからなくなる。

この子は、ヒトじゃなくて、ヒトのフレンズで、でも、あたしはヒトで・・・、

・・・ほんとうに？

ほんとうにあたしは、ヒトなの？

そう思い込んでるだけ、なんじゃないの？

頭の中をいろんな考えがぐるぐる回る。

視界さえもぐるぐる回っている気がして、今にも吐きそうだ。

なんとか思考を落ち着けたかったけど、時間は待つてはくれないみたいだ。

かばんと名乗ったその子は、こちらを射抜くような目になると、静かに言った。

「ようやく見つけたよ。セルリアンクイーン。今度は、逃げないでね。」

その目は、まるでわたしの体を貫いて、後ろにまで届いているようだった。

フレンズ紹介くチンパンジーく

シーラさんは霊長目ヒト科チンパンジー属の哺乳類、チンパンジーのフレンズだよ！

チンパンジーって名前は、しっぽのないサル、って意味なんだって！ そのまんまだ

よね！

チンパンジーはとっても頭のいい動物で、木の棒とか石とか、色んな道具を使って工

サや水をとったりするよ！

それだけじゃなくて、手話で会話をすることもできるんだって！

いくつものジェスチャーを組み合わせて、『ついて来い』だったり、『体を搔いて』だつ

たり、いろんなことを伝えられるんだよ！

すっごいよね！

そんな頭のいいチンパンジーなんだけど、おとなのオスは実は獰猛なんだ。

慣れてないヒトだと興奮して襲いかかったりするから、気をつけないとだよね。

あと、チンパンジーはヒトにすごく近い動物だから、昔は色んな薬の動物実験に使われてたんだって……。

そのために、たくさんのチンパンジーが不自由な暮らしを強制されてたんだ……。

もちろん、そのおかげで助かった命もたくさんあるんだけど。

やっぱり、かわいそうだよね……。

【こえ】ともえちゃん（しゅくしちほー）

――

――

――

ここは、ジャパリパーク。

今日もたくさんのフレンズさんたちが、のんびり幸せに暮らしています。

鬱蒼とした草木が生い茂る密林に、

ふたりのフレンズさんたちが隠れていました。

「なにやられたならぬけはい……、これは、ひよつとしてしゅらばというものでは……？」

「そうなのー?」

「はい。ヒトはつがいをとりあうしゆうせいがあったそうで、そのじようきようをしゅらばとよんだそうです。おそらく、これがしゅらば……。」

ふたりとも、木の陰からのぞき見をしてるみたい。

もう、ふたりとも、悪い子ね?

あんまりいけないことしちゃ、ダメよ?

「たしかに、しゅらばつぽいけどー、センちゃんがそうぞうしてるのとは、たぶんちがうとおもうよー?」

「なにをいつてるのですかアルマーさん! いらいぬしさんは、きつとつがいを、あのもうひとりのヒトにとられたのです!」

「そうかなー。」

「ああ! これがしゅらば!」

「ていうかー、わたしたちのいらいつてー、たしかー、」

……あら?

もうひとり、誰かいるみたい。

「つてえなこのお! なんだこのもりい! きがおおすぎて、はしれねえーだろがい!」

あらあら。

枝とか葉っぱをいっぱいつけちゃって。

こんな密林で走り回ったら、危ないわよ？

それに、木に話しかけても、お返事は返って来ないのよ？

「お？ やんのか？ やんのかおいこらあ！ ぼけつつたつとぶつたすぞらー
！」

「・・・だれ？ あのこ。」

「ぎー？」

ふたりのフレンズさんたちは、

もうひとりの子に気づいたみたい。

はてさて。

どうなるかしら？

ふたりのフレンズさんたちの、楽しい旅は続きます。

けものフレンズR くびわちほー 第07話 「せるりあ
んくいーん」アバン・Aパート

胡蝶の夢、という言葉がある。

むかしむかしの、えらいヒトが語った説話だ。

夢の中で蝶になり、ひらひらと空を飛んでいた彼は、ふと目が覚め、ヒトの身である自分を見て思うのだ。

はたして自分は今、蝶になる夢を見ていたのか。

それとも、今の自分が、蝶の見ている夢なのか。

その説話は、どちらであろうと違いはない、という意味で語られたものだ。

蝶であるときは蝶であり、ヒトであるときはヒトである。

いずれにせよ、自分という知は変わらず存在し、形態の違いでしかないそれらに、なら違いはないのだと。

さすが、むかしのえらいヒトは言うことが違う。どうすればそこまで達観した考えが持てるのだろうか。

少なくともわたしには、とてもムリだ。

もし、自分が蝶の見る夢でしかないと知ったなら、自分の存在が足元から崩れるような感覚になって、きつとわけもわからず取り乱す。

そして、こう願うのだ。

夢なら覚めて、と。

その夢から覚めた先がどちらなのか、ひとつの疑いもせずに。

「ようやく見つけたよ。セルリアンクイーン。今度は、逃げないでね。」

かばんと名乗ったその子は、こちらを射抜くような目で見据え、そう言った。

セルリアンクイーン。

はじめて聞く単語だったけれど、それがいったいどういうものなのか、容易に想像できた。

頭に浮かんだ想像に、まるで地面が抜け落ちたような感覚に襲われる。

ぐるぐるとめぐる思考に何も言えないままでいると、シーラさんが注釈を入れるように口を挟んだ。

「セルリアンクイーン。文字通りセルリアンたちの女王で、セルリアンを自分の思い通りに操ることができる、かつてパークを危機に陥れた危険なもの、だったな。かばん。」

「はい、そうです。」

その説明はおおよそわたしの想像していたものと同じもので、そんな、とてもおだやかではない内容を、ふたりはひどく冷静に語る。

それが、とてもおそろしい。

だって、ふたりのはなしがほんとうだとしたら……。

何か言わなくちゃ、と思って口を開くのだけど、吐息すら漏れない。

こえって、どうやってだすんだっけ。

そもそも、いきって、どうやって、すうんだっけ。

呼吸すらあやういまま、なんとか絞り出した声は、ひどくうわずって、震えていた。

「あ、あたしは……、ヒトじゃない、って、こと……？」

口に出した瞬間、夕日に赤く染まっていたはずの景色から、色が失われる。

聞こえていたはずの木々のざわめきが、しんと消え失せる。

色と音が失われた世界で、わたしはひとりだった。

あはは。

あたし、かんちがいしてた、みたいだね。

あたしは、ずっとじぶんのこと、ヒトだって、おもってたけど。

それは、ヒトになったゆめを、ずっとみてただけだったんだ。

ほんとうのあたしは、ヒトじゃなくて、

ほんとうの、あたしは――

「そんなはずありません！　ともえちゃんはまちがいない、ヒトです！」

その声が聞こえた瞬間、消えていた木々のざわめきが戻ってくる。

目に映る景色が、夕日に赤く染まっていく。

色を取り戻した目を、声の聞こえた方に向けると、

そこには、わたしのたいせつなともだちがいた。

「イエイヌちゃん……。」

イエイヌちゃんは、とても怒っていた。

歯をむき出しにして、フーツ、フーツ、と息を漏らしながら、かばんと名乗ったその

子を睨みつけている。

ここまで激しい感情を表に出したイエイヌちゃんを見るのは、たぶん、始めてだ。

いつもにこにこしていて、わたしがおぼかなことをしても、けっして怒らず、困った

ような顔をしながら、すぐく真面目に叱ってくれる。

そんなイエイヌちゃんが、本気で怒っていた。

「あなた、なんですか！　いきなりでてきて、わけのわからないことを！」

イエイヌちゃんはわたしをかばうように前に出て、言葉を続ける。

「ともえちゃんは、がんばりやで、やさしくて、いつもみんなのために、なにかをしてく

れるこなんです！」

その言葉ひとつひとつが、わたしの胸に染みこんでいく。

「あたまがよくて、わたしがおもいつかないようなことも、いっぱいおもいついて、それをぜんぶ、だれかのためにやくだててて……！」

記憶のない、自分が何なのかもわからないわたしだけれど、

イエイ又ちゃんはそんなわたしのために、本気で怒ってくれている。

そんなわたしを、肯定してくれる。

そっか。

たとえ、あたしがヒトじゃないのだとしても。

きつと、それだけで、

ありがとう。イエイ又ちゃん。もう、じゅうぶんだよ。

——と、口にしようとしたのだけど、

「だから！ ともえちゃんは、セルリアンのじよおうなんて、そんなあぶないものじゃ、」

「あ、あの！ ごめんなさい！ ちがいます！」

遮るように言ったその子の様子に、口の動きが止まる。かばんと名乗ったその子は、明らかに狼狽していた。

イエイ又ちゃんのけんまくに気おされてか、さつきまでの冷静な感じはどこへやら、

おどおどした声色と表情で、

「ボクが言ってるのはその子のことじゃなくて……。」

言いながら、わたしの後ろにいるくびわちやんを指さした。

「その、後ろの子のことなんですけど……。」

……、

……、……、へ？

——

けものフレンズR くびわちほー 第07話「せるりあんくいーん」

——

えっと。

ちよつとまってね。いま、じょうきようをせいりするから。

かばんちゃんが言ったセルリアンクイーンっていうのは、あたしのことじゃなくて。

つてことは、たぶんだけど、やっぱりあたしはヒトで。

ひよつとしたら、かばんちゃんが自分で言ってみたに、ヒトのフレンズ、なのか

もしれないけど、少なくともセルリアンの女王とかつてものじゃあないみたい。

考えてみれば、あたし、セルリアンに襲われたことあったしさ。

頭を冷やしてみると、そりやそうでしょ、という感じ。

あはは。

あたし、かんちがいしてたみたいだね。

うーん。

この場にプロングホーンちゃんがいたら、しやがせまい、なんて笑われちゃうかも。

あははは。

・・・って、笑ってる場合じゃないって！

「ちよ、ちよつと待って！ くびわちゃんはそんな危ないのじゃないよ!」

そう。かばんちゃんが指さしたのはくびわちゃんだ。

つまりそれは、くびわちゃんがその、セルリアンクイーンとかいうもの、って言うて

るわけだよね？

いやいや、そんなはずないでしょ！

「そうです！ くびわちゃんも、そんなきけんなものなんかじゃありません!」

イエイヌちゃんの援護にうんうんと頷きながら、わたしは考えをまとめつつ続ける。

「くびわちゃんはすご〜くいい子だよ？ 物知りで、色んなことを教えてくれるし。セルリアンみたいに、フレンズさんを襲つたりもしないよ?」

それに、と呟いて、

「さっきだって、洞窟にあった機械を使って、みんなにシーラさんの映像見せてくれたし

さ。」

「何だつて?」

続けた言葉に反応したのはシーラさんだった。

シーラさんは何故かすごくうろたえた様子で、きよろきよろした視線をヒヨウちゃんたちに向ける。

「え、嘘でしょ? あれ、見たの? みんな?」

「みたでー。」

「みましたわ。」

「うん。みたみた。」

「はい。みました。」

「みたよ。」

そして、みんなが声を返すにつれて、しだいに顔を赤くしていった。

え? なんて?

あれつて、みんなに見せるために撮ったものじゃなかったつけ?

そんなことを思いながら、わたしはシーラさんに問いかける。

「えつと、シーラさん? ひよつとして、あの映像、見せちゃダメだった?」

シーラさんは赤くした顔をそのままに、ぽりぽりとほっぺをかきながら、

「えっと・・・、撮った後で気づいたんだが、普通、レンズは機械を使えない。少なくとも私の知る限り、機械を使えるのは私を含め、数えるくらいしかない。」

それって、つまり・・・。

「え。それじゃあ、映像を残した意味ないんじゃない？」

「だから気づいたのは撮った後なんだよ！ 撮り終わって急に恥ずかしくなったから消そうと思ったんだけど・・・、どうせ見られないし、いいかなって・・・。」

言いながら映像に残した内容と、撮り終わったときの感覚を思い出したのだろうか、後半の声は消え入りそうなくらいに小さかった。

そんなシーラさんの肩に、ヒヨウちゃんがにまにました笑顔で腕を回してくる。

うつわあ・・・、わっるい顔だあ。

「にやはは、なんやシーラ。ガラにもなくてれとんのか？ お？」

「めずらしいこともあるものですわね。まあ、ムリもありませんけど。」

「なんだって、たいせつなかぞく、だものね？」

リエちゃんが映像に残されていた言葉を繰り返すように言うと、シーラさんはますます顔を真っ赤にして下を向く。

「くすくす。みんな、あんまりいじめちゃかわいそうですよ？」

「わたしはシーラねえのきもちがわかって、すごくうれしかったよ？」

可笑しそうに笑いなながらフォローするメイちゃんと、きらきらしたじゅんすいな目を向けるローラちゃん。

ローラちゃん。気持ちわかるけど。

それ、たぶんおうちだとおもいます。

「・・・くつ、穴があつたら入りたいというのは、こういう状況を言うのだろうな。」

悔しそうにはがみをしながらかくシーラさんに、ヒョウちゃんは、にまにましたわつる顔のまま、

「あなならそこにあいとるでー。じぶんであけたあなやさかい、なんぼでもはいつたらええんとちやいますかー。」

「この・・・っ！ ヒョウ！ お前な！」

がぼつと身を起こしたシーラさんとヒョウちゃんが取っ組み合いをはじめ。

あはは。

本当にみんな、仲いいなあ。

つて、だいぶ話が脱線してしまった。

「と、ともかく！ くびわちゃんはセルリアンの女王なんて、そんな危ないのじゃありません！」

とりつくろうようにそう言って、わたしはずい、と前が出る。

状況を上手くとりつくろえたかはわからないけど、言葉の中身については、とりつくろったものじゃない。

少なくとも、それがわたしの、

．．．ううん。わたしたちの、本心だ。

わたしはイエイヌちゃんとふたりで、かばんちゃんをまつすぐに見据えた。

けれど、その当のかばんちゃんはというと、

「あはは．．．。」

お腹を抱えて、小さく声を出して笑っていた。

えっと、どうしたんだろう。

ひよつとして、ヒヨウちゃんたちのやりとりがよつぽど可笑しかった、とか？

とつても楽しそうに笑うかばんちゃんに、思わず毒気を抜かれてしまう。

イエイヌちゃんとふたりできよんとした目を向けていると、笑いも収まってきたのか、かばんちゃんは、ふう、とひと息ついて、

「えっと、いろいろと、ごめんなさい。つい、気を張ってしまったみたいで。」

ふかぶかと頭を下げしてくれる。

再び頭を上げたときそこにあつたのは、とつても優しげな微笑みだった。

うーん。なんというか、これって。

こっちもいきなりの話で警戒してしまったわけだけど、ひよつとしたら、かばんちゃんもわたしたちと同じように、警戒していただけたのかも。

どうも誤解があつたみたいだけど、それを解消さえすれば、仲良くなれそうかな。こうして見ると、すつごく優しそうな感じの子だし。

そんなことを考えていると、自然と、わたしもおんなじように笑顔になる。

「えつと、かばんちゃんって、呼んでいい？」

「はい。もちろんです。」

わたしの提案に、かばんちゃんは変わらず笑顔で答えてくれる。

「ボクも、ともえさん、と呼んでも？」

「さんじゃなくて、ちゃんって呼んで！ 話し方も、もつと普通に！ その方が仲良くなれそうだし！」

せつかく、パークではじめて会えたヒトなのだから、できればもつと仲良くなりたい。それにやっぱりこの子、いい子そうだし。

そう思つてのお願いだったのだけど、かばんちゃんは何故だかびつくりした顔になつて、わたしの顔をまじまじと見つめた。

えつと、あたしのかお、なにかへんかな・・・？

なんてことを思つたけれど、気のせいだったのかな。

かばんちゃんはまたすぐに笑顔に戻ると、

「うん。わかったよ。ともえちゃん。」

そう言つて、また、あはは、と小さな笑い声を漏らした。

うん。

やつぱりかばんちゃんは、笑顔のすてきな、いい子みたいだね。

さて。

そんな感じに、少しだけうちとけることができたところで、

「えっと、セルリアンクイーン、だっけ。なんでくびわちゃんがそんなのだって思ったの？」

？」

あらためて、お互いに誤解をしてしまった原因について聞いてみることにした。

わたしの質問に、かばんちゃんは口元に手を当てて考えるようにしながら、ひとり言

のように呟く。

「えっと、どこから話せばいいかな・・・、」

「カバン。イチド、ラボニキテモラッタホウガ、セツメイガシヤスイヨ。」

と、聞こえてきたのはボスの声だ。

あれ？　なんで？　ボス、ここにはいないよね？

どうしてボスの声が？

頭に疑問を浮かべながらかばんちゃんの様子を眺めるのだけど、やっぱりよくわからない。

「ラツキーさん。．．．、うん、そうだね。」

かばんちゃん右手首につけた腕時計みたいなものに話しかけている。

その腕時計みたいなものは、ほんらい文字盤がある場所に、うすぼんやり光るレンズみたいなものがついていて、それはたぶん、ボスのお腹についていたのと同じものだ。

ひよつとしてあれは、つうしんき、みたいなものなんだろうか。

あれを通じて、遠くにいるボスとおはなしができる、とか？

そんなてきとうな予想を立てていると、かばんちゃんはこちらに向き直って、こんな提案をしてきた。

「あの、よければ一緒に来てくれないかな？ 近くにボクが住んでる場所があつて、そこ

で、色々説明できたらと思うんだけど．．．。」

そこで歯切れが悪くなったのは、さっきの今で、気兼ねしてしまってるからだろうか。

「．．．その、くびわちゃん、と一緒に。」

と、申し訳なさそうな顔を見せるかばんちゃん。

わたしとイエイヌちゃんは顔を見合わせてから、かばんちゃんの方に視線を向けて、こくりと頷く。

そして、後ろを振り返りながら、

「くびわちゃん、いいかな？」

声をかけてから、気づいた。

さつきまでそこにいたハズのくびわちゃんが、いない。

「あれ？ くびわちゃん？」

「ともえちゃん！ あそこに！」

イエイ又ちゃんの指が示した方向を見ると、くびわちゃんがこちらに背を向けて走っているところだった。

向かう先は、みつりんの茂みの方。

それはつまり、こういうこと。

「ええ!! くびわちゃん！ 待って！ なんで逃げるの!？」

くびわちゃんはわたしたちがおはなししているスキに、逃げちゃった、ということだろう。

ちなみにくびわちゃんは体が小さいから、あんまり走るのが得意じゃない。今もとてとてとした足取りで、けれどいっしょうけんめいに走っている。

小さい子が、うんどうかいでがんばって走ってるみたいで、なんだかとってもいじらしかった。

うーん、やっぱりくびわちゃんはかわいいなあ。

・ ・ ・ じゃなくて！

そんなこと考えてる場合じゃ、ないってば！

「待って！ くびわちゃん！」

追いかけるために走り出しながら、くびわちゃんに声をかける。けれど、くびわちゃんはこちらを振り向いてもくれなかった。

それは、仕方のないことかもしれない。

だって、さっきのおはなしを、くびわちゃんも聞いてたのだから。

自分が、セルリアンクイーン、っていうものかもしれない、なんて話を。

思えばわたしは、くびわちゃんがさっきのやり取りをどう見てたかなんて、考えもしなかった。

パークではじめて会ったヒトがいいヒトで、舞い上がったのかもかもしれない。

・ ・ ・ ううん。そうじゃない。

きっと、わたしは自分がその、セルリアンクイーンってものじゃないってわかって、ほっとしてたんだ。

だから、くびわちゃんがどう思ってるかなんて、考えもしなかった。

・ ・ ・ うん。

くびわちゃんに追いついたら、ちゃんと謝ろう。

そして、くびわちゃんが嫌だと言うなら、みんなでそのまま逃げちゃおう。

かばんちゃんにはわるいけれど、ともだちが嫌がつてるのにムリにつれていくなんて、あたしにはできそうにないから。

心の中でそう決めて、走る足にちからを込める。

見ると、くびわちゃんの背中はずぐそこにまで迫っていた。

というか、くびわちゃんは今もう、走っていないかった。

茂みに入るいっぽでまえたところで、立ち止まっている・・・どころか、見覚えのあるフレンズさんに抱きかかえられるようにされていた。

「つてえなこらー！ どこみてほっつきあるってっだらー！」

その、いちど聞いたら忘れられないような、口のわるさ。

「ロードランナーちゃん!？」

思わず声を上げながら、わたしはロードランナーちゃんを見る。

ロードランナーちゃんはふーふーと息を荒げるくびわちゃんをひっしと抱きかかえ、逃がすまいとしていた。

その体には、あちこちに葉っぱや枝をつけている。ひよつとして、いつもの調子でみつりんの中を走り回ってたのかも。

あんなに草や木がいつばいなのに、あぶないなあ。

なんてことを思いながら見ていると、

「……っ、……！」

じたばたと暴れ出したくびわちゃんに、抱きかかえる手を離しそうになっていた。

「つて、うわ！ あばれんな！ あたしだよあたし！ みりやわかんだろ、つていたい！

まつてまつて！ いたい！ つめいたい！ ひつかくのやめて！ やだあつ！ う

わあん！」

「だ、だいじょうぶ!? くびわちゃん、やめてあげて！ もう泣いてるから！」

ロードランナーちゃんの腕の中で暴れるくびわちゃんをなんとかだめて、ふたりを

引き離す。

くびわちゃんはひとしきり暴れて疲れたのか、もう逃げ出そうとする気配はなかつ

た。

もちろん、そのぎせいはおおきかった、みたいだけど。

「うう……、いたいよお……、ひどいよお……。」

両腕に残ったひつかき傷をふーふーしながら、ロードランナーちゃんは泣きべそをか

いている。

なんともかわいそうな姿なのだけど、おかげでくびわちゃんを捕まえることができ

た。

「あはは。ありがとう。ロードランナーちゃん。くびわちゃんを止めてくれて。」

「…、つたく、ちゃんとかまえとけよな。ほんと、なんであたしがこんなめに…。」
あらためてお礼を言うと、ロードランナーちゃんはごしごしと目をこすつて、うらめしげな視線を向ける。

その視線を苦笑いしながら受け止めて、わたしはとりあえず、浮かんだ素朴な疑問を聞いてみることに――、

「えっと、ロードランナーちゃん、どうしてこ、」

「ちよつとまったー!」

聞いてみることにしたのだけど、とつぜんの大声に遮られてしまう。

見ると、がさがさと音を立てながら、フレンズさんが茂みの中から出てくるところだった。

「はなしはきかせてもらいました! ここはこのわたしにすべてまかせてもらいましょー!」

…、
…、
…、
だれ?

「センちゃん、くうきよもうよー。」

そしてまた、今度はのんびりとした声を上げながら、別のフレンズさんが茂みの中から現れる。

ふたりとも、はじめて見るフレンズさんだった。

ふたりの内ひとり、声の大きいフレンズさんは、がばつと腕を広げながら、また大きな声を上げる。

「なにをいつているのですかアルマーさん！ こうして、じたいがこんめいをきわめたいま！ たんていであるわたしがうごかず、だれがうごくというのですか！」

「たしかにこんめいをきわめてるけどー。それはどっちかというとセンちゃんのせいかなー。」

「もう、なにがなんだか……。」

「あはは……、一個ずつ、整理しよつか。」

色々なことが起こり過ぎてこんらんするわたしに、いつの間にか近くに来ていたかばんちゃん、くすくすと笑いながらそう言った。

———

「えつと、オオセンザンコウさんとオオアルマジロさんは、どうしてここに？」

「ふつふつふ……、おおきななぞをかぎあてる、たんていのきゆうかくをなめないでいただきましょう。」

「センちゃんはこういつてるけど、ほんとうはただ、おもしろそうだからついてきただけだよー。」

「もう、危ないことになるかもしれないからって、言ったのに。仕方ないなあ。」

話を聞くと、ふたりのフレンズさんはどうもかばんちゃんの知り合いであるらしかった。

声の大きなフレンズさんが、オオセンザンコウのセンちゃん、のんびりとした感じのフレンズさんが、オオアルマジロのアルマーちゃん。

センちゃんはきらきらした金色のショートヘアにウロコのついた帽子をかぶっていて、ワイシャツの上に着る桃色のカーディガンを着ている。

ブレスレットやスカート、長いしっぽにも大きなウロコがたくさんついていて、なんだか南国のくだものみたいな感じ。

ちよつと変わったアイドル衣装みたいな雰囲気、とってもかわいらしい。

アルマーちゃんもセンちゃんとおそろいの帽子をかぶっているのだけど、髪は黒のセミロングで、ふたりで並ぶと髪の色のコントラストがすごく映える。

ワイシャツの上にオレンジ色のカーディガンを着ていて、下は黄色のミニスカート。肩やひじ、ひざにはウロコのついたプロテクターをつけていて、まるでこれからローラースケートで遊ぶみたい、すごくアクティブな印象だ。

もつとも、アルマーちゃん自身はとても落ち着いた感じの子みたいだった。のんびりした表情で、けれどちゆういぶかく周囲を観察していた。

さすがは、『たんてい』の『じよしゆ』といったところだろう。

そう。探偵。

ふたりは『たんてい』を仕事にしているみたいで、センちゃんが『たんてい』、アルマーちゃんが『じよしゆ』とのことだった。

つい、今日のお昼まで、かばんちゃんの依頼で調査をしていたのだそうだ。

ふたりがいったい何を調べていたのか、聞いてみたのだけど、センちゃんいわく、「たんでいには、しゅひぎむがありますから、それはおしえられません！」

とのこと。

気になるけど、そう言われちゃったら仕方がないかな。

それに、こつちの話も確認しておかないと、だしさ。

そう思い、わたしはロードランナーちゃんに聞き直る。

「えっと、ロードランナーちゃんは、どうして？」

「っ、んだよ、いちやわりーかよ！」

わたしの質問に、ロードランナーちゃんはいつもの調子で返してくる。

「悪くないけど・・・、ひよつとして、あれからずっと、ついて来てくれたの？」

「へんつ！ てめーらただだとふあんだからな！」
どうも、そういうことみたい。

でも、そうならそうと云つてくれればよかったのに。せつかくついて来てくれてるなら、一緒になっておはなしとか、色々できたと思うんだけどな。

まあ、ロードランナーちゃんは意地っ張りな子だから、そんな提案してもたぶん、いつもの憎まれ口で返してくるんだろうけど。

なんて思っていると、やっぱりというか。

ロードランナーちゃんは「それに、」と区切るように言つて、いじわるっぽい顔をくびわちちゃんの方に向けながら、

「このちつこいのがまた、だれかにめーわくかけてるかもしんないしー！」

そんな、いつもの憎まれ口をたたく。

またいつものケンカがはじまりそう、なんて思いながらくびわちちゃんを見るのだけど、くびわちちゃんは買ひ言葉り返さなかった。

「……、あ、……つ、」

口を開けて何かを言いたそうにするのだけど、またすぐに口を閉じて、そのまま黙つてしまう。

「……んだよ、ちよーしくるうなー！」

ロードランナーちゃんは頭の後ろをかきながら、ぼやくように言う。

その顔に浮かぶのは、呆れたような、けれど、どこか心配そうな表情だ。

「おめーよお。かんじんなどで、びびってんじゃねーよ。」

「・・・」

「ずっとだまつてるわけにや、いかねーだろが。」

その言葉は、どういう意味だろうか。

たしかにくびわちゃんはさつきから黙ったままなのだけど、それだけの意味じゃないような。

うーん、と考えるみるんだけど、わたしにはよくわからない。

でも、くびわちゃんにはどうにも刺さったみたいで、閉じたままだった口を小さく開いて、声を漏らした。

「・・・い。」

「なんだよ。きこえねー。いいたいことがあるなら、はっきりいえつつーの。」

「・・・くそばーど、おせっかい。」

「へんつ、そのちよーしだよ。」

はつきりと聞こえたくびわちゃんの声に、ロードランナーちゃんにはやりと笑う。そしてその顔のまま、

「んで、どーすんだ？　いくのか？　にげんのか？　ここでにげたら、これからあたしはおめーのこと、みじんこくそびびり、つてよんでや、」

「いく。」

「・・・つたく、さいしょつからそーいえつっーんだよ。」

おはなしの途中でくいぎみに返されたのに、ロードランナーちゃんはどこかうれしそうな顔をしていた。

うーん。

なんだか、置いてけぼりになっちゃった感じ。

ひよつとして、こうやで別れる前に、ふたりは何か、秘密のおはなしでもしてたんだろうか。

わたしもイエイヌちゃんも、あのときは疲れてすぐに寝ちやつたし、ひよつとしたらその後で、ふたりは会ってたのかも。

・・・まあ、しんぎのほどは気になるけど、今は聞かなくてもいいことかな。くびわちゃんも行くって言ってくれたし、とりあえず、結果オーライだろう。

「なるほど。」

となりから聞こえた声に視線を向けると、かばんちゃんが真面目な顔でロードランナーちゃんを見ていた。

「かばんちゃん？ 何がなるほどなの？」

「あ、いえ。なんでも。えっと、ロードランナーさん。こうやで会ったフレンズさんたちから、ことづてを頼まれてるんですが・・・」

「あん？ だれからだよ。」

話しかけられたロードランナーちゃんは、かばんちゃんに視線だけを向けながら、ぶつきらばうな声を返す。

「チーターさんからは、頑張るのよ、と。」

「へんつ、いわれなくてもがんばるっつーの。」

と、チーターちゃんからのことづてには、はいはい、といった様子で、

「それからプロングホーンさんからは、あんまり無茶はするなよ、だそうです。」

「はい！ むちゃなんてしません！ ありがとうございます！ プロングホーンさまあ
！」

と、プロングホーンちゃんからのことづてには、目をきらきらさせながら、お返事をした。

あいかわらず、みごとなてのひらがえしである。

「・・・ごますり、くそばーど。」

「ああ!?! なんだとみじんこくそびびりい!」

ぼつりとこぼしたくびわちゃんの声に、ロードランナーちゃんはいつものように食って掛かる。

それは、うみべからこうやまで、飽きるほどに見た光景だ。

いつもなら、やれやれ、と思わずため息をつきたくなるような光景なんだけど、今はそのいつもどおりの姿が、とてもありがたい。

なんだかようやく、わるいゆめから抜け出せたような気分だ。

しぜんと、小さく開いた口から、笑い声が漏れだした。

「あはは。ふたりとも、ケンカしないの。」

言いながら、わたしはかばんちゃんの方に向き直ると、ロードランナーちゃんを手のひらで示して聞いてみる。

「あの子も連れて行っていいかな？ たぶん、ほつといてもついて来ちゃいそうだし。」

「あはは・・・、そうみたいだね。」

かばんちゃんは口元に手を当てて、可笑しそうに笑いながら、こんなことを言ってきた。

「うん。大丈夫。バスにはまだまだいっぱい乗れるから。」

・・・へ？ バス？

みつりんの中を歩き、ローラちゃんと会った広場に戻ると、空はだいぶ薄暗くなっていた。

もうそろそろ、日も完全に落ちる頃だろう。

『いせき』に向かう道とは反対の方、わたしたちがお昼にやってきた道の手前には、かばんちゃんの言っていた『バス』があった。

「へー。これが・・・、バス？」

思わず疑問形になってしまったのは、そのバスがわたしが知っているバスとはちよつと違う感じだったからだ。

車体は運転席と客席が分かれるような形をしている。トレーラーみたいな感じ、と言えはわかりやすいかな。

全身をヒョウ柄でカラーリングされていて、運転席の屋根にはネコ科のどうぶつみたいな大きなお耳がついている。

なんだかとおもってもかわいい感じ。

「もう、だいぶ暗くなってきたね。みんな乗って。出発しよう。」

かばんちゃんはその言って運転席に乗り込む。

かばんちゃん、車の運転もできるんだね。すごいなあ。

「むふー。いちどのつてみたいとおもっていたのです！」

「センちゃん。だんきがあるからー、きをつけてねー?」

センちゃんとアルマーちゃんは楽しそうに後ろの客席の方に乗り込んでいく。わたしたちも続かないと。

でも、その前に。

「あんたらにはえらいめーわく、かけてしもうたな。」

「そんな、迷惑だなんて。みんなと一緒にいれて、とつても楽しかったよ?」

一緒に広場に戻ってきたヒヨウちゃんたちが、お見送りをしてくれるみたいだった。

ヒヨウちゃんはわたしの素直な感想に、少し照れくさそうに笑う。

「にやはは。さわがしいんがウチらのとりえやからな。また、いつでもみつりんにおいでや。」

「そうですわね。わたくしたちいちどう、こころよりおまちしております。」

「きがねなくあそびにくるといいのよ。みつりんは、あそぶところもいっぱいあるんだから。」

「こんどはかわあそびなんてどうですか? わたしとりエちゃんでおよぎ、おしえますよ。」

クロちゃんも、リエちゃんも、メイちゃんも、すぐくあつたかい笑顔を見せてくれた。

「ともえさん……。ありがとう。」

そして、ローラちゃん。

ローラちゃんは少し涙ぐむような表情で、わたしの顔をまっすぐ見る。お礼を言われるようなことなんて何もしてないのだけど、そう言ってくれる気持ちは素直に嬉しかった。

「さんじゃなくて。今度会うときは、ともえちゃんって、呼んでね？」

「うん・・・、うん。ありがとう・・・、ほんとに、ありがとうね・・・。」

ぐすぐすと泣き出してしまったローラちゃんの頭を、となりにいたシーラさんがぽんぽんと撫でる。

「ローラたちが世話になったようだ。私からも礼を言わせてくれ。」

「そんな、あたしは何もしてないし・・・、お礼なら、がんばったイエイ又ちゃんと、くびわちゃんに。」

わたしがそう言うと、となりにいたイエイ又ちゃんは苦笑交じりに言う。

「わたしこそなにもしていませんよ。ローラさんをゆうきづけた、ともえちゃんのおかげです。」

くびわちゃんもこくこくと頷く。

それこそ、そんなことないと思うのだけど。

イエイ又ちゃんはがんばってたたかってくれたし、くびわちゃんが機械を動かしてく

れなかったら、シーラさんの姿を見て、ローラちゃんが元気になることもなかったしき。そんなことを思いながら、ふたりを見てみると、

「そうか。キミも、成長したのだな。」

シーラさんがいきなりそんなことを言ってきた。

その言葉は誰に対して言ったものなんだろう。目をそらしていたから、よくわからな
い。

「なんでもない。ただの独り言だ。」

疑問に思っ
てきよとんとした目を向けると、シーラさんはそう言っ
て、くつくつと笑った。

「必ず、またこの密林に来てくれ。そのときには、色々と話をしようじゃないか。ヒトの話は興味深いからな。歓迎するぞ。」

「あはは。あたしじゃ、シーラさんが楽しんでくれるようなおはなし、できないかもただけどね。」

そうして、みんななどのお別れをすませて、わたしたちもバスに乗り込んだ。

「ラッキーさん。ラボまでの運転、お願いしてもいいかな。」

「ワカツタヨ。カバンハ、ユックリヤスンデテネ。」

「ありがとう。暗いから、気をつけてね。」

「マカセテ。」

運転席の方から、かばんちゃんとボスのおはなしが聞こえてくる。そのおはなしの内容から、さつきてきとうに考えた予想は違ってたのかな、と思う。

ボスはこの車の運転だつてできる。つてことは、ボスは遠くにいるわけじゃなくて、近くにいるということ。なら、かばんちゃんの持つてる腕時計みたいなもの、あれがボスなんだろう。

かばんちゃん、あの腕時計みたいなものを、ラッキーさん、つて呼んでたし。ボスのせいしきめいしょうは、たしか、ラッキービースト、つて、いうんだつたよね。

つまり、あの腕時計みたいなものは、たぶんボスの本体で、理由はわからないけど、壊れちゃったボスをああいふ形に修理して、一緒にいる、ということなのかな。

そんなことを考えている内に、発車の準備はすんだようだ。ぶろろろ、というエンジン音と共にバスが動き出す。

笑顔で手を振るみんなに、わたしたちは客席の窓から身を乗り出して手を振り返す。今まで通ってきたちほーももちろん、そうなんだけど、

また来たいな、と心から思う。

広場の周りをぐるりと回って、バスはお昼にわたしたちが通ってきた道へと入っていった。

バスはあつという間にみつりんを抜けて、今はこうやとのさかいめを走っている。みつりんの外側をぐるつと回ると、かばんちゃんが住んでいる『らぼ』に着くみたいだった。

わたしは今日あったことを思い返しながら、スケッチブックにクレヨンをはしらせる。

スケッチブックの6ページ目には、きらきらとサンドスターのかけらが舞う中で、楽しそうにおしゃべりをしているヒヨウちゃん、クロちゃん、リエちゃん、メイちゃん、ローラちゃん、そしてシーラさんを描いた。

きらきらしたサンドスターの様子をクレヨンで再現するのはなかなか難しかったけど、われながら良く描けたと思う。

おえかきのできに満足しながら、目の前に掲げてむふふと笑っていると、正面の席に座っているイエイヌちゃんの姿が目映る。

「イエイヌちゃん・・・? どうしたの?」

イエイヌちゃんは何故だか、すごく元氣のない顔をしていた。

びこびこしたおみも、ふさふさのしっぽも、しゅんと垂れ下がっていて、ごきげんメーターはゼロ、といった感じに見える。

ひよつとして、さつきかばんちゃんに対して怒ったことを気にしてるのだろうか。

そう思って、声をかけてみるのだけど、

「イエイヌちゃん。さつきのはさ、仕方ないよ。お互いに誤解してただけなんだから。あんまり気にしちやダメだよ。」

「くうん・・・、そういうことでは、ないのですが・・・。」

どうも、当てが外れたみたいだ。イエイヌちゃんは心配そうな顔で運転席の方を見る。

その視線の先には、とうぜん、かばんちゃんがいる。

わたしは、うーん、と考えながら、思っていることをそのまま口にする。

「なら、くびわちちゃんのこと？ それこそ、心配ないと思うけど。かばんちゃんもいいヒトみたいだし。あぶないことにはならないと思うよ？」

くびわちちゃんはわたしたちから少し離れた席に座っている。その対面にはロードランナーちゃん。ふたりとも疲れていたのか、バスの揺れのせいかわからないけど、くうと寝息を立てていた。

運転席の近くにはセンちゃんとアルマーちゃんが寄り添うように座っていて、ふたりもまた穏やかな顔で眠っている。

なんとなく、ほっこりした気分でその姿を眺めていると、

「ほんとうに、そうなのでしょうか．．．？」

「イエイヌちゃんはとても心配そうな顔で、そんなことを言ってきた。」

「イエイヌちゃん．．．、それって、どういう．．．、」

いつも前向きなイエイヌちゃんらしくない台詞に、おどろいて聞き返す。

「イエイヌちゃんは警戒するようにしっぽとおみみを立てて、こう言った。」

「わたしは、あのヒト、あまりしんようできません。」

――――

フレンズ紹介くオオセンザンコウく

センちゃんはりんこー目センザンコウ科センザンコウ属の哺乳類、オオセンザンコウのフレンズだよ！

センザンコウの仲間はいろいろいるんだけど、オオセンザンコウはその中でもいちばんおつきい体をしてるんだよ！

背伸びをしたら、だいたいあたしと同じくらい、かな？ けっこうおつきいよね！

体はまつぼっくりとか、パイナップルみたいなギザギザのウロコで覆われていて、これは体毛が変化したものなんだって！

そのウロコはすごい硬くって、丸まって防御を固めたら、ライオンの攻撃でもびくともしないみたい！ すっごいよね！

ウロコは硬いだけじゃなくて、ギザギザしてるから攻撃にも使うことができるんだよ！ 長いしつぽにもウロコがついてるから、それを振り回して攻撃するんだって！

子どもの内はまだウロコがそんなに硬くないんだけど、まんがいち襲われても、おしりから臭い匂いのぶんびつ液を出して、身を守るんだって！

あと、子どもの内はお母さんにおぶってもらって移動するみたい！

センちゃんもなんだか子供っぽいから、ひよつとしたらアルマーちゃんにおぶってもらったり、してるのかもね！

けものフレンズR くびわちほー 第07話 「せるりあ
んくいーん」B・Cパート

フレンズ紹介〜オオアルマジロ〜

アルマーちゃんはひこー目クラミホリ科オオアルマジロ属の哺乳類、オオアルマジロのフレンズだよ！

アルマジロって言葉の意味は、武装したものの、って意味なんだって！ その名前の通り、体中がウロコで覆われていて、鎧を着てるみたいなんだよ！

アルマジロはセンザンコウと同じように、丸まって身を守るイメージがあるけど、丸くなれるの是一部のお仲間さんだけなんだって！

オオアルマジロは丸くなれないんだけど、そのかわりに穴を掘って隠れたりとかして身を守ったりするよ！

今、穴を掘るって言ったけど、オオアルマジロの面白いところは、その穴をたくさん作ることなんだ！

2日にひとつのペースで深い穴を掘って、寝床にしたり、虫とかのエサを取る場所にしたりするよ！

ひとつの穴の深さは5メートルにもなるんだって！ すっごいよね！

オオアルマジロの掘った穴は他の動物が使うこともあつて、みんなそこに隠れて休んだり、エサを取るために使うんだって！

こういうの、いんふらせいび、っていうんだよね！

他の動物の役に立つことを毎日せつせとこなしてるなんて、オオアルマジロって、すっごくがんばりやさなかも！

すっごい、えらいね！

バスが『らぼ』に着いたときには、もう日も沈んで、辺りはすっかり真っ暗になっていた。

らぼはとても頑丈そうな外壁に囲われていて、通用門らしいところの前でバスがいったん停車すると、びび、という電子音と共に門が開いた。そのまま通り抜けると、バスの後方で再び、門が自動で閉まった。

その門ももちろん、そうなんだけど、外壁も、それから車窓から見える建物も、明らかに人工物と見て取れるものだった。

コンクリートで出来ているそれらの建造物は、ひよつとすると、ヒトにとつてはぶんめいの温かみを感じさせるものだったかもしれないけど、どうしてか、冷たい印象を受

けてしまう。

・・・うん。どうしてかは、分かっている。

『わたしは、あのヒト、あまりしんようできません。』

そう言ったイエイヌちゃんの声と表情に、不安を感じていたから、だった。

あの後、「どうして?」と何度も聞いたのだけど、イエイヌちゃんは答えてはくれなかった。

ただ、ひとことだけ。

「だいじょうぶです。なにがあっても、わたしがまもりますから。」

とだけ、答えになっていないことを言って、そのまま黙ってしまった。

そうこうしている内にバスはらぼに辿り着き、けつきよく、どうしてイエイヌちゃんがかばんちゃんをそんなに警戒しているのか、わからないままだ。

「着いたよ。みんな、お疲れ様。」

バスを大きな建物の横に停めて、かばんちゃんが運転席からこちらを振り返って言う。

その顔に浮かんでいるのは、とても優しげな微笑みだ。

こんな優しそうな子なのに、イエイヌちゃんは どうして、信用できない、なんていうのだろう。

それはたしかに、かぼんちゃんは今日はじめて会ったばかりの子で、いきなり何もかも信じられるかと聞かれれば、そう答えるかもしれないけど。

でも、それを言うなら今まで会ってきたフレンズさんだって同じことなのに……うーん。

・・・まあ、考えても仕方ないか。

今はイエイヌちゃんも理由を答えてくれなさそうだし、まずはやるべきことをやらな
いと。

「みんな、着いたみたいだよ！ ほら、起きて起きてー！」

わたしは、ぱんぱん、と手を叩きながら、みんなを起こして回った。

それから、みんなで建物の中に入って、広いリビングでだいぶ遅めの夕食をとった。

もちろんメニューはジャパリまん。みんなのぶんのジャパリまんはぜんぶ、かぼん
ちゃんが提供してくれた。

「時間があれば、料理をこちそうすることもできたんだけど……」

なんて言っていたけど、ホントかな？

かぼんちゃん、どんな料理つくるんだろう。あとで食べてみたいかも。

そんなことを思ったけど、ジャパリまんを一口頬張ると、すぐに頭から抜けて行っ
てしまった。

やっぱりジャパリまんはおいしい。あいかわらずの幸せな味に、みんなの顔もほころんでいた。

それにしても、こんなにくさきんいるのに、気前よくふるまって平気なんだろうか？ そう思つてかばんちゃんに聞いてみたのだけど、なんでもシーラさんの治療に使うのに集めたのだとかで、だいぶ余ってしまったらしい。

手持ちのジャパリまんの数が心もとないことを伝えると、かばんちゃんは、いくらでも持つて行つて、と笑顔で言つてくれた。

やっぱり、かばんちゃんはとっても優しい、いい子だった。

・・・いい子、なんだけどなあ。

ごほんの間もイエイヌちゃんの表情は険しくて、警戒するような視線をかばんちゃんに向けていた。

表情が険しい、と言えなくびわちゃんもまたそうかもしれない。

もつとも、くびわちゃんの場合は、警戒しているというより、不安そうな表情だったけど。

センちゃんとアルマーちゃんは、らぼの中を興味しんしん、といった感じに眺めていて、ときどき「あれはなんですか!？」とかばんちゃんに質問しては、その答えをふんふんと聞いていた。

わたしもいろいろ聞きたいことがあったのだけど、イエイヌちゃんとかくびわちゃん、ふたりのことを気にしていると、ついつい無言になってしまって、結果、ただただ食べるのに集中してしまった。

ロードランナーちゃんももとより、山のようなジャパリまんに夢中だった。

そうして、すっかりお腹いっぱいになったところで、

「今日はもう遅いから、話は明日にしようか。部屋はいっぱいあるから、自由に使つていいよ。」

と、かばんちゃんが言つて、その場はお開きになった。

翌朝。

「ふんふんふんふん、ふんふんふんふん、ふんふーん♪ ふんふん、ふんふんふん…、」
上機嫌に鼻歌を歌いながら、わたしはリビングのおそうじをしている。

ごちそうしてもらった上に泊まる場所も提供してもらったのに、何もしないでいるのが申し訳なくはじめただけど、やってる内にちよつと楽しくなつてきてしまったのだ。

それに、上機嫌な理由はもうひとつある。

えへへ。何だと思ふ？

ヒントは、あたしのおい！

・・・、ぶつぶー、じかんぎれー。

正解は、『シャワーを借りれた』でした！

昨日、なんだか気苦労を感じる夕食を終えた後で、かばんちゃんが、そう言えば、とシャワーの存在を教えてくれたのだ。

目が覚めてこれまで、水浴びも満足にできなかったわたしにとつては、その話は天から降り注ぐ恵みの雨のようなものだった。シャワーだけに。

浴槽があるともつとうれしかったのだけど、ぜいたくは言えないよね。

それに、温かいお湯を浴びているだけで、とつても気持ちよかつたし。

備え付けられてたのは石鹸だけだったから、洗ったばかりのときは髪がきしきしするのが気になったけど、朝になったらしっとり感が戻ってたから問題なしだ。

お借りしたベッドも、すつごく寝心地が良かつたし。

というわけで、すつかりリフレツシュしたわたしは、みんなよりちよつと早起きして、リビングのおそうじをしていたのだった。

「ふんふんふん、でれれれ、じゃーっじゃっ、じゃーん♪ でれれれ！」

「しっしっし、やけに楽しそうなフレレンズがいるねえ。」

鼻歌が歌に変わったあたりで聞こえてきた声に、急にげんじつに引き戻される。

声のした方を見ると、はじめて見るフレンズさんがにやにやした顔でこちらを眺めているところだった。

わたしは顔が真っ赤になっていくのを感じながら、あはは、と乾いた笑いでその声に答える。

うーん。ぜんぜん気づかなかった。

歌とおそうじに、集中しすぎちゃったのたかも。

それにしても……、足音とかぜんぜん、聞こえなかったような。

「おやあ？ キミはあ……、もしかして、フレンズじゃあないのかなあ？」

「う、うん。あたしは、ヒトのともえだよ。よろしくね！」

恥ずかしさをまぎらわすように元気よく自己紹介をすると、そのフレンズさんにはにやにやした顔のまま、

「ししし……。ヒト、ヒトねえ。まあ、キミがそう言うんならあ？ そうなんだろうねえ。」

そんな、てつがく的な言葉を返してくる。

なんだか不思議な子かも。

つやつやした髪は灰色で、すつごく長い。それこそ、青みがかった毛先が床に着きそうなくらいだ。青っぽい紫の前髪は横にまとめていて、つるつとしたおでこがとつても

キュートな感じ。

フレンズさんも音楽を聴くのだろうか？ 頭にかぶっているヘッドホンには、「PP」と文字が書いてある。飾り気のない意匠のはずなのに、なんだかおしやれだ。

襟元の青いフードがセーラー服っぽくも見える白いパーカーは、ふりふりのミニスカートと一体になっていて、ちよつと変わったワンピースみたい。

変わっている点はもうひとつあって、肩から先は灰色と白のモノトーンカラーなんだけど、その袖口がびったり、閉じていること。

まるで大きなミトンみたいな袖に、すっぽりとその腕を収めていた。

・・・なんだろう。

久しぶりにムズムズする感じが、するような。

あの、とりの羽っぽい腕とか、

髪とか肌とか、やけにつやつやしてて、りゆうせんけいなフォルムとか、

すつごく見たことのあるどうぶつのフレンズさん、な気がするんだけど・・・。

湧き上がってきたきゅんきゅんをなんとか抑えながら、わたしはお名前をたずねるところにした。

「えつと、あなたのお名前は？」

「ワタシ？　ワタシはねえ・・・。」

「ジャイアントペンギンさん。戻ってきてたんですね。」

答えたのは、リビングに入ってきたかばんちゃんだった。

その答えに、やつぱり、と思う。

そして、じよそうたいせいにはいる。こころのなかで。

「やあやあ、かばんちゃん。キミも、戻ってきてたんだねえ?」

「ええ。ゆうべ遅くに。」

「なるほどなるほどお。それならあ、お目当てのものは見つかったのかなあ?」

「はい。おかげさまで。」

「しっしっし。そいつは良かったねえ?」

何やらかばんちゃんとおはなしているようだけど、耳に入らない。

そして、かばんちゃんに気を取られている今が、絶好のチャンス!

わたしは内なるきゅんきゅんの指し示すがまま、がばりと手を広げて走り出す。

「ぺんぎんさんだあつ!」

「おっとお。」

そんな、気の抜けた掛け声とともに、ひらりとかわすジャイアントペンギンちゃん。

ええ? うそ!

きゅんきゅんのはどうに支配されたわたしの渾身のタツクル・・・、

じゃなくて、心からの愛情表現を難なくかわすなんて．．．！
本気を出したらあれだけ機敏な動きができるトンちゃんですえ、かわせなかったの
に。

「ええ？　ともえちゃん、一体なにを．．．。」

いきなりの行動にびっくりした表情のかばんちゃんが声をかけてくるけど、今はそれ
どころじゃない。

「なんで!?　なんでよけるの!?!」

わたしはあまりのくやしさに膝をつきながら声を上げる。

ひとめがなければ泣いているところだ。

せつかく、ぺんぎんさんにさわれるのに．．．。すりすりできるのに．．．!!

「そりゃあ避けるよお。ワタシは体温が低いからねえ。ヒトが触れると火傷しちゃうん
だよお。」

けれど、にやにや顔のまま発したジャイアントペンギんちゃんの言葉に、頭から冷水
をかけられたような気持ちになった。

「ええ!?!　そうなの!?!　ごめんさい!」

あわてて謝ると、ジャイアントペンギんちゃんはまたにやにやと笑って、

「ししし。別にいいよお?　ウソだしさあ?」

「・・・へ？」

「もう、ジャイアントペンギンさん、あんまりからかわないであげて下さい。」

かばんちゃんが困ったような顔で言うのを聞いて、からかわれたのだと理解した。

暴走して、おまけにからかわれて、

なんだかあまりに自分が情けなくて、さっきまでのきゅんきゅんも、なんだかすつかり落ち着いてしまった。

「えつと・・・、ごめんさい。あたし、かわいいものとか見ると、興奮しちゃって。」

「いいよいいよお？ それだけワタシが魅力的ってことだからねえ？ しっしっし。それでも勿論？ おさわりは禁止だけどねえ？」

立ち上がりながらのわたしの言葉に、ジャイアントペンギンちゃんは釘を刺すようにそう言った。

「改めましてえ、ワタシはジャイアントペンギン。まあ、気軽にジャイアント先輩と、呼んでくれたまえよお。」

「あはは。よろしくね。ジャイアント先輩。」

わたしが言葉通りに呼び返すと、ジャイアントペンギンちゃん：、じゃなくて、ジャイアント先輩はまた、ししし、と笑って、

「キミは素直ないい子だねえ。今度後輩のペンギンを連れてきてやるからあ、おさわ

するのは、そいつらにしなさいなあ？」

「ホントに!? 楽しみにしてるね!」

そんな、うれしい提案をしてくれた。

「いいんですか? そんな約束勝手にして。ペパプのみんな、怒りませんか?」

「いいのいいの。アイドルやってんだからあ、おさわりも仕事の内だよお。」

「それ聞いたら、みんな怒ると思いますよ? マーゲイさんも。」

かばんちゃんとかジャイアント先輩が何やら話しているけれど、わたしはまだ見ぬペンギンさんたちとのふれあいを想像するのに夢中で、やっぱり耳に入らなかつた。

それから、起きてきたみんながリビングに集まると、昨日の話の続きとなった。

思い思いにソファアに座つたり、カーペットに寝そべつたりしながら、みんなの前に立っているかばんちゃんの口が開くのを待っている。

かばんちゃんは何かタブレットみたいなものを持っている。たぶん、あれで資料か何かを見せて、説明を補足するつもりなんだろう。

わりとほんかく的なその様子に、わたしは心の準備をする。

ゆうべは勝手に雰囲気にもまれて黙っちゃっていたけど、今日はちゃんとしよう。

これでしょうか、聞きたいことをいろいろ聞けるわけだし。

シャワーも浴びれてベッドで寝れて、心機一転、すこぶる快調といった感じだし。

・・・まあ、ついさつき、快調すぎて大きな失態を見せたばかりではあるんだけどさ。

「じゃあ、昨日の続きを、始めますね。」

かばんちゃんが話をはじめると、リビングの照明が少し、薄暗くなった。

「セルリアンクイーンは、文字通りセルリアンの女王で、セルリアンを自由に操れる能力を持っています。そして普通のセルリアンと同様に、フレンズさんを襲います。」

そこで言葉を区切り、持っていたタブレットを操作すると、リビングの中央、かばんちゃんのとなりには立体映像が映し出された。

あ・・・、タブレットで見せるんじゃないかね。

かばんちゃんのぷれぜんは、考えてたより、もっとほんかく的だった。

立体映像をはじめて見たのだろう、センちゃんとアルマーちゃんは「おおー」「なになにー？」と興味深げにその映像を見る。

暗くなつて眠気を誘われたのか、カーペットに寝そべるロードランナーちゃんは興味なさそうな顔であくびをしていた。

ジャイアント先輩はくびわちゃんの方を眺めながら、またにやにやとした笑みを見せている。

そのくびわちゃんと、イエイヌちゃんの表情は、やっぱり暗いままだ。

うーん……。

かばんちゃんの説明で、ちゃんと誤解が解けるといいのだけど。

みんなの反応を眺めつつ、改めて、わたしはその立体映像を見る。

そこに映し出されていたのは、半透明の緑色をした、ヒトのような形をしたものだった。

「これは、かつてこの『らぼ』で研究されていた、セルリアンクイーンの映像です。見ての通り、ヒト型のセルリアン、といった形態です。」

これが、かばんちゃんの言っていたセルリアンクイーン……。
でも、これって……、

「みなさんもお察しの通り、くびわちゃんとは姿形は全く似ていません。ですが、」

わたしが思いついた疑問をそのまま口にするように、かばんちゃんは言う。そしてまたタブレットを操作すると、浮かんでいた映像に変化が生じた。

映像の中のセルリアンクイーンに、大きな耳としっぽが生える。

かと思うと、その耳が小さくなったり、あるいは全くなくなつて、フードみたいなものをかぶつてみせたり、しっぽも太さや長さが変わつたりしていた。

「このように、セルリアンクイーンはその姿形を変化させます。」

「ちよつと待って。これ、みんな、フレンズさんの形なんじゃないの?」

わたしが思いついたことをそのまま言うと、かばんちゃんはわたしの方に向き直り、「うん。その通りだよ。」

すぐく真面目な顔でわたしの言葉を肯定した。

「セルリアンはフレンズさんを取り込んで、サンドスターを奪いますが、セルリアンクイーンは取り込んだものの輝きを奪うとされています。」

「輝き……、」

聞こえてきた新しい単語に、思わずオウム返しをしてしまう。それを質問ととらえたのか、それとも、もとより説明するつもりだったのか、かばんちゃんは補足説明をしてくれる。

「輝き、というのは、生き物を生き物たらしめる、根っここの部分です。心とか、魂と言ったのが近いかも知れません。」

心とか、魂。

それが、輝き。

それを……、奪うの？

それって、すつごく危険なんじゃ……。

改めて、かばんちゃんがどれだけ危険なものに向き合おうとしたかがわかった。

かばんちゃんは、昨日は気を張っていたと言っていたけど、話を聞いた今、それも無

理もないことだと思う。

「輝きを取り込んだセルリアンクイーンは、取り込んだ相手の姿形を模倣すると言われています。その為、このようにいくつもの形態を持つわけです。」

かばんちゃんはそう言つて、タブレットを持っていない方の手で目まぐるしく姿を変えセルリアンクイーンを指し示す。

「この映像は、かつてこのえりあで発見された、セルリアンクイーンの幼体を映したものの、なのだそうです。他にもらぼには色々な資料が残されていたのですが、内容が難しくて……」

言いながら、かばんちゃんがタブレットを操作すると、映像の中のセルリアンクイーンが、はじめに見た耳もしっぽもない形に変化して、止まった。

「ボクにわかったのは、このセルリアンクイーンの幼体が、リトルクイーンと呼ばれていたこと。そしてそれは、今もこのえりあにいるかも知れない、ということだけでした。」

リトル、クイーン。

それが、あのセルリアンの、名前。

口には出さずその名前を繰り返していると、立体映像が消え、薄暗くなっていたリビングの照明が元に戻る。

えっと……、これで説明は、終わりってこと？

かんじんなことをまだ、聞けてないような……。

それそわと質問をしたそうにしているわたしに気づいて、かばんちゃんが手のひらを向けてそれを促してくれた。

「えつと……」

口に出しながら、質問を頭の中でまとめる。

「かばんちゃんは どうして、くびわちゃんがその、リトルクイーンだって、思ったの？」
「うん。それなんだけど、」

かばんちゃんはそこで一度区切り、視線をくびわちゃんの方に向けて、その先の言葉を続けた。

「ボクは、前に一度、くびわちゃんに会ってるんだ。」

——
それは、何週間か前のことです。

知り合いのフレンズさんやラッキーさんから、最近、セルリアンが以前よりたくさん、見かけられるようになったと聞いたボクは、気になって調査を始めることにしました。

セルリアンの活動が活発になるのには、必ず原因があります。それは、かつて別のえりあで経験したことから学んでいたことです。

それに、ボクは既に、らぼに残された資料からリトルクイーンのことを知っていまし

た。

そして、リトルクイーンはまだこのえりあにいるかも知れない、ということも。

あくまで想像ですけど、リトルクイーンは何かの理由で休眠状態になっていて、それが最近になって目覚めたんじゃないか、そう思っ、急いで調査を始めました。

色々なちほーを回って見たのですが、あまり有力な情報は得られなくて、一度戻ろうと思ったらぼの近くまで来たときに、くびわちゃんに出会ったんです。

くびわちゃんらはらぼの近くで、倒れているフレンズさんと一緒にいました。

フレンズさんは大ケガをしているみたいで、くびわちゃんはその周りをうろうろしながら、きよろきよろと辺りを見渡していました。

ボクはそのとき、とっさに、助けなきや、と思いました。

もう少し詳しく、誰から、誰を、と言え、

くびわちゃんから、そのフレンズさんを、です。

くびわちゃんがどういう子なのか、少しだけ分かった今となつては、勘違いだったんだった、分かるんですけど。

きつと、くびわちゃんはそのフレンズさん、シーラさんを、何とか助けようとしてたんだよね？

辺りをきよろきよろ見ていたのは、たぶん、ラッキーさん、ラッキービーストが通り

がからないか、探していたんだと思います。

けれどそのときのボクには、そう思えなかった。

だって、そこにはくびわちちゃんとシーラさんの他に、大きなセルリアンがいたんだから。

くびわちゃんは、そのセルリアンとおはなしをしているみたいでした。

声を出していたわけじゃないから、本当にそうだったかは分かりませんが、少なくとも、セルリアンがくびわちゃんに襲いかかる素振りすら見せなかったのは事実です。

状況がつかめなくて、とつさにくびわちゃんに声をかけちゃったのがいけなかったんでしようね。

くびわちゃんは急に声をかけられてびっくりしたみたいで、そのままセルリアンと一緒に、走って逃げてしまいました。

そして、大ケガをしているシーラさんを抱えて、らぼに戻る途中で、ボクは思いました。

あれが、リトルクイーンなんじゃないか、って。

シーラさんの治療をはじめたボクは、勿論調査になんて行ってる場合じゃなくて、オオセンザンコウさんとオオアルマジロさんのふたりに、代わりに調査をお願いしたんです。

調査の内容は、小さい体で、大きな耳と尻尾があつて、緑色で、ぶかぶかの首輪をつけたフレンズさんを探して、観察すること。

危険なことにならないよう、絶対に接触しないよう、念を押してね。

それから、もしその子がヒトと接触するようなら、すぐにボクに知らせて欲しいとお願いしました。これは保険というか、あり得ないこととは思つたんですが、一応ね。

セルリアンクイーンがヒトの輝きを奪うと、本当に大変なことになるみたいなので、それも全部考え過ぎだったって、今なら分かるんですが。

くびわちゃんが危険な存在じゃないってことは、一緒にいるともえちゃんや、イエイ又さん、ロードランナーさんが証明してくれましたから。

ただ・・・、それでも、ひとつだけ確かなことがあります。

くびわちゃんは、セルリアンと意思疎通をする、ちからを持つているということ。

ボクが見たことと、こうやで、ともえちゃんたちが体験したこと、それは、そうじゃないと説明がつかないんです。

長い話を終えて、かばんちゃんは、すう、と深呼吸をする。

「これは、あくまでボクの想像でしかないんですが、」

そして、くびわちゃんを真つすぐに見つめた。

「くびわちゃん。キミは、ラツキーさん、ラツキービーストがセルリアン化して生まれ
た……。そうじゃないかな。」

ボスの、ラツキービーストの、セルリアン？

その言葉に、わたしの理解は追いつかない。

たしかに、かばんちゃんが言ったように、くびわちゃんがセルリアンとおはなしがで
きるのは、本当かもしれない。

それでいろいろなことに説明がつくことは、じじつだ。

でも、くびわちゃんがセルリアンだなんて……。そんなの……。
ぐるぐると回る思考に、めまいさえ感じる。

「なるほどねえ。道理で、似てるわけだねえ。スタービーストに。」

独り言のような誰かの声も、耳に入ってこない。

たしかに、わたしも思ったことはある。

くびわちゃんはいろんなことを知っていて、いろんな道具も使えたり、直せたりする。
まるで、ボスみたいに。

ひよつとしたら、ボスがフレンズになったらこんな感じなのかも、なんて思ったこと
もあるくらいだ。

そうだよ。フレンズさん。

ラッキービーストのフレンズさんなら、説明がつくんじやないかな？

セルリアンとおはなしができるのだって……、

何か事情が……、

あつて、その……、

けれど、そんな事情は、どれだけ考えても思い付かない。

ぐるぐると頭をフル回転させて、つじつまが合う答えを探すのだけど、けつきよく、かばんちゃんの示したもののより全てを上手く説明できる答えは、見つからなかった。

そして、くびわちゃんは、

かばんちゃんの問いかけに、こくり、頷いた。

くびわちゃんは、かばんちゃんの説明を引き継ぐように、たどたどしく言葉を紡ぎはじめた。

「……さんどすたーが、どうぶつや、どうぶつだったものにあたると、ふれんずや、びーすとなる。いしとか、むきぶつにあたると、せるりあんになる。」

それは昨日、みつりんできびわちゃんに教えてもらったことだ。

「……ぼくたち、らつきーびーすとは、むきぶつだけど、こーていんぐがさされていて、さんどすたーの、えいきようを、うけないようになってる。」

その説明を、そしてかばんちゃんの言葉を、補足するように、くびわちゃんは続ける。

「・・・ぼくは、そのこーていんぐが、なくなったじょうたいで、さんどすたーにふれた。だから、せるりあんになった。」

ふう、と小さく息をはくと、座っていたソファから立ち上がり、わたしとイエイヌちゃんの前には立った。

「・・・ともえ、いえいぬ。」

その声は、いつものように、淡々とした声で。

けれどその表情は、いつもの無表情じゃない。

すぐくつらそうで、とても心細そうで、

今にも泣きだしてしまいそうな表情で、くびわちゃんは口を開いて、

「・・・いままで、だまつてて、ごめんなさい。ぼくは、ふれんずじゃ、」

言いかけた言葉は、けれど、最後まで言い切られることはない。

ううん。

そんな言葉は、最後まで絶対に言わせない。

わたしは立ち上がった勢いのままくびわちゃんに抱き着いて、その顔を自分の胸に埋めていた。

「そんなこと、言わないでよ。」

ごめんなさいだなんて、

セルリアンで、フレンズじゃなくて、ごめんなさいだなんて、

そんな悲しいことを言わせるために、あたしたちは一緒に過ごしていたわけじゃない。
い。

そうだ。あたしが悩む必要なんて、はじめからなかった。

たとえくびわちゃんがフレンズさんじゃないのだけどしても。

「くびわちゃんは、くびわちゃんだもん。あたしたちのたいせつな、おともだちだもん。」
そのじじつが変わることなど、ありえないのだから。

抱きしめていたくびわちゃんを離して、その顔を真つすぐに見る。

「だから、謝らないで？ 勇気を出して話してくれて、ありがとう。」

わたしがそう言うと、くびわちゃんの瞳がうるうると揺らぎはじめる。

となりに立っていたアイエイヌちゃんが、そんなくびわちゃんの頭を優しくなでた。

「わたしもおなじきもちです。たとえなんであつても、くびわちゃんはわたしたちの、たいせつなおともだちですよ？」

「……ともえ、いえいぬ。」

いつものような、淡々とした声。

けれどそこには、いつもの無表情じゃない、泣き出しそうな笑顔があつた。

「へっ、だからいったろーが。そいつらはそんなの、きにしねーってよ。」

ロードランナーちゃんが寝そべったままの体勢で、やれやれという感じに言った。やっぱり、ロードランナーちゃんはくびわちやんのこと、知ってたみたいだね。

ロードランナーちゃんは、心配でついてきた、って言ってたけど、

それって、あたしたちみんなが、じゃなくて、くびわちやんのことが、ってことだったのかな。

「・・・みんな。ありがとう。」

震えながら発せられた言葉と共に、くびわちやんの瞳からほろほろと涙がこぼれ落ちた。

そうして、誤解からはじまった一連の出来事は、収まるところに収まった。

これでまた、みんなで旅を続けることができそうだ。

旅の支度を整えて、わたしたちはらぼの通用門の前にいる。

わたしたち、というのわたしとイエイヌちゃんと、くびわちゃん、そしてロードランナーちゃんのようにんだ。

やっぱりというか、ロードランナーちゃんも一緒に来てくれることになった。

もちろん断る理由もないし、むしろ一緒にいろいろおはなしたいから、うれしいことなのだけど、またくびわちゃんとケンカしないかだけが気がかりだ。

この一連の出来事で、くびわちゃんが何者か、というじじつが明らかになったわけけど、それで何かが変わるわけでもなく、過ぎてみれば、いつも通りの日常だった。

「みんな、気をつけてね。」

横並びになるわたしたちの前には、かばんちゃんがいる。

せつかくだからとお見送りに出てきてくれていた。

「ぐぬぬ・・・、おおきななどが、めのまえでとかれてしまいました・・・。これではた
んていのながすたります・・・。」

「まーまー、そういうこともあるさー。」

かばんちゃんの後ろの方では、何故か悔しそうにしているセンちゃんを、アルマー
ちちゃんがなだめている。

ふたりはわたしたち・・・というか、くびわちゃんを追いかけていたんだっけ？

そうなると、ふたりの旅はこれで終わり、ということなのかな。

くびわちゃんがその、リトルクイーンとかいうものじゃないってことは、わかったわ
けだし。

ちなみにジャイアント先輩は昨日あんまり寝ていないらしく、

「ワタシは眠いから寝るよお。」

とこのことで、この場にはいない。

もつといういろいろおはなししてみたけど、仕方ないかな。

それに、後輩のペンギンさんたちと会わせてもらう約束もしたし、おはなしはそのと
きにすればいい。

「かばんちゃん。いろいろ、ありがとね？」

「気にしないで。ジャパリまんは余ってるし、バギーだって、ずっと使ってなかったか
ら。」

かばんちゃんが言うバギーというのは、今、わたしたちの後ろでエンジン音を立てて
いる車のことだ。正しくはジャパリバギーといって、動くように整備はしていたらしい
のだけど、ずっと使わずに保管していたものらしい。

運転に不安を感じて、たいよをじたい、しようと思っただけで、くびわちゃんが、
「……まかせて。」

と手を上げたので、ために運転させてみると、らぼの狭い敷地内をすいすいと、見
事に乗りこなしていた。

こういうところは、さすがはボス、ということだろうか。

でも、今わたしが言っただのは、そういうことではなくて。

もちろん、しょくりょうのほきゆうや、旅の足ができるのは、非常にありがたいのだ
けど。

「えっと、それだけじゃなくて。かばんちゃんのおかげで、くびわちゃんが自分のこと、教えてくれる機会ができたわけだし。だから、ありがとう。」

わたしが改めてお礼を口にするのと、かばんちゃんは少し困ったような顔になって、「それこそ、気にしないでいいよ。むしろ余計な心配をさせるようなことを言っちゃったから……。本当に、ごめんなさい。」

そう言って、帽子が落ちてしまいそうになるくらい、深々と頭を下げた。

「……ぼくも、にげちゃって、ごめんなさい。」

「わたしも、しつれいなたいどをとってしまつて、もうしわけありませんでした。」
くびわちゃんとイエイヌちゃんも、同じように深く頭を下げる。

そうして顔を上げた後、小さく微笑み合う。

お互いに誤解していたことは、これで全部解消できた、ということだろうか。
うーん、と思う。

わたしには、あとひとつだけ、まだ気になることがあるのだけれど……、
「ひとつ、ともえちゃんに聞いておきたいことがあるんだけど。」

「へ？ あたしに？」

どうしたものかと考えを巡らせていたわたしの耳に、かばんちゃんの声が届く。
なんだろう、と思っていると、かばんちゃんはとても真剣な顔で、こう言った。

「ともえちゃん、旅をはじめめる前は、どこにいたの？」

ああ、そう言えば、話してなかったっけ。

「んー、と、そうげんのはしつこの方の・・・、なんだか建物の中、かな？　ここの建物

とちよつと似てる感じ、なんだけど。」

「そこで暮らしてたの？　ひとりで？」

「えつと、そうじゃなくて・・・。」

わたしはそうげんの建物で目覚めたこと、目覚める前の記憶がないことを簡単に説明する。

「だから、それまでどこで何してたヒトなのか、わかんないんだ。」

「そう・・・、なんだね。・・・ごめんね、答えづらいこと聞いて。」

かばんちゃんは表情を暗くして、またごめんなさいを言ってきた。

うーん。

やっぱりそういう反応になっちゃうよね。

あたし自身、みつりんでシーラさんにヒトのことを聞いたときとか、

勘違いだったけど、かばんちゃんにセルリアンクインと言われたときとか、

すつごく不安になっちゃってどうしようもなかったわけだし。

でも、何故だか今は、自分の記憶がないことに、何の不安もない。

ううん。何故だか、じゃないかな。

そこには明確な理由がある。

「ぜんぜん！ 気にしないでいいよ！ イエイヌちゃんのおうちに行くのも、はじめは手掛かりがないかなって気持ちだったけど、今は単純に遊びに行きたいだけだもん。」

言いながら、その理由をくれた存在を、まっすぐに見る。

思えば、そうげんでひとり不安だったわたしを救ってくれたのも、やっぱりこの子だった。

「ねー 楽しみだよねー」

その子はいきなりおはなしを振られて、わふ、とびつくりした顔をして、けれどすぐにぱたぱたとしつぽを振り、笑顔で答えてくれた。

「はい！ たのしみです！」

バギーの後部座席に座りながら、スケッチブックを開きつつクレヨンをくるくる回している、前の方からぴゅいぴゅいという音がするのに気付いた。

どうやら、助手席に座っているロードランナーちゃんが可愛らしい寝息を立てながら寝てしまっているようだ。

「ロードランナーちゃん、また寝てる・・・、」

「いろいろ、むずかしいはなしばかりでしたから。つかれてしまったのでしよう。」

「イエイヌちゃんはその言うのだけど、この子、さっきのかばんちゃんの説明のとき、めっちゃばくすいしてたと思うんだけど。」

まあ、いつか。

「運転中のくびわちゃんとケンカして、事故でも起こされた日には、かばんちゃんに合
わす顔がないし。」

「イエイヌちゃんは眠くない？ 大丈夫？」

「だいじょうぶです！ むしろおそとにでられて、げんきになってきたくらいです！」

たしかに、イエイヌちゃんは言葉通りに元気そうだ。

「なんだかこうして元気なイエイヌちゃんの姿を見るのも、しばらくぶりな気がする。」

「あはは、たしかにそうかも。ラボの中でやけに静かだったもんね。イエイヌちゃん、狭
いところはにがてなの？」

「いえ、そういうわけではなく・・・。」

「イエイヌちゃんはちよつとだけ困ったような表情になって、その先を続けた。」

「やっぱり、わたし、あのかばんというかた、どうもにがてで・・・。」

うーん。やっぱり、そっか。

あえてはぐらかしてみただけど、やっぱりイエイヌちゃんは、らぼにいる間ずっと、警

戒していたということ、なんだよね。

まあ、それでも。

昨日は『しんようできない』なんて強い言葉だったのが、『にがて』程度に落ち着いたのは、かばんちゃんのヒトとなりが、ちよつとだけでもわかったからだろう。

「昨日も聞いたけど、どうして？」

その問いは、昨日は答えてくれなかったことだけれど、イエイ又ちゃんが自分から話してくれた今なら、答えが聞けそうだと思った。

その予想は裏切られず、イエイ又ちゃんはくうん、と小さく声を漏らして、答えてくれる。

「なにか、その、こわいかんじがして。」

「怖い？　なんで？　ぜんぜん、優しいヒトだったと思うけど。」

「わたしもそうおもうのですけど・・・、あのかたのにおいをかぐと、まえにみた、こわいゆめをおもいだしてしまうのです。」

こわいゆめ、かあ。

ゆめつて、たしか頭が記憶を整理しているときに見るんだっけ。

こわいゆめ、なんだったら、過去に経験した怖い体験とかが、その原因だったりするわけだけど・・・、

「怖い夢って？ どんなの？」

夢の内容を知ることができれば、イエイヌちゃんの、かばんちゃんに対する苦手意識が、何にきいんしてるのか、分かりそうな気がする。そう思って聞いてみると、

「おさえつけられて、みうごきのできないわたしに、なにものかが、とがったものをさしてくるのです。とつてもいたくなくてにげようとするのですが、にげられなくて。」

え……、

それって……、

「そのなにものかは、とがったものをぬくと、につこりわらいかけてくるのです。ひどいめにあわせておきながら、そのひょうじょう……、そこしれぬきようき、をかんじました。」

「ひよつとして、その何者かに、かばんちゃんが似てるの？」

「くうん……、すがたかたちは、ちがうのですが、においがそっくりで。こんな、ゆめのことでもわがってしまって、いいだせなかつたのですが……。」

おはずかしいかぎりです、と結びの言葉を口にして、イエイヌちゃんはしゅんとしてしまった。

うーん……、と、

なるほど。

あはは。

そういうことか。

「あー、そつか。あたし、なんとなくそれ、わかっちゃったかも。」

「ええ!?! どういうことですか!?! わたしのゆめとあのかたと、どんなかんけい!?!」

「ええと、あんまりうまく説明できないかもだけど、」

そう前置きをして、わたしはたどたどしい説明をはじめめる。

イエイヌちゃんはときおり、ふむふむと相槌を打ちながら、わたしの話を黙って聞いてくれた。

そして、わたしが話を終わると、ぽん、と手を打ちながら、

「なるほど、わたしがフレンズになるまえのきおく、ということですか。」

と、まとめるように言ってくれた。

さすがイエイヌちゃん、りかいがはやい。

「そうだと思う。たぶん、病気になるらないように、注射を打ってもらった時の記憶、なんじゃないかな? 予防注射、つてやつ。」

「よぼう、ちゆうしゃ。」

はじめて聞く言葉なんだろう、オウム返しをするイエイヌちゃんに、わたしはそのまま話を続ける。

「姿かたちが違うのは・・・、ひよつとしたら、かばんちゃんもフレンズになる前、だったのかな。かばんちゃん、ヒトのフレンズだって、言ってたし。」

「なるほど・・・、たしかに、そうかもしれない。・・・ということは、」

ハツとしたような顔を見せるイエイヌちゃんに、わたしは小さく笑みを見せながら、「そうだね。それは怖い夢じゃなくて、優しいヒトに会った思い出、なんだと思うよ。」

そのことを、教えてあげた。

イエイヌちゃんはまた、くうんとおはなを鳴らしながら、申し訳なさそうな顔で、来た道の方、らぼの方を眺める。

そこに映る景色には、すでにらぼの外壁すらないけれど、何を思っただ視線を向けているのかは、痛いほどにわかった。

「・・・あとで、また会いに行こうね。」

「はいー」

元氣よくお返事をくれたイエイヌちゃんに、今度こそ気になっていたことをぜんぶ吐き出し終えたわたしは、すっきりとした気持ちでスケッチブックの7ページ目にクレヨンを書らせはじめた。

—
—
—

ここは、ジャパリパーク。

今日もたくさんの方レンズさんたちが、のんびり幸せに暮らしています。

とつても頑丈な外壁に囲まれたラボの中で、

フレンズさんたちがおはなしをしていました。

「えっとー。ひとつ、きになることがあるんですけどー。」

そう言ったのはアルマーちゃん。

何が気になるのかな？

みんなにも教えてあげて？

「けつきよく、くびわさんは、リトルクイーンってものじゃ、なかったんだよねー？」

「そうですね。ヒトやフレンズさんとおともだちになれている時点で、それは間違いな

いことだと思います。」

「でもー、セルリアンのかつどうがかっぱつかしてるのはー、じじつなんだよねー？」

「・・・はい。その通りです。」

ふたりとも、暗い顔をしちゃってる。

セルリアンがいつぱいいるのは、怖いものね。

なんとかならないかしら？

「・・・オオアルマジロさん。ひとつ、お願いを聞いてくれますか?」

「もちろんだよー。こまっているフレンズをたすけるのがー、『たんてい』のしごとだからねー。」

「うう・・・、すんすん・・・。」

「ほらほらセンちゃん、いつまでもおちこんでないでー。またあたらしい『いらい』だよー?」

あらあら。

センちゃんはふたりよりずっと暗い顔をしてるのね。

さっきのことが、とつても悔しかったみたい。

「・・・、おちこんでなどいけません。いま、つぎなるなどをかぎあてるために、はなのちようしをととのえていたところですよ。」

「あははー。さすがだね、センちゃん。」

「あたりまえです! たんていはこのていどでへこたれてはいられないのです!」

「それってー、あんにみとめてるきもするけどー。」

よかった。

センちゃん、元気になったみたいね?

「それで、いらいのないようと、ほうしゆうは?」

「詳しくは後で説明しますが、とあるフレンズさんを探して欲しいんです。報酬は……、」
「ほうしゅうはー、パークのへいわ、かなー？」

「いいでしょう！ パークのききをすくうのも、たんていのつとめ！ そうとなれば、すぐにもいきますよ！ アルマーさん！」

「センちゃん。まだくわしいはなし、きいてないよー？」

うふふ。

ふたりの旅は、まだ終わりじやないみたい。

ふたりのフレンズさんたちの、楽しい旅は続きます。

けものフレンズR くびわちほー 第08話「ぼくのふれんど」アバン・Aパート

らぼを離れてどのくらい経っただろうか。

白紙だったスケッチブックの7ページ目にかばんちゃんとジャイアント先輩、それからセンちゃんとアルマーちゃんを描いたあたりで、景色に緑が増えてきていることに気づいた。

くびわちゃんの運転するバギーの向かう先には、みつりんほどじゃないけれど、こんもりとした森が見えている。

わたしはクレヨンを動かす手を止め、描きかけのスケッチブックをかばんにしまおうと、イエイヌちゃんに声をかけた。

「イエイヌちゃんのおうちって、森の中にあるんだね。」

「はい。きょうはてんきがいいので、こもれびがきもちよさそうですねえ。」

イエイヌちゃんの言うとおり空には雲ひとつなく、太陽がさんさんと輝く中、気持ちやすかつとするような青色が広がっている。

イエイヌちゃんは口を少し開き気味にして、両手で窓枠に掴まるような体勢で外の景

色を眺めていた。ごきげんメーカーことふさふさのしっぽは、ぱたぱたと横に振られて
いる。

「イエイ又ちゃん、とつてもうれしそうだね。」

「そうですね。わたしもおうちにかえるのはひさしぶりですから。．．．それに、」

イエイ又ちゃんは振り返り、わたしの方を真つすぐに見ると、

「おともだちをおうちにごしょうたいするのは、はじめてですし．．．。」

そう言つて、とてもうれしそうに、うふふ、と笑つた。

「あはは。あたしもすつごく楽しみにしてるよ。」

「．．．ぼくも。」

わたしがにつこり笑つて答えると、運転席のくびわちゃんが座席越しに同意してくれ
る。

運転しながらなので前を向いているのだけど、わたしの席から見える横顔は、やつぱ
りうれしそうだった。

そしてもうひとり、助手席にのロードランナーちゃんはと言うと、

「ぴゅい．．．、ふにゅ．．．、くう．．．、くう．．．、」

あいかわらずぐつすり眠つていて、可愛らしい寝息だけが聞こえてくる。

わたしの視線に気づいてか、イエイ又ちゃんが口元を押さえてくすくすと笑つた。

「きもちよさそうにねていますねえ。」

「だね。」

わたしの席からだとその寝顔は見えないけど、寝息の音だけでもとても気持ちよさそうに寝ている姿が想像できた。

バギーはそのまま森の中に進んでいく。森の中の道は車が一台通るには十分な道幅があった。

並木道のようなそこは、とてもせいひつな様子だった。差し込んでくる木漏れ日が光の帯をいくつも作っていて、なんだかしんぴ的な美しさすら感じさせる。

イエイヌちゃんがさつき言っていたとおり、とても気持ちのよさそうな場所だった。思わず車を降りて森林浴を試してみたくなる。

うずうずする感覚をこらえながらイエイヌちゃんの方を見ると、どうやらイエイヌちゃんも同じみたいで、しつぽをぶんぶんと振りながら外の景色を食い入るように見つめていた。

イエイヌちゃんはとてもかしこいから、つつい忘れてしまいがちになるけど、好奇心おおうせいで楽しいことが大好きな、イエイヌのフレンズなのである。

こうしてしつぽをぶんぶん振って、気持ちがだだもれになっている姿を見ると、ほっこりする感覚をきんじえない。

うーん。

やっぱりイエイヌちゃんはかわいいなあ。

まだかなまだかな、と言わんばかりの様子の子のイエイヌちゃんと、ここにこの顔のわたしたちを乗せたバギーはそのままゆっくり進み、しばらくしてひらけた場所に辿り着いた。

森と石垣に囲まれたそこには大きな門があつて、門の先にはドーム状の建物がいくつも建つていた。建物はクマだつたりライオンだつたりコアラだつたり、どうぶつの顔を模した形をしている。

くびわちゃんはバギーを門の横に停め、わたしたちの方へ振り返る。

「・・・ついた。」

「わふうー！」

喜びの声と共にバギーから飛び降りたイエイヌちゃんは、ぱたぱたとかけて門のまんなかに立ち、わたしたちの方に振り返って満面の笑みを見せた。

「ようこそ！ わたしのおうちへ！」

けものフレンズR くびわちほー 第08話「ぼくのふれんど」

「んーっ！」

道中ぐつつすり寝ていたロードランナーちゃんはバギーから降りると、ぐーっと伸びをした。

「ロードランナーちゃん。だいぶぐつつすりだったね。昨日、あんまり寝られなかったの？」

「ん？ そんなことねーけど？ きのうもかいみんだったぜー！」

「そうなんだ。よくそんなに寝れるね・・・。」

昨日もかいみんで、かばんちゃんの説明の時も寝てて、おまけにらぼからここまでもぐつつすりで。

あたしだったら、そんなに寝たら気持ち悪くなっちゃうかも。

なんて思うのだけど、ロードランナーちゃんはすつきりした様子で、にこにこ可愛らしい笑顔を見せていた。

「・・・よだれ、たれてる。」

「んあ？ ああ、わり。」

くびわちゃんが指摘をすると、ロードランナーちゃんは手の甲でごしごしと口元をぬぐう。

ふたりとも、だいぶ仲良しさんになったみたいだね。

うみべからこれまで、ほとんどケンカしてる姿しか見てないから、今みたいな様子はなんだかとても新鮮で、とてもうれしい。

バギーから離れて門の前に立つ。大きな門には何か書かれていたような跡があるのだけど、塗料の劣化がはげしくて何が書いてあったのかはわからない。

「ハイ」が、きよじゆうく。」

なんとはなしに呟いたわたしに反応したのはくびわちゃんだ。

「・・・そう。むかし、ぱーくのしよくいんや、そのかぞくがすんでいたところ。もともとは、おきやくさまがとまるぼしよ、だったけど、ほてるができてから、そうなった。」

「へー。ホテルなんてのもあるんだね。」

あいかわらず物知りなくびわちゃんの説明に言葉を返していると、ぶんぶんと手としつぽを振るイエイヌちゃんの姿が目に入った。

イエイヌちゃんはすでに門の内側に入っていて、クマの形をした『おうち』の前に立っていた。

「さあさあみなさん！ はやくおいでください！ おちややおかしのこよういもありますよー！」

イエイヌちゃんはびよんびよんと飛び跳ねながら、そんな昔話の台詞みたいなことを言ってくる。

その言葉に、頭の中にちよつとだけ心配の芽が顔を出した。

昔話だとたいいてい、そういうおいしい話には裏がある、みたいな教訓じみた展開になつたりするんだけど、とうぜん、イエイヌちゃん相手にそんな心配はこれっぽっちもない。

ヒトの手を離れてだいぶ時間が経っているだろうパークで、お茶やお菓子がちゃんとした形で残っているかが心配なのだった。

しようみきげんとか、かなりマズいことになつてるんじや・・・。

「・・・きよじゆうくのせつびは、らつきーびーすが、かんりしている。おちゃや、おかしも、ていきてきに、あたらしいものところかんざれている。」

そんなわたしの心配を察してか、くびわちゃんが説明をつけ足してくれた。

うーん。やっぱりあたしって顔に出やすいのかな？

「そうなんだね。ありがと、くびわちゃん。」

素直にお礼を言うのと、くびわちゃんは恥ずかしそうに口元をぶかぶかの首輪にうずめた。

「ひひ、いっちよまえにてれてやがらあ。らぼじやびびつてなきそうだったのによー。」

「・・・くそばーど、だまれ。」

「ああ!?! てめーがだまれくそびびりい!」

あはは・・・、ぜんげんてつかい。
やつぱりふたりはいつもどおりみたいだ。

ふたりをなだめながら『おうち』の前に辿り着くと、イエイヌちゃんはとつても素敵なにごにこ笑顔でわたしたちを迎えてくれた。

「あらためまして、ようこそわたしのおうちへ！ さあさあ、こんなところでたちばなしもなんですから、どうぞなかへ！」

イエイヌちゃんはそう言つて『おうち』のドアを開けて、わたしたちを中へ案内した。
「おじやましまーす。」

「・・・おじやま、します。」

「じやますんぜー。」

それぞれにドアをくぐりながら声を上げるのだけど、すぐにみんな黙ってしまった。というのも、『おうち』の中はすぐ暗くて、ドアの近く以外何も見えないくらいだったのだ。

ドアの近くだつて光の差し込む足元くらいしか見えなくて、一歩先に進むともう真っ暗だ。

「はて？ わたしのおうち、こんなにくらかつたでしょうか・・・？」

家主であるはずのイエイヌちゃんすら戸惑うくらいの暗さである。

壁沿いにてきぐりで照明のスイッチを探してみるのだけど、見つからない。ならばと部屋の中央の方に向かって歩き、ぶら下がってるだろう電灯の紐を探すのだけど、手を切るばかりだ。

「ん．．．、なんだろ、これ。」

と、ぶら下がってる紐を探していた私の手が何か柔らかいものに触れた。

ぺたぺたと触って確かめるのだけど、てのひらにすっぽり収まるくらいの大きさで、感触はとても柔らかくて気持ちいい。

ジャパリまんくらいのサイズ感で、触るとふにゆつと柔らかくて、ほんのりあったかい感じのするもの、つて、なんだろう。クツシヨンとか？

でも、クツシヨンがこんなとこにぶら下がってるわけもないだろうし．．．、

そんなことを考えながら、ふにゆふにゆもにゆふにゆ．．．、とその感触を確かめてみると、

「おお！ そういえば！ とおでをするのに、カーテンをしめてから、でたようなきがします！」

イエイヌちゃんがぼんと手を打って、ぱたぱたと真つ暗な部屋の奥へと進んでいく。そして、シャツ、というカーテンレールのこすれる音と共に、部屋の中が明るくなった。暗いところに入ってすぐまた明るくなったものだから、目の採光がうまく追いつかな

わたしはフレンズさんのぶら下がるすぐそばで、うなだれながら正座をしている。

「まったく……、いきなり『ねどこ』におしかけたあげく、」

「……はい、」

「あんなろうぜきをはたらき、」

「……うう、」

「おまけにかおをみてひめいをあげるとは……、」

「……はい、」

「チサマ……、ぶしつけにもほどがあるう。」

「うう……、かえすことばもございません……。」

深々と頭を下げ、カーペットの敷かれた床に伏せる。いわゆる土下座というやつだ。気分としてはもうこのまま床の下に埋まってしまいたいほどである。

「あの……、おきもちわかりますけれど、ともえちゃんもわざとやったわけでは……、」

と、私の横に立っているイエイヌちゃんも口をはさんだ。

「なんじゃチサマは。このムツツリむすめのなかまか？」

む、むつつりむすめ……。

ひどい言われようだとも思うけど、状況を考えれば、はんろんのよちはなかった。

頭を上げられないまま音だけで様子を伺っていると、フレンズさんは、ふん、とひと

つ息を吐く。

「そもそもチサマら、なみちーの『ねどこ』になにしにきた。きやくをしようたいしたつもりはないがの。」

寝床、とフレンズさんはさつきもそう言っていた。

なみちー、というのはフレンズさんの名前だろうか。

であれば、つまりここは、このフレンズさんの寝床、ということになるのだけど：。どうも、ここがどこかという点で、わたしたちの認識には大きな食い違いがあるみたいだ。

「ええと、それなんですけど……」

わたしたちの認識ではこの『おうち』の家主であるイエイヌちゃんが、事情を説明しはじめた。

あいかわらずわかりやすい説明で、とうぜん事情を知っているわたしも思わずふんふんと声を上げそうになった。

「なるほど。ここはもともとチサマの『ねどこ』であつたか。」

イエイヌちゃんが説明を終えると、フレンズさんは素直に理解を示してくれた。

「ひるまもくらいところを、とさがしておつたらここをみつけてな。しばらくまえからすみついておる。なみちーは、やこうせいゆえ。」

なるほど。

どうも、なみちーと名乗ったこのフレンズさんは、イエイヌちゃんが留守にしている間に、ここに住み着いていた、ということみたいだ。

「であれば、こちらにもひがあるわけじゃな。．．．そこな、ムツツリむすめ。いつまでそうしておる。おもてをあげい。」

フレンズさんはそう言つて、キキキ、と甲高い声で笑う。促されるままに顔を上げると、さかさまにこちらを見下ろす目と、目が合った。

さつきはどアップで見たせいでひめいを上げてしまったけれど、改めて見るフレンズさん、ううん、なみちーちゃんの顔は、とても色白で整つていて、見惚れるくらいに綺麗だ。

「さきほどのことはみずにながそう。かわりに、こちらのぶちようほうも、ゆるしてくれとありがたい。」

整った顔に少し気恥ずかしそうな表情を映しながら、なみちーちゃんはそんなことを言った。

「わたしはぜんぜん、かまいませんよ？　るすのあいだにおやくにたてたなら、むしろうれいのですし。」

「うう．．．、本当にごめんなさい．．．。」

くすくすと笑いながらフォローをしてくれるイエイヌちゃんに対しても、申し訳ない気持ちでいっぱいになりながら、わたしは立ち上がって居住まいを正す。

と同時に、なみちーちゃんは天井から足を離しふわりと身を翻して音もなく着地した。

「では、あらためてじこしようかい、といこうかの。なみちーはなみちー、ナミチスイコウモリのフレンズじゃ。」

さかさまにぶら下がっていたときも思ったことだけど、こうして上下を戻して改めて見ても、色白で整った目鼻立ちをしてるその顔は、やっぱり見惚れてしまうほどに綺麗だ。

黒い髪はおかっぱの形に切りそろえられていて、なんだか古風な感じもする髪型だけど、綺麗な顔立ちや口調もあって、お姫様みたいな清廉さを感じさせる。

髪と同じ色をした大きなお耳は、頭の上からぴんと伸びていて、遠くの音までよく聞こえそうだ。

頭の後ろには小さい羽が生えていて、さつき空中で体勢を変えるときなんか、ぱたぱたとせわしく動いていてとても可愛らしかった。

服装は黒のセーラー服に黒タイツに黒いブーツ。上から羽織っているマントはコウモリの羽を模したような形で、こちらもやっぱり黒い。

そんな全身黒ずくめな格好なのだけど、受ける印象は地味というより高貴な感じ、だろうか。

やっぱりお姫様みたいな、貴族みたいな雰囲気の子だった。

なみちーちゃんの自己紹介に応じたのはイエイヌちゃんである。

「わたしはイエイヌのフレンズで、イエイヌともうします。こちらはともえちゃんと、くびわちゃん、そしてロードランナーさんです。」

「えっと、ともえです。．．．さつきは、ホントにごめんね?」

「．．．くびわ。」

「ロードランナーだぜ!」

そうしてそれぞれを紹介を終えて、さてどうしよう、というところで、イエイヌちゃんがにこにここと笑いながら目の前でほんと手を打って言った。

「さて。それではよていどおり、おちゃにしましょうか。せっかくですから、なみちーさんもごいっしょにどうですか?」

「ふむ．．．、るすちゆうにかつてにいすわり、みがひけるこちではあるが．．．、さそいをむげにことわるのも、れいにしつするとうもの。ありがたくごしようばんにあずかろう。」

イエイヌちゃんの提案に、なみちーちゃんはうつすらと笑みを浮かべながら答えてく

れる。

その提案には私も大賛成だった。

「では、わたしはおちやのじゅんぴをしてきますね。みなさんはおすきなところでくつろいでいてください。」

言われて、さつきからみんな部屋のまんなかで立ちっぱなしだったことに気づく。

わたしはお部屋の様子を眺めながら、近くにあつた椅子に腰かける。テーブルを挟んで向かいの席にくびわちやんが座り、となりの席にはなみちーちやんが座った。

ロードランナーちゃんは・・・と探してみると、窓際に据え付けられているベッドの上でごろごろしていた。

い、いつの間に・・・、ていうか、あの子まだ寝る気なの・・・？

自由気ままなロードランナーちゃんに呆れながら、そのまま部屋の中を眺める。

イエイ又ちゃんのおうちはなんだか可愛らしい感じの内装だった。丸みを帯びた家具はうすいピンク色のものが多くて、小さい子のお部屋っぽい感じ。

しようじき、わたしのイメージするイエイ又ちゃんのお部屋は、もつとこう、落ち着いてるといふか、凜々しい感じのお部屋だったのだけど・・・。

あ、そつか。ここってイエイ又ちゃんがフレンズになる前に、ヒトと暮らしてたおうち、なんだっけ。だとしたら、その子はわたしと同じくらいの歳だったのかも。

テーブルクロスとか、ベッドのシーツとか、ところどころどうぶつプリントのものがあつて、とっても親近感を感じる。

うーん。はじめて来たはずなのに、なんだかなごんじやうなあ。

「チサマらはやぬしどのと、どのようなかんけいなのじゃ？」

あれこれ考えながらお部屋を見渡していたら、なみちーちゃんがおはなしを振つてきた。

家主どの、つて、イエイヌちゃんのことだよな？

「おともだちだよ。イエイヌちゃんがそうげんの方に来たときに出会つて、そこでおともだちになったの。」

「そうげんとは、またずいぶんとおいな。はねのないフレンズには、たいへんなみちのりじゃつたろうに。」

言いながら、なみちーちゃんは頭の後ろの羽をばたばたと動かしてみせる。たしかにわたしが空を飛べるフレンズさんだったら、ここまでの道もそんなに時間をかけずに来たのかもね。

でも・・・、

「あはは。そうだね。でも、ゆつくり何日もかけて来たし、色々なフレンズさんとも会えたから、あんまり遠いとか、感じなかったかな。それに、」

言葉を区切り、視線を向かいのくびわちゃんと、ベッドでだらだらしてるロードランナーちゃんにそれぞれ向ける。

「旅の途中でくびわちゃんともロードランナーちゃんともおともだちになれたし。」

こうしてゆつくりと歩いてきたおかげで、得られたものはとっても大きい。

「だからあのとき、イエイヌちゃんがおうちに来ない？つて誘ってくれて、すごく感謝してるの。」

「そうか・・・、それはなによりのことじゃな。」

なみちーちゃんは腕を組みながら、穏やかな表情でうんうんと頷いた。

と、

ぐうううううう・・・、という大きなお腹の音が聞こえた。

ひよつとしてあたしの？と思っただけけど、お腹が震えた感覚はない。音の聞こえた方向からすると、くびわちゃんでもないと思う。

そうなる・・・、

「やだ、ロードランナーちゃん。そんなにお腹、空いてたの？」

「はあ!? あたしじゃねーよ!」

ロードランナーちゃんはそう言うけれど、音のした方向を考えると、ロードランナーちゃん以外に考えられなかった。

まさかこんなお姫様みたいな雰囲気にするなみちーちゃんが、あんなに大きなお腹の音をさせるわけないし。

「うんうん。わかるわかる。お茶とお菓子、楽しみだもんね。」

「だからあたしじゃねーって！」

「あはは。ごめんごめん。聞かなかったことにするから。」

「んだよ・・・、ったく。」

ロードランナーちゃんはぶつぶつと唇を尖らせて呟くと、そのまま枕にぼふつと顔を埋めてしまった。

うふふ。恥ずかしがっちゃってー。

ロードランナーちゃんのこういう反応は、ちよつと意外かも。

「それにしても、やぬしどのはなにゆえ、そんなとおいところまででかけたのじやろうな？」

と、唐突に投げられた質問に視線を戻しながら、ふと考えてしまった。

そう言えば、今まで考えたこともなかったかも。

「うーん。なんでだろ。」

言いながら、その理由を考えてみる。

何処か行きたい場所があった、とか？

でも、わたしと会ってからこれまで、イエイヌちゃんはずっと一緒にいてくれるし、何処かへ行きたいような素振りは一度も見せたことはない。

しいて言うならここ、イエイヌちゃんのおうちに向かって旅をしていたわけだけど、それもけつきよく、イエイヌちゃんにとつては自分のおうちに戻ってくるだけの話だしさ。

いまいちぴんとくる回答が思いつかないままでいると、隣の部屋からばたばたという物音が聞こえてきた。

あつちはたしか、イエイヌちゃんがお茶の準備を……、
ばん、と。

視線を向けたと同時に、隣の部屋に繋がる扉が勢いよく開いた。

そしてその中から何かが勢いよく飛び出してくる。

「ともえちゃん！ あぶない！」

「へ？」

イエイヌちゃんの大声が耳に届き、その何かはわたしの方へと向かっていることに気づいた。

「うわあつ！」

飛び掛かってきた何かはわたしの顔めがけて飛びついてくる。勢いのまま椅子ごと

床に倒れそうになるけど、なんとか上半身をのけ反らせるだけで耐えられた。

けれどももちろん、それで無事に済んだわけじゃない。

飛び掛かってきたその何かはわたしの肩と膝に毛むくじやらの足を置いて、はあはあ
と荒い息を吐きながら、口を大きく開けてぺろりと舌を見せて・・・、

「た、たべ・・・！」

「なんじゃ、チサマ、またはいりこんどったのか。」

食べないで、というわたしの台詞は、呆れたような響きのするなみちーちゃんの声に
遮られた。

なみちーちゃんの様子にちよつとだけ冷静さを取り戻したわたしは、あらためて、飛
び掛かってきたその子を見る。

椅子に座ったわたしに押し掛かるようして、はふはふと息を吐いているその子は、
フレンズさんでも、ヒトでもなく、

まぎれもない、どうぶつの姿をしていた。

「ハツハツハツハ・・・、アオン！」

犬・・・、じゃあない。

尖った大きなお耳が斜めに生えていて、頭の後ろの辺りからトサカのような黒いたて
がみが背中の方に続いている。口と鼻の周りが黒くて、灰色の毛に覆われた全身には黒

い横じまがあった。

このどうぶつって、たしか、

「まったく、どこからはいつてくるのやら……、のう、アードウルフ。」

「アオウン！」

なみちーちゃんが、前にどうぶつ図鑑で見た名前を呼ぶと、その子はまるでお返事もするかのよう、可愛らしい声で鳴いた。

「ウアフツ！ アフツ！ ペロペロペロ……、」

「あはは、くすぐりたいよ。アードウルフちゃん。」

わたしはまるで子どものようにすがりつくアードウルフちゃんをだっこしながら、顔をペロペロと舐められていた。

子どものように、というか、じじつ、アードウルフちゃんはまだ子どもくらいの大きさだった。

さすがに生まれたばかりという感じではないけど、図鑑で見た姿よりだいぶ小さくて、わたしでも簡単に抱えられるくらいだ。

「キュウン……、ペロペロペロ……、」

「もう、舐めるのダメだってばー。あはは……！」

だから、本気でイヤだったなら両手で持ち上げて床に降ろすのもわけないのだけど、こうしてされるがままに舐められているのは、とうぜん、まんざらでもないからである。ふわふわでちっちゃくて、おまけに甘えん坊とか、かわいいにもほどがあるというものだ。

イエイヌちゃんの用意してくれたお茶やお菓子はテーブルの上に出されていたけど、さつきからずつとこの調子だから、わたしは手を付けられずにいた。

せつかくイエイヌちゃんが淹れてくれたお茶のだし、温かいうちに飲みたい気持ちはもちろんあるのだけど、こうして可愛らしいどうぶつにじゃれつかれてしまっっては、どうしようもない。

申し訳ない気持ちでイエイヌちゃんを見ると、そんな葛藤もすべてお見通しなのだろう、イエイヌちゃんは「しかたないですねえ。」とでも言わんばかりの微笑みを向けてくれた。

「しかし、めずらしいこともあるものじゃの。そやつがしよたいめんのあいてに、そこまでなつくとはな。」

なみちーちゃんは音も立てず、とても上品に紅茶を飲みながら、そんなことを言う。その話し振りからすると、アードウルフちゃんのこと、前から知っているみたいだった。「このこは、なみちーさんのおしりあいなのですか？」

「そうじゃな．．．、しりあい、というか、ともであつたわ。」

イエイヌちゃんの問いかけに答えると、なみちーちゃんはカップを静かにテーブルに置く。そしてわたしの帽子をぱしぱしと前足で叩きはじめたアードウルフちゃんに、寂しげな視線を向けた。

「しばらくまえに、なみちーとそやつは、セルリアンにおそわれてな。とおりがかつたフレズにたすけられたのじゃが、すでにそやつのサンドスターは、うばわれたあとじゃつた。」

え．．．と。

思いがけず聞いてしまった悲しいいきさつに声を上げそうになり、慌てて口を押える。

これまで、フレズさんがサンドスターを失ってしまったらどうなるのか、話として聞いたことはあつた。

けれど、実際に『そうなつてしまった』フレズさんを見るのは、はじめてのことだつた。

なんて言葉をかけていいかわからずそのまましていると、イエイヌちゃんが申し訳なそうに口を開く。

「それは．．．、すみません。かなしいことをおもいださせてしまつて．．．。」

「きにするでない。パークではよくあるはなしじゃ。」

「アオン！」

なみちーちゃんが気丈なことを言うのと同時に、まるでそれを肯定するかのようになり、アードウルフちゃんが一声吠える。

まるで話していることがわかっているかのようなその反応に、なみちーちゃんは口元を隠してくすくす笑った。

「ふえ、ふおつふあはほほへーはひつほひ……」

と、お茶うけのクッキーを口いっぱいにはおぼりながら、ロードランナーちゃんが口を挟む。相変わらず、ちっちゃい子供みたいな行動だった。

「……しゃべるなら、のみこんでから。」

「……、んぐ……、んが……、ズズズ……、んぐつ、」

くびわちちゃんがいつもの無表情で言うとき、自分のぶんのお茶を音を立ててすすり、クッキーごと飲み込んだ。なみちーちゃんの上品な所作とはうんでいの差である。

「んで、そこからおめーら、いつしよにいるんかよ。」

「いや……、どうにもはなれてくれんでな。なみちーは、なんとか、やせいにかえそうとしとるんじゃが……。」

「ふーん、まあ、それならしかたねーか。」

その、あたりまえのように交わされた会話に、はてと思う。

「え？ どうして？ おともだちだったんでしょ？ 一緒にいたらいいじゃない。」

わたしが思ったことをそのまま口にする、イエイヌちゃんが少し複雑そうな顔で、「ともえちゃん……、どうぶつにもどったフレンズは、やせいにかえず、というのが、パークのおきてなのです。」

「ええ？ そうなの？」

驚いて周りを見ると、みんなそれぞれうんうんと頷いている。この中で最も物知りであろしくびわちゃんも、こくりと。

「そうなんだ……。」

「フレンズとどうぶつでは、あまりにちがいがすぎること。しかたのないことじゃ。」

なみちーちゃんはそう言うのだけど、顔に浮かんでいるのはとても寂しげな表情だ。うーん、と考える。

たしかに、フレンズさんとどうぶつじゃ、いろいろ違いはあると思うし、一緒に暮らしていくのにも、いろいろ問題はあるのかもしれないけど。

でも……、それってなんだか、寂しい気がする。

たとえば、わたしはイエイヌちゃんと違って、耳も鼻も良くない。

くびわちゃんと違って、物知りじゃないし、ロードランナーちゃんと違って、足も速くない。

みんなぜんぜん違うけど、それでも一緒にいる。

だって、一緒にいて楽しいから。

ヒトもフレンズさんもどうぶつも、けつきよくのところ、一緒にいる理由なんて、それだけで充分なんじゃないかな・・・。

そんなことを頭の中でつらつら考えるのだけど、どうしてか、口に出すことはできなかった。

・・・ううん。わたし自身、わかってるからだろう。

それはあくまで、失った経験のない者のりくつだ。

アードウルフちゃんがどうぶつに戻るところを、おそらく目の前で見ていたなみちーちゃんは、きつと今見せている表情の何倍も悲しんだと思う。

それでも尚、野生に返そうと言うのだ。

その気持ちは、わたしの勝手なさかしりくつで、かき回しているものじゃないと思う。

「にしても、そんなにたのしそうなそやつをみるのは、ひさしぶりじゃわ。」

なみちーちゃんは優しげな表情でアードウルフちゃんを眺めて、キキキ、と小さく笑

う。そしてそのまま視線をわたしに向けて、こう言った。

「のう、ともえ。よければそやつと、しばしあそんでやってはくれんかの?」

「うん。もちろん!」

わたしがふたつ返事でありようかいすると、気配を察知したのか、アードウルフちゃんが「アオン!」と嬉しそうな声を上げた。

「でも、なにをして遊ぼうか。この子、どういう遊びが好きなの?」

「ふむ、フレンズであったときは・・・、あなほりやかけっこ、それから、かりごっこなんぞを、このんでいたかの。」

穴掘りやかけっこ・・・、それから、狩りごっこ?

・・・えっと、狩りごっこ、ってなに?

なみちーちゃんの回答に、頭上に疑問符を浮かべていると、イエイヌちゃんがつこりと笑いながら言った。

「そういうことでしたら、とっておきのあそびどころがありますよ?」

フレンズ紹介くナミチスイコウモリく

なみちーちゃんはコウモリ目チスイコウモリ科チスイコウモリ属の哺乳類、ナミチスイコウモリのフレンズだよ!

ナミチスイコウモリは別名、吸血コウモリとも言つて、どうぶつの血を吸うコウモリなんだつて！

するどい歯で獲物に噛みついて、傷口を舐めて血を舐めとるみたい。

歯がするどいから、噛まれても逆に痛みがないらしいんだけど、やっぱり血を吸うつていうのはちよつと、こわいかな・・・。

夜行性で、昼間は洞窟とかの天井にぶら下がって眠ってるんだよ！

コウモリがぶら下がって寝るのは、それがいちばんリラックスできるから、みたい！ヒトの場合だと、ずっと逆さまでいたら頭に血がのぼって気持ち悪くなっちゃうけど、コウモリは体が小さくて軽いから、重力で血の巡りが悪くなることもないんだつて！

そんな小さくて軽いナミチスイコウモリんだけど、お腹いっぱい血を吸うときは、体重の半分近い量を飲んじゃうみたい！

でも、そこまで飲んじゃうと、重くて飛べなくなるから、地面を飛び跳ねて歩いて巢まで戻るんだよ！ ぴよんぴよんしててかわいの！

それと、飲んだ血はぜんぶ独り占めにするんじゃないかと、群れでお腹が空いてる子がいたら、口移しで分けてあげるんだつて！

おともだち想いの、とってもいい子だよね！

【こえ】ともえちゃん（しゆくしちほー）

けものフレンズR くびわちほー 第08話「ぼくのふれんど」B・Cパート

どうぶつ紹介くアードウルフく

アードウルフちゃんやんはネコ目ハイエナ科アードウルフ属の哺乳類だよ！

ウルフって名前についてるし、和名もツチオオカミっていうんだけど、ハイエナの仲間なんだって！

ハイエナの仲間ではいちばん小さい体をしてて、お顔も小さいから、すっごいかわい
いんだよ！

アードウルフは穴を掘って、シロアリとかを食べて暮らしてるよ！

アリクイみたいに舐めとって食べるから、他のハイエナに比べて舌が長くて大きいし、噛まなくていいから歯やアゴは大きくないんだって！

シロアリを探すのがすっごく得意で、土の中を掘る音で探し当てたり、アリの分泌する匂いを辿って見つけたりするんだよ！

そんな小さな音とか匂いを探知するなんて、すっごいよね！

そんな食生活だから、穴に潜るのがすっごい好きで、穴を見つけるとぜったいに潜っ

ちやうみたい！　ぴよこん、って穴から顔を出したりして、すっごくかわいいの！

あと、群れで暮らすことはないんだけど、つがいを見つけると、お互いにその相手と生涯ずっと一緒に暮らすみたい！

ひとりの相手と一途に想い合うなんて、なんだかすっごく素敵だなあ・・・。

【こえ】ともえちゃん（しゅくしちほー）

「よーし、じゃあ、いくよー？　・・・それー！」

掛け声と同時に、わたしは半身の体勢から、水切りをするような形で持っていた物を投げた。

持っていた物、というのは、イエイヌちゃんがとっておき、と言っていた遊び道具、フリスビーである。

「ハツハツハツハ・・・、ウオウン！」

しゆるしゆると回転する円盤はふわふわと宙を飛び、並走するように走り込んできたアードウルフちゃんにダイビングキャッチされた。

アードウルフちゃんはフリスビーをくわえたまま、とてとてと近づいてくる。そしてそのままわたしの足元にフリスビーを置いた。

これが、狩りごっこ。なるほどたしかに。

つまりこれは、フリスビーを空を飛ぶ獲物に見立てた狩りの真似事であるわけなのだった。

「よしよし、えらいえらい。」

撫でて欲しそうにすり寄ってくるアードウルフちゃんの首や頭を、両手で挟み込むように撫でてあげると、喉を鳴らして気持ちよさそうな声を上げる。

もふもふの感触が手のひらから伝わってきて、撫でているこっちだって、とつても気持ちいい。

「キュウン……、アフ、アフ、」

おまけにこの声、この表情である。

平静を装って一緒に遊んでいるわたしだけけれど、さつきからきゅんきゅんが止まらず、顔はにやけっぱなしだった。

「オン！」

「うふふ……、なあに？ また投げて欲しいの？」

「アフ！ アフ！」

「しようがないな。じゃあ、もう一回ね？」

「アオン！」

待ちきれないといった感じに手元を見るアードウルフちゃんに、デレデレのわたしは

「キュウン・・・、クウン、」

「ふっふっふ、まだまだあまいですねえ。あのていどのすろーいんぐをきやつちできないとは。」

獲物を横取りされて悲しそうなアードウルフちゃんに、イエイヌちゃんはふふんと得意げに声をかける。

「いいですか？ ゆくさきをみてからはしりはじめてはおそいのです。フリスビーがゆびをはなれるしゆんかんにはしりだし、かそくをしながらゆくさきをみきわめて・・・、」
人差し指を立てながら話を続けるイエイヌちゃんをジト目で見つめながら、わたしはすたすたとふたりに近づいた。

「・・・で、あるからして。フリスビーきやつちとは、いうなればおのれとのたたかいであり、」

「イエイヌちゃん・・・、」

「おお、ともえちゃん。いいところに。いまこのきにきやつちのコツを・・・、」

にこにこの笑顔を見せながら振り返るイエイヌちゃんに、わたしは大きく息を吸い込んで、

「おんなのこがお口でものをくわえるなんて、はしたないことしちやいけません！」

「かけっこついたら、あたしのでばんだな！」

につこり、満面の笑みを浮かべるロードランナーちゃんが相変わらずの大きな声を出した。

走ることが大好きなことも相変わらずのようで、かけっこ、という単語を聞いた時点から、ずっとうずうずしていたロードランナーちゃんである。

こうして実際にかけてこをする段になって、にこにこ笑顔で嬉しそうに手足をぶらさせている。

その足元にはアードウルフちゃん。この子もかけっこする空気を察したのか、楽しそうにはふはふと息を漏らしながら、開始の合図を今か今かと待っていた。

「うう・・・、わたしもかけっこしたいですう・・・。」

おなじく走るのが大好きなイエイヌちゃんは、ふたりの姿をとて羨ましそうに眺めていた。

『はんせいちゆう』と書かれた紙を首からぶら下げて、地面にちよこんと正座をしている。

プラカードのようなその紙は、さっきのフリスビーでのことをきちんと反省してもらうため、わたしが用意したものだ。

でも、ちよつとやりすぎかなあ・・・？

イエイヌちゃん、じゆうぶん反省してるみたいだし。

そんなことを思いながら、くうん、とおはなを鳴らしながらしよんぼりしているイエイヌちゃんに近づいた。

「イエイヌちゃんも、かけっこしたいよね？」

「いえ・・・、わたしはこのとおり、はんせいちゆうですし・・・。」

「もう充分反省したでしょ？」

言いながら、わたしはイエイヌちゃんの首にかかった紐を取ってあげた。

「ともえちゃん・・・！　ありがとうございますう！」

「いいからいいから。イエイヌちゃんも一緒に、走っておいでよ。」

歓喜の表情と共にぱたぱたとしつぽを振るイエイヌちゃんに、わたしはちよつと複雑なところもちである。

うーん。なんというマツチポンプ。

「お、やつぽおめーもはしんのかよ。」

「はい！　こうやではおくれをとりましたが、こんどはまけませんよ？」

「へへっ、そーこなくちゃよ。」

横に並んだイエイヌちゃんに、ロードランナーちゃんは不敵な笑みを見せる。イエイヌちゃんはその顔を真つすぐに見て、似たような笑顔を返した。

実に楽しそうなふたりである。
けれど。

なんというか、ちよつとヒートアップしすぎなような。

「えつと・・・、ふたりとも、わかっているとおもうけど、アードウルフちゃんはまだちつちやいから、」

「んじゃ、はじめるとすつか！ くびわ！ ごうれい！」

「・・・いちについて、よいい、どん。」

不安を感じたわたしが口を挟む間もなく、かけっこ開始の合図が出されてしまった。

「うおおおおおっ！」

「わふわふ！ わふー！」

威勢のいい声が発せられたかと思うと、ふたりの背中がものすごい勢いで遠ざかっていく。相変わらずのとんでもないスピードだった。

ちよつと離れた場所にいた、既にその光景を見たことのあるわたしでさえ、その勢いに肩をびくんとさせてしまったほどである。

つまり。

だとすれば。

もつと近くにおいて、それをはじめて見る子にとっては・・・、

「キユウウ……、アフ、」

「ああああつ！ アードウルフちゃん！ だいじょうぶ!?」

びっくりしすぎて、目を回してひっくり返ってしまったアードウルフちゃんにかけよ
りながら、わたしはひめいのような声を上げた。

「なんとというか……、チサマら、ざんねんなやつらじやの。」

「うう……、もうしわけありません……。」

「もがー！ ふがー！」

かけっこ勝負から帰ってきたふたりは、並んで正座をさせられていた。

イエイヌちゃんの首にはさつきと同じ『はんせいちゆう』の紙、ロードランナーちゃん
の首には『いつかいやすみ』と書かれた紙がぶら下げられている上に、口にはバツテ
ン印つきのマスクがつけられている。

ちなみに、ロードランナーちゃんの紙とマスクはくびわちゃん作だ。

「キユウウ……、クウン、」

わたしはすっかり怯えてしまったアードウルフちゃんを抱っこしながら、よしよしと
頭を撫でている。

「だいじょうぶだよー？ もう怖くないからねー？ 危ないことするおねーちゃんたち

は、じつとしてるからねー？」

「くうん……、ともえちゃん、あんまりですう……。」

「んがー！」

ひなんめいた声と、ちよつと何言ってるかわからないです、なうめき声が聞こえてくるけれど、今度ばかりはじごうじとくである。

ふたりにはしばらくの間、はんせいしていてもらおう。

と、くびわちゃんがしゃがみ込んで、ごそごそと何かをしているのに気付いた。

「あれ？ くびわちゃん、何してるの？」

「……あなほり。あーどうるふは、あなほりや、あなにもぐるのが、すきだから。」

手元を見ると、どこかで拾ったのか、シャベルを片手にいっしょうけんめい地面に穴を掘っていた。

くびわちゃんは体が小さいから、ちっちゃい子がお砂場で遊んでるみたいで、すつごく微笑ましい光景である。

しばらく、ほっこりしながらその様子を眺めていると、ふう、と満足そうに息を吐いて、くびわちゃんがこちらを見上げた。

「……できた。」

くびわちゃんの足元には丁度アードウルフちゃんがすっぽり入れるくらいの大きさ

の穴が空いていて、しつとりとした土の匂いが昇ってくる。

「あはは。よかったね、アードウルフちゃん。おねーちゃんが穴を掘ってくれたよ?」

「クウン……、アフ、」

わたしは抱きかかえていたアードウルフちゃんを両手で抱え直して、くびわちゃんの方に近づける。

——と。

「ウウウウ……ツ、アフツ! ワフツ!」

「あ、あれ? どうしたの? アードウルフちゃん。」

どうしてだろうか。アードウルフちゃんはとつぜん低く唸り始めると、くびわちゃんに向かって勢いよく吠え出した。

興奮しているというか、威嚇をしているというか、怯えたような様子だ。

「あれ? なんで? どうしてだろ。くびわちゃん、怖くないよ?」

「……たぶん、におい、のせい。」

じたばたと暴れ出したアードウルフちゃんを再び抱っこする形に抱え直していると、くびわちゃんがとても悲しそうな顔でぼつりと言った。

「匂い、つて? くびわちゃんの匂い、つてこと?」

「そうじゃろうな。そこなちいさきものは、セルリアンにとてもよくにたにおいをして

おる。」

わたしの問いかけに答えたのは、音もなくとなり立っていたなみちーちゃんだった。

「アードウルフはおぼえておるのじやろう。サンドスターをうばったあいての、においをな。」

くびわちゃんはボス、ラッキーピースがセルリアンになって生まれた存在だ。

鼻が良くないわたしにはわからないけど、その匂いも、ボスとセルリアンの匂いが混じったような匂い、なのかもしれない。

ひよつとしたら、イエイヌちゃんが船の上で言っていた、知っているふたつの匂い、つていうのは、そういうことだったのだろうか。

でも、

「ちよ、ちよつと待つて！ たしかにくびわちゃんの匂いは、そうなのかもしれないけど……でも！ くびわちゃんはそんな、あぶないものじやなくて、」

「みくびるでない。チサマらのようすをみていれば、そのくらいのこととはわかるう。」

あわてて声を上げるわたしに、なみちーちゃんは優しい声で答えてくれる。そのままくびわちゃんの目の前に立つと、目線を合わせるようにしやがみ込んだ。

「てを、だしてみよ。」

くびわちゃんは少し不思議そうな顔をしたけれど、言われるがままにおずおずと手を差し出す。穴掘りをしていたせいで、その指先には土汚れがついていた。

なみちーちゃんはその指を、ついた土ごとペロりと舐めた。

「いったい何を、と思うけれど、続けて発せられた言葉に、その意図を理解する。

「ほれ、アードウルフよ。このとおり、こやつはきけんなものではないぞ？　チサマもこちらへきて、つちのあじをたのしんではどうじゃ。」

ウウウ・・・、と低く唸り続けていたアードウルフちゃんは、なみちーちゃんの言葉に唸るのをぴたりとやめ、わたしの腕の中からするりと抜け出してぴよん、と地面に降り立つ。

そしておそるおそる、ふたりのところへ近づくと、なみちーちゃんが舐めていたくびわちゃんの指に鼻を近づけて、くんくんと匂いを嗅いだ。

そして、

「キュウン・・・、ペロペロ、・・・アフツ！　アフツ！　ペロペロ、」

「・・・くすぐつたい。・・・あはは、」

なみちーちゃんと同じように、土ごと指を舐めはじめると、悲しそうな表情だったくびわちゃんの顔に、明るい笑みが浮かんだ。

「なみちーちゃん、ありがと。くびわちゃんのこと、信じてくれて。」

「しんじるもなにも、こやつのかんちがいをただただだけじゃ。れいをいわれるようなことではないわ。」

なみちーちゃんはそう言つて、キキキ、と甲高い声で笑う。

アードウルフちゃんはひとしきりくびわちゃんの指を舐めた後、地面の穴に潜り込んで首をびよこんと出していた。その顔はどこか満足げというか、とてもリラックスした表情である。

そのとなりでしゃがみ込んだままのくびわちゃんは、アードウルフちゃんの頭をおっかなびつくり撫でている。けれどその顔は、やつぱり笑顔だ。

なんだかすつごくほっこりする光景だった。

「くうん……、なんだかおいてけぼりにされてるかんじがしますう……。」

「んがー……、くう……、ぴゅい……。」

離れたところから聞こえてくる声と寝息に、そろそろイエイヌちゃんだけでもはんせいを解いてあげようと思ひ、きびすを返す。

そのときだった。

どさり、と後ろから音が聞こえて、なんだろうと振り向く。

「……ええ？」

振り返った視線の先にあつたのは、地面に倒れたなみちーちゃん。そして慌てて駆け

寄るくびわちちゃんとアードウルフちゃんの姿。

わたしも駆け寄り、地面に横たわるなみちーちゃんの顔を覗き込む。

その、とても綺麗な顔は、まるで血の気が引いたように真っ青だった。

「なみちーちゃん!? だいじょうぶ!? ねえ! どうしたの!」

どれだけ大きな声で呼びかけても、なみちーちゃんは目を覚まさなかった。

あの後、なみちーちゃんをみんなで抱えておうちの中に運び、ベッドに寝かせた。

枕元にはアードウルフちゃんの姿があり、くうんと鼻を鳴らしながら、とても心配そうに顔を覗き込んでいる。

ベッドの周りにいるみんなの表情は暗い。もちろん、わたしもそうだろう。

弱いものだけけど息はしているし、命に別状はない、と思うのだけど、いきなり倒れるなんて、心配しない方がおかしい。

「なみちーさん、だいじょうぶでしょうか……?」

「わかんない……。なんで倒れちゃったのかな……。びようき、だったのかな……。」

イエイヌちゃんの問いかけに、何もわからないまま答える。そのままくびわちちゃんの方に視線を向けて、

「ねえ、くびわちちゃん。何かわからない? なみちーちゃん、なんで……。」

「・・・さんどすたーが、こかつしてる。たぶんもう、なんにちも、たべてない。何日も食べてない・・・、って、それって。」

くびわちゃんの返答に、思い出す。

イエイ又ちゃんのお茶の準備を待っているとき聞こえた大きなお腹の音。

あれはなみちーちゃんのお腹の音、だったんだ。

「ちっ・・・、そういうことかよ。んなことしても、コイツがよろこぶわけじゃ、ねーだろに。」

「・・・、なみちーさん、アードウルフさんのこと、ほんとうに好きだったのですね・・・。」

そんな、居たたまれない表情と共に漏れ出たふたりの呟きには、わたしが理解したのと以外の何かがあるように感じた。

どういふことだろう、と思つてふたりを見ると、ロードランナーちゃんががしがしと頭を掻きながら話しはじめる。

「フレレンズがどうぶつにもどつちまうと、そいつとなかのよかつたフレレンズも、どうぶつにもどりがることがあんだよ。わざとセルリアンにくわれたりするヤツもいつけど、たいていはそいつみてーに、めしをくわねーようになって・・・。」

「フレレンズがフレレンズでいつづけるためには、サンドスターのほきゆうが、かかせません。ていきてきにジャパリまんをたべていれば、もんだいはないのですが・・・。」

思えば、お茶の時だって、なみちーちゃんはお茶菓子に一切手を付けていなかった。

あのときははてつきり、マナーてきなものだと思っただけだ、そうじゃなかったんだ。

あれは、あれはつまり、その、

飢えることによる、緩やかな・・・、

「だから、どうぶつにもどったフレンズはやせいにさえして、ちゃんとおわかれしなくちゃ、いけねーんだ。」

歯噛みするように呟いたロードランナーちゃんの台詞で、全て腑に落ちた。

「そんな・・・、そんなのって・・・、」

「なんじゃ、バレてしもうたか。」

わたしが呟いたと同時に、なみちーちゃんが口を開いた。ゆっくりと目を開き、そのまま手をつけて身を起こそうとする。

「ムリしないで！ いきなり体を動かしたら！」

「よい。どうせさきさきのないみじや。ねてばかりではつまらんわ。」

「そんなこと・・・、」

誰の手も借りずに上半身を起こしたなみちーちゃんは、周りを囲むわたしたちからイエイヌちゃんの姿を見つけて、キキキ、と力なく笑った。

「やぬしどの。すまぬな。このようにすることに、チサマのねどこをつかわせてもらって。」

「いえ・・・、そんなことは・・・、」

このようなこと、というのはもちろん、そういうこと、だろう。

もう一足遅かったら。

らぼでバギーを借りられなかったら。

わたしたちがおうちに着いた時、ひよつとしたらここには、一匹のコウモリが住んでいたのかもしれない。

「めのまえで、というのめねぎめがわるからう。なに、すぐにでてゆくわ。」

そう言って、なみちーちゃんは羽をばさりと動かす。

「・・・もう、とぶちからものこつてない、か。すまぬ。そこをどいてくれぬか。そうかこまれては、ベッドからおりることもままならぬゆえ。」

「そんなの・・・、」

できるわけないよ、と言いかけたわたしの口は、

「すぐにでていく、ねえ。」

そんな、ぶつきらばうな感じの眩きに遮られる。

声のした方を見ると、ロードランナーちゃんが不機嫌そうな顔でなみちーちゃんを睨んでいた。

「おめーさ。なんで、あたしらがきたとき、すぐにそういわなかったんだよ。」

「・・・、ちゃに、さそわれたからの。むげにことわるのもしのびなしに。」

なみちーちゃんの返答に、ふうん？と鼻を鳴らして、ロードランナーちゃんは続ける。

「んじや、ちゃーのんだあと、そうすりやよかったじゃねーか。なんでだ？」

「それは・・・、その、」

なみちーちゃんは再度の問いかけに言葉を詰まらせて、きよろきよろと視線を這わせる。

そんな、なみちーちゃんの膝の上に、アードウルフちゃんの小さな足が置かれた。

そのままなみちーちゃんの上に乗ると、上半身に身を預けるように寄りかかる。

「キュウン・・・、クウン・・・、クウン・・・、」

下から顔を覗き込みながら、まるで病気の母親を心配するような、不安げな声を漏らす。

その声に、なみちーちゃんの鼻からすすすと、すするような音が漏れ出した。

「こやつが・・・、アードウルフが・・・、たのしそうにしているのが、うれしくてな・・・、」

震えた声を出したなみちーちゃんの目から、ぽろぽろと涙がこぼれだす。

「なみちーは、アードウルフがいなくなつて、ずっと、かなしくて、つらくて・・・、ひとり、たすかったことが、ゆるせなくて・・・、こんなことなら、いつそ、いつしよに、つて・・・！」

アードウルフちゃんを抱きしめながら、なみちーちゃんは嗚咽交じりに言葉を続ける。

「そのまえに、がんばって、やせいにかえそうって、おもって……。でも、ついてくるし……。どうぶつにもどってから、いつも、げんきがなくて、さみしそうで……。！
あんなに、えがおのにあうこだったのに……。！」

「キュウン……。！」

なみちーちゃんの言葉が、わからなくても伝わるのだろう、腕の中のアードウルフちゃんが悲しそうな声を上げた。

なみちーちゃんは、こんなにもつらい気持ちを抱えて、ずっとひとりでいたんだ。

それなのに、わたしたちにはあんなにも気丈にふるまって……。

それが、どれだけ大変なことか。どれだけつらいことか。痛いくらいに想像できる。

なにか、なにか言ってあげないと……。

「そりゃ、とーぜんだろ。どうぶつとフレンズじゃ、ちげーんだよ。」

聞こえてきた声は、冷たく突き放すようなものだった。

……。言葉だけを聞けば。

「チサマ……。ッ！」

「ことばだって、きおくだってなくしちゃう。フレンズがどうぶつにもどるってのは、そ

いつがいなくなるのといっしよだ。・・・でもよ、」

キツと睨みつけるなみちーちゃんの目を、はじめて見るような、すごく真剣な顔でまっすぐに見つめ返して、ロードランナーちゃんは言葉を続ける。

「なにいつてつかわかんなくても、つたわるもんはあんだろーが。あたしなんてにらんでねーでさ、ちゃんとそいつのかお、みてやれよ。」

優しく、さとすように言われて、なみちーちゃんはアードウルフちゃんの顔を覗き込む。

「そいつがなんで、やせいにかえれねーか、おめーもホントは、わかってんだろ?」

「クウン・・・、ペろ、ペろ、」

覗き込んだその頬に流れる涙にアードウルフちゃんが舌を伸ばすと、なみちーちゃん顔くしやくしやくしやにして嗚咽を漏らした。

「アードウルフ・・・、アードウルフ・・・、」

「・・・どうぶつとフレンズはちげー。でも・・・、だからって、ともだちになれねーわけじゃ、ねーだろが。」

ロードランナーちゃんは小さく呟くように言うと、わたしの方にずい、と手を伸ばした。

その言葉は、なみちーちゃんに向けたものでもあるようで、別の誰かに向けられたも

ののようでもあった。

ひよつとしたらロードランナーちゃんも、むかし、大切な誰かを失ったことがあるのかな……。

そんなことを考えながら、わたしはかばんから取り出したジャパリまんを、その手のひらにのせた。

「くえよ。おめーがそのまんまだと、いつまでたっても、そいつのきもちがうかばれねえ。」

ロードランナーちゃんは手に取ったジャパリまんを差し出しながら、ぶつきらぼうにそう言った。

なみちーちゃんはおそろおそろ、差し出されたジャパリまんを受け取る。両手でつかんで、口の前に持つていくのだけど、けれど、そこで止まってしまった。

口を開けて、食べようとする形のまま、しばらくの時間が過ぎる。
やっぱり、食べられないのかな……。

どうしたら、食べてくれるんだろう……。
なんて、そんなことを、わたしが心配するまでもなかった。

「キュウ……、ペロ、ペロ、」

アードウルフちゃんがジャパリまんの近くに顔を寄せて、ペロペロと舐めだしたの

だ。

そうして、一部分をよだれまみれにすると、そのまま食べることなく、なみちーちゃん顔を上げる。

それはまるで、こわくないよ、と言っているようだった。

さつきお外でくびわちゃんの土まみれの指を舐めた、なみちーちゃんのように。

なみちーちゃんは呆気にとられたような、けれど、どこか嬉しそうな表情になると、キキキ、と小さく笑う。

そしてそのまま、小さな口を開けて、ぱくり、

「・・・、おいしい、」

よだれまみれジャパリまんにかぶりつくと、小さな声で感想を漏らす。

ぱくぱくと、無言のまま三分の一くらいまで食べたところで、その目からまた、涙がぼろぼろとこぼれはじめた。

「おいしいよお・・・、アードウルフう・・・！」

なみちーちゃんは涙をぼろぼろこぼしながらも、ちゃんとジャパリまんをひとつ食べた。そして泣き疲れたのだろう、再び倒れるように眠りに落ちた。

ついさつき倒れたばかりでのその様子に、また心配になったけれど、くびわちゃん

いわく、ちゃんとサンドスターの補給はできたそうだから、一先ずは安心していいだろう。

それにしても……、

「んあ？ あんあ？ はりひへんはほへー。」

まじまじとその顔を見てしまったわたしに、ロードランナーちゃんはジャパリまんを口いっぱい頬張りながら睨み返す。

食べてるの見たらお腹空いた、とロードランナーちゃんが言ったので、苦笑しながらもうひとつ取り出して渡したのだった。

お菓子もいっぱい食べてたはずなのに、おまけにこの空気の中で、すごい食欲である。そんな感じに、ロードランナーちゃんはすっかりいつも通りな感じだけれど、ついさつきまで見せていた姿は、なんとというか、すごいかっこよかった。

思えばみつりんでくびわちゃんを説得したときもそうだったけど、ロードランナーちゃん、ああいう一面もあるんだね。

「……ちゃんと、のみこんでから。」

「んぐっ……、んっ……、げっふー。」

「……ろーどらんなー。おぎようぎ、わるい。」

口は悪いしお行儀もよくないけど、やっぱりロードランナーちゃんも、素敵な子だ。

「それにしても、なみちーさん、ちゃんとたべてくれて、よかったです。」

「そうだね。これからもふたりで、楽しく過ごせるんじゃないかな?」

言いながら、すやすやと眠っているなみちーちゃんと、その横でうずくまって眠っているアードウルフちゃんを見て、ほっこりした気分になる。

「そうですね。うんがよければ、アードウルフさんも、またフレンズになることもできるでしょうし。」

「サンドスターの噴火、だっけ?」

「はい。ついこのあいだふんかしたばかりですから、しばらくはこのままだと、おもいます。」

「そっか……。」

なんとなく寂しい気分になりながら、窓の外、遠くの方に見える山を眺めていると、くいくい、と袖を引っ張られてそっちを向いた。

「なあに? くびわちゃん。」

「……ほうほうが、ないわけじゃない。」

「え? 方法って? なんの?」

ぼつぼつと、いつもの抑揚のない声で言うくびわちゃんに何の気なしに聞き返すと、返ってきた返答は、わたしの思ってもみなかったものだった。

「……あーどうなるふを、もういちどフレンズにする、ほうほう。」

「ええ!? そんなこと、できるの!?!」

驚いて聞き返したわたしに、くびわちゃんはさもとうぜんのように、「……できる。」と答えた。

「……さんどすたーが、どうぶつにふれると、ふれんずになる。なら、さんどすたーがあればいい。」

「あればいい……って、そんなのどこに……、あ、わかった。ジャパリまんでしょ!」
言いながら考えて出した回答は、どうも違っていたみたいだ。

くびわちゃんはふるふると首を振る。

「ともえちゃん。ジャパリまんにふくまれるサンドスターは、とてもすくないのです。どうぶつをフレンズにするには、とても……。」

「ええ……、じゃあ、どこにあるの? くびわちゃん。」

みたび聞き返したわたしに、くびわちゃんは無言のまま窓の外に向けて指をさす。その方向を眺めると、きよじゅうくの建物の遠く向こうに、小さく山が見えた。

「……あの、やまのふもとに、けっしょうかしたさんどすたーの、こうしょうがある。たぶん、いまものこっている。」

「こうしょう……、鉱床ってこと?」

「・・・そこにいけば、どうぶつをふれんずにするには、じゅうぶんなおおきさの、さんどすたーがあるはず。」

「そうなんだ！ くびわちゃん、やつぱり物知りだね！」

本当に物知りだ。

わたしなんか、サンドスターの鉱床なんて、そんなものがあるなんて考えもしなかった。

そつか・・・、そこに行けば、アードウルフちゃんも・・・。

「なら、さっそくふたりを連れて・・・、あ、でも、なみちーちゃん、大丈夫かな？ あのお山までだとだいぶ距離がありそうだし・・・。」

病み上がり、というか、ついさつきまで倒れるくらいにすいじやくしていたのだ。いくらフレンズさんが頑丈で、ちゃんご飯を食べられたとはいえ、すぐに満足に動けるとは思えない。

「わたしたちだけで、とりにいつてはどうでしょうか？ おふたりにはここでまっついでいて。」

「そうだね！ そうしよつか！ ロードランナーちゃんも、いいかな？」

「んー・・・、そうなあ・・・。」

ジャパリまんを食べ終えたロードランナーちゃんにも話を振ってみるのだけど、その

反応は微妙というか、あまり乗り気じゃないように感じる。

「ま、いーんじゃね？　とりにいくだけならよ。」

「う、うん。ちよつと遠いかもだけど、バギーもあるから、そんなに何日もはかからないと思うし……。」

「へっ、んなごときにしてるわけじゃねーよ。」

ロードランナーちゃんはそう言つて、気にすんなとばかりに手をひらひらと振つてみせた。

なんだかちよつと気になるけど、聞いてもはぐらかされそうな気がして、聞き返すことはできなかつた。

ナミチスイコウモリが目を覚ますと、部屋の中には枕元で眠るアードウルフ以外、誰の姿もなかつた。

はて、夢でも見ていたのかと思うものの、何日かぶりに満たされた腹は、確かに先ほどまでのことは現実であつたと伝えてくる。

ふと、視線をテーブルにやると、こんもりと重なつて置かれたジャパリまんが目に見える。

音もなくベッドからおり、テーブルの傍に立つと、ジャパリまんの下に何やら紙きれ

が敷かれていることに気づいた。

「これは……、たしか『もじ』とかいうのじゃったか……、サ……、を……き……ふん、よめぬわ。」

紙切れには文字が書かれていたが、フレンズであるナミチスイコウモリは一部の文字しか読むことができない。

識字率がないに等しいフレンズにとつて、一部でも文字が読めることは非常に稀有なものであったが、文を通して読めなければあまり意味はなかった。

「クウン……」

「なんじゃ、チサマもおきたのか。」

聞こえてきた声に視線を落とすと、足元にアードウルフがいるのに気付いた。アードウルフはキュウキュウと小さく鳴き声を上げながら、ナミチスイコウモリの足に体をすり寄せる。

「キキキ、そんなにしんぱいせんでもよい。もう、へいきじゃ。」

ナミチスイコウモリは椅子に腰を下ろし、ぽんぽん、と膝を叩く。すかさずアードウルフがよじ登り、膝の上で丸くなると、優しい手つきでたてがみのような背中の毛を撫で始めた。

「やつらは……、またもどってくるかの？」

「キュウン……？ アフ、アフ、」

「そうよな。わからぬよな。」

「キュウン……、クウン……、」

「そうさな。みな、よいやつらじゃったわ。」

ナミチスイコウモリとアードウルフは、まるで互いの言葉を理解しているかのように会話をしたが、けして彼女らは互いの言語を理解をしているわけではない。

けれど、

言葉を覚える前の赤子が、表情や身振り手振り、鳴き声で親とコミュニケーションをとるように。言葉を理解せずとも伝わるものは、確かに存在する。

その感覚を成すものを、ヒトは信頼と呼び、ときに愛と呼んだ。

「アフ！ オウン！」

「そうじゃな。しばらくまって、もどってこぬなら、おいかけるとしようかの。なにせ、れいをいいそびれたゆえ。なみちも、チサマも、たがいにの。」

「アフ！ アフ！ ウオウン！」

楽しそうに笑いながら、『これから』の話をするふたりの間にも、確かにそれは存在した。

バギーの後部座席でスケッチブックをひろげながら、わたしはなみちーちゃんのことを考えていた。

あの後、思い立ったがきちじつ、ということわざのとおり、わたしたちはすぐにバギーに乗り込み、くびわちゃんの示したサンドスターの鉱床に向けて旅立った。

はじめは、なみちーちゃんが起きるまで待とうという話だったのだけど、やけに急かしてくるロードランナーちゃんにみんなが根負けした形だった。

うーん、乗り気じゃなかったはずなのに、なんでよ。

相変わらず、走ることで以外のこうどうげんりが読めない子である。

なみちーちゃんたちにはジャパリまんと一緒に書き置きを残したから、ちゃんと待っていてくれると思うけど……。

「きになりますか?」

さつきからずっと、クレヨンを動かす手が止まっていることに気づいてか、イエイヌちゃんが何をと言わず聞いてくる。

「うん。ちゃんと待っていてくれるかなって。」

「だいじょうぶですよ。もし、はぐれてしまっても、またさがせばよいだけです。」

「あはは。そうだね。そのときは、イエイヌちゃんのおはなに頼ろっかな。」

「わふ! おまかせください!」

ぼふん、と胸に手を当てて、自信たっぷりに言うイエイヌちゃんに、わたしはほっこり癒されながらも、少し申し訳ない気持ちになった。

「ごめんね、イエイヌちゃん。せっかくおうちに帰れたのに、ゆっくりできなくて。」
そうなのである。

イエイヌちゃんはせっかくおうちに帰れたのに、あんまりゆっくりできなかったのだ。

わたしとしてももう少し、それこそ何日かくらいは滞在して、ゆっくりまったりするつもりだったから、ちよつとだけ残念な気持ちがあるのは否定できない。

勿論、アードウルフちゃんやなみちーちゃんといっぱい遊んだし、このサンドスター探しの旅も、したいと思ってはじめたことだから、けして不満ではないのだけど。

「そんなこと、きにしないでいいんですよ。おうちにはげませんし。またこんど、いっしょにいったときに、ゆっくりすればいいんです。」

それに、と区切るように言葉を置いて、イエイヌちゃんは、
「こんどはちゃんと、ともえちゃんのきおくのてがかりを、さがさなくてはいけませんから。」

そう言えばそうだったね、という、当初の旅の目的を口にした。

「あはは。そうだったね。あたし完全に忘れてたよそれ。」

言いながら、なんだか照れくさいような、嬉しい気分になる。

あたし自身忘れてたようなことを、イエイヌちゃんはちゃんと覚えていてくれたんだね。

「もう、ほんとうにともえちゃん、じぶんのことはあとまわしなんですから……。」
「あはは。ごめんごめん。ちゃんと思い出したから、うん。」

照れ隠しの笑いが止まらないわたしは、たまらずにやけた顔を外に向ける。

そのまま遠くの景色を眺めるようにすると、少しずつにやけ笑いが収まってきた。

と、

「……、あれ？」

「どうかしましたか？　ともえちゃん。」

「えっと……、あの、丘のとこ。」

窓の外を指さして言いながら、イエイヌちゃんの方を振り返る。イエイヌちゃんはわたしの手が指す方をしげしげと眺めると、げげんそうな顔になった。

「ふむ……、なにも、みえませんが。」

「え？　あれ？」

もう一度視線を窓の外に向けると、さつき見えた筈のものはこつぜんと姿を消していた。

「えっと・・・、さつきは、たしかに・・・。」

視界の隅に映った遠くの丘に、見覚えのある姿が見えた気がしたんだけど・・・、

「なにか、あそこにいたのですか？」

「うん。見覚えがある子がいたと思ったんだけど、気のせいだったみたい。」

「うふふ。ともえちゃんはあるんが、そそっかしいところがありますから、きかなにかを、みまちがえたのでしよう。」

「えー？ さすがにそれはないよー。」

あはは、とお互いに顔を見合わせて笑う。

さすがのあたしでも、木と見間違えたってことはないと思うけど、さつきのはやっぱり、気のせいだったかな。

ちくりんからはもう、だいぶ離れたし、こんな遠いところにあの子がいるはずないもんね。

そんなことを考えながら、わたしはスケッチブックの描きかけのページにクレヨンを走らせはじめた。

ここは、ジャパリパーク。

今日もたくさんのフレンズさんたちが、のんびり幸せに暮らしています。

森の中にある大きなライブステージ。

目を閉じればかつての歓声が聞こえてくるその場所で、

さんにんのフレンズさんたちがお話をしていました。

「そつたらさあ。いきなりおおぜいのセルリアンにかこまれてえ。あんときはもう、ダメかとおもつたんよお。」

「ふむふむ、それからどうしたのですか?」

「はじめてみるフレンズがあ、こー、ぴゅー!つてとんできてえ。ぴゃー!つてみーんな、やつつけたんよお。こー、つめを、ぴゃー!つてやつてえ。」

「なるほど、ぴゅー!と、ぴゃー!ですか! ぜひそのあたりのところをくわしく!」

「センちゃん、そこ、じゆうようかな?」

さんにんの内、ふたりはセンちゃんとアルマーちゃん。

ふたりは最近危ない目にあつたフレンズさんに、そのときのお話を聞いてみたい。

ひよつとして、それが新しい『いらい』の内容なのかしら?

「そのこつて、どんなこだったかな? みためとかー、おおきさとかー。」

「うーん、おおきさはウチらとおんなじくらいやつたねえ。みためは・・・、きいろかつ

たりくろかつたり、しましまじやったねえ。」

「きいろとくろのしましま・・・。」

「あと、むねんところがえつらいふくらんどつたけど、ありやあ、でつかいたんこぶでも、できてたんかねえ？　もし、ウチのせいでケガしたんなら、ほんにもうしわけないんよお。」

「あははー。それはちがうとおもうよー？」

うふふ。

フレンズさんは本当に申し訳なさそうだけど、

アルマーちゃんの言う通り、それは勘違いかな？

「アルマーさん。タヌキさんがであったフレンズって、」

「どうやら、あたりっぼいねー。かばんさんのいつてた、セルリアンがり、かなー。」

「やはり・・・、そうだとおもったのです。でなければ、ぴゅー！とか、ぴゃー！などというはずがありません！」

「かくしようにえたのそこなんだー。」

ふたりにナイショ話かしら？

フレンズさん、タヌキさんは、ひそひそ声でお話してるふたりが気になるみたいね？

こっさり近づいて盗み聞きしようとしちゃってる。

「それで！ そのフレンズは！ そのあとどこへいったのですか!？」

「ひいっ！ ……、きゆう、」

あらあら大変。

センちゃんの大声でタヌキさん、気絶しちゃった。

やつぱり、盗み聞きなんて、したらいけないのよ？

「もー、センちゃん、いきなりおおごえだしちゃだめだつてばー。タヌキはびっくりすると、きぜつしちゃうんだからー。」

「ああ！ これはしつれいを！ だいじょうぶですかタヌキさん！ タヌキさーん！」

「はう！ ……、ブクブクブク…。」

「センちゃんはたまにー、わざとやってんのかなー？つて、おもうことがあるよー。」
もう。

ふたりとも、タヌキさんにあんまりひどいことしたら、ダメよ？

ふたりのフレンズさんたちの、楽しい旅は続きます。